

堺市堺区

並松町遺跡

大阪府道高速大和川線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012年9月

公益財団法人 大阪府文化財センター

堺市堺区

並松町遺跡

大阪府道高速大和川線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



B区(紀州街道部分) 道4面全景(北から) [奥に現在の紀州街道が延びる]



A区南壁 紀州街道土層堆積状況(北から)



A区 紀州街道下層
黄褐色細砂層と黒色粘土層堆積状況(南から)

巻頭カラー図版 2



C区(紀州街道東側) 遺構面全景(北から)



4j区 盛土・整地層出土肥前磁器染付大皿

序 文

並松町遺跡は、堺市堺区に所在しており、平成22年2月に新規発見の遺跡として周知されたばかりであるため、あまり知られていないと思います。ただ、言い方を変えて、大阪と和歌山を結ぶ紀州街道に関わる遺跡と言えば、なんとなくイメージができるのではないのでしょうか。ところが、北に住吉大社を中心とした集落、南に堺環濠都市という大きな町が展開している地域に位置しているにもかかわらず、並松町遺跡の周辺では、発掘調査はほとんどおこなわれておらず、実態は知られていませんでした。

さて、大阪府南部では、既存の幹線道路、特に東西方向の道路の混雑が著しくなっており、都市圏の広域化を考えた場合、これに対応できる道路整備が重要になってきています。また、都心部に流入する阪神高速1号環状線の混雑が慢性的であることから、新たな路線として大和川線が計画されました。さらに、近年の大阪ベイエリアの開発に伴い、ますます大和川線に対する重要度が増してきました。

この計画路線が、現在も幹線道路として使われている紀州街道を横切るかたちとなったことから、大阪府教育委員会により、試掘調査がおこなわれました。その結果、紀州街道に関連する可能性が高い近世陶磁器や食物残渣を主体とする遺物包含層が確認されたことから、新規の遺跡として「並松町遺跡」が周知されるようになりました。

今回の調査では、この地域での紀州街道の最初の姿の検出や海方向からの洪水（津波や高潮）の堆積状況、街道沿いの集落の検出などの成果をあげることができました。この地域での紀州街道の始まりは案外新しいもので、18世紀代ということが判明しました。古代にさかのぼる熊野街道とは別の道ということになります。また、街道の西側でみつかった洪水の被害は、かなり甚大なものであることがわかり、近年の災害に対する予防意識に影響を与えるものといえます。さらに街道東側までは、洪水の被害があまり及んでおらず、遺構や遺物が多く残っていたことから、紀州街道が一定の防波堤の役割を果たしていたことが考えられます。砂堆上に立地しているということで、砂上の楼閣のイメージですが、井戸や水溜り遺構が検出されており、水との戦いが常におこなわれていたように感じます。当時の庶民の生活に結びつく多くの遺物も出土しており、生活感のあふれるものも多くみられます。本報告書の刊行により、調査の終了となりました。

最後に、調査の実施にあたり、地元自治会、阪神高速道路株式会社建設事業本部堺建設部をはじめ、大阪府教育委員会、堺市教育委員会の関係各位の方々より、多大なご指導やご協力を得ることができ、心から感謝の意を表します。今後とも、当センターへのご支援を賜りますようお願いいたします。

平成24年9月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 田邊 征夫

例 言

1、本書は、大阪府堺市堺区並松町外に計画された、大阪府道高速大和川線建設に伴う並松町遺跡の発掘調査報告書である。

2、本調査地は、堺市堺区並松町および七道西町、七道東町にかけて所在する。大阪府道高速大和川線計画路線内の調査であるため、狭長な調査区となっている。調査対象地は、紀州街道およびその両側30mずつの範囲（七道工区内）である。

3、本調査は、阪神高速道路株式会社の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人大阪府文化財センター（平成23年4月より公益財団法人大阪府文化財センター）が実施した。現地における発掘調査事業は、平成22～23年度におこなった。基本的な整理作業は、これらの発掘調査事業と並行して実施したほか、本格的な遺物整理事業は、現地調査終了後の平成23～24年度に南部調査事務所でおこなった。各年度の事業体制に関しては第1章に記したとおりである。

4、遺物の写真撮影は、南部調査事務所調査員久禮孝志がおこなった。さらに、平成23～24年度の整理作業においては、同所職員の協力を得た。平成24年9月の報告書の刊行をもって、すべての作業を完了した。

5、遺物のうち、金属製品や銭貨については、錆の除去や進行を抑制する保存処理を、中部調査事務所主査山口誠治と専門調査員倉賀野健がおこなった。

6、調査の実施にあたっては、阪神高速道路株式会社をはじめ、関係諸機関や下記の方々の援助を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）

〈調査指導〉 渡邊昌宏・岡本敏行・阪田育功（大阪府教育委員会）、嶋谷和彦（堺市教育委員会）、白神典之・下村優理（堺市文化観光局世界文化遺産推進室）

7、各種分析については、放射性炭素年代測定（AMS法）を株式会社パレオ・ラボ、花粉・珪藻分析を文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。

8、本書の作成・編集は、南部調査事務所主査中村淳磯が担当し、中村が執筆した。なお、各種分析に関しては、委託機関による成果報告をもとに、調査の見解をふまえて中村が加筆した部分もある。

9、本調査に関わる遺物、写真、カラスライド、実測図などの各種記録類は、公益財団法人大阪府文化財センターで保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1、本書中のレベルは、すべてT.P.（東京湾平均海面）を用いている。本書中における座標値は、平面直角座標系第VI系に基づいており、すべてkm単位とする。なお、測量法の改正により、測量基準が日本独自の日本測地系から世界標準の世界測地系へ変更されたことに伴い、当センターでは平成14年度以降の現地調査は、新たな座標系（測地成果2000）で測量をおこなっている。

2、本書中の方位は、すべて平面直角座標系第VI系（原点：東経136° 00′ 00″、北緯36° 00′ 00″）の座標北を示している。調査地で座標北は、磁北より東へ6° 33′、真北より西へ0° 17′ 振れる。

3、現地調査および遺物整理は、財団法人大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』（2010）に準拠している。

4、土色の記述は、最終的には小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖20版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修(2006)に準拠した。ただし、調査期間が長期にわたったため、現地調査では、なるべく最新版の『新版標準土色帖』を使用するようにした。

5、実測図の縮尺は、遺構平面図1/200、基本層序断面図1/40・1/40と1/100、個別の遺構は平面図1/100・1/80・1/50・1/40、断面図1/50・1/40、遺物実測図は陶磁器・土器1/3、大型の陶器1/4・1/6を原則とするが、紙面の制約上、必要に応じて縮尺を変えたものもある。拓本は、瓦刻印1/2、瓦平面1/6、土製品1/2、銭貨と銅製品1/1である。

6、遺構番号に関しては、調査時に全体を通じて番号を付けている。工区毎に付けたものではない。検出時点で番号を付けているため、必ずしも時代順にはなっておらず、時期の前後するものもある。また、隣接していても順序だっていない場合がある。

7、遺物番号は、挿図・写真ともに一致する通し番号である。

8、写真の縮尺は任意である。

挿 図 目 次

図 1	堺市の位置	1
図 2	大阪都市再生環状道路計画図	1
図 3	大和川線道路計画図	2
図 4	調査区および試掘箇所位置図	3
図 5	土地条件図と地形分類図	5
図 6	周辺の遺跡	7
図 7	堺周辺の参謀本部陸軍部測量局仮製図	9
図 8	調査施工順序略図（当初計画）	14
図 9	地区割図	15
図 10	紀州街道中央部 土層断面図	19・20
図 11	紀州街道部分 北壁土層断面図	21
図 12	紀州街道西側 A区北壁土層断面図	23・24
図 13	紀州街道東側 C区東壁土層断面図	25
図 14	黒色粘土層下層の土層 断面模式図	29
図 15	黄褐色細砂層 出土遺物	30
図 16	道7面 平面図	31
図 17	道6面 平面図	32
図 18	紀州街道東端部 土層断面図（B区北壁）	33
図 19	道5面 平面図	34
図 20	紀州街道 堆積状況模式図	35
図 21	道5面下（道6面上） 出土遺物	36
図 22	道4面下（道5面上） 出土遺物	38
図 23	道3面 平面図	39
図 24	道3面下（道4面上） 出土遺物	40
図 25	道2面下（道3面上） 出土遺物（1）	42
図 26	道2面下（道3面上） 出土遺物（2）	43
図 27	道1面下（道2面上） 出土遺物	45
図 28	A区深掘りトレンチ 土層断面模式図	47
図 29	19井戸 断面図	48
図 30	第1回洪水砂層除去面 平面図	49
図 31	第1回洪水砂層 出土遺物（1）	51
図 32	第1回洪水砂層 出土遺物（2）	52
図 33	20木組 平面・断面図	54
図 34	20木組 出土遺物	55
図 35	第2回洪水砂層 出土遺物（1）	56

図 36	第 2 回洪水砂層 出土遺物 (2)	57
図 37	第 3 回洪水砂層 出土遺物	58
図 38	第 4 回洪水砂層除去面 平面図	60
図 39	第 4 回洪水砂層 出土遺物 (1)	61
図 40	第 4 回洪水砂層 出土遺物 (2)	62
図 41	第 4 回洪水砂層 出土遺物 (3)	63
図 42	第 4 回洪水砂層 出土遺物 (4)	64
図 43	25 土坑 出土遺物 (1)	66
図 44	25 土坑 出土遺物 (2)	67
図 45	13 井戸・24 井戸 断面模式図	68
図 46	24 井戸・27 井戸 出土遺物	69
図 47	畝溝群 平面図	71
図 48	盛土・整地層 出土遺物	72
図 49	紀州街道西側出土 瓦拓本	73
図 50	紀州街道西側出土 銭貨・銅製品拓本	74
図 51	C 区黄褐色砂層 出土遺物	76
図 52	C 区 遺構平面図	77
図 53	50 土坑 変遷模式図	78
図 54	50 土坑・70 土坑 平面図	79
図 55	50 土坑・70 土坑 断面図	80
図 56	50 土坑 出土遺物 (1)	82
図 57	50 土坑 出土遺物 (2)、70 土坑 出土遺物	83
図 58	6 i 区 盛土・整地層 出土遺物	85
図 59	29 土坑 平面・断面図	87
図 60	29 土坑 出土遺物 (1)	90
図 61	29 土坑 出土遺物 (2)	91
図 62	4 j 区 盛土・整地層 出土遺物 (1)	93
図 63	4 j 区 盛土・整地層 出土遺物 (2)	94
図 64	4 j 区 盛土・整地層 出土遺物 (3)	95
図 65	4 j 区 盛土・整地層 出土遺物 (4)、4 i 区 盛土・整地層 出土遺物	96
図 66	4 h 区 盛土・整地層 出土遺物	98
図 67	6 h 区 平面図	99
図 68	52・53 土坑 出土遺物	100
図 69	52~54 土坑 出土遺物	101
図 70	68 井戸 平面・断面図	102
図 71	60 井戸 平面・断面図	103
図 72	6 h 区 包含層 出土遺物	104
図 73	6 h 区 盛土・整地層 出土遺物 (1)	105

目 次

卷頭カラー図版	
序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 調査にいたる経緯と経過	1
第2章 位置と環境	5
第1節 位置と周辺の遺跡	5
第2節 文献による歴史的記録	8
第3章 調査の方法	14
第1節 現地調査	14
第2節 整理作業	17
第4章 調査成果の概要	18
第1節 基本層序	18
第2節 遺構・遺物の概略	26
第5章 調査成果	28
第1節 A・B区（紀州街道）の成果	28
第2節 A・B区（紀州街道西側）の成果	47
第3節 C区（紀州街道東側）の成果	75
第6章 各種分析	116
第1節 放射性炭素年代測定（AMS法）	116
第2節 花粉・珪藻分析	120
第7章 まとめ	133
参考文献一覧	
遺物観察表	
報告書抄録	

図 74	6 h区 盛土・整地層 出土遺物（2）	106
図 75	5 h区 盛土・整地層 出土遺物（1）	108
図 76	5 h区 盛土・整地層 出土遺物（2）	109
図 77	35井戸 平面・断面図	110
図 78	36井戸 平面・断面図	111
図 79	紀州街道東側出土 瓦拓本	112
図 80	紀州街道東側出土 銭貨・泥面子拓本	113
図 81	46溝 平面・断面図	115
図 82	試料採取地点（放射性炭素年代測定）	117
図 83	暦年較正結果	119
図 84	試料採取地点（花粉・珪藻分析）	120
図 85	50土坑断面図	120
図 86	29土坑の花粉ダイアグラム	123
図 87	50土坑の花粉ダイアグラム	123
図 88	29土坑の珪藻ダイアグラム	126
図 89	29土坑の珪藻総合ダイアグラム	126
図 90	50土坑の珪藻ダイアグラム	127
図 91	50土坑の珪藻総合ダイアグラム	127

図 版 目 次

図版1 紀州街道 遺構(1)

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1 A区紀州街道堆積状況(北側溝) | 2 A区紀州街道堆積状況[細部](北側溝) |
| 3 A区紀州街道堆積状況(中央) | 4 A区紀州街道堆積状況(中央西側) |
| 5 A区紀州街道堆積状況[下部](中央) | 6 A区紀州街道堆積状況[下部](中央西側) |
| 7 A区紀州街道堆積状況(南壁) | 8 A区紀州街道堆積状況[細部](南壁) |

図版2 紀州街道 遺構(2)

- | | |
|--------------------------|---------------------|
| 1 A区22土坑(南から) | 2 B区紀州街道堆積状況(東端部北壁) |
| 3 B区紀州街道堆積状況[道路側溝部分](南壁) | |
| 4 B区紀州街道堆積状況[西端部](南壁) | |
| 5 A区黒色粘土層堆積状況(西から) | 6 A区黒色粘土層下堆積状況(西から) |
| 7 B区深掘りトレンチ(西から) | 8 B区黒色粘土層下堆積状況(北から) |

図版3 紀州街道 遺構(3)

- | | |
|----------------|----------------|
| 1 A区道5面全景(東から) | 2 A区道6面全景(北から) |
| 3 B区道6面全景(南から) | 4 A区道7面全景(北から) |
| 5 B区道7面全景(北から) | |

図版4 紀州街道 遺構(4)

- | | |
|----------------------------|----------------|
| 1 A区道4面全景(北から) | 2 B区道6面全景(南から) |
| 3 B区道5面全景[手前は紀州街道迂回路](東から) | |
| 4 B区道5面全景(北から) | 5 A区道5面全景(東から) |
| 6 A区道5面全景(北から) | |

図版5 紀州街道 遺構(5)

- | | |
|----------------------------|----------------|
| 1 B区整地層除去面[道3面より上面]全景(北から) | |
| 2 A区道3面全景(南から) | 3 A区道3面全景(北から) |
| 4 A区道3面下砂層除去面全景(北から) | |

図版6 紀州街道 遺構(6)

- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 1 A区道2面西側石垣[北部](西から) | 2 A区道2面西側石垣[北部細部](西から) |
| 3 A区道2面西側石垣[中央部](西から) | |
| 4 A区道2面西側石垣[石積状況](北から) | |
| 5 A区道2面東側石垣[北部細部](東から) | |
| 6 A区道2面東側石垣[北部](東から) | 7 A区道2面東側石垣(東から) |
| 8 A区道2面西側石垣裏込め内焼台混入状況(西から) | |

図版7 紀州街道西側 遺構(1)

- | | |
|----------------------------|--|
| 1 A区洪水砂層除去面全景[紀州街道含む](東から) | |
| 2 A区洪水砂層除去面全景[紀州街道含む](西から) | |

図版8 紀州街道西側 遺構(2)

- 1 A区洪水砂層除去面全景〔紀州街道含む〕(西から)
- 2 B区洪水砂層除去面全景〔紀州街道含む〕(西から)

図版9 紀州街道西側 遺構(3)

- 1 B区洪水砂層除去面全景〔紀州街道含む〕(西から)
- 2 B区洪水砂層除去面〔西部〕全景(西から)
- 3 B区洪水砂層除去面全景〔紀州街道含む〕(東から)

図版10 紀州街道西側 遺構(4)

- 1 B区洪水砂層除去面全景(東から)
- 2 A区北壁断面〔西端部〕(南から)
- 3 A区北壁断面〔西部〕(南から)
- 4 A区北壁断面〔中央部〕(南から)
- 5 A区西壁断面〔北部〕(東から)

図版11 紀州街道西側 遺構(5)

- 1 A区深掘りトレンチ(東から)
- 2 B区西半部最終面全景(北から)
- 3 A区19井戸検出状況(東から)
- 4 A区19井戸(東から)
- 5 A区洪水砂層端部石検出状況(北から)
- 6 A区13井戸(東から)
- 7 B区27井戸(西から)
- 8 B区24井戸(西から)

図版12 紀州街道西側 遺構(6)

- 1 A区20木組〔北半部〕(南から)
- 2 B区20木組埋土堆積状況(北から)
- 3 B区20木組〔東半部〕(北から)
- 4 B区20木組(西から)
- 5 A区畝溝検出状況(南から)
- 6 A区畝溝全景(西から)
- 7 A区畝溝〔南西部〕全景(西から)
- 8 A区西半部洪水砂層除去面全景(西から)

図版13 紀州街道東側 遺構(1)

- 1 C区遺構面全景および紀州街道(東から)
- 2 C区遺構面全景(東から)

図版14 紀州街道東側 遺構(2)

- 1 C区遺構面全景(北から)
- 2 紀州街道沿いの遺構群(北から)

図版15 紀州街道東側 遺構(3)

- 1 C区70土坑(西から)
- 2 C区50土坑〔1回目〕埋土堆積状況(西から)
- 3 C区50土坑〔1回目〕木組検出状況(北から)
- 4 C区50土坑〔1回目〕木組全景(南から)
- 5 C区50土坑〔2回目〕(西から)
- 6 C区50土坑〔2・3回目〕埋土堆積状況(西から)
- 7 C区50土坑〔2回目〕底面(西から)
- 8 C区50土坑〔3回目〕(西から)

図版16 紀州街道東側 遺構(4)

- 1 C区29土坑〔埋土除去面〕(東から)
- 2 C区29土坑南側木組(東から)
- 3 C区29土坑北側木組(東から)
- 4 C区29土坑内30井戸(北から)

- 5 C区29土坑西側木組（東から） 6 C区29土坑階段状石組（東から）
7 C区29土坑東側木組（東から） 8 C区29土坑完掘状況（西から）

図版17 紀州街道東側 遺構（5）

- 1 C区52土坑埋土堆積状況（北から） 2 C区53土坑埋土堆積状況（西から）
3 C区54土坑完掘状況 [68井戸検出状況]（西から）
4 C区68井戸（西から） 5 C区60井戸（西から）
6 C区土層断面 [東端部]（北から） 7 C区60井戸木枠検出状況（西から）

図版18 紀州街道東側 遺構（6）

- 1 C区46溝埋土堆積状況（北から） 2 C区35井戸 [上部]（西から）
3 C区35井戸 [内部]（西から） 4 C区36井戸枠瓦 [細部]（西から）
5 C区36井戸 [上部]（西から） 6 C区36井戸 [下部]（西から）
7 C区36井戸 [内部]（西から）

図版19 紀州街道 遺物（1）

道5面下（道6面上）出土遺物、道4面下（道5面上）・道3面下（道4面上）出土遺物

図版20 紀州街道 遺物（2）

22土坑出土遺物、道3面下（道4面上）出土遺物、道2面下（道3面上）出土遺物
道1面下（道2面上）出土遺物

図版21 紀州街道 遺物（3）

道1面下（道2面上）出土遺物、盛土・整地層出土遺物

図版22 紀州街道西側 遺物（1）

第1回洪水砂層出土遺物、第2回洪水砂層出土遺物

図版23 紀州街道西側 遺物（2）

第4回洪水砂層出土遺物、盛土・整地層出土遺物

図版24 紀州街道東側 遺物（1）

黄褐色砂層出土遺物、50土坑出土遺物

図版25 紀州街道東側 遺物（2）

6 i区盛土・整地層出土遺物、4 h区盛土・整地層出土遺物

図版26 紀州街道東側 遺物（3）

29土坑出土遺物

図版27 紀州街道東側 遺物（4）

29土坑出土遺物、4 j区盛土・整地層出土遺物（1）

図版28 紀州街道東側 遺物（5）

4 j区盛土・整地層出土遺物（2）

図版29 紀州街道東側 遺物（6）

52・53・54土坑出土遺物

図版30 紀州街道東側 遺物（7）

6 h区盛土・整地層出土遺物

表 目 次

表 1	測定試料および処理	116
表 2	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	118
表 3	微化石概査結果	122
表 4	花粉化石組成表	124
表 5	珪藻化石組成表	128
表 6	『大坂瓦屋仲間記録』に見える堺の瓦屋仲間	135
表 7	堺市内洪水被害記録一覧	136

写 真 目 次

写真 1	現在の和和橋（堺側から）	12
写真 2	神輿受渡式（住吉祭）	13
写真 3	鯨山車（住吉祭）	13
写真 4	ポールによる撮影風景	16

第1章 調査にいたる経緯と経過

大阪南部地域では、既存の幹線道路、特に東西方向の道路の混雑が著しく、円滑な交通の確保が難しくなっており、今後の更なる交通量の増大や都市圏の広域化を考えた場合、これに対応できる道路の整備が極めて重要になっている。また、都心部を走る阪神高速道路1号環状線の混雑は慢性的なものとなっており、沿道環境への影響が懸念されている。そのため、これらの問題を解決すべく、自動車交通の流れを抜本的に変革し、都心部の慢性的な渋滞や沿道環境の悪化等を大幅に緩和する、新たな環状道路の整備が強く要望されるようになった。

大和川線は、このような状況を背景として計画されたものであり、大阪府知事により、平成7年9月に都市計画決定、平成8年2月に路線決定、同7月に自動車専用道路の指定がなされている。平成11年3月には、建設大臣より阪神高速道路公団に対して基本計画の指示、10月には工事実施計画書の認可がおこなわれ、工事開始公告となった。平成12年2月には、建設大臣より阪神高速道路公団に対して都市計画事業の承認がおこなわれた。なお、道路関係四公団民営化での事業区分見直しや堺市の政令指定都市移行にともない、平成18年度からは大阪府、堺市ならびに阪神高速道路株式会社の三者が共同して整備をおこなうことになった。

この一方で、整備により誘導される新たな都市拠点の形成を通じた都市構造の再編を促すことを目的として、政府の都市再生本部により、平成13年8月に「大阪都心部における新たな環状道路」が都市再生プロジェクトとして決定された。大和川線は、この「新たな環状道路」の一部を形成する路線であり、堺市築港八幡町で阪神高速道路4号湾岸線より分岐し、松原市三宅中で同14号松原線に連絡する、全長約9.7kmの自動車専用道路である。途中、堺市域で直交する国道26号線や大阪高石線などの幹線道路に連結し、松原市域では都市計画道路堺松原線（大阪府施行）と一体的に整備する予定である。この道路により、大阪南部地域においては臨海部と内陸部が高速道路で直結されることとなり、東西方向一般道の交通混雑が大幅に緩和されるとともに、阪神高速道路の1号環状線、13号東大阪線、14号松原線なども渋滞が緩和され、関西都市圏の社会経済活動の活発化に大きく寄与するものと期待されている。

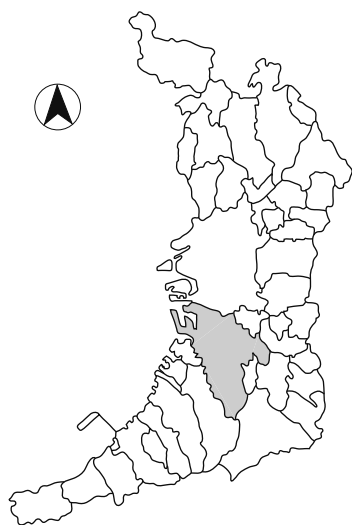


図1 堺市の位置



図2 大阪都市再生環状道路計画図（阪神高速より提供）

○大和川線

※ JCT名及びランプ名は仮称

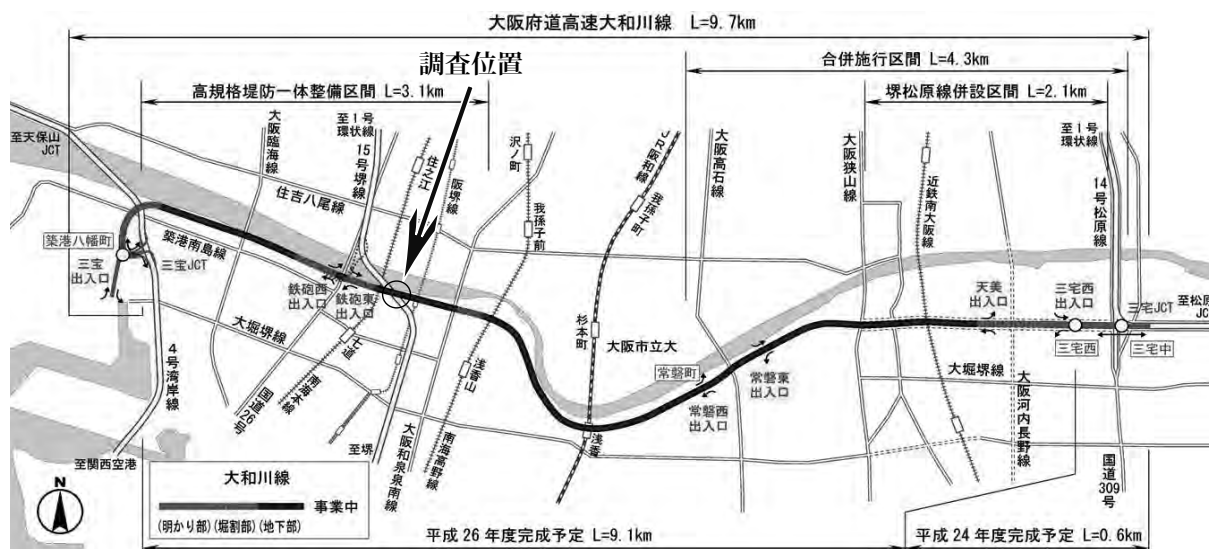


図3 大和川線道路計画図 (阪神高速より提供)

大和川線は、路線の計画にあたって、道路の整備だけではなく、地域の環境保全に十分配慮しながら高規格堤防整備事業（国土交通省施行）やその他の周辺整備計画との整合のうえ進めている。このため、大和川の景観保護、周辺市街地の環境への影響、沿道の土地利用ならびに沿川のグリーンベルトタウン構想との整合などを勘案し、一部のランプやジャンクションを除いて基本的に地下構造または掘削構造を採用している。平成17年度以降にも計画の見直しがされており、建設着手前にランプの廃止や線形の変更などがおこなわれている。

この都市計画道路の建設計画をうけて、計画路線の東部が周知の遺跡である三宅西遺跡や池内遺跡、大和川今池遺跡などに隣接していることから、平成15年度に大阪府教育委員会文化財保護課は、大阪府土木部および富田林土木事務所および阪神高速道路公団とその取り扱いについて協議をおこなった。その結果、路線内における遺跡の有無および周知の遺跡の実態についての資料を得るために、富田林土木事務所と阪神高速道路公団から、財団法人大阪府文化財センター（平成23年4月より公益財団法人大阪府文化財センター）に対して事前確認調査の依頼がなされた。基本的に路線予定地の両側に東西方向に幅2m（下端）のトレンチを設定するものであった。調査期間は、平成15年10月～平成16年6月（阪神高速道路公団は、平成15年10月～平成16年3月と平成16年4月～平成16年6月）で、対象は大和川線予定路線のうち、国道309号線から府道大阪狭山線までの区間（約2km）であった。

この平成15～16年度の調査成果をうけ、大阪府教育委員会文化財保護課の指示により、三宅西遺跡および池内遺跡、大和川今池遺跡の調査がおこなわれることとなった。

これらの遺跡の発掘調査は、合併施工区間であるため、発注者側が富田林土木事務所に一本化され、そこからの委託事業として財団法人大阪府文化財センターとの間で契約が締結され、平成16年11月～平成22年3月の期間で実施されることとなった。これらの大和川線路線内の調査については、現在までに大部分が終了しており、平成20年度に『三宅西遺跡』、平成21年度に『池内遺跡』、『大和川今池遺跡Ⅱ』、『大和川今池遺跡Ⅰ』の調査報告書を刊行している。

本体工事と共に、これらの遺跡の範囲内では、富田林土木事務所管轄事業の都市計画道路大和川線建

設に伴う付帯工事もおこなわれることから、富田林土木事務所と財団法人大阪府文化財センターとの間で契約が締結され、小規模ではあるが、追加の埋蔵文化財調査が実施されることとなった。これらの調査成果については、平成22年5月に『大和川今池遺跡Ⅲ』、7月に『三宅西遺跡Ⅱ』、平成23年3月に『大和川今池遺跡Ⅳ』、11月に『大和川今池遺跡・天美西遺跡』の調査報告書を刊行している。

さらに、計画路線の西部に関して、建設に先立ち大阪府教育委員会文化財保護課により、埋蔵文化財包蔵地の有無を確認する試掘調査が進められていた。そのうち、計画路線と南北方向に走る紀州街道が交わる地点（堺市堺区並松町付近）で、平成21年12月と平成22年1月におこなわれた試掘調査において、3ヶ所の試掘坑のうち2ヶ所（1区と3区）で、紀州街道に関連する可能性が高い近世陶磁器や食物残渣を主体とする遺物包含層が確認されたことから、東西65m、南北30m強の範囲を有する新規の遺跡として、「並松町遺跡」が周知されることとなった。

並松町遺跡の調査については、その位置が阪神高速道路株式会社の施工区間であることから、阪神高速道路株式会社と財団法人大阪府文化財センターとの間で、平成22年12月21日に業務委託契約が締結され、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、現地調査および遺物整理作業を含めて、平成24年10月31日までの期間で実施することとなった。現地調査は、本体工事の工程と密接に関連することから、センターから新規に工事発注するかたちをとらず、本体工事に付随して進める方法をとった。航空測量に関しては、センターからの発注による入札をおこない、業務委託契約の締結のうえ実施した。

発掘調査は、調査対象地区にかかる一般道路の付け替えなどを考慮したことから、調査区を3ヶ所に分割しておこなうこととなった。調査は、路線内の全面が対象となっているが、調査前にすでにH鋼材による土留めが施されており、隣接地への影響はほとんどない状況であった。紀州街道部分を含む西半部は、紀州街道を東側に迂回させたが、調査区南側の民地につながる一般道路を調査区内に確保する必

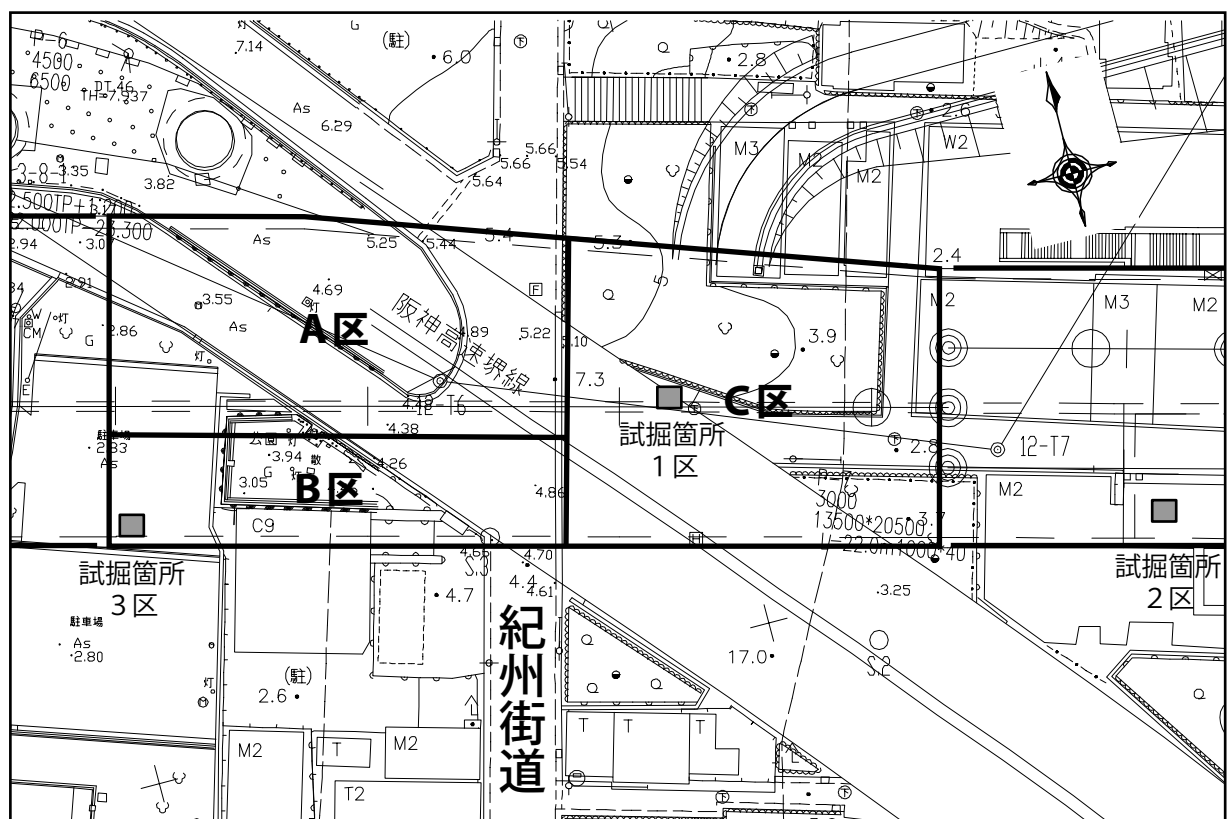


図4 調査区および試掘箇所位置図(1/600)

要性が生じたことから、2分割（A区・B区）となった。紀州街道の東側（C区）は、路線内にかかる一般道路はないことから、分割せずに調査をおこなうことができた。なお、次の工区に移る際には、道路切り替え工事の関係で約2ヶ月間外業が中断することから、現地調査が終了するまでは現地詰所において、基礎整理を主体とする整理作業をおこなった。

さらに、報告書作成に伴う本格的な整理作業は、現地調査終了後引き続き、南部調査事務所においておこない、遺物整理などの成果をまとめる作業が中心となった。その後、編集、印刷業務を経て、平成24年9月の報告書刊行をもって、全事業を終了した。

以下に、調査体制の一覧を記す。

調査体制

平成22年度(2010年度) [現地調査および整理作業]

調査部	部長	福田英人
調査課	課長	福田英人
調整グループ	グループ長	江浦 洋
	主幹	岡本茂史
調査グループ	グループ長	岡戸哲紀
	南部総括主査	森屋美佐子
	主査	中村淳磯

平成23年度(2011年度) [現地調査および整理作業]

調査部		
調査課	課長	江浦 洋
調整グループ	グループ長	岡本茂史
調査グループ	グループ長	岡戸哲紀
	南部総括主査	西村 歩
	主査	中村淳磯

平成24年度(2012年度) [整理作業]

調査部	部長	江浦 洋
調整課	課長	岡本茂史
調査課	課長	岡戸哲紀
	南部総括主査	西村 歩
	主査	中村淳磯

第2章 位置と環境

第1節 位置と周辺の遺跡

1. 地理的環境

並松町遺跡の所在する堺市は、面積149.99平方キロメートル、人口約84.3万人（平成24(2012)年1月推計）の政令指定都市である。大阪府の中央南西部に位置しており、西は大阪湾に面し、北は近世に開削された大和川をはさんで大阪市住吉区・住之江区と接している。東は富田林丘陵、南には泉北丘陵が広がっている。大阪湾に沿う平坦地は、古くは住之江とよばれた砂浜で海水浴場が設けられていたほどであったが、現在では埋め立てなどにより工業地帯となっている。それより内陸部は沖積低地帯で、「堺砂堆」と名づけられた標高3～5mの平らかなまぼこ形をなす微高地帯、さらに内陸には上町台地に連なる標高20m前後の洪積層の信太山台地が広がっている。

「堺砂堆」は、北は大阪市の浜口・粉浜を経て「難波砂堆」に、南は石津・浜寺を経て「高石砂堆」へと連なっている。中世都市「堺」は、この砂堆上に形成されたものであり、現在も中心となる市街地として存続している。海岸低地は、大和川の三角州・湊海岸低地・石津川河谷低地からなる。さらに後背台地・丘陵は、砂利・泥岩・凝灰岩などが互層に堆積する、前期および中期洪積層のいわゆる「大阪層群」からなっている。

当遺跡は、堺市の北端部に位置しており、大和川の南側堤防に接している。現況の標高は、紀州街道部分が高まりとなっていることから、道路部分ではT.P.+3.5～5.5mである。後世の盛土・整地層が厚いため、道路部分以外での江戸時代後半の遺構面はT.P.+1.5～2.0mである。調査地は「堺砂堆」上にあたることもあり、調査中に粘質土が検出されることはなく、ほぼ砂層や砂質土層の掘削に終始した。なお、隣接する本体工事では、現況地盤より約20mの深さまで掘削しており、土層観察ができる状況であった。ここでは粘質土はほとんどみられず、砂礫を主体とする土層が確認されることから、調査地が砂（礫）堆上にあっていることがわかる。以前から知られている、

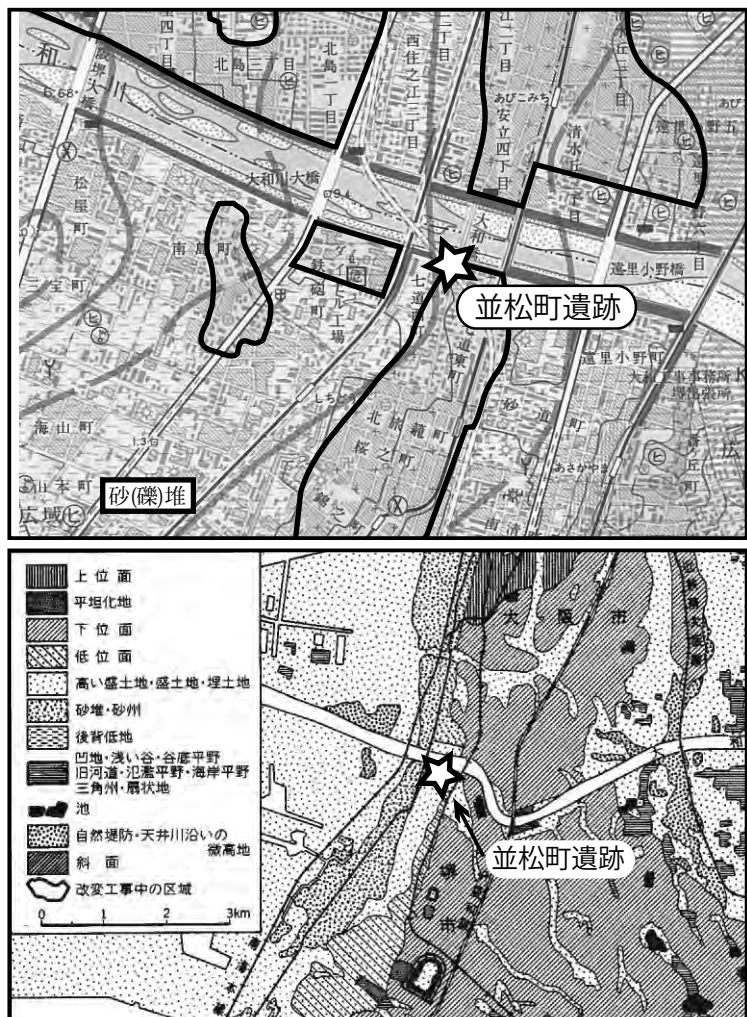


図5 土地条件図(1/25,000)[上]と地形分類図[下]

調査地周辺の土地条件図によると、調査地はちょうど南北方向に長い「堺砂堆」を横断していることになり、堺砂堆の東端は阪堺線の線路周辺とされていることから、本体工事における観察結果がこれをほぼ証明していることがわかる。

2. 歴史的環境

調査地は、中央部を紀州街道が横断している。紀州街道は、大坂の今宮橋(現大阪市浪速区)を起点とし、南下して住吉村(現大阪市住吉区)、安立村(現大阪市住之江区)を通り大和川に架かる大和橋を渡り、堺の街中に入る。堺町では大道と呼ぶ。堺の南橋から岸和田城下(現岸和田市)に達し、貝塚寺内(現貝塚市)、佐野村(現泉佐野市)を通り、信達宿(現泉南市)、山中宿(現阪南市)を通過しながら、和歌山城下に達する。鶴原(現泉佐野市)で孝子越え街道と分岐するが、こちらを紀州街道とする場合もある(現在の国道26号線のルート)。なお、瓦屋(現泉佐野市)以南は中世の熊野街道と同じ道筋である。紀州側では、大坂街道とも呼んだ。紀州街道は地方的な街道であったが、元禄14(1701)年から和歌山藩主紀州徳川家や岸和田藩主岡部家の参勤交代や御上使の通行の道筋であり、紀州と京坂地域を結ぶ主要な街道として、人馬の往来は絶えずあった。(和歌山藩は当初、紀北から大和に入り、伊勢路を経て参勤交代をしていたが、元禄14年から紀州街道を通るようになった。)

並松町は、堺の町の北入口にあたり、北堀である土居川を隔てて北に位置しており、紀州街道に沿う南北約500mの細長い町である。元禄2(1689)年の『堺大絵図』には、街道両側の松並木が描かれており、「並木松之内六町二拾五間」と記されている。

調査地の南側には、現在の堺市街地の中心部を占める堺環濠都市遺跡が広がっている。南北約3km、東西約1kmにおよぶ広大な遺跡であり、堺市教育委員会や大阪府教育委員会などにより、多くの地点で発掘調査がおこなわれている。その膨大な成果により、中世から近世にかけて繁栄を誇った堺の町の状況が次第に明らかになってきている。

堺環濠都市遺跡の発掘調査成果で実態が明らかになるのは、応永6(1399)年の応永の乱に伴うと考えられる焼土層以降である。それ以前に関しては考古学的成果が少ないため、不明な点が多い。文献による調査においても、応永の乱以降に堺の町が発展していく状況が知られているが、考古学的成果についてもこれ以降の遺構や遺物の検出例が急激に増え、このことを証明している。慶長20(1615)年の大坂夏の陣の前哨戦で堺の町が焼かれてしまうが、この時期の遺構や遺物の質・量ともみられており、堺の繁栄を裏付けたものとなっている。この後、堺の町は新たな町割りが施され、近世都市として復興するが、幕府の直轄都市でありながら一地方都市へと変化した。

堺市街地においても堺環濠都市遺跡とは異なり、堺環濠都市遺跡の範囲外となる土居川から大和川の間に限っては、発掘調査がおこなわれておらず、現状では調査地周辺の考古学的成果はほとんどみられない状況である。計画路線が大和川の南側に沿っていることから、大阪府道高速大和川線建設に先立ち、大阪府教育委員会文化財保護課により埋蔵文化財包蔵地の有無を確認する試掘調査がおこなわれたが、大和川今池遺跡より西側地域では、並松町遺跡以外で顕著な遺構や遺物は検出されなかった。このため、この地域においては大阪府道高速大和川線建設に伴う発掘調査は、この調査地以外ではおこなわれていない。



国土地理院発行2万5千分の1地形図「大阪西南部」「堺」に加筆
 0 1,000m
 1 : 25,000

- | | | | | |
|---------------|----------------|-------------|------------------|-------------|
| 1 並松町遺跡 | 2 紀州街道 | 3 堺環濠都市遺跡 | 4 住吉大社旧境内遺跡 | 5 住吉行宮跡遺跡 |
| 6 津守廃寺 | 7 浜口遺跡 | 8 西住之江遺跡 | 9 遠里小野遺跡 | 10 砂道遠里小野遺跡 |
| 11 錦綾町遺跡 | 12 浅香山遺跡 | 13 北花田口遺跡 | 14 田出井町遺跡 | 15 南田出井町遺跡 |
| 16 長尾街道 | 17 田出井山古墳 | 18 北三国ヶ丘町遺跡 | 19 向泉寺跡 | 20 南瓦町遺跡 |
| 21 翁橋遺跡 | 22 西高野街道 | 23 北台場跡 | 24 堺台場跡 | 25 旧堺港 |
| 26 旧堺燈台 (国史跡) | 27 山口家住宅 (国重文) | 28 堺県庁跡 | 29 土佐十一烈士墓 (国史跡) | |

図6 周辺の遺跡 (1/25,000)

第2節 文献による歴史的記録

ここでは、主に江戸時代以降の文献記録における、堺および調査地周辺の地名や歴史的背景を中心に項目別に記述していく。

江戸時代の堺

関ヶ原の合戦の後、徳川幕府は堺を直轄領とし、慶長5(1600)年に初めて成瀬正成と米津正勝を「堺政所」(堺奉行を江戸時代前期にはこう呼んでいた)として派遣した。堺奉行は、徳川幕府のいわゆる遠国奉行の一つで、1～3千石ぐらいの旗本が任命され、離任後は大坂町奉行に就任する者が多かった。大坂の陣で堺は徳川方に協力したため、慶長20(1615)年の大坂夏の陣の前哨戦で豊臣方の大野治房・道犬によって火を放たれ、堺の町はほぼ全域が焼失した。大坂の陣後、堺奉行長谷川藤広は風間六右衛門を地割奉行として、戦後の復興に着手させた。いわゆる元和の町割で、東・南部の農地が市中の郭内に囲い込まれ、東・北・南の三方に濠をめぐらして農村部と市街地の境界とした。東西の大小路、南北の大道という中世の堺の骨組を残しながらも、町全体が広げられて碁盤目状に整備され、環濠も新しく掘りなおされた。元和の町割は、中世の町割とは異なり、きわめて計画的なものであった。碁盤目状の市街の中央で、幹線である堺港に通じる大小路と紀州街道につづく大道が交差している。堺は当初4ヶ所に分かれていたが、元禄6(1693)年に大小路を境に北組・南組の2ヶ所に分かれた。

元和4(1618)年、徳川幕府は堺奉行として、喜多見勝忠を任命した。この時点で、堺奉行は周囲の農村を支配する強い権限を持ち、国奉行的性格を有していた。江戸時代初期には、堺の商人にも輸入品の中心であった輸入生糸販売の独占権が与えられ、糸割符仲間として一時的な繁栄を取り戻した。慶長9(1604)年に施行された、輸入生糸に対する幕府の糸割符仕法では、堺・京・長崎の三都市の頭人(特権商人)が十二・十・十の割合で配分するものであり、堺は三分の一余りを占めた。その後、仕法は何度か改正されたが、貞享2(1685)年でも九州の商人への若干の配分の他、全体を堺・京・長崎・江戸・大坂で十二・十・十・十・五に配分するもので、四分の一程度を堺が占めるものであった。しかし、この時点で、堺では旧糸割符仲間のほとんどが仲間からはずされることになり、これを不当とする旧仲間による堺奉行所や幕府への訴訟がおこなわれるようになった。さらに、元禄11(1698)年の糸割符仕法の改正では、この五都市商人への特権も弱められ、輸入生糸の重要性が低くなることから、堺の衰微が確実になり、全国的な大坂市場の優位性が確立していった。寛永年間(1624～44)の鎖国政策により貿易港でなくなり、海外貿易の制限をうけることや、元禄年間(1688～1704)以降の大坂の経済的發展による進出、加えて宝永年間(1704～11)の新大和川の開通で、堺の港湾的機能は低下した。

江戸時代初期、堺町の近郊農村は、堺奉行により「堺付村」とされ、奉行の支配地であった。年貢米は堺町に集められ、町と農村部の関係は経済的にも日常生活の面でも密接であった。慶安年間(1648～52)頃の堺奉行の支配の村は、堺廻り四カ村と呼ばれた北庄・中筋・舳松・湊をはじめ、その周辺農村である大鳥郡八田庄(現堺市中区)・上神谷地区(現堺市南区)を含めた36カ村約23,000石であった。元禄9(1696)年、堺奉行は伏見奉行と共に廃止され、大坂町奉行に吸収されたが、同15(1702)年に復活した。しかし、堺奉行は堺の町とわずかに願泉寺(現貝塚市)・久米田寺(現岸和田市)・施福寺(現和泉市)の境内を支配する町奉行的存在に縮小され、幕末までそのまま続いた。大和川(享保3(1718)年からは新大和川と石川)などの河川や大仙陵なども堺奉行の管轄であった。

寛文年間(1661～73)頃から、堺町周辺に大坂城代・京都所司代・大坂定番などに赴任した大名・旗本の所領が成立し始め、元禄年間(1688～1704)頃からは、将軍徳川綱吉によって、関東の譜代大名領が設定されてきた。18世紀後半頃の領有関係を概観すると、ある程度堺を中心に規則正しい配置となっている。堺町周辺には幕府領の村落が多く、隣接の地域は、大鳥郡を中心に田安領・一橋領・清水領の御三卿の村落が所在する。さらにその外周部上神谷地区に伯太藩渡辺領(大坂定番)、和田谷地区には下総関宿藩久世氏の所領が取り巻いている。河内八上郡(現堺市美原区)・丹南郡(現松原市)にはそれぞれ山形藩秋元領と地元丹南藩高木領がまとまって存在している。七道村は、住吉大社の社領となった。



図7 堺周辺の参謀本部陸軍部測量局仮製図(1/30,000に縮小)

もともと、摂津と和泉の国境は堺の大小路筋であったが、明治4(1871)年7月に当時の堺県が国境を大和川と定め、現在に至っている。明治22(1889)年の市制町村制施行によって、堺の町は堺市となった。そのほか、現市域には多くの村が成立した。このうち、向井村の旧七道村域は、明治27(1894)年に堺市に編入された。

なお、明治時代に参謀本部陸軍部測量局により作成された仮製図を見ると、近世の堺環濠都市の形状がそのまま残っていることがわかる。今回の調査地点である紀州街道の並松町付近は、集落は広がっていないが、大和川から街道沿いに建物が連なっていることがわかる。

並松町

土居川(堺北堀)を隔てて北半町の北に位置し、紀州街道(大道)に沿う南北約500mの細長い町で、北は大和川。堺の町の北入口にあたる。もとは住吉郡七道村に属する。元禄2(1689)年の『堺大絵図』には、街道両側の松並木が描かれており、「並木松之内六町二拾五間」と記されている。土居川に架かる北之橋北詰から住吉の手水橋までの6町25間の間は、江戸時代初頭以来堺政所(堺奉行)の支配するところで、石河勝政が政所を勤めた寛永年間(1624～44)に、街道の両側に松が植えられて以来「松の中・並松」と称せられ、町名の起源ともなった。前掲大絵図によると、道幅は北で3間半2尺、中ほどで4間半、南で6間4尺と、堺に近づくほど広がっており、道の両側には1間の土居が築かれている。さらに「此並松之間手水橋迄、並木犬はしり之外、車二而幅三尺通、西二而幅三尺通、先年ヨリ水通シ之筈、東西共誘之、庄屋証文有之」と記されており、両側に水道を通す計画のあったことが知られ

る。北之橋北詰西類には、16×5間の「獄門場」が描かれている。文化11(1814)年の陳阿自筆の四天王寺参詣記『竹杖の日記』によると、堺の北端に「高井の松」があり、「堺町は大変南北に長くて桜町・錦之町など鍛冶屋の多いところ」と述べている。

大坂夏の陣で灰燼に帰した堺の町の戦後復興をおこなうにあたり、徳川幕府直轄の地割奉行として就任した風間六右衛門は、見事にこれを完成し、名奉行として名声が高かった。ただ、風間六右衛門の祖先が日蓮宗の大信者であったことから、他宗の僧侶から寺院の地割にあたって日蓮宗寺院に多くの敷地を与えたという不平がおこり、ついに徳川幕府へ直訴する事態となった。実は、風間六右衛門は実直な人であったことから、汚職や賄賂が蔓延していた堺の実力者からの反感を買い、日蓮宗の熱心な信者であることを理由に汚名を着せられたという。元和4(1618)年に徳川幕府からの江戸への召喚命令が出された際、直ちに輿に乗り、上府を装って並松町に至ったところで、輿の中で割腹自刃したのである。その菩提を弔うため、風間堂が建立され東側に現存している。昭和40(1965)年に並松山風間寺と寺号公称し、現在に至っている。

宝永元(1704)年の大和川付け替えによって新川筋が松並木を中断し、大和川以南、北之橋までの道筋にはしだいに茶店や商家が街並を形成し、文政年間(1818~30)には、堺北組の所属となって並松町と称され、年寄も置かれた。明治5(1872)年、並松町となった。

七道村

堺町の北に位置し、紀州街道に沿っている。高須町に隣接する。古くは七堂・七度とも書かれたと伝えられており、その由来を行基が開創したとされる高渚院の七堂伽藍のあった地とも、住吉社の神輿を担ぐ人々が身を清めるため七度の潮垢離をとった地であるからともいうが、未詳である。摂津国住吉郡に属する。別称が多く、堺七道町・七道領・七道浜村・七道浜町村などとも称した。

『鹿苑日録』の慶長4(1599)年6月25日条に、住吉慈恩寺(跡地は現大阪市住吉区)に滞在していた京都鹿苑院住持が堺へ行った帰りに「七道躍舞之小人」を一覧したとあり、また同12(1607)年7月7日条に「七道 安立町年貢分、来秋無異儀可致納所」とみえ、慈恩寺領であったことがわかる。寛永~正保年間(1624~48)の『摂津国高帳』には、「堺七道町」とみえ、高槻藩松平康信領90石余が記されている。おそらくこの他に住吉社領があったものと思われる。以後、高槻藩領と住吉社領の入会村として幕末に至る。

宝永元(1704)年の大和川開削により村域は二分され、大和川河北と河南の地に分断された。河南のうち紀州街道沿いが町場化し、並松町が成立した。並松町は文政年間(1818~30)堺町に組み込まれ、堺北組に属した。これにより、河南地域も東西に分断された。並松町の東を松西、西を松西とそれぞれ俗称した。明治4(1871)年の郡界変更で、大和川北岸地域は住吉郡七道領村となり、南岸地域は大鳥郡に属することになった。並松町により東西に分断され不便であったため、明治20(1887)年頃に並松町への合併を出願したが実現しなかった。明治22(1889)年には、向井村の大字となる。

紀州街道

紀州街道は、古くは住吉街道と呼ばれていたことから、平安時代から鎌倉時代にかけて盛んとなった上皇や公卿、武士たちの熊野、高野参拝の一環として開けはじめたものと考えられている。当時は淀川を下った後、四天王寺に参詣し、その後住吉詣をおこない、熊野に向かうコースをとっていたからであ

る。また、南北朝時代に浜寺に大雄寺が創建され、その参詣道としてつくられたともいわれている。一般的には、豊臣秀吉の頃、住吉参詣の便並びに堺の町（堺政所）へ通じるために設けられたものとされているが、実は秀吉の軍用道路であったとの説もある。

ところで、紀州街道は近世に発展し、熊野街道にとってかわるほど重要となるが、文献には表れていない。大阪湾岸の生活道路は部分的に存在していたことは推測できるが、中央貴族や官人たちが往来する大道は存在しなかったと考えられている。道路よりも泉州沖の海上交通路が利用されていたためとされている。堺浦は、平安時代末から鎌倉時代初頭にかけて、すでにかなり発展していた。また、和泉郡我孫子浜（現泉大津市）から日根郡内（現泉佐野市）に至るまでの地域には、中央の内膳司に魚貝を納める網曳御厨供御人（あびこのみくりやくごにん）が存在しており、特権を帯びて大阪湾岸の漁業を独占して活躍していたという。このような漁民たちが、一方で廻船業を営んでいたことも考えられる。文献には、南北朝の動乱期に堺浦魚貝商人が南朝方に組しているとして、足利方がその対応に苦慮していることが記されており、一大勢力であったことがわかる。紀州への和泉国海岸寄りの街道が文献で「紀州街道」としてみえるのは、元禄4(1691)年10月が初見である。

紀州街道は、大坂三郷長町9丁目(現大阪市浪速区)の南端、鼈川に架かる今宮橋を起点とし、今宮村(現同上)、天下茶屋(現大阪市天王寺区)と南下、住吉村(元大阪市住吉区)に至る。その後、安立村(元大阪市住之江区)を通り大和川に架かる大和橋を渡り、堺の街中に入る。堺町では大道と呼ぶ。堺の南橋から湊村(現堺市堺区)に出て、宇多大津村(現泉大津市)を経て岸和田城下(現岸和田市)に達し、貝塚寺内(現貝塚市)、瓦屋村・佐野村(現泉佐野市)を通り、信達宿(現泉南市)、山中宿(現阪南市)、紀州山口宿(現和歌山市)を通過しながら、和歌山城下(現和歌山市)に達する。鶴原(現泉佐野市)で孝子越え街道と分岐するが、こちらを紀州街道とする場合もある(現在の国道26号線のルート)。街道の大部分は和泉平野の平坦部であるが、山中宿から和泉山脈の山間部に入り、雄ノ山峠(現和歌山市)の北で紀泉国境を横断する。なお、瓦屋以南は中世の熊野街道と同じ道筋である。紀州側では、大阪街道とも呼んだ。

豊臣期の大坂城下町の中心は、文禄3(1594)年につくられた惣構濠に、大坂城とともに囲まれた区域であった。その後、大阪城下は拡大していき、南側では四天王寺から住吉、堺に至る街道筋に家々を建て、町をつないで帯状の城下をもつようになった。江戸時代の大坂の主要な道の一つである、堺筋は堺に通じる道との意味である。江戸時代には、『堺住吉図』などのように大坂・住吉・堺を一つの図におさめたような絵図もつくられた。文久3(1863)年の『改正堺大絵図』でも、大和川の北に住吉大社が描かれており、中世や古代にまでさかのぼる大坂・住吉との結びつきの深さを表しているといえる。

江戸時代になってから、曲折や凸凹が多く、人馬の往来に不便であったため、紀州徳川家初代頼宣が大改修している。この結果、海沿いに新たな集落が発達し、それを結ぶ道が幹線化していったものである。紀州街道は地方的な街道であったが、元禄14(1701)年から和歌山藩主紀州徳川家や岸和田藩主岡部家の参勤交代や御上使の通行の道筋であり、紀州と京坂地域を結ぶ主要な街道として、人馬の往来は絶えずあった。(和歌山藩は当初、紀北から大和に入り、伊勢路を経て参勤交代をしていたが、元禄14年から紀州街道を通るようになった。)

近世中期以後は、商品流通の活況に伴う人馬の往来が激しさを加えるのが一般的な傾向であるが、紀州街道には、そのような現象はあまりなかったらしい。天保5(1834)年2月には、泉州浦々から通行人を小船に誘い込み海路を航行、堺・大坂方面に向かうため、陸上の紀州街道の往来商人が減少し街道

がさびれるので、海上往行を禁止する旨の禁令が発布されているのは、上記の事情をあらわすものといえよう。街道の諸施設は、五街道などに比べると概して小規模であった。公儀定駅馬も、堺市中では150疋と定められ、その会所がそれぞれ堺南半町・北半町大道に設けられていたが、早くから定数を割っていたという。信達宿でも減少していることから、各宿駅では、公用の人馬の継立を維持するのが精一杯であったと思われる。紀州街道は、和歌山藩主と御上使の通行により維持されており、「紀州様」関係の比重が大きいので、名実ともに紀州街道であったといえる。

大和橋

元禄16(1703)年に大和川の付け替えが決定し、紀州街道を横切ることになったため、橋を架けて川を越えることとなった。架橋工事は、大和川の開削工事と並行しておこなわれ、最初の橋は「新川橋」として、宝永元(1704)年9月に川の通水に先立って完成した。当時は新大和川に架かる唯一の橋であった。文化10(1813)年の『堺手鑑』によると、享保3(1718)年9月に「新川橋」を「大和橋」と改名することが奉書で通達され、大和川と改名されたという。のちに徳川頼宣が和歌山城を構えてから、和歌山と大阪をつなぐ重要路線となった。このため、当初から公儀橋として幕府が直接管理した。橋の規模は、長さ70間(137.9m)、幅員3間(5.9m)であり、以後この規模を守って維持補修がなされている。しかし、架橋から14年後の洪水で橋が破壊したとされるなど、幾度も破壊・流出と修繕を繰り返した。橋を管理した堺奉行の引継文書によると、架橋されてから約100年の間に大がかりな修繕だけでも、10回おこなわれたとされる。[元文元(1736)年・寛保元(1741)年・延享3年・寛延3(1750)年・宝暦6(1756)年・明和3(1766)年・安永5(1776)年・天明6年・寛政7(1795)年・文化2(1805)年] 公儀橋であるため、修繕費用は幕府の公金でまかなうが、幕府の財政も逼迫していることから、修繕で本橋が通行できない場合の仮橋や渡し船の工面は民間に請け負わせ、その冥加金を工事費にあてたりしている。前述の『竹杖の日記』には、大和橋を架け替えるという理由で仮橋を渡し、武士と助郷役に従事している人夫以外から一人に1文ずつの勧進を求めていたことが記されている。

江戸時代後期のものとされる、『紀州藩参勤交代行列図巻』上巻に、かなり詳しく大和橋が描かれている。これは、江戸から和歌山へ帰る紀州藩主の行列を描いた絵巻であるが、紀州街道沿いの安立町や街道を行き交う人々も描かれており、実際には藩主の駕籠が来る直前まで町人は土下座をしていなかったことなど、当時の様子がわかって興味深い。なお、大和橋の北詰の安立町周辺は、「霰の松原」と呼



写真1 現在の大和橋（堺側から）

ばれ、小町（上堤）茶屋があり、南詰は「松の中・並松」と呼ばれ、紀州街道がここから堺の土居川に至るまでの区間は、松並木となっていた。

幕末には、補修さえもままならない状態であったとされ、明治2(1869)年によろやく補修されたものの、根本的な解決策にはなっていなかった。大阪府と堺県は共同で工事費用の国費充当を大蔵省に陳情した結果、明治6(1873)年に架け替え工事が実施された。この橋も木造であり、明治18(1885)年の大洪水によって大きな被害をうけたため、大正5(1916)年になって大阪府により



写真2 神輿受渡式（住吉祭）



写真3 鯨山車（住吉祭）

初めて鉄橋化されたが、規模は江戸期のものとあまり変わらなかった。なお、明治6(1873)年に架け替えた木橋の欄干は、(株)大和川染工所で保管されている。昭和14(1939)年に大規模な補修がおこなわれ、橋桁にはI桁鋼、橋脚には鑄鉄柱が用いられ、橋長は192.9mとなった。その後、昭和49(1974)年の架け替えを経て、現在の橋は、橋の老朽化と大和川の河川改修のために、平成12(2000)年に架け替えられたものである。形式は3径間連続の斜張橋であるが、床版がコンクリートで設計上プレストレスしない合成桁の思想を取り入れた珍しいものである。現在は、南行きの一方通行となっている。

住吉祭

住吉大社の夏祭りである「住吉祭」の最終日8月1日に、御神輿の行列が紀州街道を住吉大社から大和川を渡り、堺の宿院頓宮まで練り歩く御渡祭（御渡）がおこなわれる。文久3(1863)年の『改正堺大絵図』には、大和橋の北詰に「祭礼場」と称される施設が描かれている。ここで神輿を一旦置いて、大和川の水量が多くないときは神輿を担いで徒歩で川越えしたという。橋を通らないのは、大和川がここに付け替えられる前の時代をしのんでいるとのこと。なお、旧暦6月末日におこなわれていた住吉大社の大祓えの祭では、堺宿院に移されていた神輿が夜に住吉に還幸する際、見越しを送る堺の人々と迎える住吉の人々のかざす数百の松明が大和橋の上であかあかと燃え、その火は遠く明石からも見ることができたという。

平成17年からは、この徒歩によるお渡りが復活し、神輿を担いで大和川を渡る神輿受渡式が河中でおこなわれるようになった。また、この大和川神輿受渡式では、平成22年から堺火縄銃保存会による火縄銃発砲が大阪側、堺側で1回ずつおこなわれている。さらに、平成23年には、「鯨山車」が57年ぶりに復活し、御渡行列に加わった。これは、「鯨まつり」と呼ばれる、鎌倉時代末期が起源と伝わる堺の伝統行事で、くじら型の山車を引いて住吉大社に奉納するものである。明治以降、20～30年に1回開催されていたが、昭和29年を最後に中断していた。今回は地元住民が実行委員会を結成して復活した。7月24日に堺出島漁港を出発した、全長12mにもおよぶ竹製の「鯨山車」が住吉大社に奉納され、同時に「くじら音頭」や「くじら踊り」も披露された。8月1日の御渡祭（御渡）にあわせて、「鯨山車」の曳行が実施され、御渡行列とともに大和橋を渡って大和川を渡った。

第3章 調査の方法

第1節 現地調査

調査区は、大阪府道高速大和川線建設事業地内であり、紀州街道をはさんで並松町遺跡の範囲内にあたる。新設道路であり、計画路線は、片道2車線計4車線の自動車専用道路部分で、約7割が地下を通るトンネルである。工事にあたっては開削トンネルとシールドトンネル工法が採用されているが、調査地は、開削トンネル工法であることから、掘削前に路線の両側に深さ約20mに及ぶ土留壁が設けられており、掘削位置は安全が確保された状況で、調査を開始することができた。

調査は、『遺跡調査基本マニュアル』に沿っておこなっており、現地の平面直角座標系による地区割りは、第VI系のX軸とY軸を基に設定した10mの正方形区画を基準としている。遺物の取り上げ単位はこの区画であり、各々に名称をつけている。

前述したが、調査対象地区にかかる一般道路を考慮したため、調査区を3ヶ所に分割した。大きく分けて紀州街道部分を含む西半部は、街道を東側に迂回させたことにより、街道と西側を分割することなく調査が可能となった。ただし、調査区南側の民地につながる一般道路を調査区内に確保する必要性が生じたことから、北側と南側の2分割（A区・B区）となった。紀州街道の東側（C区）は、路線内にかかる一般道路はないことから、分割せずに調査をおこなうことができた。なお、次の工区に移る際には、現地における道路切り替え工事の関係で約2ヶ月間外業が中断することから、現地調査が終了するまでは現地詰所において、基礎整理を主体とする整理作業をおこなった。

現地作業では、記録保存のため、検出した遺構の図面（平面図・断面図など）や遺構面の平面図、土層の断面図などの作成、遺構や遺構面などの写真撮影をおこなった。また、紀州街道が現在の道幅になった遺構面（街道部分）と街道の西側の洪水層下面、街道の東側で検出した遺構面については、高所作業車により全景の写真撮影をおこなった。さらに、測量業者による航空測量をおこない、国土座標による正確な平面図を作成した。写真測量に関しては、調査区中央部の上面を阪神高速堺線の高架道路が覆っており、ヘリコプターやレッカーによる撮影ができないことから、ポール撮影により図化作業をおこなっ

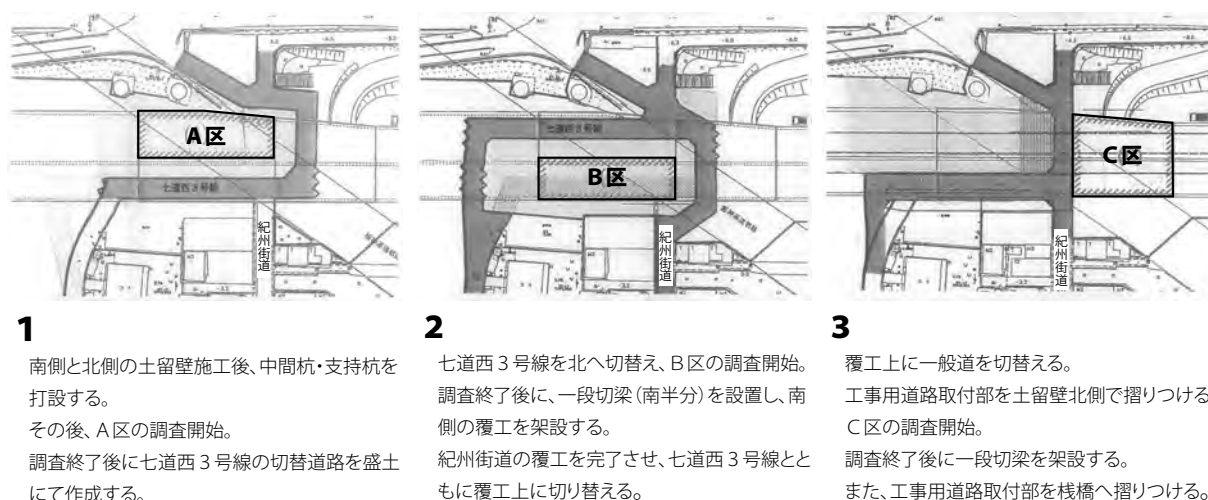


図8 調査施工順序略図（当初計画）

た(写真4)。

遺物登録は、調査区では分けておらず、全調査区を一括で付けているため連番になっており、重複する番号はない。遺構番号も、遺構の種類に関わらず、検出した順に1番から連番を付けていることから、番号の重複はない。

調査は、バックホーによる機械掘削で、現地表面から盛土・耕作土を除去した後、層位毎に人力掘削により掘削を進めた。紀州街道は現存する道路であることから、道路部分は現代の舗装が施されているほか、水道管や都市ガス、電話などの埋設管が機能は失っているものの、何次にも分かれて残存したま

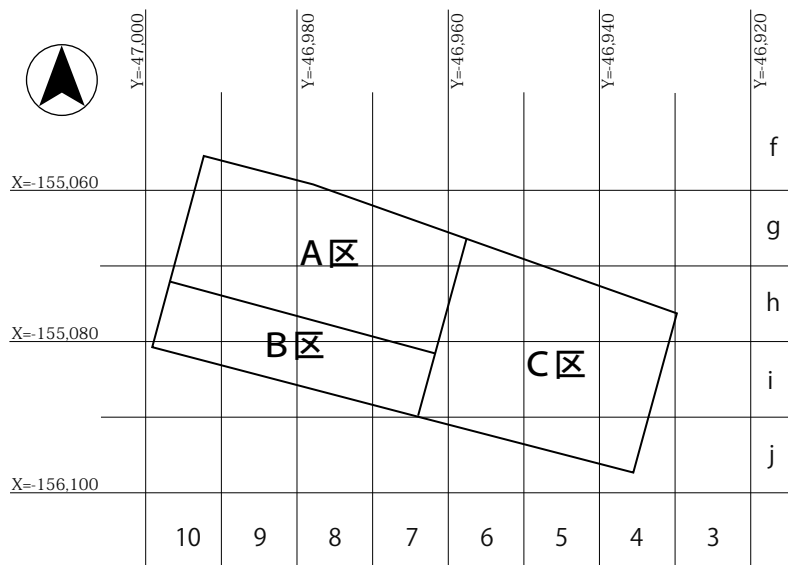
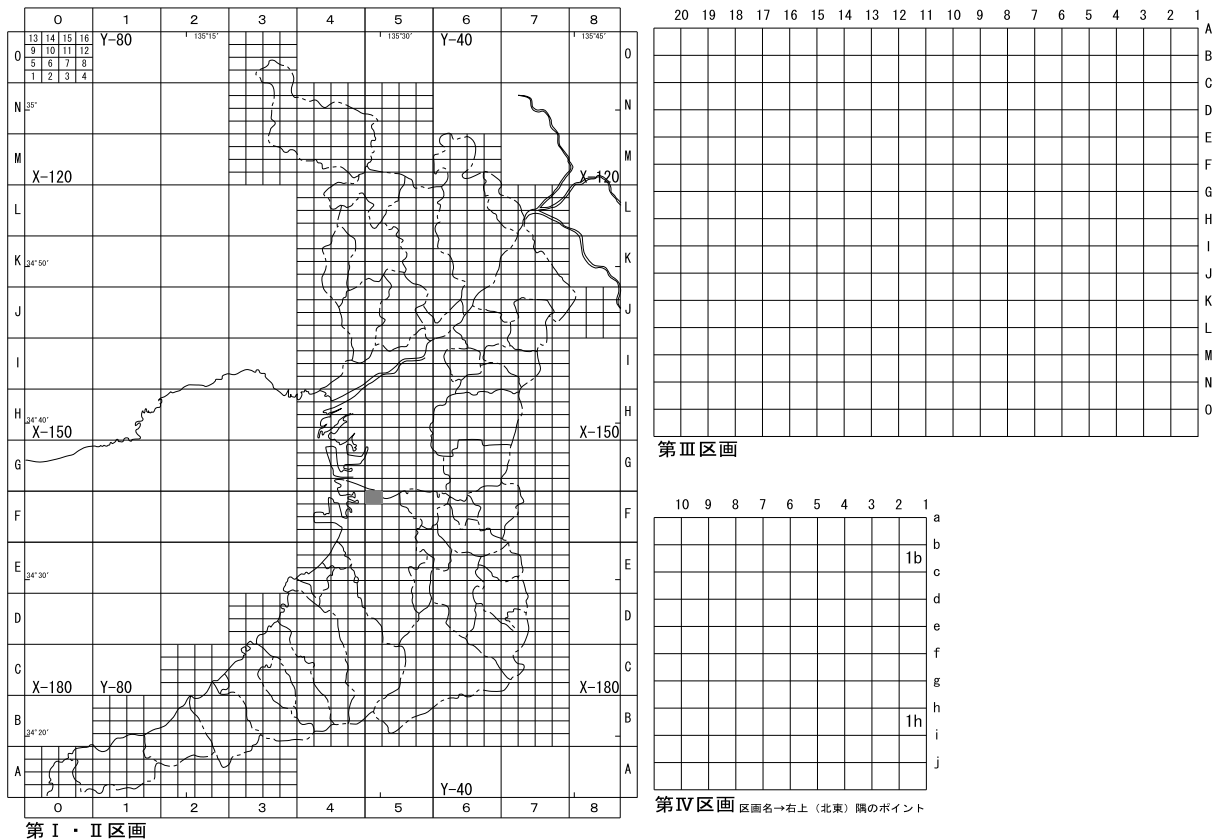


図9 地区割図



写真4 ポールによる撮影風景

紀州街道を含めて両側30mが調査対象範囲となったことから、大阪府教育委員会文化財保護課の指示により、調査区の境界線を決定した。なお、この西側と東側の境界部分については、掘削にあたって土留めは施さず、オープンカットでおこなうことから、掘削深度を考慮に入れて調査範囲が予定より狭くならないように調査面を確保した。なお、各地区で掘削最終面より下層の土層確認や遺構、遺物の有無を探るため、一部トレンチにより掘り下げた。各地区とも調査途中の遺構面と最終面について、大阪府教育委員会による立会を受けた。

各地区の機械掘削開始から人力掘削終了までの期間は、次のとおりである。

A区 平成23年2月1日～5月11日

B区 平成23年6月22日～8月25日

C区 平成23年11月1日～平成24年1月31日

遺構全体の実測作業は、基本的には、主要な遺構面1面を航空写真測量により、図化作業（1/50、1/100）を測量業者に委託しておこなっている。それ以外に、遺構面が複数存在する地区や遺構の密集度により、複数面図化した地区や部分も存在する。他の遺構面の全体図や遺構図、土層断面図などは、平板測量や実測により作成している。前述したように、平面位置は平面直角座標系第VI系（世界測地系：日本測地系2000）、レベルは東京湾平均海面（T.P.）を用いており、これを基に図化をおこなっている。以前は図化作業を手書きによるトレースでおこない、原図を作成していたが、現在では図化作業の発注形態が変わり、デジタル化に伴う測量方法をとることになっている。最終納品はデータで納めるかたちになったことから、CADソフトなどを使用して、パソコン上で図化のみならず、加工も可能となっている。

記録写真に関しては、現地で遺構面全景や遺構、遺物出土状況、土層断面などを35mmカメラ（モノクロ、カラースライド）と適宜6×7カメラ（モノクロ、カラースライド）を使用して、調査担当者が撮影をおこなっている。記録用として、デジタルカメラによる撮影もおこなっている。遺構面全景の写真撮影に際しては、高所作業車（高さ10mクラス）を使用している。また、遺物写真の撮影に関しては、南部調査事務所写真室が担当した。これらの記録写真のネガやスライドなどは登録・整理されており、当センターで保管している。

第2節 整理作業

出土遺物は、基本的な整理作業として現場詰所で登録後、順次洗浄・注記・接合・復元をおこなった。

基礎整理として、現地で作成した図面はファイルに収納し、現地で撮影したフィルムは現像後アルバムに収納し、台帳の作成をおこなった。また、出土遺物には、遺物ラベルを添付し、洗浄作業、注記作業、台帳作成作業をおこなった。

遺構図面作成の具体的な作業としては、業者発注により作成された日本測地系2000（世界測地系）のデータは、DXF形式であることから、そのままAutodesk社製AutoCAD LTなどのCADソフトを用いて編集がおこなえるほか、Adobe社製Illustratorでも利用できる（以前のバージョン）。現地での手書き実測図は、スキャナーで取り込み、コンピューター上で加工できるようデータ化することにした。このほか、基本データの作成のため、Adobe社製Photoshop CS2を用いてすべての遺構図面の接合などの作業をおこなった。コンピューター上での編集は、Adobe社製Illustrator CS2を用いておこなった。さらに、これらのデータをもとにIllustrator CS2上でトレース作業をおこない、レイアウトも含め遺構図版を作成した。遺構図版に関しては、従来に比べて作業時間が大幅に短縮できるため、基本的には、従来の手書きによるトレース作業はおこなっていない。

遺物は、従来通りの実測作業によって実測図を作成し、遺構図と同様の手順で、すべての遺物実測図をIllustrator CS2でトレースする方法をとった。従来の手書きによるトレース作業はおこなっていない。今回は、文様の細かい染付碗や皿が多かったことから、遺物実測における時間短縮のため、文様をデジタルカメラで撮影し、写真をデータ化することにより、図版を組んでいる。拓本に関しても、スキャナーで取り込んだデータで図版を組んでいる。結果的には、文様が細かい分、手書きトレースに比べて作業時間が大幅に短縮できたものと考えられる。改良の余地は大いにあるものの、レイアウト作業に非常に便利であると考えられることから、今後はトレース作業全般についても、コンピューター上でおこない、データ化していくことが可能であるといえる。

当報告では写真に関しては、従来通りの紙焼きしたものを原寸で貼りこんだ版下を作成している。

本文のレイアウトに関しても、挿図がデータ化されていると、レイアウトソフトである、Adobe社製InDesign CS2などで体裁を整えることができる。今回は、InDesign CS2で作成した本文の版組を印刷製版としている。以前にも同様のデータ作成により入稿したことがあるが、特に重大な問題は体験していないため、あまり問題はないと考えている。

第4章 調査成果の概要

第1節 基本層序

紀州街道部分とその両側では堆積状況が異なることから、層名は統一していない。基本的な層序は以下のとおりである。

1. 紀州街道部分

紀州街道の堆積状況から、層位上で画期となると考えられる層で遺構面を分けて調査を実施した。ただし、層位を便宜的に分けただけであることから、時期差を明確に表しているわけではない。また、盛土などは確認されていないことから、街道に関して大規模な造成がなされた痕跡は残っていない。

道0面下層：現代の道路の下層で、機械掘削の対象とした層である。上面はアスファルトにより舗装されている。工事開始まで使われていた水道管などの埋設管があり、アスファルト片やコンクリート片、レンガなどを含む盛土層である。砂礫が主体で、瓦類や陶磁器が出土している。

道1面下層：道の両側に石垣を施した路面の下層で、機械掘削の対象とした層である。上面にはアスファルトによる舗装はみられないが、部分的に板石や瓦片などを敷いて路面を補強している。機能を失った水道管などの埋設管があり、レンガなどを含む盛土層である。砂礫が主体で、瓦類や陶磁器が出土している。時期は確定できないが、大正時代から昭和時代初期頃のものと考えられる。

道2面下層：上面は、セメント状の凝固剤により路面が固められており、機械掘削の対象とした層である。機能を失った水道管などの埋設管があり、レンガなどを含む砂礫が主体の盛土層である。部分的に火を受けている。瓦類や陶磁器が出土している。時期は確定できないが、近代以降である。

道3面下層：上面は、厚さ約1cmの砂混じりシルトで路面が固められている。礫を含む砂質土を主体とする盛土層である。中央部で細かく複数の路面が確認された。瓦類や陶磁器が出土している。江戸時代後半～幕末と考えられるが、一部近代に及ぶ可能性がある。

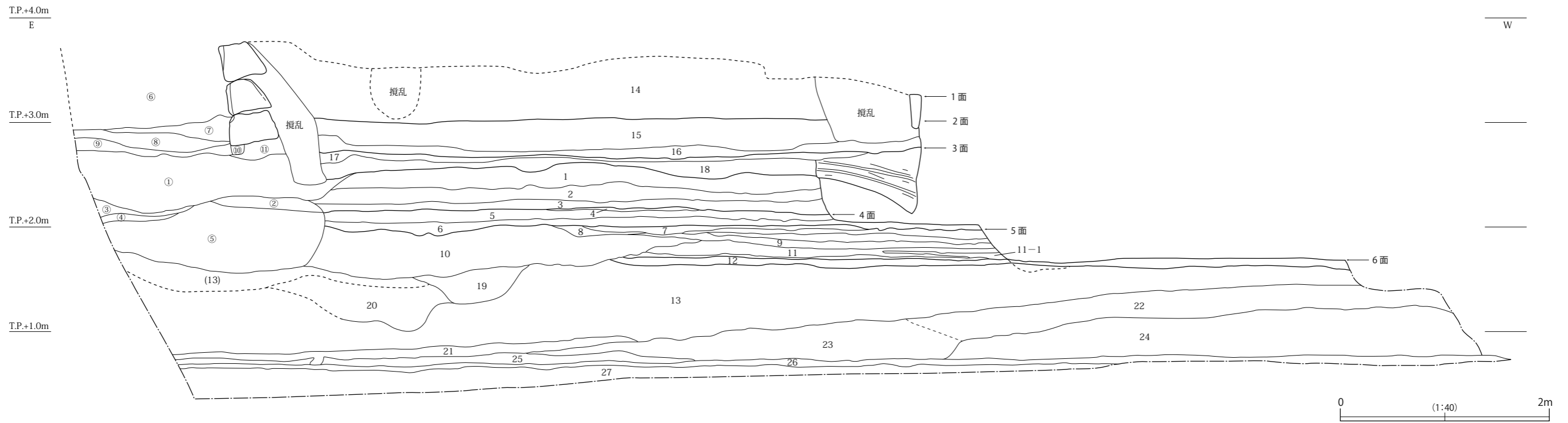
道4面下層：上面は、粘土で路面が固められている。粗砂を含むシルトが主体で、部分的に粘土ブロックを含む。瓦類や陶磁器が出土している。江戸時代後半～幕末と考えられる。

道5面下層：現在の道路とほぼ同じ幅となった最初の路面である。上面は粗砂混じりシルトで、硬く締まる。硬く締まるシルト層ともろい細砂層の互層で、中央部で細かく複数の路面が確認された。シルトで路面が構成されており、細砂層は路面上の自然堆積と考えられる。瓦類や陶磁器が出土している。江戸時代後半と考えられる。

道6面下層：現在の道路部分で最も古い時期の路面である。上面は硬く締まる細砂である。シルトを含む細砂が主体で、部分的にシルトブロックを含む。細かく複数の路面が確認された。江戸時代後半と考えられる。

黄褐色細砂層：調査区内に限らず周辺に広く広がる、厚さ約1mの細砂層である。自然堆積であるが、非常に均質でもろく、礫などは一切含んでいない。部分的に下層に粘土やシルトを含む。遺物の出土はなく、堆積時期ははっきりしない。

黒色粘土層：上層の黄褐色細砂層の直下に堆積しており、同様に調査区周辺に広く広がる。厚さ10cm

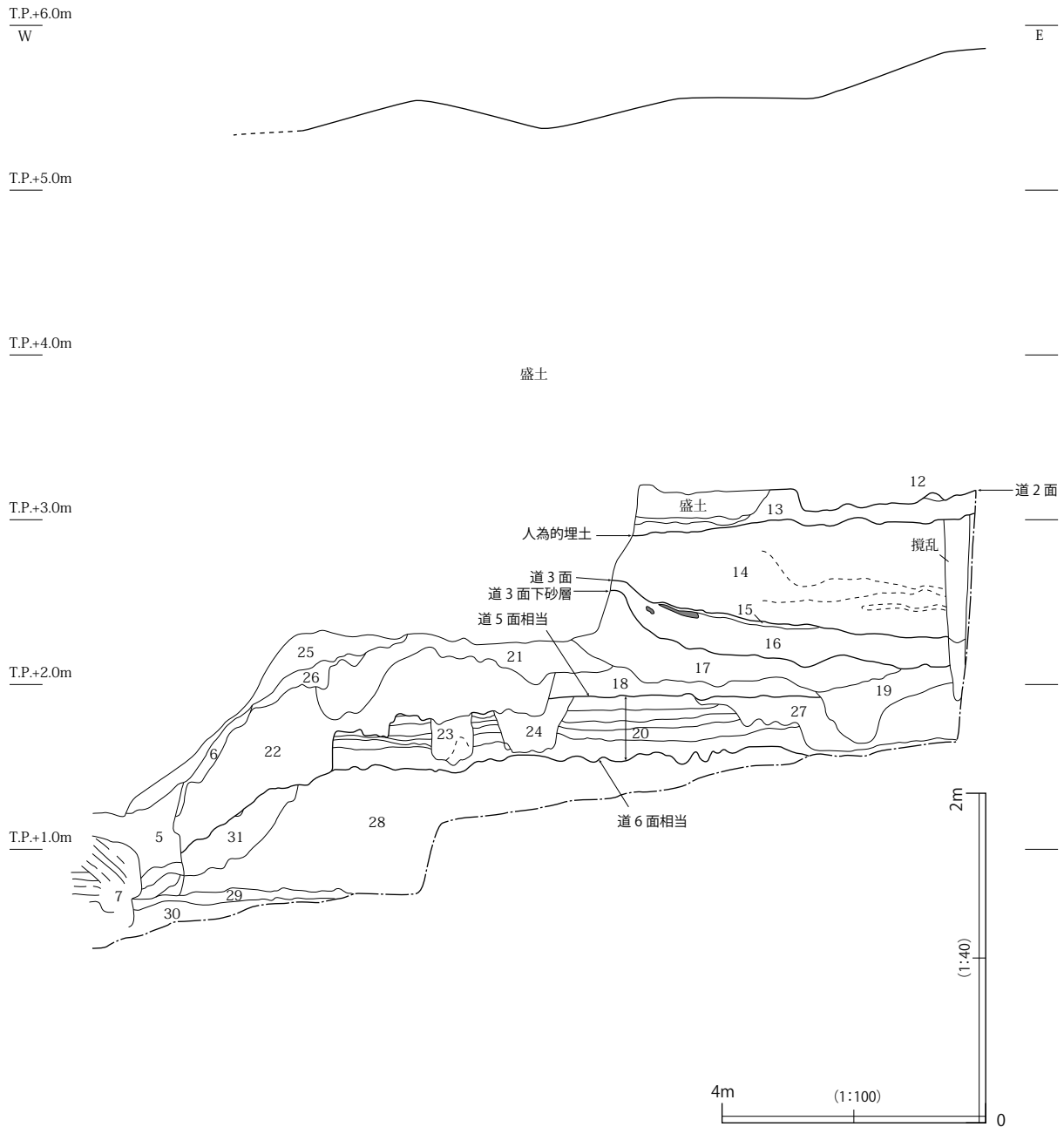


1. にぶい黄燈 10YR6/3 粗砂混細砂 固くしまる 厚さ1cmのシルト層(固い) 2~3枚あり
2. にぶい黄燈 10YR6/4 粗砂混細砂 径1cm程度の小礫含む 2~3枚の面あり
3. 灰黄褐 10YR6/4 細砂混粗砂 径1cm程度の小礫含む 2枚の面あり 比較的もろい
4. にぶい赤褐 5YR4/4 と 灰黄 2.5Y6/2 粘土 固くしまる
5. 黄灰 2.5Y6/1 粗砂 と 褐灰 10YR4/1 シルト の互層
6. 黄褐 2.5Y5/3 粗砂混細砂 明黄褐 10YR6/6 粘土ブロック含む
7. 灰黄褐 10YR6/2 粗砂混シルト 固くしまる と にぶい黄燈 10YR7/3 細砂 もろい の互層
8. 灰黄褐 10YR6/2 粗砂混シルト 固くしまる と にぶい黄燈 10YR7/4 細砂 もろい の互層
9. にぶい黄褐 10YR5/3 細砂 もろい と 褐灰 7.5YR4/1 シルト 固くしまる の互層
10. 褐灰 7.5YR5/1 細砂 しまる
11. 灰黄 2.5Y7/2 シルト 固くしまる 面が数枚に分かれる
12. にぶい褐 7.5YR5/3 と にぶい黄燈 10YR7/2 シルト と 灰褐 7.5YR6/2 粗砂
13. 黄褐 10YR5/6 細砂 均質 [自然堆積]
14. にぶい黄燈 10YR6/3 細砂~粗砂 礫・瓦類混在 [埋土]

15. 黄灰 2.5Y6/1 礫混粗砂 固い(薬剤で固めている) と にぶい赤褐 5YR4/4 礫混粗砂 のセット
16. 灰黄褐 10YR5/2 ~ 黒褐 10YR3/2 粗砂混細砂
17. 黒褐 10YR3/1 細砂 固くしまる
18. にぶい黄褐 10YR5/3 粗砂混細砂 部分的に焼けている(赤褐 2.5YR4/6 シルト)
19. 褐灰 7.5YR5/1 細砂 しまる
20. 灰黄褐 10YR5/2 細砂 しまる 褐灰 10YR4/1 シルトブロック含む
21. 褐灰 10YR5/1 細砂 上部に黄灰 2.5Y4/1 シルトを多く含む
22. 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂
23. 黒褐 2.5Y3/1 シルト混細砂 黒色シルト多く含む
24. 黄褐 2.5Y5/3 細砂 均質
25. 褐灰 10YR5/1 細砂 と 黒 7.5YR2/1 粘土 細砂混粘土と粘土が層状に堆積
26. 黒褐 7.5YR3/1 細砂混粘土 粘土が層状に堆積
27. 黄灰 2.5Y6/1 粗砂混細砂 有機物・炭化物含む

- < 紀州街道東側 >
- ① にぶい黄燈 10YR6/4 礫混粗砂 径0.5~2cmの礫含む もろい [盛土]
 - ② 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混細砂 径0.5~1cmの礫含む
 - ③ にぶい黄 2.5Y6/3 シルト混細砂 部分的にしまる
 - ④ 灰黄 2.5Y7/2 粗砂 礫含む
 - ⑤ 褐灰 7.5YR4/1 細砂 径0.5cm程度の小礫含む
 - ⑥ にぶい黄燈 10YR6/3 粗砂 貝殻含む もろい [埋土]
 - ⑦ 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混シルト 粘土含む 固くしまる
 - ⑧ にぶい褐 7.5YR5/4 細砂 と 褐灰 7.5YR5/1 粗砂 のセット 0.5cm厚 道状
 - ⑨ にぶい赤褐 5YR5/4 シルト 灰黄褐 10YR5/2 粘土混じる
 - ⑩ 黒褐 5YR3/1 シルト 木材の痕跡
 - ⑪ にぶい黄褐 10YR5/3 粘土混細砂 黄褐 10YR5/6 粘土 含む

図10 紀州街道中央部 土層断面図 (1/40)



- 5. 黄褐 10YR5/6 粗砂 径0.5～2cmの小礫含む〔第4回洪水砂層〕
- 6. 明黄褐 2.5Y6/6 粗砂混細砂 〔第3回洪水砂層〕
- 7. にぶい褐 7.5YR6/3 小礫混粗砂 径0.5～3cmの小礫 〔第2回洪水砂層〕
下部に鉄分による褐色の変色あり 部分的に径1～5cmの礫含む
- 12. 灰オリーブ 5Y4/2 シルト混粗砂 固くしまる〔道2面〕
- 13. にぶい黄橙 10YR6/3 シルト・細砂混粗砂
- 14. 褐灰 10YR6/1 礫混粗砂〔人為的埋土〕
- 15. 灰黄褐 10YR4/2 礫混粗砂〔道3面〕
- 16. 灰白 10YR7/1 礫混粗砂
- 17. 灰黄褐 10YR6/2 礫混粗砂〔道3面下砂層〕
- 18. 褐 10YR4/4 礫混粗砂

- 19. にぶい黄褐 10YR5/3 礫混粗砂 径1～3cmの礫含む
- 20. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 固いシルト と にぶい黄褐 10YR5/4 粗砂層 のセット
- 21. 暗褐 10YR3/3 粗砂混シルト しまる〔埋土〕
- 22. にぶい黄褐 10YR4/3 粗砂混シルト 〔第2回洪水砂層下盛土〕
- 23. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混細砂 炭化物・礫含む
- 24. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂層 礫多く含む
- 25. にぶい黄橙 10YR4/3 粗砂 しまる〔埋土〕
- 26. 黄褐 10YR5/6 礫混粗砂 もろい〔埋土〕
- 27. 褐灰 7.5YR4/1 細砂 径0.5cm程度の小礫含む
- 28. 黄褐 2.5Y5/3 細砂 均質
- 29. 黒褐 7.5YR3/1 細砂混粘土 粘土が層状に堆積
- 30. 黄灰 2.5Y6/1 粗砂混細砂 有機物・炭化物少量含む
- 31. 褐灰 5YR5/1 粗砂混細砂 径0.5cm程度の小礫含む〔側溝〕

図11 紀州街道部分 北壁土層断面図

弱で、炭化物や有機物を多く含む。遺物の出土はなく、堆積時期ははっきりしない。考古学的な時期決定ができないことから、土壌サンプルを採取して放射性炭素年代測定をおこなうこととした。

黒色粘土層下層：粗砂層である。径 0.5 cm の小礫を含んでおり、比較的もろい。炭化物や有機物を多く含む。遺物の出土はなく、堆積時期ははっきりしない。

2. 紀州街道西側

紀州街道の西側では、海からの大規模な高潮や津波などによるものと考えられる、厚く堆積した洪水砂層が確認された。大きく 4 層に分かれることから、4 度にわたる被害をうけていることがわかる。遺物による時期決定は困難であるが、災害記録と照合すると時期が推測できる可能性があるものと考えられる。

盛土・整地層：近代～現代のもので、機械掘削の対象とした層である。土管などの埋設管があり、コンクリート片、レンガ塊などを多く含む盛土層である。大規模な整地に伴うもので、かなり厚く堆積している。細砂で埋められており、下層の洪水砂層と区別がつきにくい部分もある。粘土ブロックや礫を含む砂質土層を主体とする。

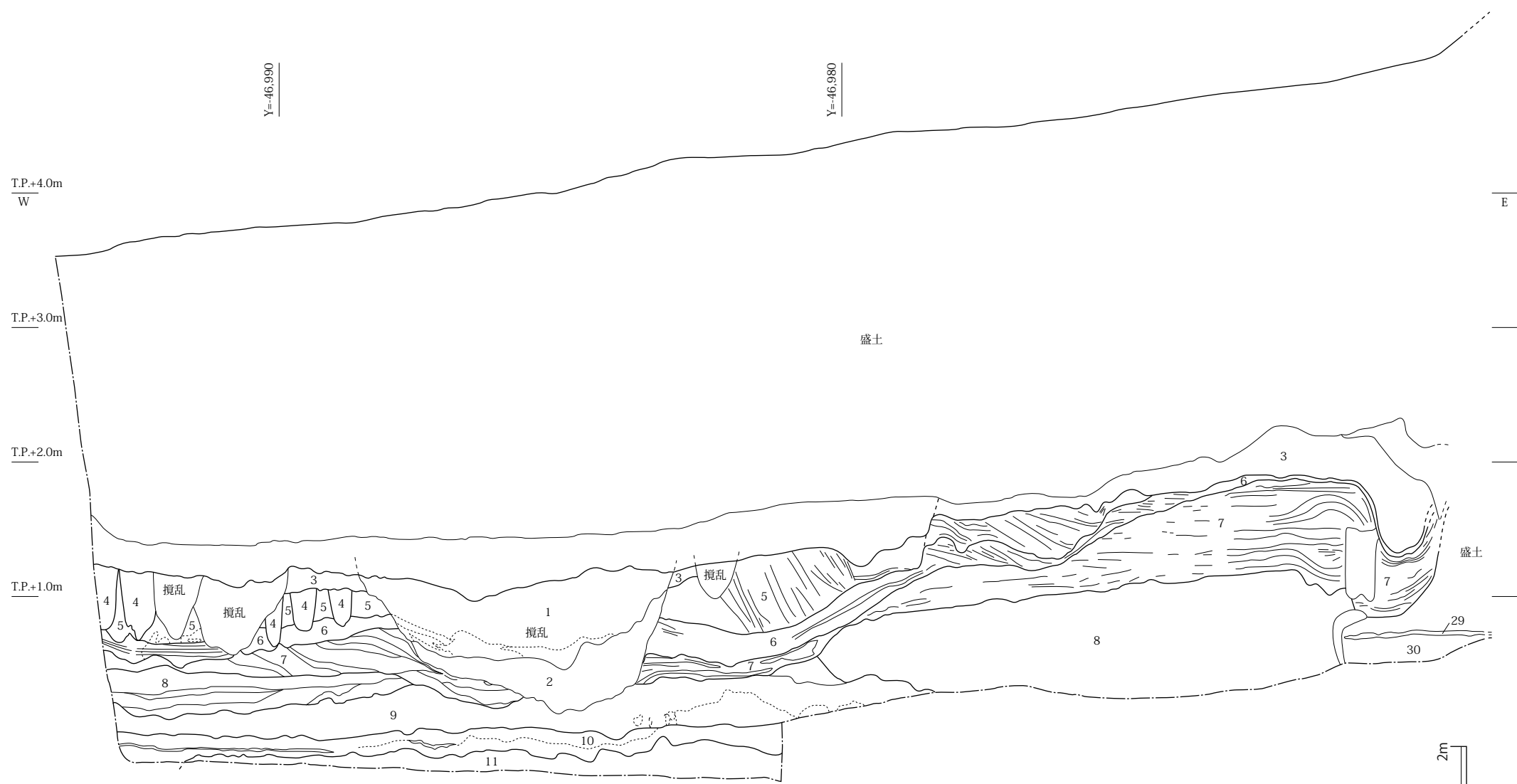
第 4 回洪水砂層：径 0.5～2 cm の小礫を含む粗砂層である。激しい流れに伴うもので、強く東向きに下がる斜め方向の堆積である。厚さ 20～60 cm で、ほぼ全面に広がる。かなり厚い堆積であるが、上部は整地などに伴い削られているものと考えられる。最前線にあたる部分の堆積状況から、紀州街道の道 4 面と道 5 面の間に入ることがわかる。瓦類や陶磁器が出土している。細かい年代は確定できないが、江戸時代後半～幕末と考えられる。

第 3 回洪水砂層：粗砂を含む細砂層である。緩やかな流れに伴うもので、比較的粒子の細かい砂層の堆積である。厚さ 5～20 cm で、ほぼ全面に広がる。東半部で緩やかに上方に向かう。最前線にあたる部分の堆積状況から、紀州街道の道 4 面と道 5 面の間に入ることがわかる。細かい年代は確定できないが、江戸時代後半～幕末と考えられる。

第 2 回洪水砂層：径 0.5～3 cm の小礫を含む粗砂層である。かなり激しい流れに伴うもので、やや東向きに下がる斜め方向の堆積である。下部に鉄分による褐色の変色がある。部分的に径 1～5 cm の礫を含む。厚さ 20～70 cm で、ほぼ全面に広がる。東半部で厚く堆積している状況が確認されるため、本来は厚く堆積していたものが、第 3 回洪水砂により西半部が侵食されたものと考えられる。最前線にあたる部分の堆積状況から、紀州街道の道 6 面を侵食していることがわかる。最前線にあたる部分では、径 40 cm 程度の礫もみられる。瓦類や陶磁器が出土している。細かい年代は確定できないが、江戸時代後半と考えられる。

第 1 回洪水砂層：径 0.5～3 cm の小礫を含む粗砂層である。強い流れに伴うもので、ほぼ水平方向の堆積である。部分的に細砂が層状に堆積する。礫を多く含んでおり、もろい。厚さ 40 cm で、西半部で検出されているが、東半部は上の第 2 回洪水砂に侵食されている。瓦類や陶磁器が出土している。細かい年代は確定できないが、江戸時代後半と考えられる。

洪水砂層下層：礫を含む粗砂層である。径 0.5～2 cm の小礫を含んでおり、硬く締まっている。炭化物や有機物を含む。遺物の出土はなく、堆積時期ははっきりしない。黒色粘土層下層に対応するものと考えられる。



1. にぶい黄 2.5Y6/3 粗砂混細砂 粘土・小礫含む (攪乱)
2. 灰黄 2.5Y6/2 粗砂混細砂 粘土・小礫含む (攪乱)
3. 灰黄褐 10YR5/2 小礫混粗砂 径0.5～2cmの小礫含む (攪乱か?旧表土?)
4. 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂混粗砂 [畝溝埋土]
5. 黄褐 10YR5/6 粗砂 径0.5～2cmの小礫含む [第4回洪水砂層]
6. 明黄褐 2.5Y6/6 粗砂混細砂 [第3回洪水砂層]
7. にぶい褐 7.5YR6/3 小礫混粗砂 径0.5～3cmの小礫 [第2回洪水砂層] 下部に鉄分による褐色の変色あり 部分的に径1～5cmの礫含む
8. にぶい黄橙 10YR6/3 小礫混粗砂 径0.5～3cmの小礫多い [第1回洪水砂層] 部分的に細砂が層状に堆積
9. 明黄褐 10YR6/6 細砂 径0.5cmの小礫少量含む (第1回洪水砂層の下)
10. 褐灰 10YR6/1 礫混粗砂 部分的に明黄褐 10YR6/6 シルト含む 径1～2cmの小礫混在 (第1回洪水砂層の下)
11. 暗青灰 5B4/1 粗砂 径0.5～1cmの小礫含む (第1回洪水砂層の下)
29. 黒褐 7.5YR3/1 細砂混粘土 粘土が層状に堆積
30. 黄灰 2.5Y6/1 粗砂混細砂 有機物・炭化物少量含む

図12 紀州街道西側 A区北壁土層断面図

3. 紀州街道東側

紀州街道の東側では、後世の大規模な攪乱はなかったため、上層における遺構面は比較的良好に残存していた。ただ、整地が遺物包含層の大部分にまで及んでいたことから、後世の廃棄物が多く混入した状況となり、遺物包含層の残存状況はあまりよくなかった。

盛土・整地層：近代～現代のもので、機械掘削の対象とした層である。機能を失った水道管などの埋設管があり、コンクリート片、レンガ塊などを多く含む盛土層である。大規模な整地に伴うもので、かなり厚く堆積している。粘土ブロックや礫を含む砂質土層を主体とする。

包含層：整地により削られた部分が多く、良好な状態では検出されていない。部分的な検出により、礫を含む砂質土層を主体とすることを確認した。厚さ約 15 cm で、炭化物を含む。西半部では、この層をはさんで上面と下面で遺構面が 2 面確認された。あまり時期差はなく、いずれも江戸時代後半～幕末と考えられる。瓦類や陶磁器が出土している。

黄褐色細砂層：調査区内に限らず周辺に広く広がる、厚さ約 1 m の細砂層である。自然堆積であるが、非常に均質でもろく、礫などは一切含んでいない。部分的に下層に粘土やシルトを含む。遺物の出土はなく、堆積時期ははっきりしない。

黒色粘土層：上層の黄褐色細砂層の直下に堆積しており、同様に調査区周辺に広がる。炭化物や有機物を含む。厚さは 10 cm 弱であるが、一定していない。粘土がなくシルトや粗砂のみの部分もみられる。遺物の出土はなく、堆積時期ははっきりしない。考古学的な時期決定ができないことから、土壌サンプルを 2ヶ所で採取して放射性炭素年代測定をおこなうこととした。

黒色粘土層下層：粗砂層である。径 0.5 cm の小礫を含んでおり、比較的多い。炭化物や有機物を多く含む。遺物の出土はなく、堆積時期ははっきりしない。

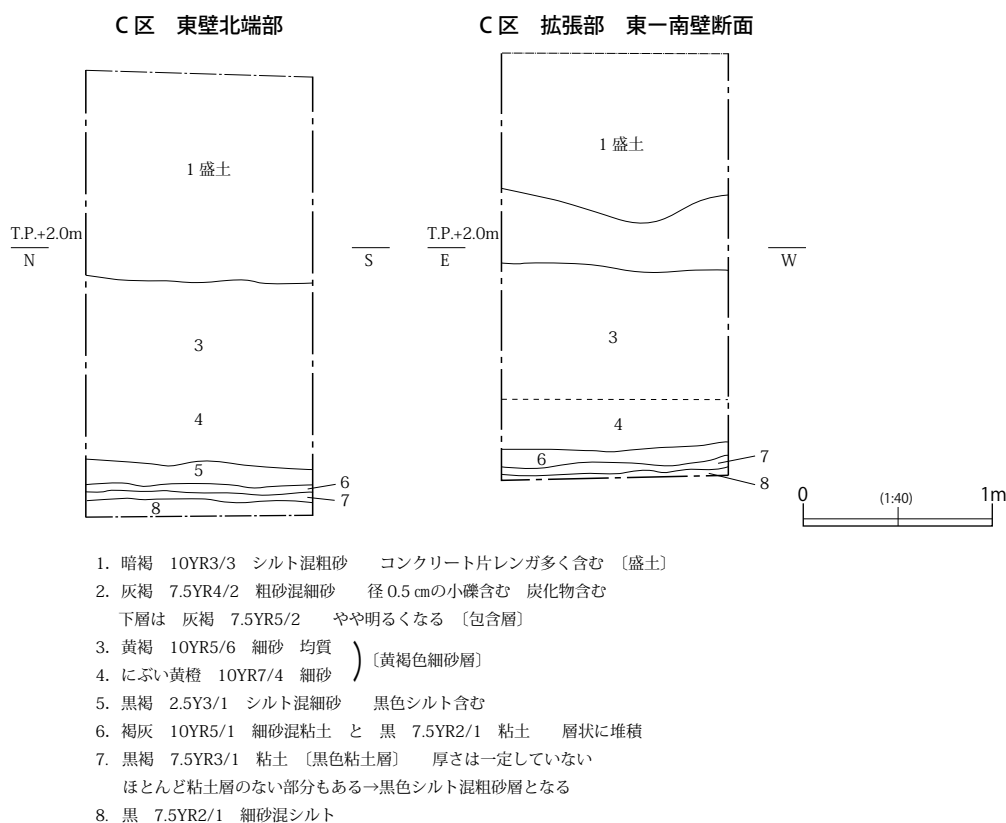


図13 紀州街道東側 C区東壁土層断面図 (1/40)

第2節 遺構・遺物の概略

調査成果については、次章で詳細に述べるが、ここでは、全体の遺構・遺物の状況を簡単にまとめておくこととする。

1. 紀州街道部分

紀州街道に関しては、現在も利用されていることから、上部では水道管やガス管、下水管、電話線などの埋設管が数次にわたって埋められており、かなり攪乱がすすんだ状況であった。路面補強のための舗装が何度もおこなわれていることから硬く締まっており、機械掘削においても除去するのに時間がかかるほどであった。また、紀州街道が大和川の堤防を越えることから道路部分が周囲より高くなるため、道路盛土の保護のため両側に石垣が施されている状況も確認された。この石垣に関しては、裏込めにレンガなどが入れられており、大正時代から昭和時代初期頃のものと考えられる。部分的に板石や瓦片などを敷いて路面を補強している。

これより下層では、厚さ1.5m以上にわたって路面が1～2cmの薄い層状に何枚も重なっている様子が観察された。街道部分が、盛土により徐々に盛り上がっていった状況が見られる。ほぼ同じ間隔で重なっており、大規模な補修などはみられない。ただ、道の上面はかなり硬く締まっており、通行による踏み固めだけではなく、なんらかの補強が施されていたことが推測される。人力掘削において、現在のスコップを用いても除去するのに時間がかかるほどであった。今回確認された街道にあたる部分の道は、調査地周辺に厚く堆積する黄褐色細砂層（自然堆積）の上面（T.P.+1.7m程度）から始まっている。硬く締まった路面の広がりから、この時期の道幅は約11mを測り、現在の約7mより広がったことが判明した。道の東側は現在の道路とほぼ同じラインを通るが、西側は西に広がっている。この時期の西側の側溝は確定されておらず、道の西側ラインが西からの洪水砂層の最前線に位置することから、さらに広がった可能性も考えられる。その後、約30cm上面で現在の道路の西側とほぼ同じラインを通る側溝が確認され、これにより現在の道幅が確定したようである。なお、東側では部分的に側溝が検出されているが、土層の観察により初期には東側ラインに盛土が施されていたことが確認された。絵図や文献で見られる土居（土塁）の可能性も考えられる。調査区内で黄褐色細砂層の内部やその下層から、道と確認できる痕跡はみられなかったため、紀州街道の初源となる道は不明である。

2. 紀州街道西側

街道の西側では、後世の大規模な整地層や構造物の基礎部分が残存していたことから、かなり深い部分にまでレンガやコンクリートが埋まっており、上層における遺構面や包含層は大部分が失われていた。紀州街道沿いに明治時代以降大規模な建物が建てられていたようで、レンガの集合体でつくられた建物の基礎部分が残存していたこともあり、街道の西側部分はかなり荒らされていた状況であった。

これらを除いた面では、西端部で畑に伴う南北方向の畝溝が数条並行して検出された。一時期畑作をおこなっていたものといえるが、あまり長期間にわたっておこなわれていたものとは考えられず、調査区内で畝溝はこの部分で検出されたのみである。第4回目洪水砂層の上面にあたるため、江戸時代後半～幕末と考えられる。このほかでは、井戸が4基検出されている。いずれも上部に井戸椀瓦を施しており、底部に底を抜いた桶を入れている。これらの井戸の掘削時期は、江戸時代にかかるものと考えら

れるが、ほぼ現代まで使用されており、廃絶に際してレンガや瓦類をはじめとする多くの廃棄物で埋められていた。

下層では、4時期に分けられる厚く堆積した洪水砂層が確認された。礫を主体とするものや細砂を主体とするものがあり、堆積状況により組成が異なっている。この洪水砂層は、西から流れこんでいることから、大和川に由来するものより、海からの高潮や津波などによるものと考えられる。洪水砂層からは、瓦類や陶磁器類が出土しているが、江戸時代後半を中心とした時期のものがほとんどである。

3. 紀州街道東側

一方、街道の東側では後世の大規模な攪乱もなく、構造物の基礎部分も残存していなかったため、上層における遺構面は比較的良好に残存していた。ただ、整地が遺物包含層まで及んでいたことから、後世の廃棄物が多く混入した状況であった。街道の西側でみられた洪水砂層の堆積はあまり見られず、西からの洪水の被害は比較的少なかったようである。大和川に由来する洪水層の堆積も確認できなかった。

ここからは、ゴミ穴や井戸、水溜めなど紀州街道沿いに広がる遺構がまとまって検出された。ゴミ穴や大型の遺構である水溜め遺構は、廃絶後に多くの廃棄物で埋められていることから、遺物の出土量は非常に多くなった。井戸は、街道の西側でみられたように、上部に井戸椀瓦が巡っているものであり、江戸時代に掘削されたものと考えられるが、ほぼ現代まで使用されており、廃絶に際してレンガや瓦類をはじめとする多くの廃棄物で埋められていた。これらの遺構の埋土からは、レンガや瓦類、陶磁器、堺播鉢などが多くみられるほか、食物残渣である貝殻や木製品なども含まれている。江戸時代後半から幕末に至るものがほとんどである。

特徴的な遺構としては、水溜めと考えられる大型の土坑が2基検出された。紀州街道沿いの50土坑は、素掘りのものであるが、埋土の堆積状況の観察により、2回掘り直されたことがわかり、重要な意味を持つ遺構と考えることができる。また、最終的には洪水砂により埋まっていることから、洪水に屈してしまっただけであるが、それまでに何度も洪水により埋まった土砂を掘り直して、土坑を復活させている努力が感じられる遺構である。

これに対し、調査区東端部で検出された29土坑は、木組みの囲いを大型の板材を用いてまわりに組んでおり、洪水対策ともいえるべき構造をもっている。また、内部は八角形に区画されており、さらに導線として、板石を用いた階段を設けている。庭園の苑池の様相を呈しているが、かなり手の込んだ構造をもつものである。いずれも水溜めと考えられるが、用途ははっきりしない。

狭い範囲で井戸が多数検出されており、遺物量も多いことから、紀州街道沿いに展開する集落の一端が検出されたものといえるが、建物跡などはみつかっておらず、実態ははっきりしない。現代まで続く遺構や遺物も多く、細かい時期区分はできないが、全体の傾向として、18世紀代以降の遺物が多く、それ以前の遺物はほとんどみられない。大和川が開削された18世紀初頭以降に、この場所に紀州街道が通り、大和橋が架けられたことから、急激に人の流れができ、にぎわうようになったことが推測される。

第5章 調査成果

今回の調査は、紀州街道を中心としてその両側に展開した集落などを調査することが目的であった。ただ、紀州街道は、以前に比べて交通量は減ったとはいえ、現在も生活道路のみならず、幹線道路として使われていることから、調査にあたって考古学的調査の範囲をどこで線引きするのかということが問題となった。掘削に入ってまず直面したのは、道路部分および近接する区域に近年まで埋設管などが設けられていたことや大型建物の基礎がそのまま残存することから、機械による埋土除去作業でコンクリートやレンガの塊が大量に発生するという状況であった。幸いなことに、今回の調査は本体工事と一体化していたことから、掘削機械の規模は申し分なく、通常の発掘調査のみの現場では考えられないようなペースで除去作業をすすめることができた。ただ、予想以上に盛土・整地層が厚いことから、人力掘削開始面までかなり上面の攪乱が進んでいた状況であった。このため、機械によって埋設管や大型建物の基礎などを除去した時点から調査を開始し、後の整理作業の段階で出土遺物から時期を判断して、調査の線引きを判断することとした。おおまかな目安として、江戸時代の範囲内を基準とした。ただし、江戸時代から明治時代まで連続する遺構も存在することから、あえて明治時代の範疇に入る部分の記述は避けているが、一部この範囲を越えたものも含まれている。

調査は、現在の紀州街道を東側に迂回させて、本来の紀州街道部分とその西側を一体として調査をおこない、その終了後に紀州街道を復旧させた後に東側の調査にかかったため、調査区を大きく2箇所に分けて調査を進めることとなった。このため、調査の進行上、2箇所に分けて調査成果を記述するところであるが、紀州街道部分とその両側では、遺構の展開などに違いがみられることから、紀州街道部分とその両側の3箇所に分けて記述することとする。ただ、紀州街道の西側に関しては、同時に調査をおこなったことから、重複した記述になる部分もある。

第1節 A・B区（紀州街道部分）の成果

紀州街道に関する歴史的背景は、第2章第2節で述べているが、道路部分に考古学的調査によるメスが入れられることは、おそらく今回がはじめてのことと考えられる。そのため、特に江戸時代を中心として幹線道路であった紀州街道の初源となる道の検出、およびその展開を解明することが調査の目的であった。また、堺環濠都市と住吉をつなぐ部分の集落の展開を探ることも目的であった。

前章で述べたように、紀州街道部分に関しては、道路の踏み固め状況により、層位上で道0面から道7面まで区分した。ただ、これは大規模な改修工事などを想定しているわけではなく、あくまでも断面観察による画期をもとにした便宜的な区分である。さらに大規模な改修工事もあり認められないため、明確に時期区分をあらわしているわけではない。ただ、細かくみると堆積状況や遺物の違いがみられるため、ここではある程度の時期区分の目安として使うこととする。記述に関しては、古い時期から新しい時期の順（下層から上層）に進めることにする。

1. 中世以前の遺構・遺物

第2章第1節でも記述しているように、調査地一帯は「堺砂堆」上に位置しており、調査中は全面にわたってほとんど砂質土の掘削のみであり、粘性の強い土壌をみることはなかった。紀州街道部分においても、下層には、基本層序で述べた黄褐色細砂層が約1m堆積しており、調査当初は紀州街道建設のため的人為的な盛土と誤認したほどであった。非常に均質な砂層であり、ラミナなどは広い範囲においても見ることができず、流水堆積とは考えられない状況であった。小礫すら混入しておらず、人為的な遺物も検出することはできなかつた。広い範囲にわたって、人が生活した痕跡（遺構）をみつけることもできなかつた。

調査の最終面は、大阪府教育委員会の指導により、この黄褐色細砂層の下層にみられる黒色粘土層上面とされ（T.P.+0.7m程度）、部分的なトレンチ掘削によりさらに下層の土層堆積状況を確認した（図14、図版2）。なお、黒色粘土層上面において、人為的な痕跡は検出されず、遺物はまったく出土していない。

A区では、紀州街道の西側に堆積する第1回洪水砂層が黒色粘土層をえぐるように堆積しており、街道部分の西側がその洪水砂層の最前線となっていることから、この洪水砂層を除去することで、土層の堆積状況を観察することができた。これによると、黒色粘土層の下は細砂混じり粗砂を主体とする土層であり、有機物や炭化物が多く含まれている。種類は特定できないが、水生植物が多く生息していた可能性が高い。径5mm程度の小礫を含むなど均質とはいえず、上層の黄褐色細砂層とは状況がかなり異なる。遺物の出土はなく、時期を判断することはできなかつた。

B区の調査においても、紀州街道部分にあたる位置で黒色粘土層から約70cm掘り下げたトレンチにより、下層の堆積状況を観察した。基本的には、A区での観察所見と異なることはなく、細砂混じり粗砂を主体とする土層であり、水生植物によるものと考えられる有機物や炭化物が検出された。遺物の出土はなく、時期を判断することはできなかつた。

黒色粘土層は、厚さ10cm程度の粘土を主体としているが、粗砂が多く含まれる部分もあり、均質で

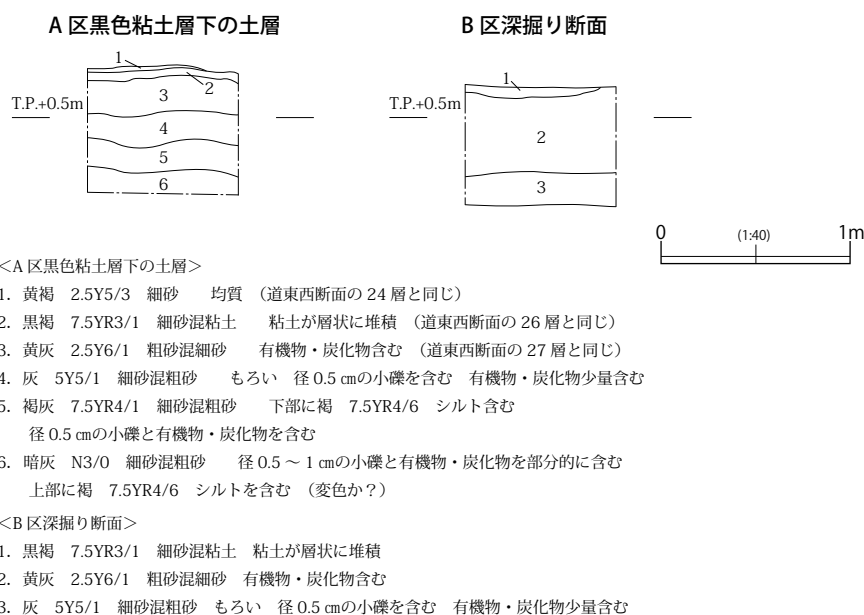


図14 黒色粘土層下層の土層 断面模式図

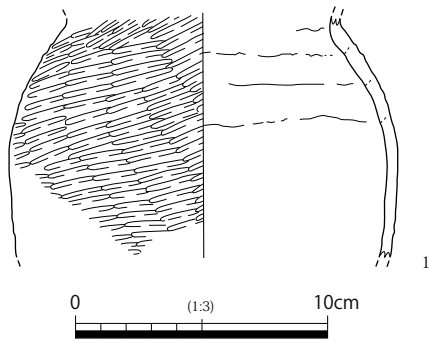


図15 黄褐色細砂層 出土遺物

はない。有機物が炭化した層であり、一時期湿地状になっていたことが推測される。遺物は出土していないため、時期決定はできなかった。ただ、粘土の中に炭化物が大量に含まれていることから、A区においてサンプルを採取し、放射性炭素年代測定をおこなった。詳細は、第6章で述べるが、結果的にB.C.102～A.D.24（確率95.4%）という測定値となり、紀元前2世紀末～紀元1世紀前半の弥生時代前期～中期ということになった。この黒色粘土層の上に黄褐色細砂層が厚く堆積している。

黒色粘土層の放射性炭素年代測定の結果から、黄褐色細砂層は弥生時代中期以降に堆積した可能性が考えられる。前述したように、非常に均質な砂層であり、海沿いの立地であることから、砂丘のような堆積状況であったと推測される。長期にわたって人為的な痕跡は残っておらず、遺物も含まれていないため、近接して堺環濠都市や住吉の集落などが展開しているのに対し、人跡未踏に近い状況であったことが考えられる。

その中で、唯一調査区の南壁際でこの砂層上層から弥生土器甕と考えられる、タタキ目のある土器が出土した（図15-1）。胴部のみであるが、はっきりとタタキ目を確認することができるため、弥生時代後期から庄内期にかけての時期のものと考えられる。ただし、この砂層からはこれ以外の遺物は検出されておらず、石器もみられない。後世の混入の可能性もあるため、この土器がそのまま砂層の時期を表しているかどうかははっきりしない。ただ、黒色粘土層の放射性炭素年代測定の結果と齟齬をきたさないことから、黄褐色細砂層は、弥生時代中期以降の時期に堆積した可能性が高いといえることができる。

紀州街道部分では、これ以降の古墳時代～中世の遺物は、混入品を含めてもほとんど出土しておらず、現在の状況からは考えられないが、先に述べた人跡未踏の状況が比較的長く続いていたことを証明しているものといえよう。

2 近世の遺構・遺物

歴史的背景として、中世末から近世初頭にかけて堺環濠都市をめぐる攻防が激化したことから、調査地周辺もその流れの中で、人跡未踏の状況であり続けることはなかったものと考えられる。近世以降、大阪夏の陣で焼失した大坂の町や堺環濠都市の復興が進み、さらに18世紀初頭の大和川開削工事により、近接して大規模な河川が建設されるというように、今まで考えられなかったような状況となったことにより、人の流れがこの地に及ぶようになったことが容易に推測される。このため、調査成果においても、中世以前の遺構・遺物がほとんどみられなかった状況から、一転して近世は遺構・遺物が多く検出されるようになった。特に、18世紀以降の遺物量が多い。紀州街道部分は、前述したように、便宜的に層位上で道0面から道7面まで区分した（図版1）。現在も存続しているため、近世にかかるのは、道3面以前と考えられる。以下、この道の区分に沿って調査成果の記述を進めていくこととする。

a. 道7面（図16、図版3）

黄褐色細砂層の上面を道7面とした。レベルはT.P.+1.6m程度を測る。上部で見られる路面のような踏み固められた状況ではなかったが、A区東端部で22土坑が検出されたことから、道6面に先行する遺構面として認識できることとなった。黄褐色細砂層の上で初めて人為的な痕跡が認められる遺構面で

ある。ただし、この面で検出された遺構はこの1基のみであった。この遺構面では、道の痕跡はまったく認められず、現在の紀州街道の初源となる道は調査区内では検出されなかった。

22土坑（図版2・20）

紀州街道に先行する遺構であるが、平面では認識することが非常に困難で、土層確認のためのトレンチを掘削した際に、断面で確認されたものである。検出面での平面形は長径約3.5m、短径3.0m（推定）の楕円形を呈しているが、底部は一辺約1.3mのやや方形で、その四隅に杭が打ち込まれた状況であった。深さは、約0.8mを測る。用途は不明であるが、本来は方形の土坑で、周囲がもろい砂層であることから、杭と板で土留めをしていたものと考えられる。杭は数本検出されたが、板材は検出されていない。埋土は、明黄褐色細砂が均質に堆積しており、まわりの黄褐色細砂層との区別が付きにくい状況であった。ただ、

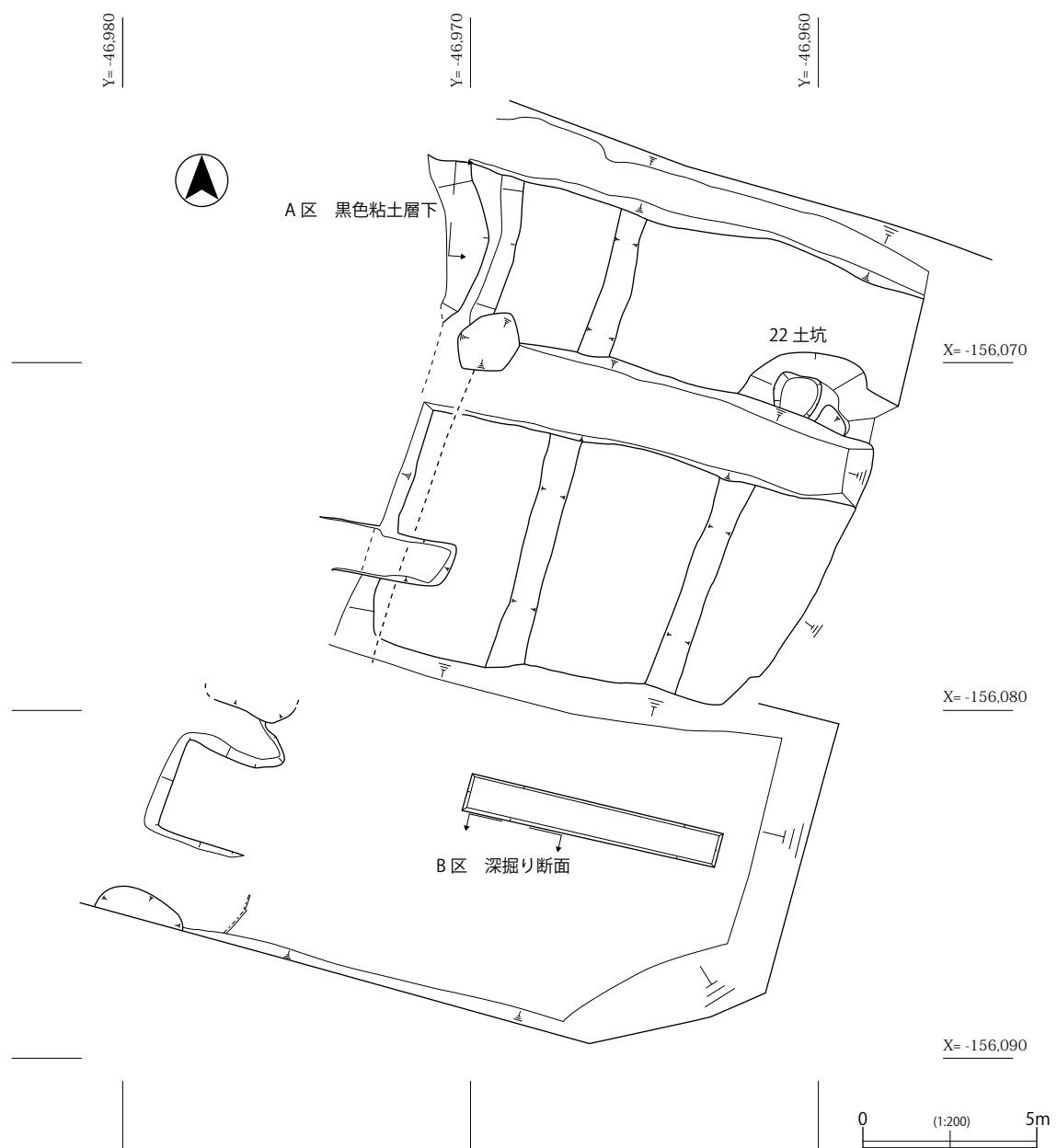


図16 道7面 平面図(1/200)

断面観察により、周囲に炭化物が含まれていることが認められたため、遺構の形状が判明したものである。なお、底部の堆積状況から、井戸の可能性は低いものといえる。遺物は、底部付近でふいごの羽口が1点出土したのみである（図版20）。このため、時期ははっきりしない。ただ、道6面との層位的な時期差はあまりみられないことから、明確な判断はできないが、近世前半頃の可能性があるものと考えられる。

b. 道6面（図17、図版3）

紀州街道が現在のルートを通るようになった、初源の道が認められた最古の遺構面である。踏み固められた面が確認できたため、道と判断した。レベルはT.P.+1.7m程度を測る。

断面観察により、踏み固められた層が複数面確認でき、遺構面においても確認できたことから、道と

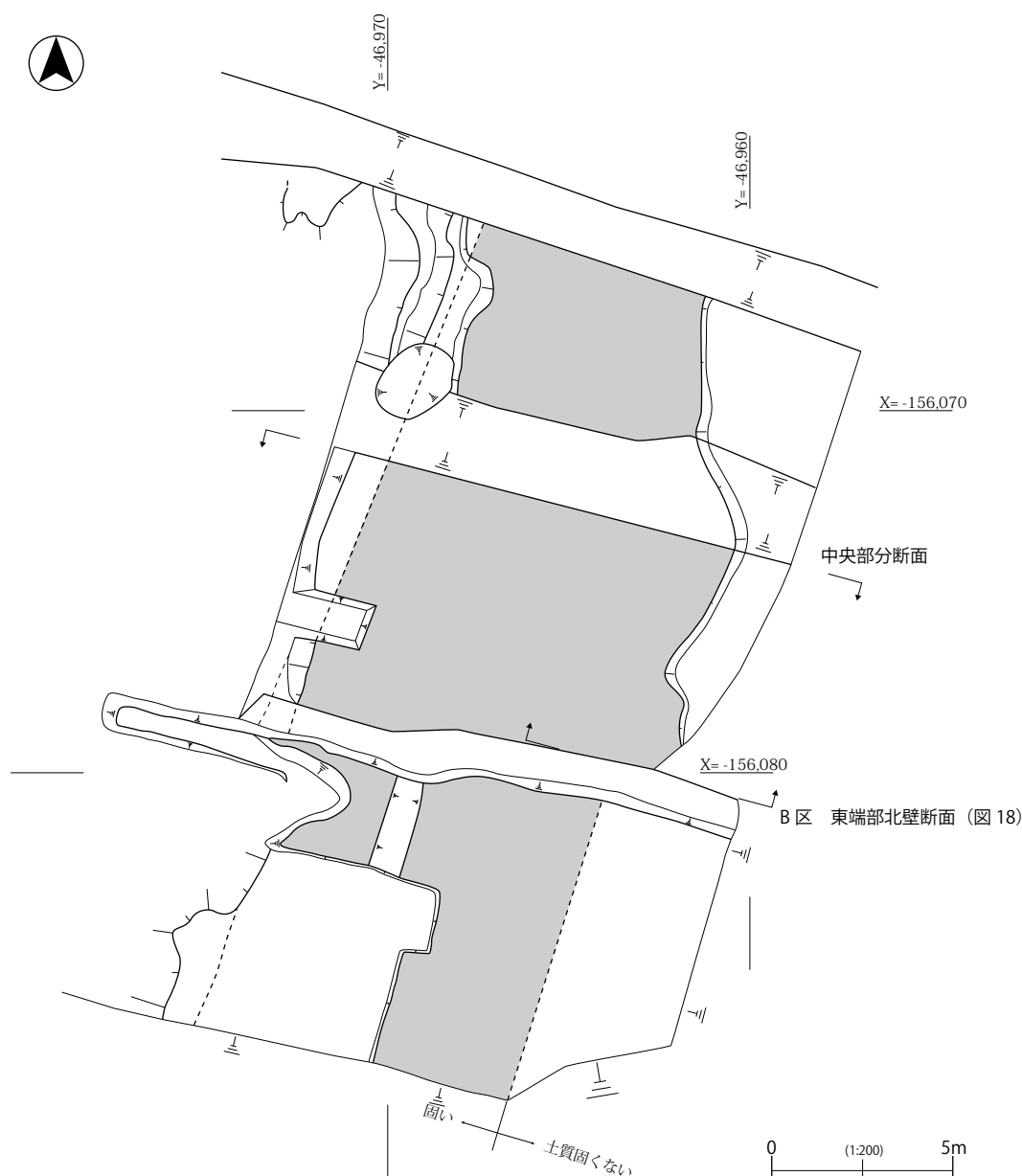


図17 道6面 平面図(1/200)

して機能していたものと考えられる。この踏み固められた範囲が、現在の紀州街道の西端よりさらに西側に約4m広がっていることから、当初は現在の道幅より広く、11m以上の規模であったことがわかる。なお、確認された道の西端部分は、西からの洪水砂層に侵食されていることから、本来はさらに西側に広がっていた可能性も考えられる。

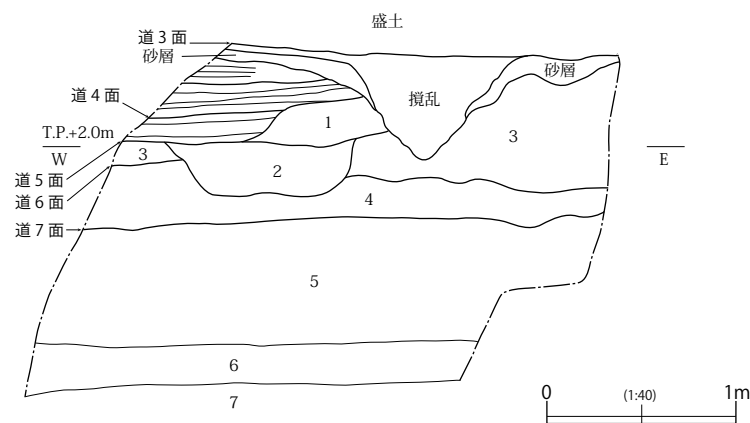
路面の下層には、事前に道を建設するための大規模な工事をおこなった形跡がみられないことから、当初は計画的につくられたものではなく、自然発生的な道から始まったことが考えられる。路面は、にぶい褐色シルトとにぶい黄橙色シルト、灰褐色粗砂が混在する厚さ10cm弱の硬く締まった層である。人力掘削にあたって、現代のスcoopでも苦勞するほど硬くなっているが、礫などは含まれておらず、補強剤のような混入物は確認できなかった。

西端部で、溝の痕跡が部分的に検出されており、道の西側に側溝が設けられていたものと考えられる。ただ、溝は西の海側からの洪水により侵食されていることから、形状は確定しておらず、さらに道の西側も洪水砂層により削平されていることから、道6面が機能していた時期の景観を復原することはできない。調査区内では、道の東側で溝は検出されなかったことから、道の両側にしっかりと側溝が設けられていたとはいえない状況である。なお、現在の道の中央付近から東側にかけて、後世の掘り込みが道6面まで及んでいることから、道の東側は確定しなかった。このため、当初の道は、現在の道より広い道幅で西側に広がっていたものか、同じような規模で現在の道より西側にずれていたものかの判断はできなかった。

道6面と道7面間の堆積層（道6面下層）からは、遺物はほとんど出土しておらず、道6面の時期を確定することはできなかった。

c. 道5面（図18～20、図版3・4）

紀州街道が現在の道幅となった、最初の道が認められた遺構面である。側溝が検出され、現在の道幅である7mとほぼ一致することから、現在につながる道と判断した。レベルはT.P.+2.0m程度を測る。



1. 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混細砂 径0.5～1cmの礫含む
2. にぶい黄褐 10YR5/3 細砂混粗砂 径0.5～1cmの小礫含む
3. 褐灰 7.5YR4/1 細砂 径0.5cm程度の小礫含む
4. にぶい褐 7.5YR5/3 と にぶい黄橙 10YR7/2 シルト と 灰褐 7.5YR6/2 粗砂
5. 黄褐 10YR5/6 細砂 均質
6. 褐灰 10YR5/1 細砂 と 黒 7.5YR2/1 細砂混粘土 粘土が層状に堆積
7. 黒褐 7.5YR3/1 細砂混粘土 粘土が層状に堆積

図18 紀州街道東端部 土層断面図（B区北壁）

遺構面で、ほぼ現在の道の西端部と一致する溝を検出した。道の西側溝と考えられ、幅1.0～1.2m、深さ約0.4mを測り、土層断面でも確認することができた。側溝が設けられていることから計画的に整備されたものと考えられるが、路面の下層は、道6面と同様に道を建設するための大規模な工事をおこなった形跡はみられない。路面は、硬く締まった灰黄褐色粗砂混じりシルトが主体で、比較的もろいにくい黄橙色細砂が混在する厚さ5～10cmの層である。土層断面の観察により、この層の中に、さらに厚さ1cm程度の硬く締まった層が3～5枚程度重なっており、シルト層と細砂層の薄い層が互層となっている状況が確認できる。道6面から道5面まではおおむねこの状況が繰り返されており、継続して踏み固められた堆積状況を見ることができる。道6面で検出された道の堆積状況と比較すると、踏み固められた堆積層の量（面数）がはるかに増加していることから、道を通行する人数が急激に増えたことが想像できる。この時点から、幹線道路としての役割が生じたものと考えられる。礫などは含まれておらず、

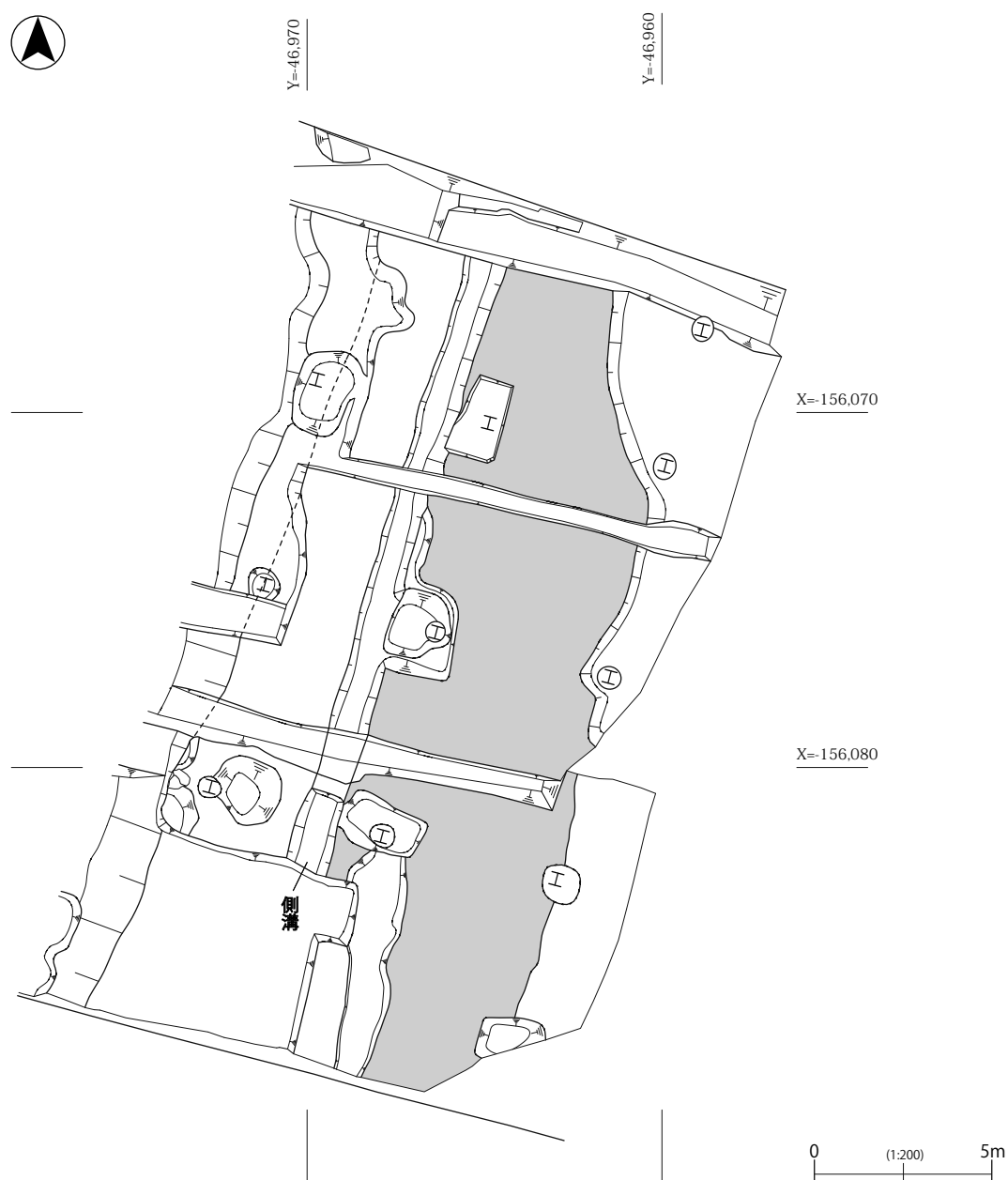
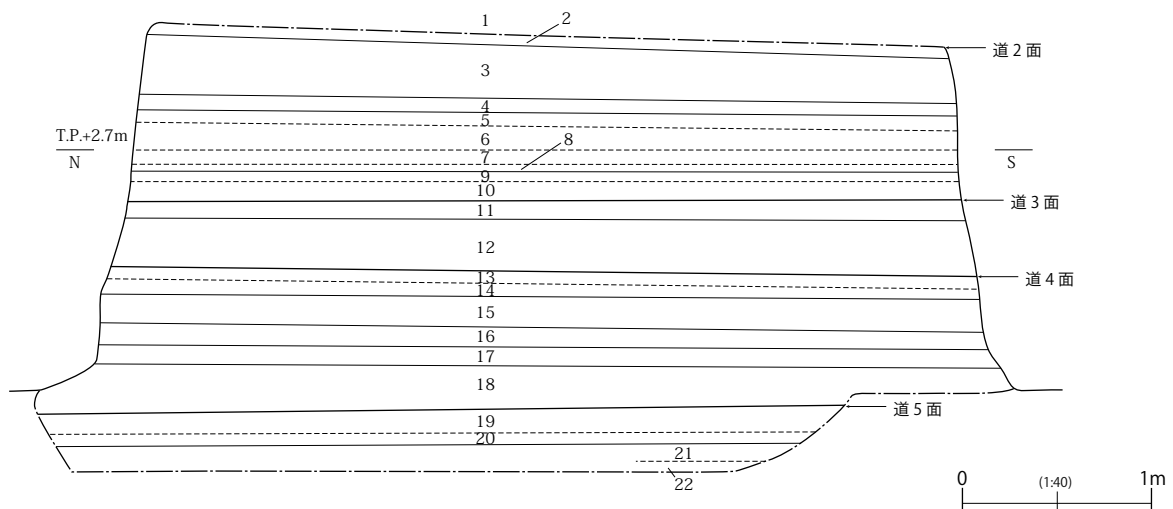


図19 道5面 平面図(1/200)

補強剤のような混入物を明確に確認することはできなかった。ただ、江戸時代の土木技術の上で、土に補強剤を混入させる例は多いことから、単なる踏み固めだけではない補強方法を用いているものと考えられる。

道の東側においても、ほぼ現在の道の東端部と一致する溝が、西側と同様に検出された。道の東側溝と考えられ、幅約1.3m、深さ約0.4mの規模で確認することができた。ただ、西側溝のように明確に掘削されたものではなく、検出も部分的なものにとどまっている。特に、調査区北半部では、検出することができなかった。B区北壁の土層断面の観察によると、道6面の段階で道より東側に高くなる盛土が確認されることから、道の東側は側溝ではなく、道に沿って盛土のような高まり（土塁）が存在していた可能性が考えられる（図18）。なお、元禄2(1689)年の『堺大絵図』に、紀州街道の並松町付近の両側に1間の土居が築かれていることから、可能性は高いものといえる。道の西側に側溝、東側に土塁が設けられていた道の景観が想定される。



1. にぶい黄燈 10YR6/3 細砂～粗砂 礫・瓦類混在（埋土）
2. 黄灰 2.5Y6/1 礫混粗砂 固い（薬剤で固めている）と にぶい赤褐 5YR5/4 礫混粗砂 固い のセット
3. 灰黄褐 10YR5/2 ～ 黒褐 10YR3/2 粗砂混細砂
4. 黒褐 10YR3/1 細砂 固くしまる
5. にぶい黄褐 10YR5/3 粗砂混細砂 部分的に焼けている（赤褐 2.5YR4/6 シルト）
6. にぶい黄燈 10YR6/3 粗砂混細砂 固くしまる 厚さ1cmのシルト層（固い）2～3枚あり
7. にぶい黄燈 10YR6/4 粗砂混細砂 径1cm程度の小礫含む 2～3枚の面あり
8. 灰黄褐 10YR6/2 細砂混粗砂 径1cm程度の小礫含む 2枚の面あり 比較的にもろい
9. 黄灰 2.5Y6/1 粗砂 と 褐灰 10YR4/1 シルト の互層
10. 黄褐 2.5Y5/3 粗砂混細砂 明黄褐 10YR6/6 粘土ブロック含む
11. 灰黄褐 10YR6/2 粗砂混シルト 固くしまる と にぶい黄燈 10YR7/3 細砂 もろい の互層
12. 灰黄褐 10YR6/2 粗砂混シルト 固くしまる と にぶい黄燈 10YR7/4 細砂 もろい の互層
13. にぶい黄褐 10YR5/3 細砂 もろい と 褐灰 7.5YR4/1 シルト 固くしまる の互層
14. 灰黄 2.5Y7/2 シルト 固くしまる 面が数枚に分かれる
15. にぶい褐 7.5Y5/3 と にぶい黄燈 10YR7/2 シルト 灰褐 7.5YR6/2 粗砂
16. 黄褐 10YR5/6 細砂 均質（自然堆積）
17. 黒褐 2.5Y3/1 シルト混細砂 黒色シルト多く含む
18. 黒褐 7.5YR3/1 細砂混粘土 粘土が層状に堆積
19. 黄灰 2.5Y6/1 粗砂混細砂 有機物・炭化物含む
20. 灰 5Y5/1 細砂混粗砂 もろい 径0.5cmの小礫含む 有機物・炭化物少量含む
21. 褐灰 7.5YR4/1 細砂混粗砂 下部に褐 7.5YR4/6 シルトを含む 径0.5cmの小礫と有機物・炭化物を含む
22. 暗灰 N3/0 細砂混粗砂 径0.5～1cmの小礫と有機物・炭化物を部分的に含む 上部に褐 7.5YR4/6 シルトを含む一変色（酸化）か？

図20 紀州街道 堆積状況模式図

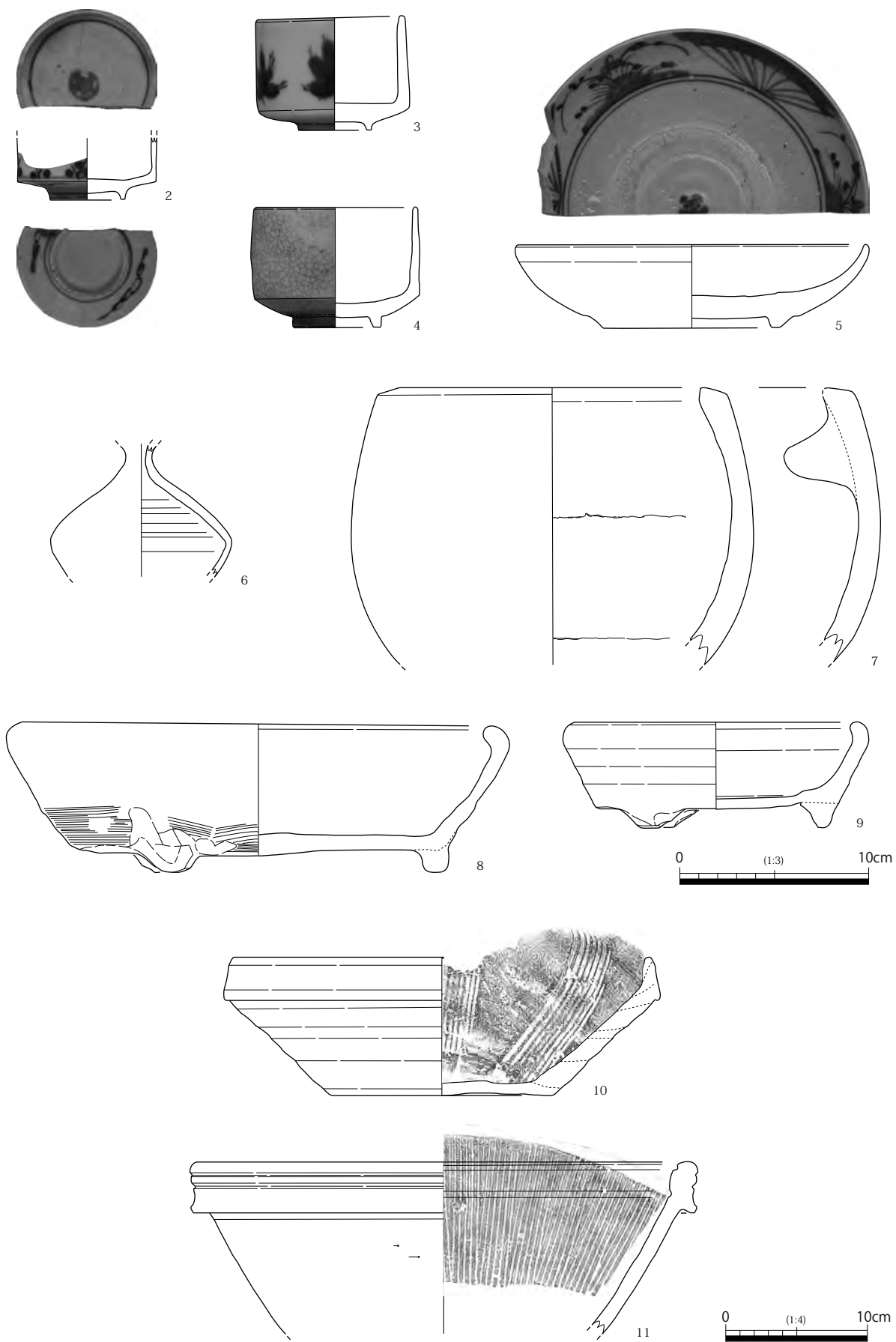


图21 道5面下(道6面上) 出土遺物

道5面下（道6面上）の遺物（図21、図版19）

紀州街道部分から出土した遺物は、便宜上区分した「道〇面」を目安に出土層位を決めて取り上げているが、道の窪みなどの補修のために埋められたものや、ある程度の盛土、埋設物の埋土など人為的に埋められた部分から出土したものが多い。このため、そのまま時期をあらわしているとはいえない遺物も多く存在すると考えられる。詳細な遺物の検討をおこない、細かい時期まで精査すべきところであるが、時間的制約もあることから、今回は、出土した遺物を層位毎にまとめて報告することを優先した。したがって、同じ層位内で時期的に矛盾が生ずる遺物が含まれる場合もあるが、ご了承願いたい。

肥前磁器染付碗・皿、白磁壺、陶器碗・壺、土師質土器火鉢・焜炉、丹波焼播鉢、堺播鉢、瓦類などが出土した。2・3は染付碗で、半筒形のものである。2は、見込み中央部にコンニャク印版による五弁花が付せられている。3は外面に若松文が付されている。4は肥前陶器碗で、半筒形のものである。底部外面を除き、施釉されており、ほぼ全面に貫入がみられる。5は染付皿で、見込みに蛇の目釉剥ぎが認められ、中央部にコンニャク印版による五弁花が付せられている。6は白磁壺である。口が非常に細くなっており、整髪用の油壺と考えられる。7は土師質土器焜炉で、内面に突起が認められる。8・9は土師質土器火鉢で、3ヶ所に脚をもつものである。9はやや小ぶりで、外面口縁部に墨書がみられる。10は丹波焼播鉢である。11は堺播鉢である。時期的には、18世紀代のものがみられる。

d. 道4面（図20、図版4）

紀州街道が現在の道幅となった、道5面から続くもので、硬く締まる粘土層が顕著に認められた遺構面である。粘土を主体とすることから、路面の補強をはかったものと考えられる。なお、道の両端部には、後世の大規模な建物に伴うレンガ塊の基礎がこの部分まで残っていたことから、側溝を確認することはできなかった。道5面の段階で側溝がつくられ、現在まで道幅は確定したものであることから、平面的には道に対して大きな変更や修正がおこなわれた形跡はみられなかった。レベルはT.P.+2.2m程度を測る。

路面は、硬く締まったにぶい赤褐色粘土と灰黄色粘土が主体となる、厚さ5～10cmの層である。全体的にやや赤味があった粘土であり、土層断面の中では目立つ。火を受けた可能性があるが、路面の補強のために人為的に焼いたものか、火災などの影響を受けたものかははっきりしない。土層断面の観察により、道5面から道4面にかけても、さらに厚さ1cm程度の硬く締まった層が3～5枚程度重なっており、シルト層と粗砂層の薄い層が互層となっている状況が確認できる。道6面からこの状況がおおむね繰り返されており、継続して踏み固められた堆積状況を見ることができる。

現在の道の中央付近から東側にかけて確認された、道6面まで及ぶ掘り込みは、道4面段階で埋められている。路面は、その上を越えて東端まで水平に広がっている状況がみられる。大規模とはいえないが、窪んだ部分に細砂を入れて平らにして道4面を確保しており、道に対する修復工事の痕跡がはじめて確認されたものといえる。

また、特にA区北部では、西からの洪水砂層に侵食される紀州街道西側の状況を見ることができる。紀州街道はやや高い位置にあったものと考えられるが、西側に向かって盛土により拡張をおこない、洪水による侵食部分を回復している。この部分の盛土からは、比較的多くの遺物が出土した。後述するが、洪水砂層の最前線では、道のすぐ横まで洪水の被害が及んでいることがわかる。

道4面下（道5面上）の遺物（図22、図版19）

肥前磁器染付皿、青磁碗、陶器碗・蓋、瓦類などが出土した。12は染付輪花皿で、見込みには松竹梅が円形に配置されており、底部高台内には「富貴（長）春」と記載されている。13は施釉陶器土瓶蓋である。14は肥前陶器碗で、半筒形のものである。15・16は青磁碗である。17は唐津焼碗で、内外面ともに刷毛目がみられる。

e. 道3面（図20・23、図版5）

紀州街道が現在の道幅となった、道5面から続くもので、厚さ約10cmの硬く締まる黒褐色細砂層が顕著に認められた遺構面である。なお、側溝の推定位置には、後世の道1面段階で設けられた石垣の基礎部分がこの部分まで及んでいたことから、確認することができなかった。道5面の段階で側溝がつく

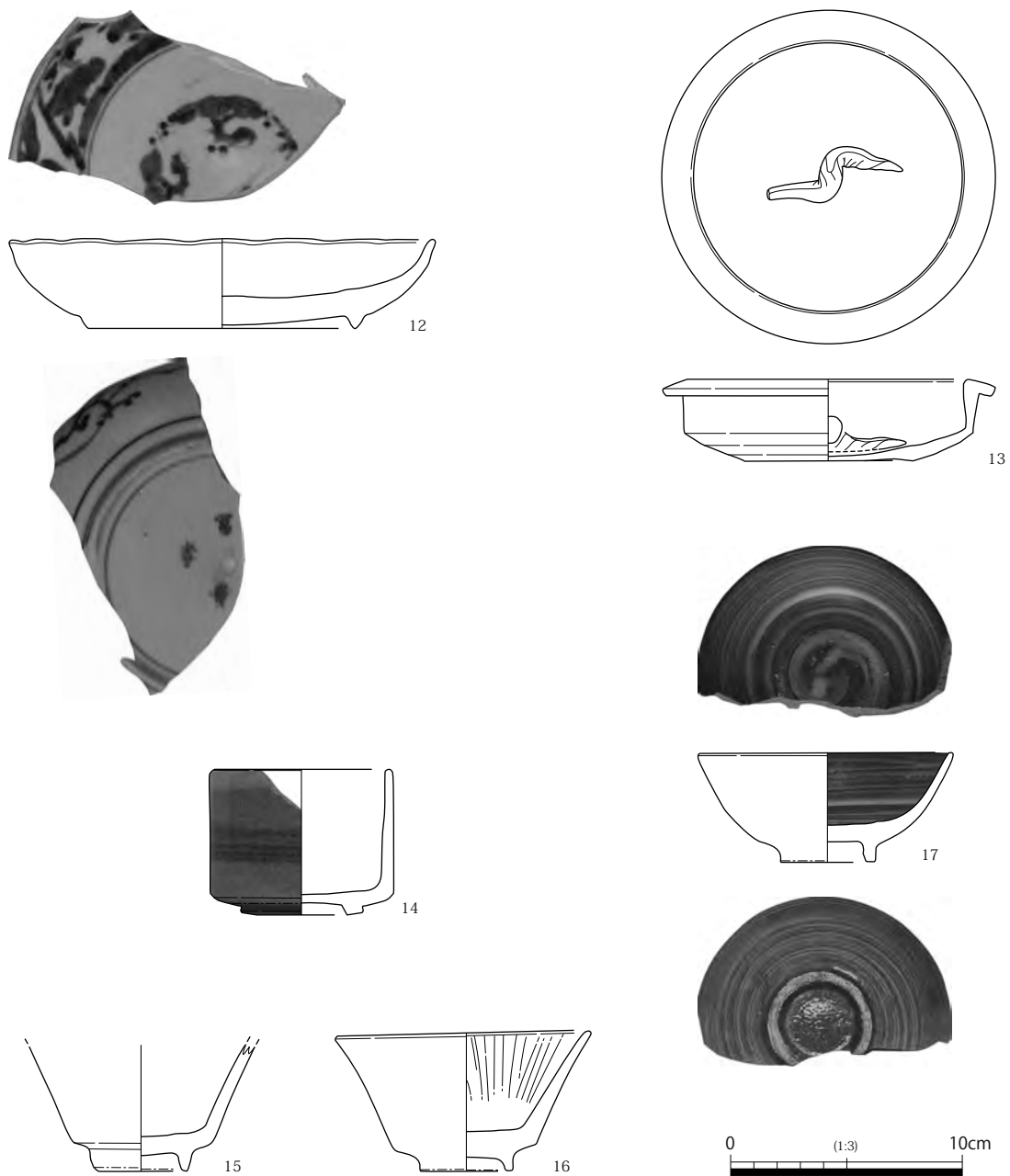


図22 道4面下（道5面上）出土遺物

られ、現在まで道幅は確定したものであることから、道に対して大きな変更や修正がおこなわれた形跡はみられなかった。レベルはT.P.+2.7m程度を測る。

路面は、硬く締まった黒褐色細砂が主体となる、厚さ約10cmの層である。全体的に黒ずんでおり、この層の上層および下層が黄橙色系であることから、層厚は薄い、土層断面の中では目立つ。硬く締まった細砂であることから、なんらかの補強剤を混入していることが考えられるが、特定することはできなかった。下層は、にぶい黄橙色粗砂混じり細砂を主体としており、厚さ約40cmを測る。紀州街道の堆積層の中では、比較的厚いものであるが、一気に埋められたものではなく、シルト層と粗砂層の薄い層が互層となっている状況が確認できることから、特に大きな変更や修正がおこなわれた状況とはいえない。道4面から道3面にかけても、厚さ1cm程度の硬く締まった層が3～5枚程度（20cmあたり）重なっている状況が確認できる。ただ、堆積層の中には、道4面以下ではあまりみられなかった、径1cm程度の小礫を含むものもみられるようになり、この時期以降に路面補強のため、礫を使用するよう

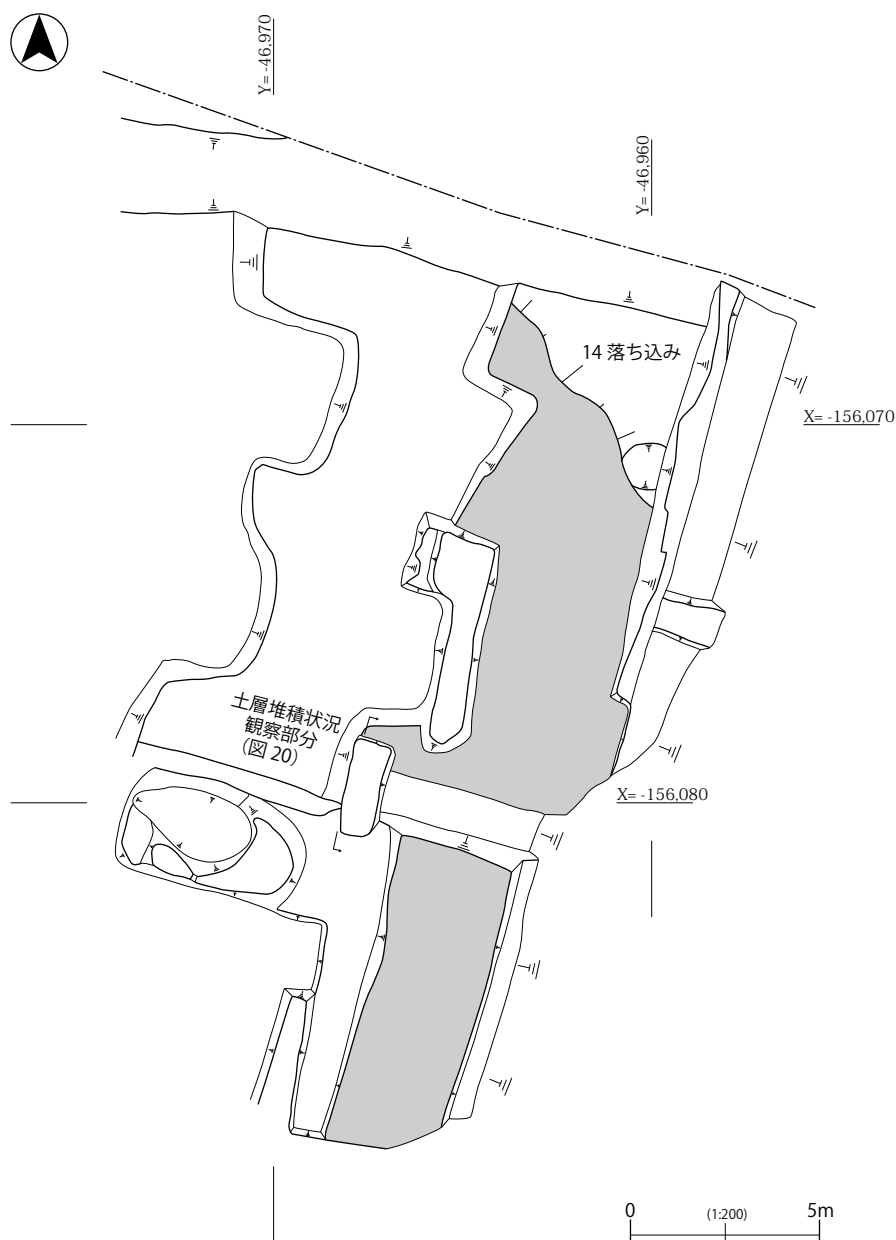


図23 道3面 平面図(1/200)

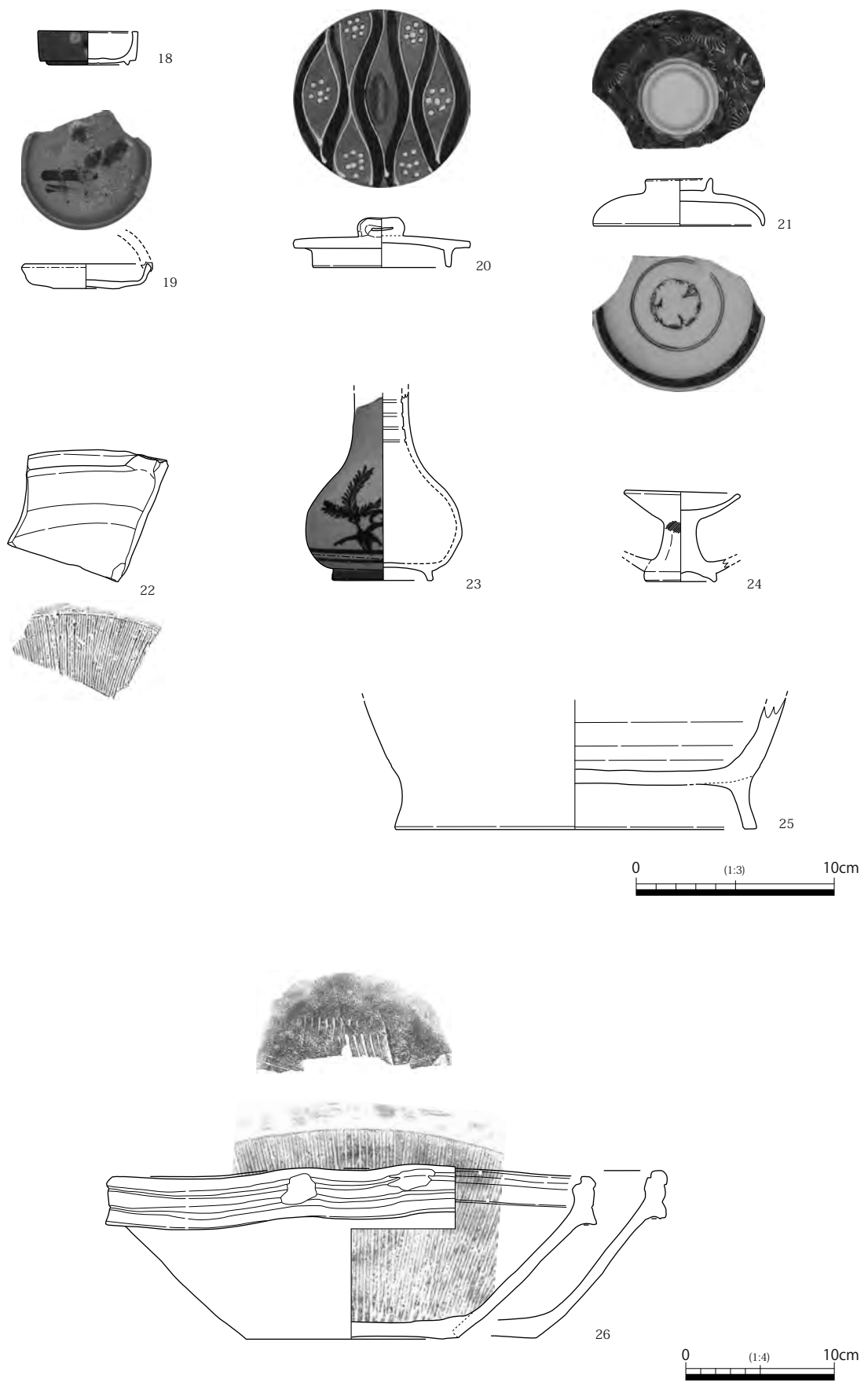


图24 道3面下(道4面上) 出土遺物

なったことがわかる。なお、路面と想定している黒褐色細砂層の下層では、部分的に焼けた状況（赤褐色シルト）がみられ、火災などの火を受けたことがわかる。

なお、A区北東部で、道3面の下から北東方向に下がる14落ち込みが検出された。深さ約0.2mを測り、埋土は灰白色礫混じり粗砂層である。道にかかる部分であり、往来を妨げるような掘削をおこなうような位置ではないことから、大和川に近接していることもあり、洪水などで削平されたような自然災害の可能性が考えられる。埋土には、ラミナなどは認められず、比較的均質であることから、流水堆積とは考えられず、道復旧のため、人為的に一気に埋めたものということが出来る。遺物の出土量は少ない。

また、A区東端部で、道4面上面に相当する灰黄色粗砂層から寛永通宝が緋銭の状態出土した。土層確認用に残しておいたアゼ内からみつかったものであるため、詳細な観察はできていない。遺構を確認することはできなかったため、砂層の中からそのまま検出されたものである。ただし、出土した層位が厚さ10cmに満たないほどであることから、意図的に埋納したものとは考えられない。銅銭である寛永通宝の緋銭であるが、検出時は鉄錆の塊と化しており、部分的に塊からはずれた銭から寛永通宝と判別できたほどであった。保存処理により周囲の鉄錆を除去したが、通常の銅銭の錆具合に比べて、鉄錆の量が多いとのことであった。周囲の鉄錆の除去のみで処理を終えたため、詳細の検討はおこなっていないが、鉄錆が多い理由として、寛永通宝の鉄銭が多く含まれていることや、出土位置が砂層ということで、地下水に含まれる鉄分が吸着しやすかったことなどが考えられる。はっきりしないが、紐状の痕跡も一部認められる。通常は96枚（96文分）を一差しとし、百文として扱っていたものである。正確な点数も計測できていないが、350枚以上はあるものと考えられる（図版21）。

道3面下（道4面上）の遺物（図24、図版19・20）

肥前磁器染付碗・皿・蓋、陶器蓋・壺・台付灯明台・小型播鉢、備前焼播鉢、陶質焼台、軟質陶器、土師質土器火鉢、銅製品などが出土した。18・19は、軟質陶器のミニチュアである。表面に色付の文様が描かれている。20は陶器蓋で、白泥で文様が描かれている。21は染付蓋で、内面見込みには松竹梅が円形に配置されている。22は陶器小型播鉢で、内面に鉄釉が施されている。23は陶器壺で、外面に手描きで草木文が描かれている。24は灰釉陶器の台付灯明台である。25は輪高台をもつ土師質土器火鉢である。26は備前焼播鉢である。65は銅製蓋で、つまみ部分には花文が付されている。

f. 道2面（図版6）

紀州街道が現在の道幅となった、道5面から続くもので、薬剤で固められたと考えられる黄灰色礫混じり細砂層が顕著に認められた遺構面である。なお、側溝の推定位置には、道1面段階で設けられた石垣の基礎部分がこの部分まで及んでいたことから、確認することができなかった。路面を固めるためにセメント状の薬剤を使用しており、近代以降のものといえる。レベルはT.P.+3.0m程度を測る。

道3面から道2面までは、黄灰色礫混じり細砂とにぶい赤褐色礫混じり細砂が混在しており、道3面以下でみられた、厚さ1cm程度の硬く締まった層が重なっている状況は確認できない。路面の補強方法の変化がみられる。

道2面下（道3面上）の遺物（図25・26、図版20）

肥前磁器染付碗・鉢・皿・蓋、白磁紅皿、青磁碗、陶器小碗・蓋・灯明皿・台付灯明台・火入れ、堺

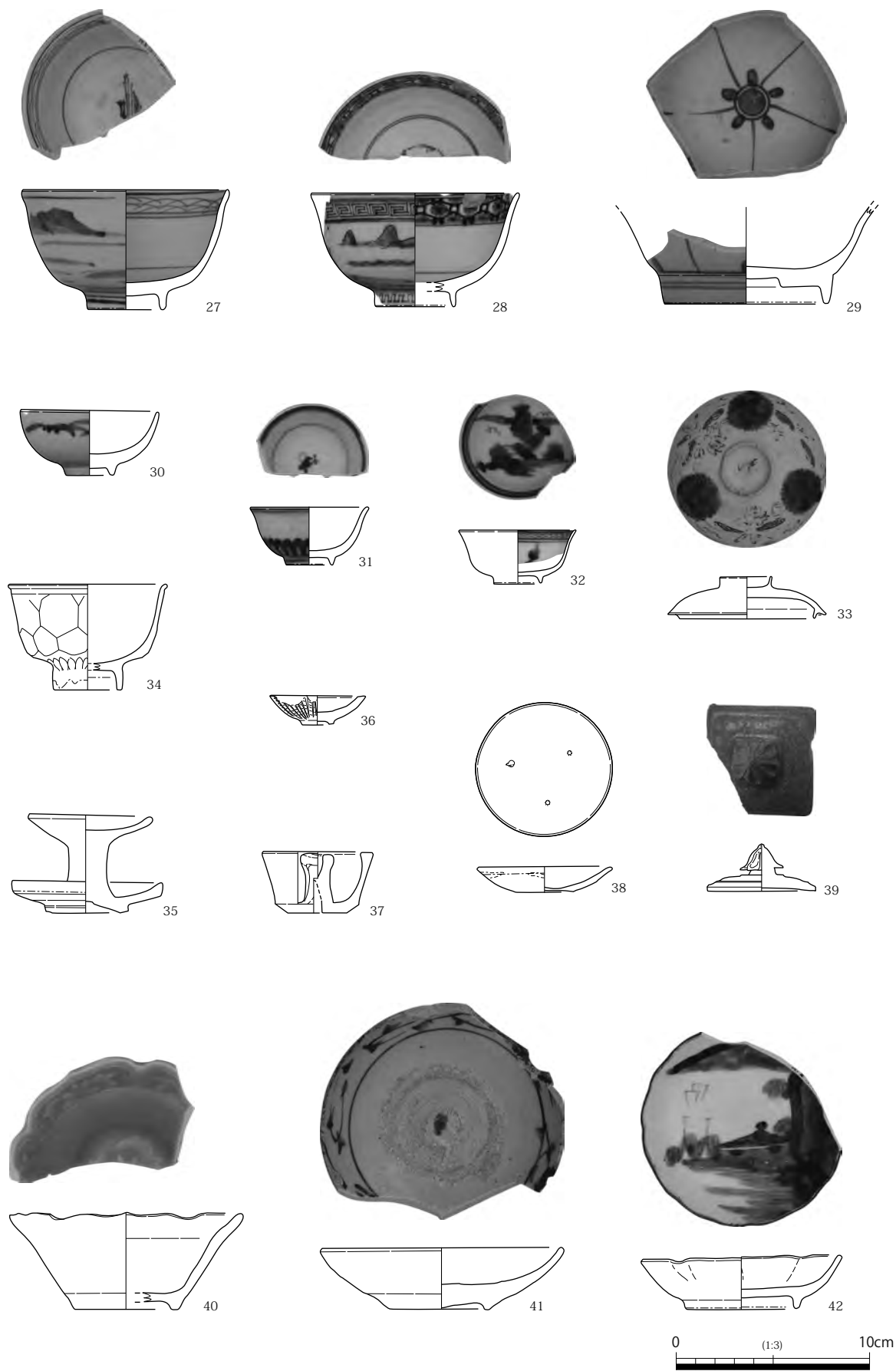


图25 道2面下(道3面上) 出土遺物(1)

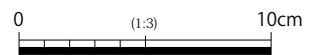
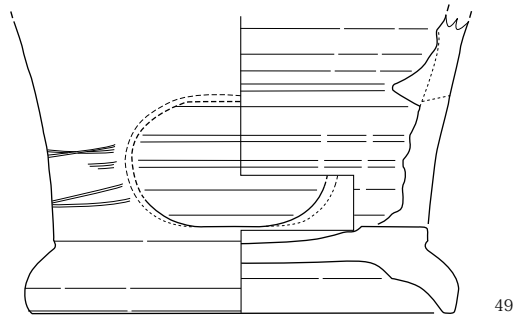
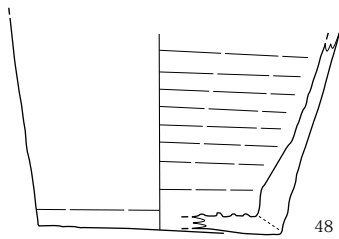
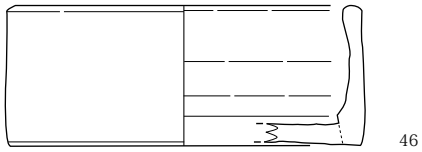
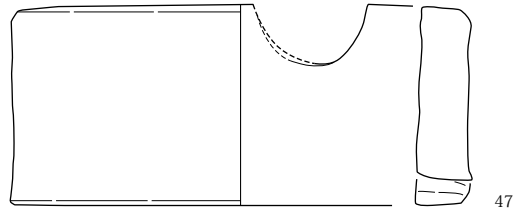
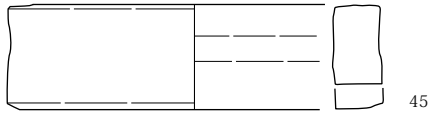
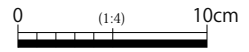
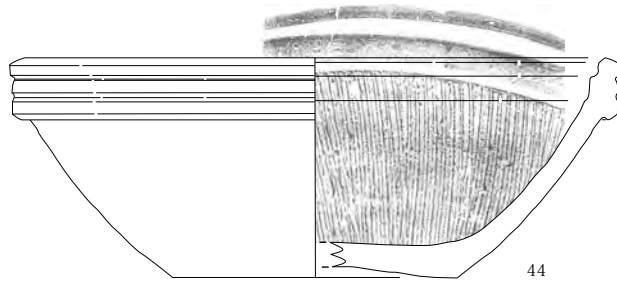
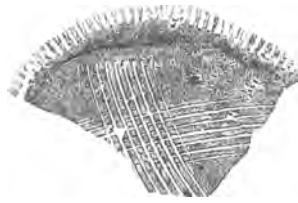
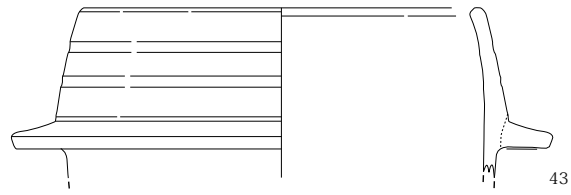


图26 道2面下(道3面上) 出土遺物(2)

播鉢、瓦質土器羽釜、土師質土器乗燭・火入れ・台付火鉢、陶質焼台などが出土した。27・28は染付碗で、いずれも端反形である。27の外面には山水、28の外面には楼閣山水と口縁部に雷文が描かれている。29は染付碗で、広東形である。見込みには五弁花が描かれており、蛇の目高台である。30～32は染付小碗である。30は外面に笹文、31は底部に蓮弁文が付されている。32は、内面に山水と考えられる文様が描かれている。33は色絵蓋で、外面に丸文と蝶文が描かれている。34は瀬戸美濃の陶器小杯である。外面は削り出しによる亀甲文様、底部には放射状沈線で成形されている。18世紀後半と考えられる。35は灰釉陶器台付灯明皿である。36は白磁紅皿である。19世紀前半と考えられる。37は土師質土器乗燭であるが、表面は黒い。38は陶器灯明皿で、内面に施釉されている。39は陶器蓋で、角形である。40は青磁鉢である。41は染付皿であるが、焼成はやや不良であるため、全体に茶色にくすんでおり、発色はよくない。見込みに蛇の目釉剥ぎが認められ、中央部にコンニャク印版による五弁花が付せられている。内面の口縁部には、梅樹文が描かれている。42は口縁部に口銹のある輪花皿で、内面に山水楼閣が描かれている。

43は口縁部のみであるが、瓦質土器羽釜である。44は堺播鉢で、見込みにいわゆるウールマーク状の摺目が認められる。45・47は播鉢などを焼成する際に使用する陶質焼台である。紀州街道の一部からこのような焼台が多く検出されているが、窯が近接して存在していたわけではない。完形のものではなく、割れたものあるいは人為的に割られたものも含まれていると考えられ、大きさもそろっていない。道の補強のために使用されており、陶質焼台のみがまとまって出土している。46・48は火入れで、46は陶器、48は土師質土器である。49は輪高台付きの土師質土器火鉢である。

なお、破片のため図示していないが、播磨の陶器である舞子焼の碗が出土した。舞子焼は、寛政年間(1789～1801)に同国明石郡山田村(現在の神戸市垂水区西舞子町)の衣笠宗兵衛が創業したものである。その後一時断絶したが、天保年間(1830～1844)に高田槌之助がこれを再興した。作品に「まいこ」「まひこ」「和風軒」などの銘款がある。ここでの出土品も底部高台内に「まひこ」の銘が刻印されていたため判明したものである。19世紀中頃と考えられる。

g. 道1面～道0面

紀州街道が現在の道幅となった、道5面から続くものであるが、道の両側に石垣を施して補強するとともに、路面をややかさ上げた遺構面である。石垣の残存状況から、上面が後世に削平されていることがわかるが、レベルはT.P.+4.0m程度と考えられる。

石垣は、同時期に積まれたにもかかわらず、東側と西側で積み方が異なった状況で検出された。西側はほぼ大きさをそろえた四角の切石を斜めに積んでいるのに対し、東側では、平らに平積みで構成されていることが、最も大きな違いである。ただ、東側の石垣に関しては、調査区内の北側では平積みであるが、途中から南側は斜め積みになっている。原因ははっきりしないが、東側の石垣がやや東側に傾いており、自立がむずかしい状況で検出されていることから、当初は斜め積みでつくられたものが、なんらかの理由で崩れたため、後に補強のために平積みで石垣を再度積上げたことが考えられる。なお、石垣は積上げているだけで、漆喰などで石垣を補強していない。石垣は上面が後世に削平されていることが考えられるため正確な規模はわからないが、5段分は確認されており、約1.5mの高さがあったことが推測される。

石垣の上部には、細長い平石が載せられており、路肩部分の補強をしている。また、路面でこの平石

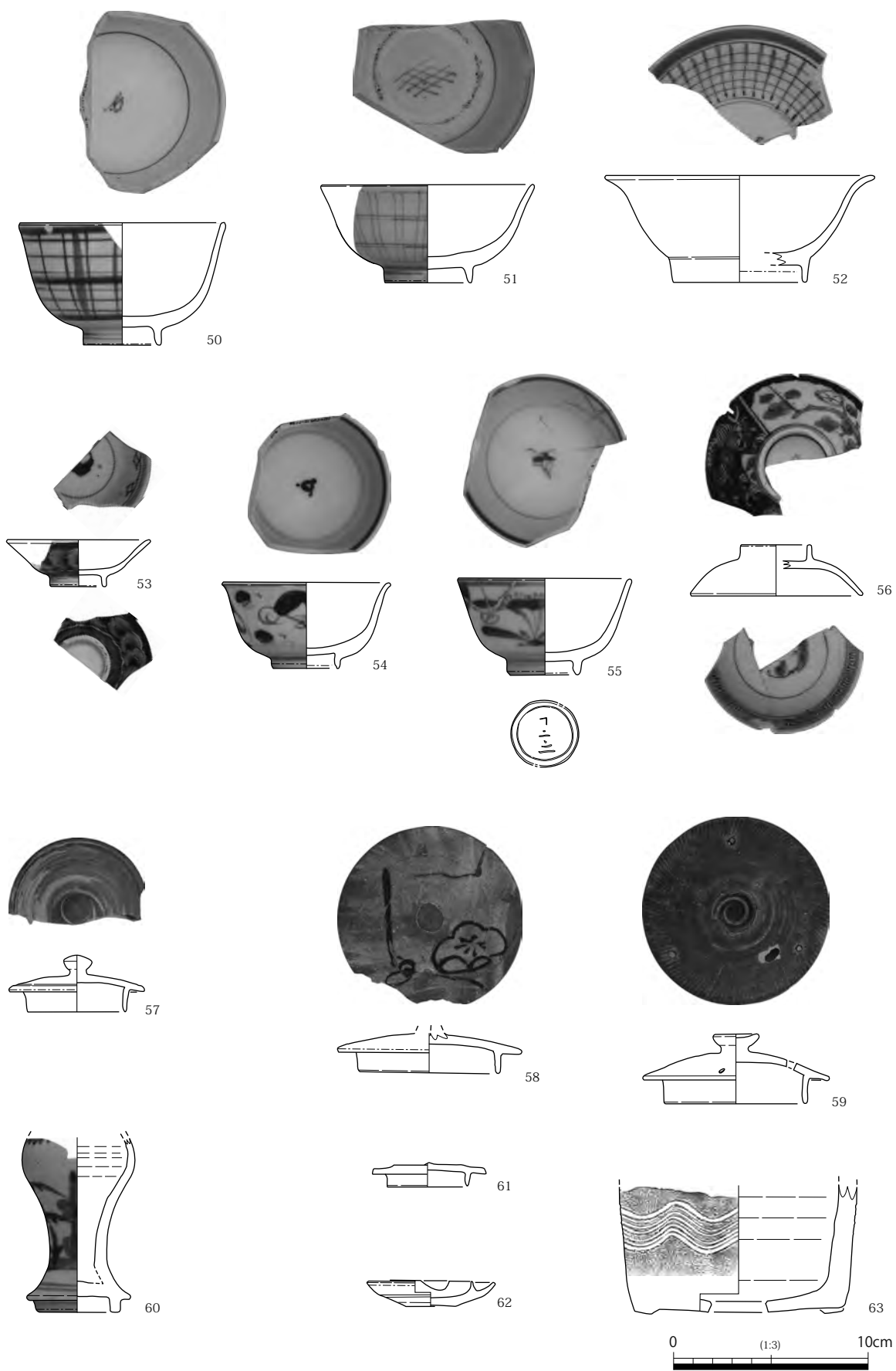


图27 道1面下(道2面上) 出土遺物

をまとめて敷いている部分が検出されており、路面の補強もおこなっていたことがわかる。道2面と同様に薬剤で路面を固めているが、舗装はされていない。機能を失った古い埋設管も残存しており、幹線道路としての役割を果たしていることがわかる。

道2面から道1面までは、にぶい黄橙色粗砂および細砂が混在しており、礫や瓦類、レンガなどが多く含まれており、かなり乱されている状況であった。

なお、この上面は現代の路面であるが、さらに多くの礫や瓦類、レンガ、コンクリートが混在することから、機械掘削の対象とし、調査対象からは除外している。

道1面下（道2面上）の遺物（図27、図版20・21）

道1面下（道2面上）は、基本的に近代以降の層序であるが、近世の遺物も含まれることから、混入品ではあるが、報告をしておくこととする。

肥前磁器染付碗・皿・神酒徳利・蓋、青磁皿、白磁碗、陶器碗・鍋・蓋・灯明皿、土師質土器焔炉・火鉢・火入れ・植木鉢、土人形などが出土している。50・51は染付碗で、いずれも外面に格子文が描かれている。51は端反形で、見込みに蛇の目釉剥ぎが認められ、中央部に斜格子文が付せられている。52は染付鉢で、内面に格子文が描かれている。53は染付小杯であるが、蓋の可能性もある。54・55は染付碗である。54は端反形で、見込みに二重圏線、中央部にコンニャク印版による五弁花が付せられている。55は焼き継ぎがされており、底部高台内に焼き継ぎ印が認められる。56は染付蓋である。外面に手描きにより梅と龍が描かれており、内面見込みには松竹梅が円形に配されている。19世紀中頃と考えられる。57～59は陶器蓋である。57は肥前陶器で、表面に刷毛目がみられる。58は鉄絵により、梅が描かれている。59はトビカンナがみられ、鉄釉が施されている。60は染付神酒徳利で、草木文が描かれている。19世紀代と考えられる。61は小型の陶器蓋、62は施釉陶器の受付き灯明皿である。63は土師質土器植木鉢で、外面に櫛目が付せられている。

67は輪高台付の土師質土器火鉢であるが、底部と側面に墨書きで丸が描かれている。これのみでは、意図は不明であるが、民間伝承である「火の用心」のために書かれた可能性がある。民間伝承として、古代の歌人であった柿本人麻呂が、その語呂合わせから火の用心の守り神となっていることに由来する。「柿本人麻呂（かきのもとひとまる）」が「火気の元火止まる」になることから、現在でも、兵庫県明石市の柿本神社などでは、火の用心の守り神として信仰されているほか、他の柿本人麻呂を祭っている神社では同様に信仰されているようである。「火止まる（ひとまる）」から「人〇」になり、簡略化された記号として、火を扱う土器にこのような文字が書かれているものが、他にも出土している。この墨書がこれにあてはまるかどうかははっきりしないが、ひとつの可能性として提示しておくこととする。

68・69は陶器行平鍋の持ち手で、鉄釉が施釉されている。表面に型押しによる文様が付けられており、68は「寿」字を図案化したもの、69は樹下仙人と考えられる。70は土人形の牛である。型作り成形で左右貼り合わせでつくられている。他からも同様の人形が出土している。71はバイ貝製の独楽である。大坂城下や堺環濠都市遺跡で出土している。

第2節 A・B区（紀州街道西側部分）の成果

紀州街道西側部分においても、紀州街道部分と同様に、近年まで埋設管などが設けられていたことや大型建物の基礎がそのまま残存することから、機械による埋土除去作業でコンクリートやレンガの塊が大量に発生するという状況であった。予想以上に盛土・整地層が厚いことから、人力掘削開始面までかなり上面の攪乱が進んでいた状況であった。また、調査当初は後世に盛られた砂層と下の洪水砂層の区別が困難であったため、機械によって埋設管や大型建物の基礎などを除去した時点から調査を開始することとした。紀州街道部分と同様に、おおまかな目安として、江戸時代の範囲内を基準とした。ただし、江戸時代から明治時代まで存続する遺構も存在することから、あえて明治時代の範疇に入る部分の記述は避けているが、一部この範囲を越えたものも含まれている。

基本層序で述べたように、紀州街道西側部分に関しては、大きく4回にわたる洪水砂層による堆積が時期差をあらわしていることから、層位上で洪水砂層をもとに時期区分をした。記述に関しては、古い時期から新しい時期の順（下層から上層）に進めることにする。

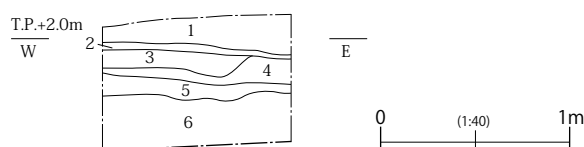
1. 中世以前の遺構・遺物

紀州街道西側部分においては、紀州街道部分の下層に堆積する黄褐色細砂層およびその下層の黑色粘土層もすべて洪水砂層で削平されており、堆積状況はまったく異なっている。ただし、紀州街道部分とは堆積状況は異なるものの、全面にわたってほとんど礫混じりの砂質土の掘削のみであり、粘性の強い土壌はみることはなかった。また、この砂礫層内の洪水砂層の区別を平面で掘り分けることも困難であったため、土層断面の確認により洪水砂層の区別をするようにした。ただ、土層断面でみるほどはっきりとした区別はできなかつたため、一部遺物取り上げ段階で多少混入しているものもあると考えられる。各々の洪水砂層上面では、遺構面は確定しなかつたため、遺構を検出することはできなかつた。

調査の最終面は、大阪府教育委員会の指導により、紀州街道西側では、洪水砂層除去面とされ（T.P.+0.2 m程度）、A区の西端部において部分的なトレンチ掘削により、さらに下層の土層堆積状況を確認した（図28、図版11）。基本的には、紀州街道部分の黑色粘土層の下層での観察所見と異なることはなく、細砂混じり粗砂を主体とする土層であり、水生植物によるものと考えられる有機物や炭化物が検出された。なお、洪水砂層除去面およびその下層においては、人為的な痕跡は検出されず、遺物はまったく出土していない。

洪水砂層除去面は、紀州街道部分の黑色粘土層より下層に位置することから、弥生時代中期以前に堆積した土層の可能性が考えられる。洪水砂層がこの土層を削平していることから、この土層が遺物包含層として機能しているならば、洪水砂層に混入していることも考えられるが、弥生時代およびそれ以前の遺物はまったく出土していない。

洪水砂層から出土した中世以前の遺物としては、混入品であるが、古墳時代のものと



1. 明黄褐 10YR6/6 ～ にぶい黄橙 10YR7/3 細砂 径5mmの小礫を少量含む
2. にぶい橙 7.5YR7/4 礫混細砂 径0.5～3cmの小礫を多く含む 層状をなす
3. 橙 7.5YR6/6 ～ 明褐灰 7.5YR7/2 礫混細砂 径1～2cmの小礫を含む
4. 褐灰 10YR6/1 礫混粗砂 部分的に 明黄褐 10YR6/6 シルト 含む 径1～2cmの小礫混在する
5. 暗褐 10YR3/3 礫混粗砂 径1～3cmの小礫を多く含む 炭化物含む 固くしまる
6. にぶい黄褐 10YR4/3 細砂混粗砂 径0.5～1cmの小礫を含む 固くしまる 暗青灰 5B4/1 と 褐灰 10YR4/1 粗砂を部分的に含む

図28 A区深掘りトレンチ 土層断面模式図

考えられる須恵器の破片が数点みられるのみである。これらの遺物も摩滅が顕著であることから、移動したものと考えられ、この地に古墳時代の遺構が存在したとはいえない。また、古代や中世の遺物も含まれていないため、近接して堺環濠都市や住吉の集落などが展開しているのに対し、人跡未踏に近い状況であったことが考えられる。

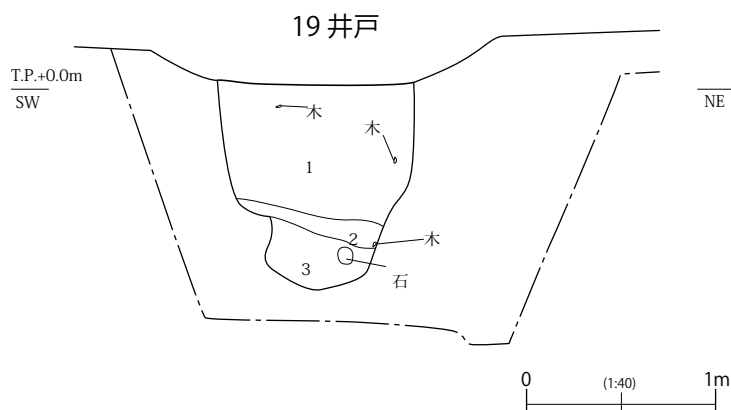
2 近世の遺構・遺物

紀州街道西側部分では、紀州街道部分で道が機能し始めた道6面以前の状況は不明である。基本的に洪水砂層により、それ以前の堆積層がえぐられており、その繰り返しであることから、遺構面が存在していたとしても削平され、破壊されているものと考えられる。このため、遺構が検出されないことはやむを得ない状況であるといわざるをえない。また、遺物に関しても、ある程度混在することは必然的であることから、紀州街道部分と同様に、出土した層位毎にまとめて報告することを優先した。したがって、同じ層位内で時期的な矛盾が生ずる遺物が含まれる場合もあるが、ご了承願いたい。以下、この洪水砂層の区分に沿って調査成果の記述を進めていくこととする。

a. 第1回洪水砂（図30、図版7～10）

調査の最終面を第1回洪水砂層除去面とした。レベルはT.P.+0.2m程度を測る。調査区西側ではみられるが、東側では上部の第2回洪水砂層に削平されており、ほとんど残存していない。西側で厚さ約0.3mが残存している。にぶい黄橙色小礫混じり粗砂が主体で、径0.5～3.0cmの小礫を含む。強い流れに伴うもので、土層の断面観察によりほぼ水平方向に堆積していることがわかる。部分的に細砂が層状に堆積している。西側の海から東に向けて進んだものと考えられ、方向から判断すると、大和川の氾濫による洪水ではなく、海からの津波や高潮とみるのが妥当といえる。

第1回洪水砂層除去面で、調査区中央を北東から南西に向かう溝状の落ち込みが検出された。幅7～12mの規模で、南西に向かって広がる。最終掘削面より下がることから完掘はしていないため、深さは不明である。径2～3cm程度の礫で埋まっており、人為的な遺構とはいえず、洪水砂によりえぐられたものと考えられる。また、この落ち込み付近で、自然堆積により埋まったものと考えられる、19井戸が検出された。これ以外に遺構は検出されていない。



1. 黄褐 2.5YR5/3 細砂 粗砂と粘土ブロック少量含む 自然堆積
2. 灰黄褐 10YR4/2 粘土混粗砂 粘土多く含む
3. にぶい黄褐 10YR5/3 粗砂 粘土ブロック多く含む もろい
径5cm程度の礫多く含む 人為的な堆積

図29 19井戸 断面図

19井戸が検出された。これ以外に遺構は検出されていない。

19井戸（図29、図版11）

第1回洪水砂層除去面において検出されたもので、第1回洪水よりも古い時期に掘削され、使われていたものである。第1回洪水砂か、それ以前の洪水により廃絶したものと考えられる。検出面で径約1mを測り、井戸枠は伴っていない素掘り井戸である。ただ、桶などを巻く竹が井戸の周囲を巻くように3段分残存して

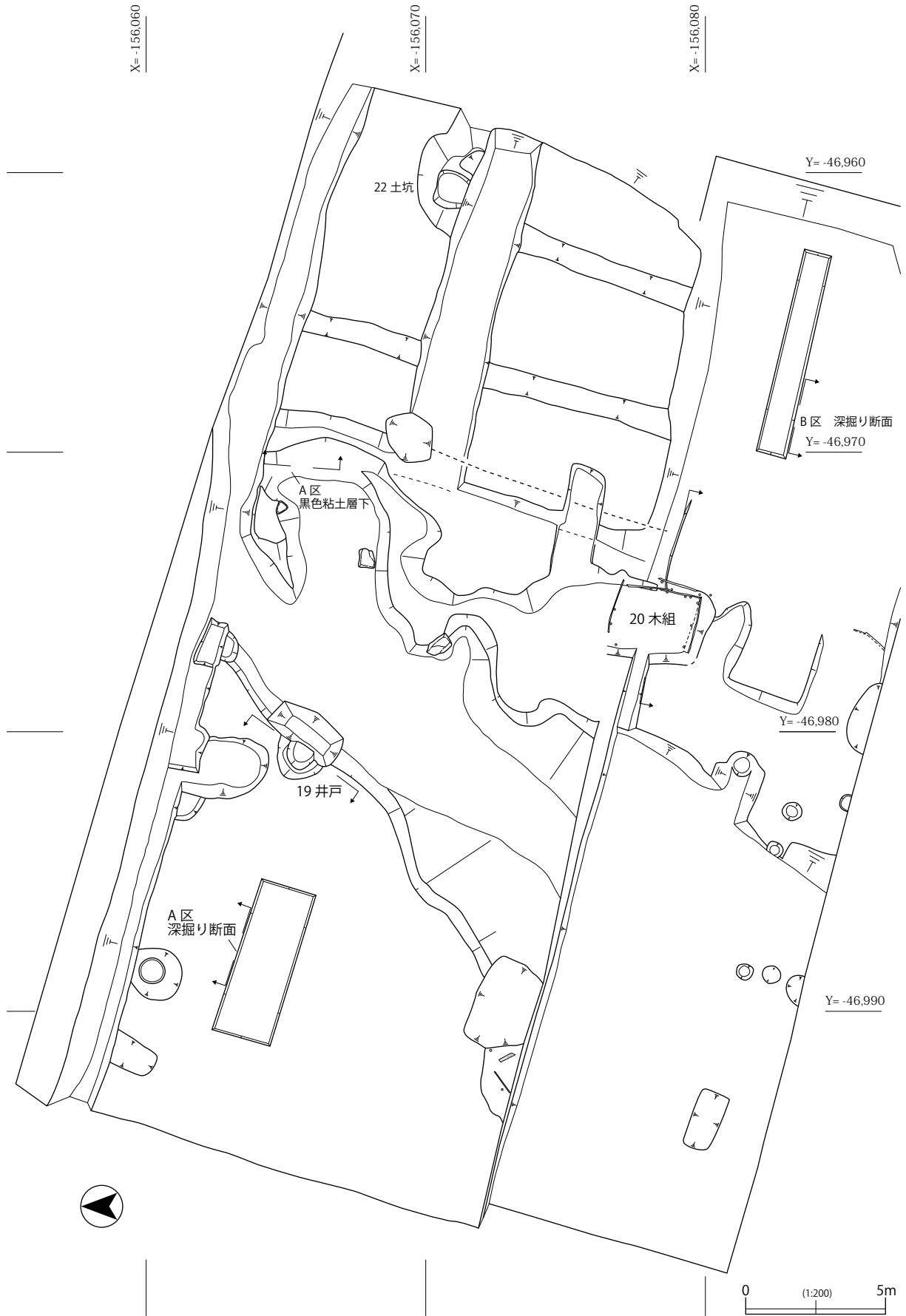


図30 第1回洪水砂層除去面 平面図 (1/200)

いたことから、当初は井戸枠が存在していたことも推測される。

埋土は3層に分かれており、上層は黄褐色細砂で、粗砂や粘土ブロックを少量含んでおり、自然堆積である。このため、最終的な廃絶は人為的に埋められたものではないことがわかる。中層は灰黄褐色粘土混じり粗砂で、粘土を多く含む。下層は径が小さくなり、にぶい黄褐色粗砂に粘土ブロックを多く含む。礫も多く含まれており、人為的な堆積と考えられる。井戸が機能している時期に、下層を一旦埋め、中層を底とした井戸として使われていたものといえる。

ただし、遺物はまったく出土しなかったため、時期は確定できなかった。

第1回洪水砂層の遺物（図31・32・49・50、図版22）

肥前磁器染付皿・鉢・蓋、白磁碗、陶器碗・皿・小型播鉢・大甕、土師質土器焜炉、堺播鉢、瓦類、銭貨、ふいごの羽口などが出土した。

72は染付皿と考えられるが、蓋の可能性もある。高台内に草花文が描かれている。73は唐津焼碗で、内外面ともに刷毛目がみられる。74は、やや小ぶりの染付蓋である。75は染付鉢である。76・79は施釉陶器の灯明皿で、79は受付きである。77は染付小碗である。78は瀬戸美濃陶器大皿で、馬の目文が付されている。19世紀初頭から中頃と考えられる。80・81は灰釉陶器皿で、いずれも菊花状の貼付文様をもつものである。18～19世紀と考えられる。82は小型の陶器播鉢である。83は土師質土器焜炉で、穿孔が1ヶ所認められる。84・85は堺播鉢である。84は小型品である。86は、産地は不明であるが、焼締め陶器の大型甕である。

176は青磁大皿の底部付近の破片であるが、割れ口に墨書が認められる。「□上米五十石」と読めることから、荷物に付けたメモのようなものと推測されるが、このような使用例は見たことはないため、用途は不明である。177は、丸瓦の一部の凸面を意図的に磨耗したもので、砥石などへの転用が考えられる。また、銭貨も出土しており、199・200は「寛永通宝」で、199は「背文」である。

これ以外に、瓦類も多く出土しているが、その中に堺の瓦仲間の刻印が押された瓦がみられる。182は平瓦の側面にみられ、一部「堺北□」と読める。183も平瓦の側面にみられ、全体の「堺谷傳兵衛」が読める。嶋谷氏の一連の研究成果によって、堺の瓦屋仲間の実態の一端が解明されている（表6）。それによると182の「堺北□」は「堺北喜」であれば瓦屋喜十郎、「堺北九」であれば瓦屋九郎兵衛、「堺北七兵衛」であれば瓦屋七兵衛に該当することになり、いずれも18世紀末～19世紀初頭の時期にあてはまる。183の「堺谷傳兵衛」は谷傳兵衛・瓦屋傳兵衛に該当することになり、19世紀初頭の時期にあてはまる。いずれも洪水砂層の時期決定に大きな影響を及ぼす遺物といえる。

18世紀代の遺物も多くみられるが、この瓦仲間の刻印により、第1回洪水砂層は19世紀初頭以降の堆積と考えられる。

b. 第2回洪水砂

第1回洪水砂層の上に堆積する洪水砂層を第2回洪水砂層とした。紀州街道西側のほぼ全域で確認され、堆積層の厚さも厚く、第1回洪水砂層を一部削平するほどで、規模の大きな洪水であったことがわかる。4回の洪水砂層の中で最も規模が大ききもので、被害も甚大であったことが推測される。

第2回洪水砂層下面のレベルは、西側でT.P.+0.3～0.4mを測る。西側は後の第3回・第4回洪水で削平されているが、検出された部分の厚さは0.2～0.7mを測る。にぶい褐色小礫混じり粗砂が主体で、

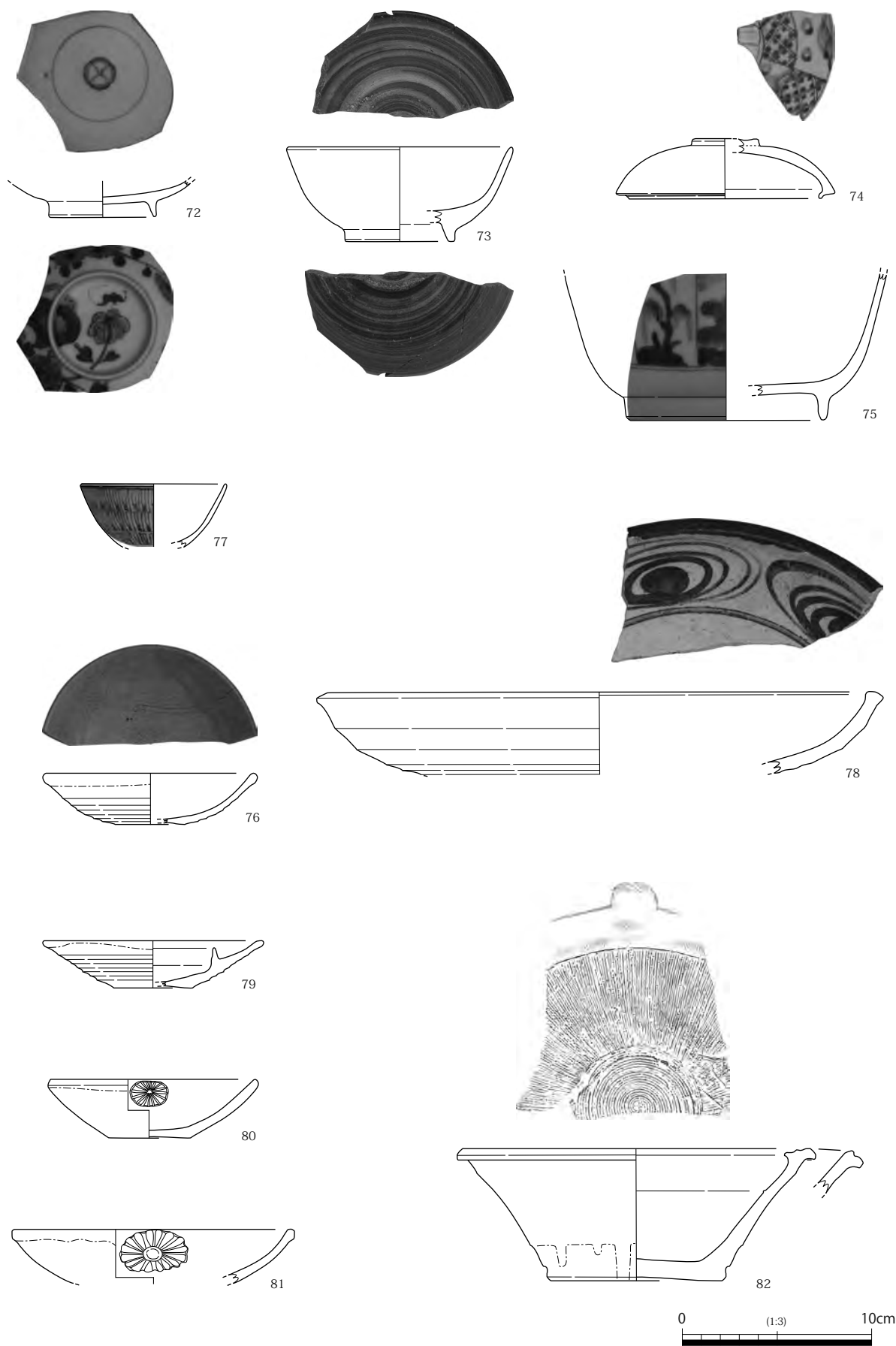


图31 第1回洪水砂層 出土遺物 (1)

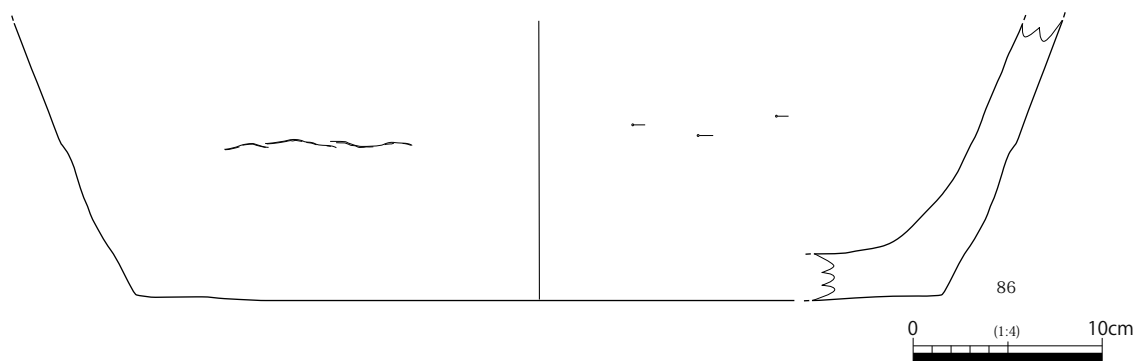
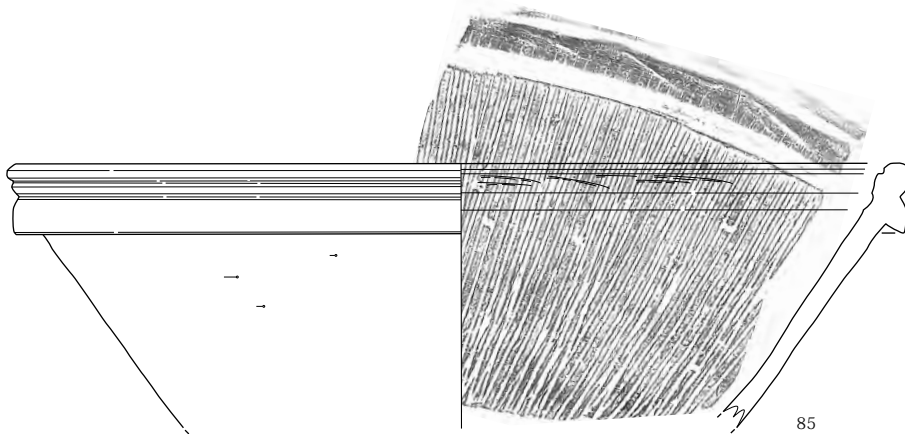
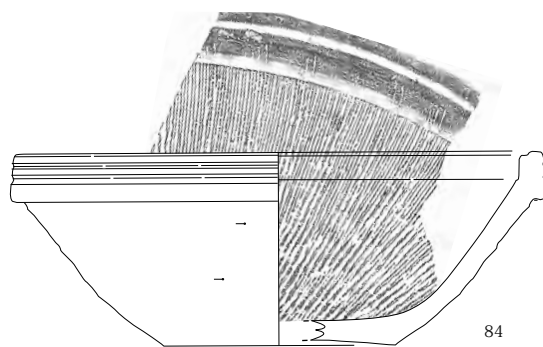
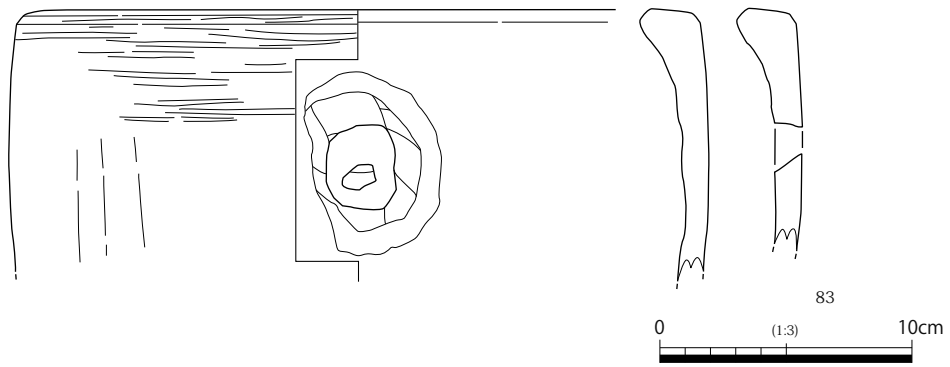


图32 第1回洪水砂層 出土遺物（2）

径0.5～3.0cmの小礫を含む。かなり激しい流れに伴うもので、やや東向きに下がる斜め方向の堆積である。部分的に径1～5cmの礫を含むところもある。なお、洪水砂層の下部や最前線付近では、鉄分によって褐色に変色している。土層断面の観察では、第1回洪水砂層とは明らかに堆積状況が異なっていることがわかるが、いずれも小礫混じり粗砂で構成されていることから、調査段階での平面的な堆積層の違いの判別は困難であった。

さらに、洪水砂の最前線は紀州街道にまで及んでおり、堆積状況から道6面を侵食していることがわかる。このため、第2回洪水は時期的に道6面以降といえる。この最前線では、他ではみられない径40cm程度にも及ぶ礫が多く検出されるなど、かなり大きな礫が運ばれていることから、洪水が大規模であったことが推測される。最前線部分では、砂層が厚く堆積しており、上面のレベルは、T.P.+1.8mまで達している。後の第3回・第4回洪水では、この部分までほとんど到達しておらず、削平もしていないことから、本来はほぼ全面にわたって、このレベルに近いところまで洪水砂が堆積したものと考えられる。このため、4回の洪水のうち、最も大規模な洪水といえることができる。なお、西側の海から東に向かって進んでおり、方向から判断すると、第1回洪水と同様に大和川の氾濫による洪水ではなく、海からの津波や高潮とみるのが妥当といえる。

かなり大規模な洪水の被害をうけていることから、遺構および遺構面は検出されなかった。ただ、紀州街道の高まりのすぐ西側に隣接した部分で、木杭と板材により構成された20木組が検出された。第2回洪水により廃絶しているが、洪水以前の遺構として残存したものである。

20木組（図33・34・49、図版12）

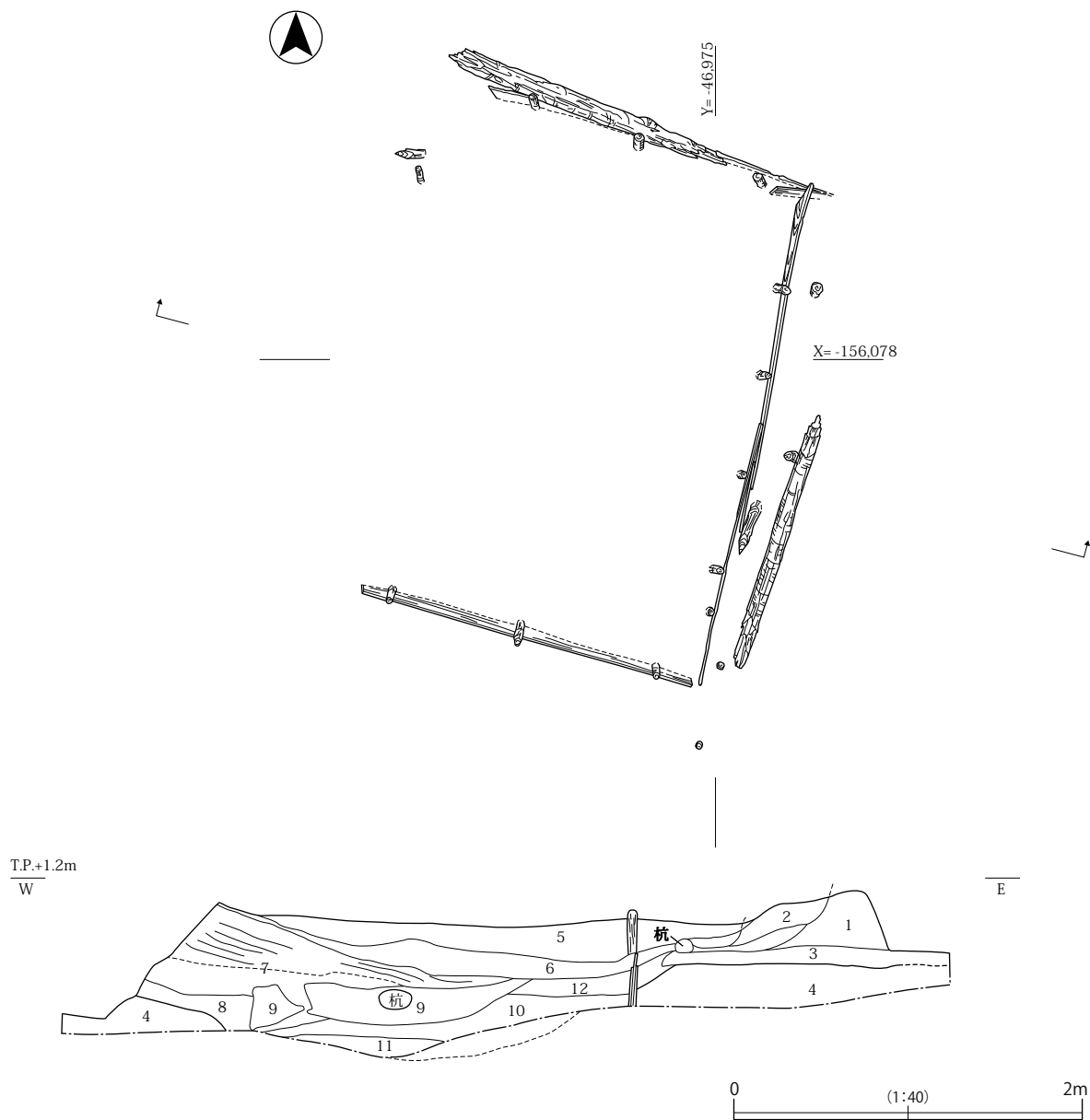
第2回洪水砂層を除去した段階で検出された。周囲に木杭を打ち込み、板材によって囲むもので、平面形は四角形を呈している。西側は失われていたが、他の部分は残存していることから、コの字状に検出することができた。南北方向3.0m、東西方向は検出部分で2.0mを測る。木杭の間隔は一定ではなく、東辺では0.5～0.6m、北辺と南辺では約0.8mである。板材は、長いもので約2.0m、短いもので約1.5mの長さのものであるが、周囲でやや太めの木杭がみつまっていることから、これらを使って補強していたことも考えられる。残存していた板材の上部から底部までの深さは、約0.7mを測る。

内部の埋土の土層観察によると、底部に粘土層がみられることから、本来は水溜めの機能をもったものと考えられる。周囲で遺構が検出されていないことから、景観を復原することは困難であるが、紀州街道東側においても、形状はやや異なるが、水溜め遺構が検出されているため、同様の遺構が存在した可能性は高いと考えられる。

洪水砂が、下層の粘土層を崩しながら内部に入り込んでいく状況がみられ、第2回洪水により内部が埋まり、廃絶したものといえる。なお、第1回洪水砂も内部から部分的に検出されているため、第1回洪水以前につくられた可能性も考えられるが、時期ははっきりしない。ただ、第1回洪水では廃絶しておらず、存続していたものと考えられ、第2回洪水、さらに第3回洪水で埋まったものといえる。

肥前磁器染付碗・皿、白磁紅皿、陶器碗・壺・蓋・甕・播鉢、土師質土器火鉢、瓦類などが出土した。

87は染付輪花皿である。見込みには松竹梅が円形に配置され、底部高台内には「富貴長春」と記載されている。外面には簡略化された唐草文が配置されている。88は染付碗で、半筒形である。焼き継ぎがみられる。89は染付碗で、いわゆるくらかわんか茶碗である。見込みには、圏線の中、手描きによる五弁花が付せられている。90は小型の陶器蓋で、つまみの付け根に花文が付けられている。91は染



1. 黄褐 10YR5/6 細砂 均質〔黄褐色細砂層〕
2. にぶい黄褐 10YR4/3 粗砂混シルト〔拡張盛土〕
3. 黒褐 7.5YR3/1 細砂混粘土 粘土が層状に堆積〔黒色粘土層〕
4. 黄灰 2.5Y6/1 粗砂混細砂 有機物・炭化物含む
5. 黄褐 10YR5/6 粗砂 径0.5～2.0 cmの小礫含む〔第4回洪水砂層〕
6. 明黄褐 2.5Y6/6 粗砂混細砂〔第3回洪水砂層〕
7. にぶい褐 7.5YR6/3 小礫混粗砂 径0.5～3.0 cmの小礫含む〔第2回洪水砂層〕
下部に鉄分による褐色の変色あり 部分的に径1.0～5.0 cmの礫含む〔上部…礫多い、下部…粗砂〕
8. にぶい黄橙 10YR6/3 小礫混粗砂 径0.5～3.0 cmの小礫多い〔第1回洪水砂層〕 部分的に細砂が層状に堆積
9. オリーブ黒 5Y3/1 粘土 上層に粗砂(第2回洪水砂)混じる
10. 灰 5Y4/1 粘土混粗砂 上層の粘土混じる
11. 黄灰 2.5Y6/1 粗砂 径0.5 cmの小礫含む
12. にぶい黄橙 10YR7/2 粗砂

図33 20木組 平面・断面図

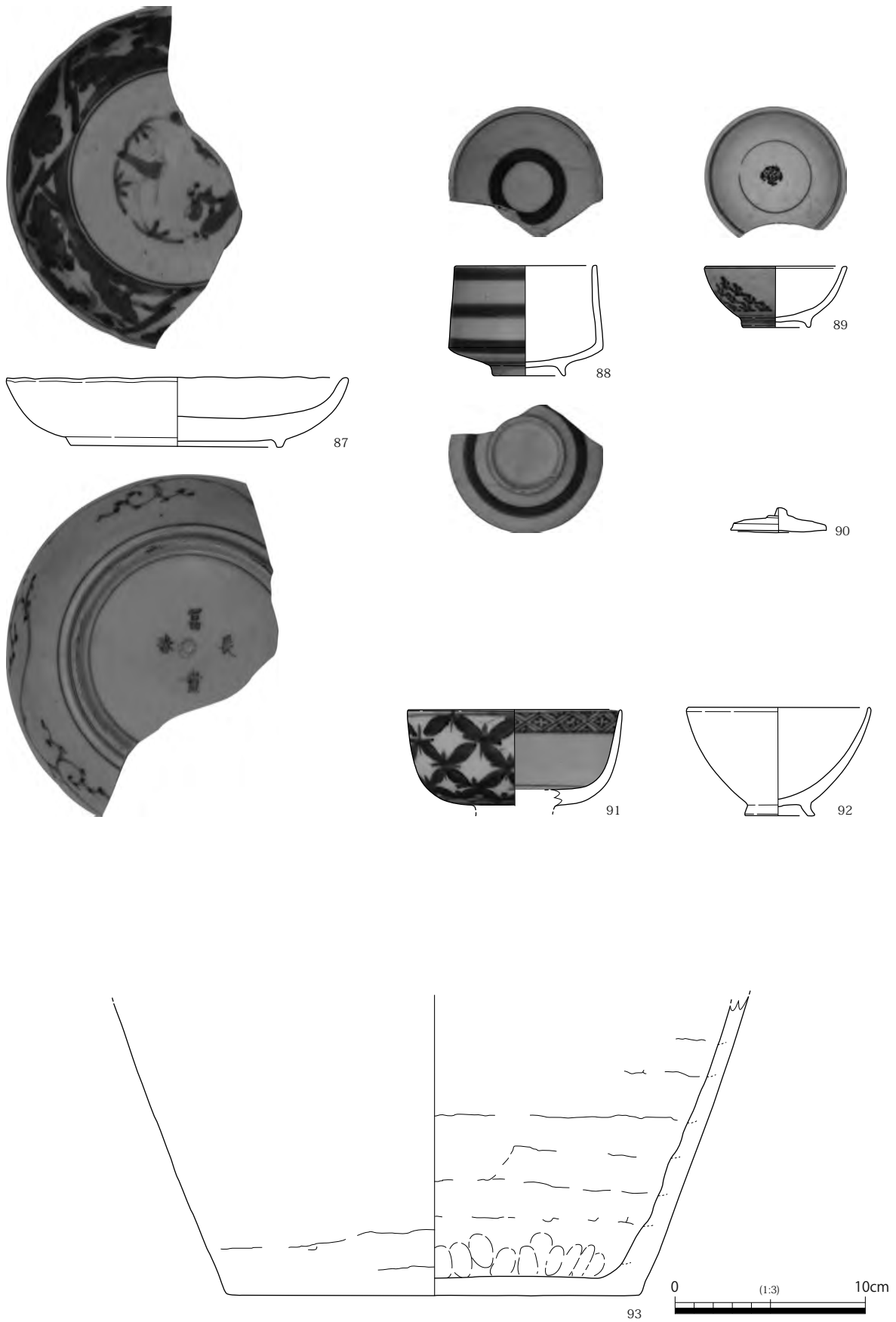


图34 20木組 出土遺物

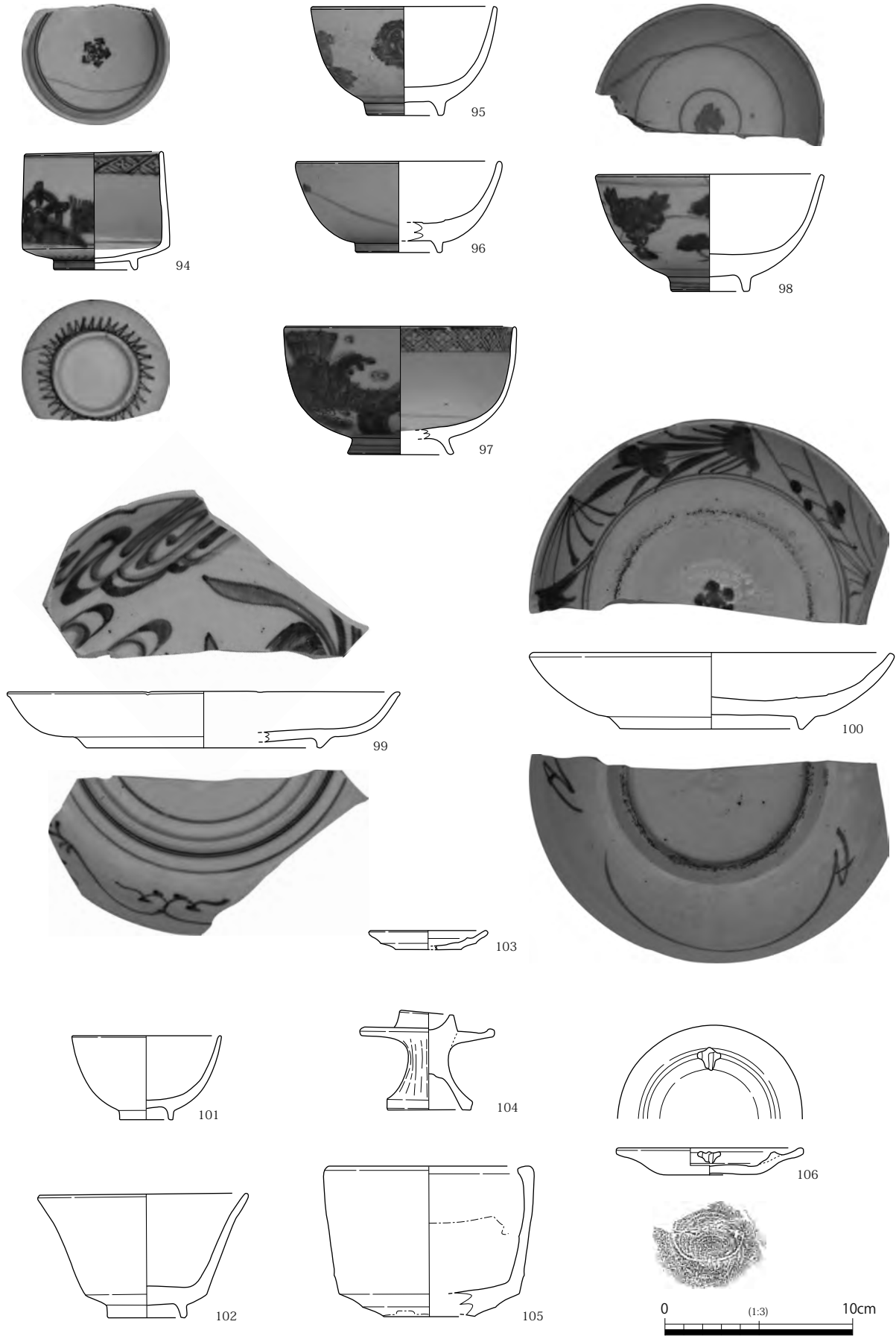
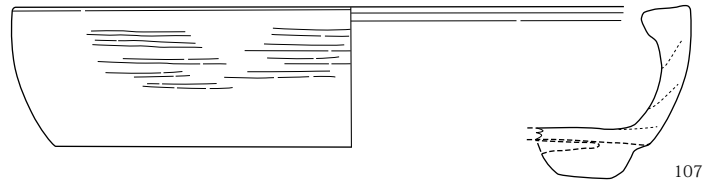


图35 第2回洪水砂層 出土遺物(1)



107

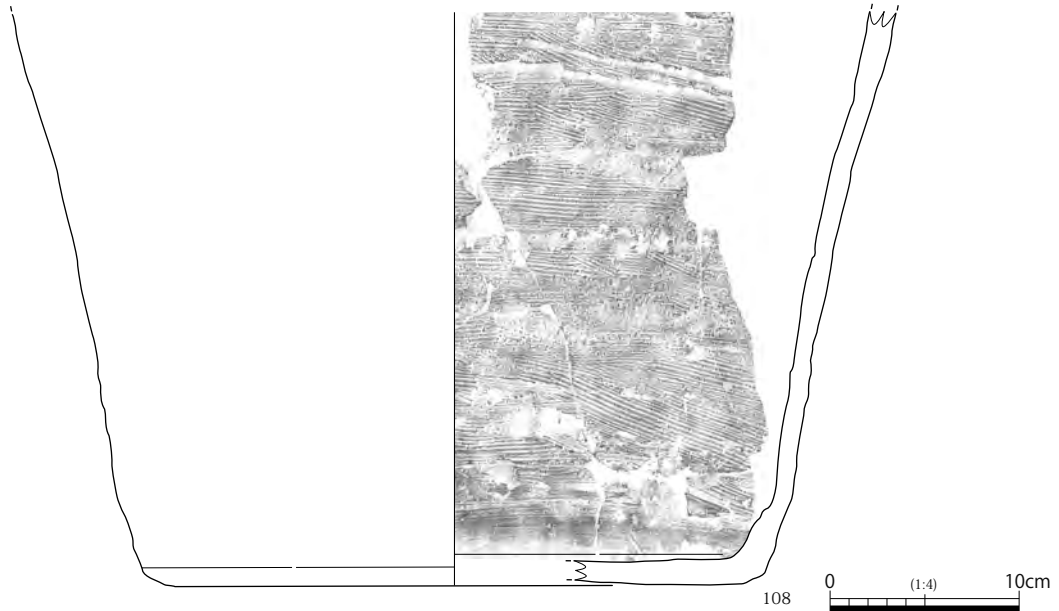


図36 第2回洪水砂層 出土遺物（2）

付碗で、外面に七宝繋ぎ文、口縁部内面には四方禪文が配置されている。92は陶器碗で、染付碗と形状が似ている。全面に貫入がみられるが、火を受けている可能性がある。18世紀末～19世紀前半と考えられる。93は陶器甕で、内面に格子タタキが調整がみられる。

これ以外に、瓦類も出土しているが、その中に堺の瓦仲間の刻印が押された瓦がみられる。185は平瓦の側面にみられ、全体の「堺谷傳兵衛」が読める。先の嶋谷氏の研究成果によると、「堺谷傳兵衛」は谷傳兵衛・瓦屋傳兵衛に該当することになり、19世紀初頭の時期にあてはまる（表6）。

この瓦仲間の刻印により、19世紀初頭以降の遺構と考えられるが、第1回洪水砂層との時期的な前後関係は不明である。

第2回洪水砂層の遺物（図35・36・50、図版22）

肥前磁器染付碗・皿・段重、白磁碗、青磁香炉、陶器碗・壺・播鉢、土師質土器灯明皿・火鉢・甕、瓦類、石製品、銭貨などが出土した。

94は染付碗で、半筒形である。見込みには五弁花が付せられており、口縁部内面には四方禪文が配置されている。18世紀末～19世紀前半と考えられる。95・96・98は染付碗で、いわゆるくらわんか茶碗である。95の外面には、コンニャク印版による鬼蔦が付せられている。96の見込みには、蛇の目釉剥ぎが認められる。98の見込みには、圏線の中、コンニャク印版による五弁花が付せられている。いずれも18世紀後半と考えられる。97は染付碗で、口縁部内面には四方禪文が配置されている。99・100は、染付皿である。100は見込みに蛇の目釉剥ぎが認められ、中央部にコンニャク印版による五弁

花が付せられている。内面には扇と唐草が配置されており、外面には簡略化された唐草文が配置されている。101・102は白磁碗である。103は土師質土器灯明皿で、内面に透明釉が施されている。104は土師質土器燭台と考えられる。105は青磁香炉である。106は土師質土器受付き灯明皿で、内面に透明釉が施されている。底部には糸切り痕がみられる。107は土師質土器火鉢で、3ヶ所に脚をもつものである。108は土師質土器甕で、いわゆる湊焼である。178は石製硯である。刻印などは認められなかった。201は銭貨で、「寛永通宝」である。

18世紀代の遺物も多くみられるが、20木組との関係から、第2回洪水砂層は19世紀前半以降の堆積と考えられる。

c. 第3回洪水砂

第2回洪水砂層の上に堆積する洪水砂層を第3回洪水砂層とした。下層の第1回・第2回洪水砂層とは異なり、粗砂を含むが比較的粒子の細かい細砂を主体とする。紀州街道西側のほぼ全域で確認されているが、堆積層の厚さは薄く、厚さは5～20cmに留まる。第3回洪水砂層下面のレベルは、西側でT.P.+0.6～0.8mを測る。ただ、後の第4回洪水によって上部が削平をうけている可能性があり、本来はより厚い堆積であった可能性も考えられる。

緩やかな流れに伴うもので、第2回洪水砂層を削平しておらず、その上面に沿って堆積している。最前線部分では、厚く堆積した第2回洪水砂層の上面に沿って上がっており、上面のレベルは、T.P.+1.9m付近まで達している。さらに、紀州街道部分との関係では、道4面と道5面の間に入り込んでおり、道の時期区分の時期決定に大きな影響を及ぼすものといえる。

第1回・第2回洪水は、激しい流れによるもので、礫や粗砂を主体としていることから、海からの津波や高潮とみているが、第3回洪水に関しては緩やかな流れに伴うものであることから、大和川の氾濫による洪水の可能性も考えられる。

第3回洪水砂層除去面では、遺構および遺構面は検出されなかった。なお、20木組埋土には、第2回洪水砂層の上面に第3回洪水砂層が堆積していたことから、あまり時期差はないものといえる。

道3回洪水砂層出土遺物（図37・55）

遺物の出土量は少ないが、土師質土器火鉢・火入れ、瓦類などが出土した。109は輪高台をもつ土師質土器火鉢である。110は土師器土器火入れで、外面に○印の刻印が施されている。さらに、瓦類の中

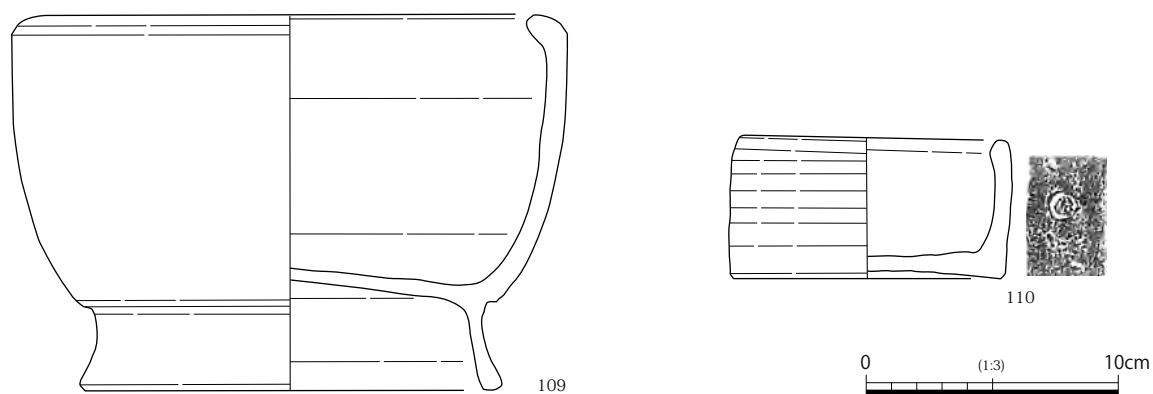


図37 第3回洪水砂層 出土遺物

に堺の瓦仲間の刻印が押された瓦がみられる。184は平瓦の側面にみられ、全体の「堺下田亦三郎」が読める。先の嶋谷氏の研究成果によると、「堺下田亦三郎」は下田又三郎に該当することになり、18世紀末～19世紀初頭の時期にあてはまる（表6）。

第3回洪水砂層は19世紀前半以降の堆積といえるが、第2回洪水砂層の堆積からあまり時期差はないものと考えられる。

d. 第4回洪水砂（図38）

第3回洪水砂層の上に堆積する洪水砂層を第4回洪水砂層とした。紀州街道西側のほぼ全域で確認され、堆積層の厚さも厚く、第3回洪水砂層を一部削平するほどの洪水であったことがわかる。ただ、その削平は下部の第2回洪水砂層までは達していないことから、第2回洪水を上回る規模ではなかったものといえる。

第4回洪水砂層下面のレベルは、西側でT.P.+0.7～0.9mを測る。上部は後の整地で削平されているが、検出された部分の厚さは0.2～0.6mを測る。黄褐色粗砂が主体で、径0.5～2.0cmの小礫を含む。激しい流れに伴うもので、強く東向きに下がる斜め方向の堆積である。最前線部分では、厚く堆積した第2回洪水砂層の上面の第3回洪水砂層に沿って上がっており、上面のレベルは、T.P.+1.9m付近まで達している。さらに、紀州街道部分との関係では、第3回洪水砂層と共に道4面と道5面の間に入り込んでおり、道の時期区分の時期決定に大きな影響を及ぼすものといえる。

西側の海から東に向けて進んでおり、方向から判断すると、第1回・第2回洪水と同様に大和川の氾濫による洪水ではなく、海からの津波や高潮とみるのが妥当といえる。

かなり大規模な洪水の被害をうけていることから、第4回洪水砂層除去面では遺構および遺構面は検出されなかった。

第4回洪水砂層出土遺物（図39～42・50、図版23）

肥前磁器染付碗・皿・鉢・蓋、白磁皿、陶器碗・鉢・蓋・火鉢・播鉢、土師質火入れ・焙烙・蓋、瓦類、銅製品、銭貨などかなり多くの遺物が出土した。なお、調査当初は、洪水以降の盛土の砂層との判別ができなかったため、一部上層で取り上げたものも含んでいる。

111～119は染付碗である。111～116はいわゆるくらわんか茶碗で、見込みには、圏線の中、コンニャク印版による五弁花が付せられている。111・112・114の外面には、コンニャク印版による鬼蔦が付せられている。113・115・116の外面には、コンニャク印版による鬼蔦と井桁が付せられている。いずれも18世紀後半と考えられる。117・118は半筒形で、見込みには、圏線の中、コンニャク印版による五弁花が付せられている。いずれも18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。119は広東形である。120は染付小杯である。121は染付鉢で、焼き継ぎされている。赤絵により外面に花鳥が描かれており、口縁部内面には瓔珞文が配置されている。

122～124は染付蓋である。123の内面中央には、松竹梅が円形に配置されている。125は染付皿である。見込みに蛇の目釉剥ぎが認められ、中央部にコンニャク印版による五弁花が付せられている。内面には扇と唐草が配置されている。18世紀代と考えられる。126は萩焼びら掛け碗で、19世紀中頃と考えられる。127は染付小皿である。手描きにより、内面に歴文、見込みに亀文様が描かれている。蛇の目高台で、底部高台内に角渦福が付されている。128は染付小瓶である。外面肩部に梅鉢文と笹文が

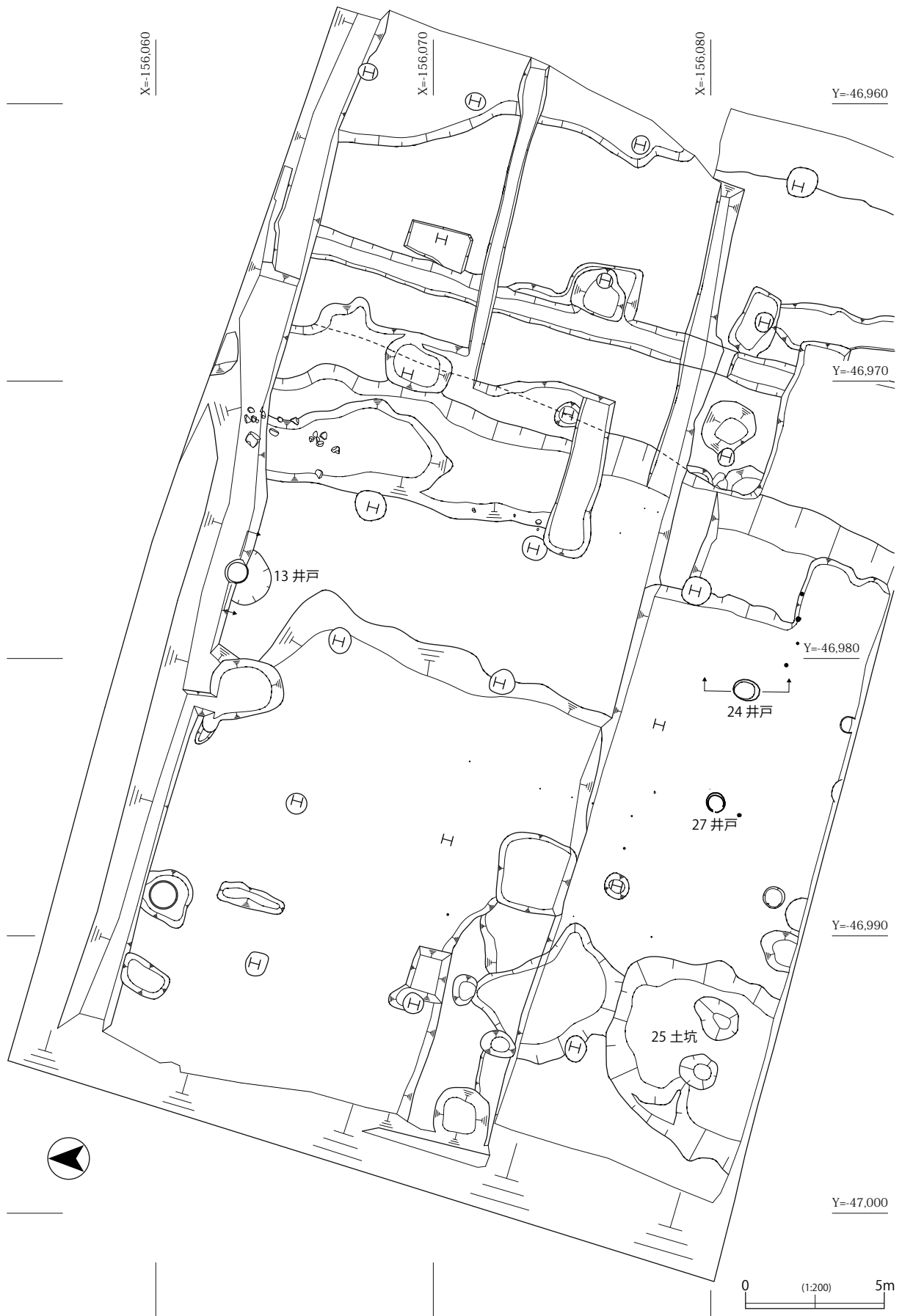


图38 第4回洪水砂層除去面 平面図 (1/200)

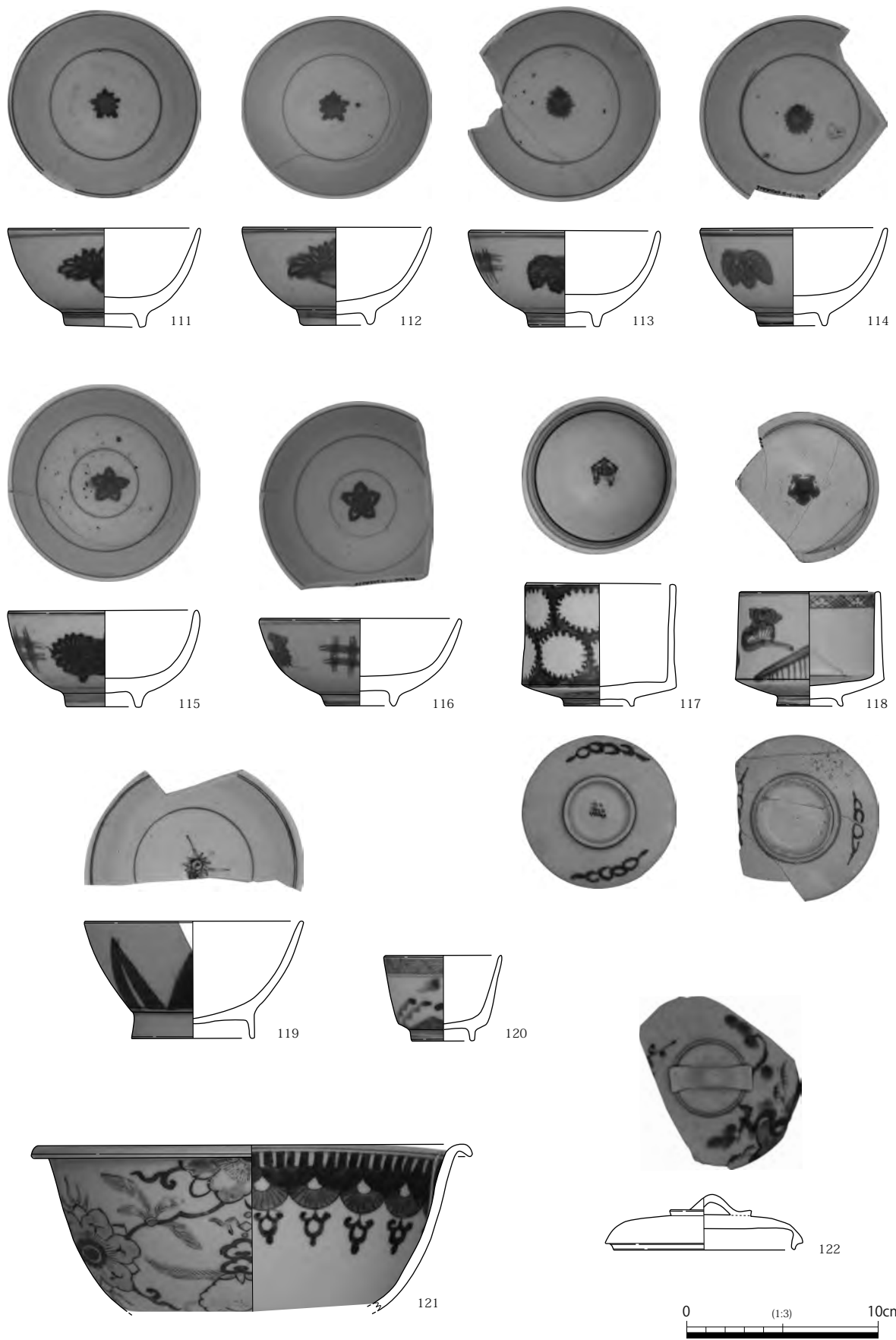


图39 第4回洪水砂層 出土遺物（1）

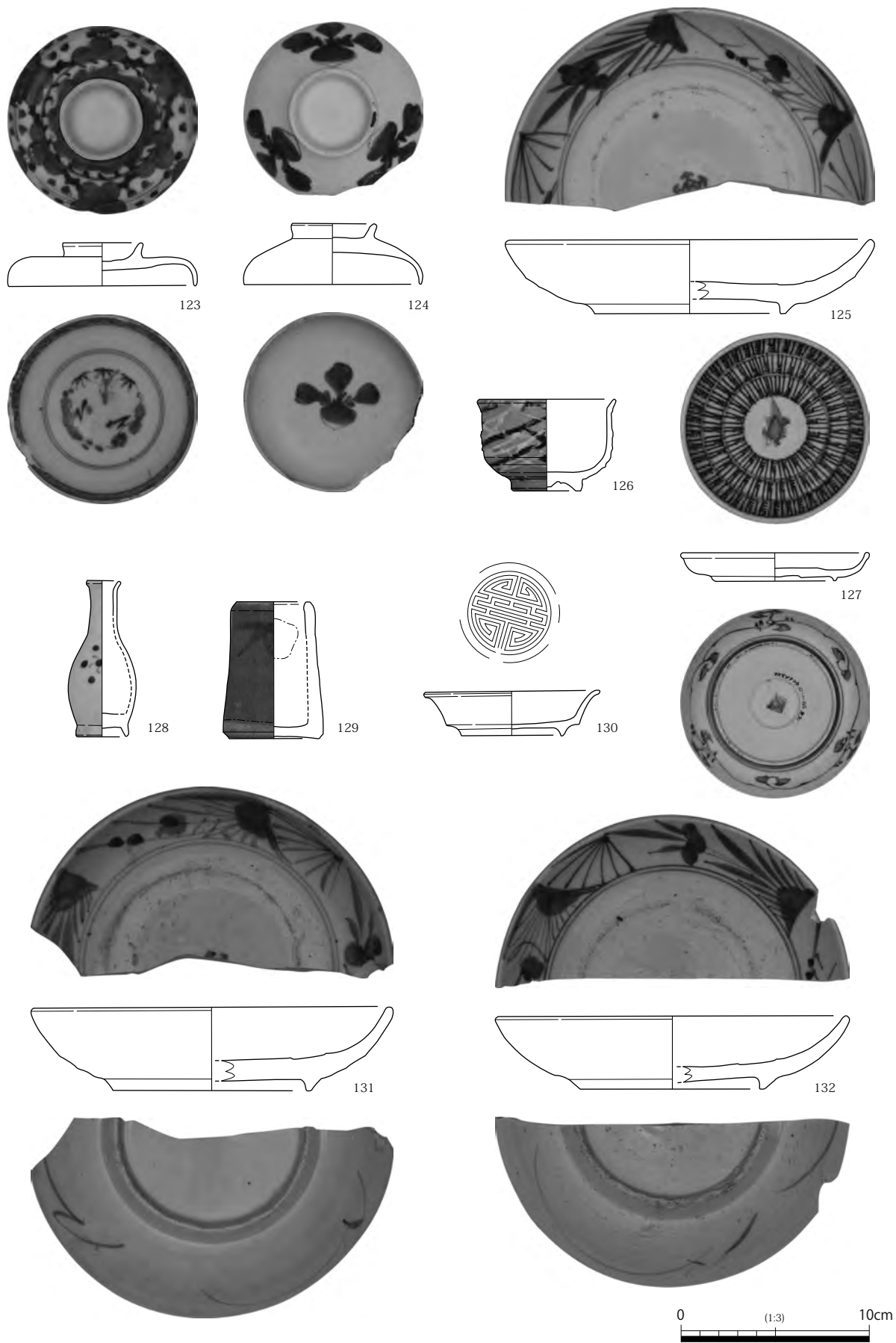


图40 第4回洪水砂層 出土遺物（2）

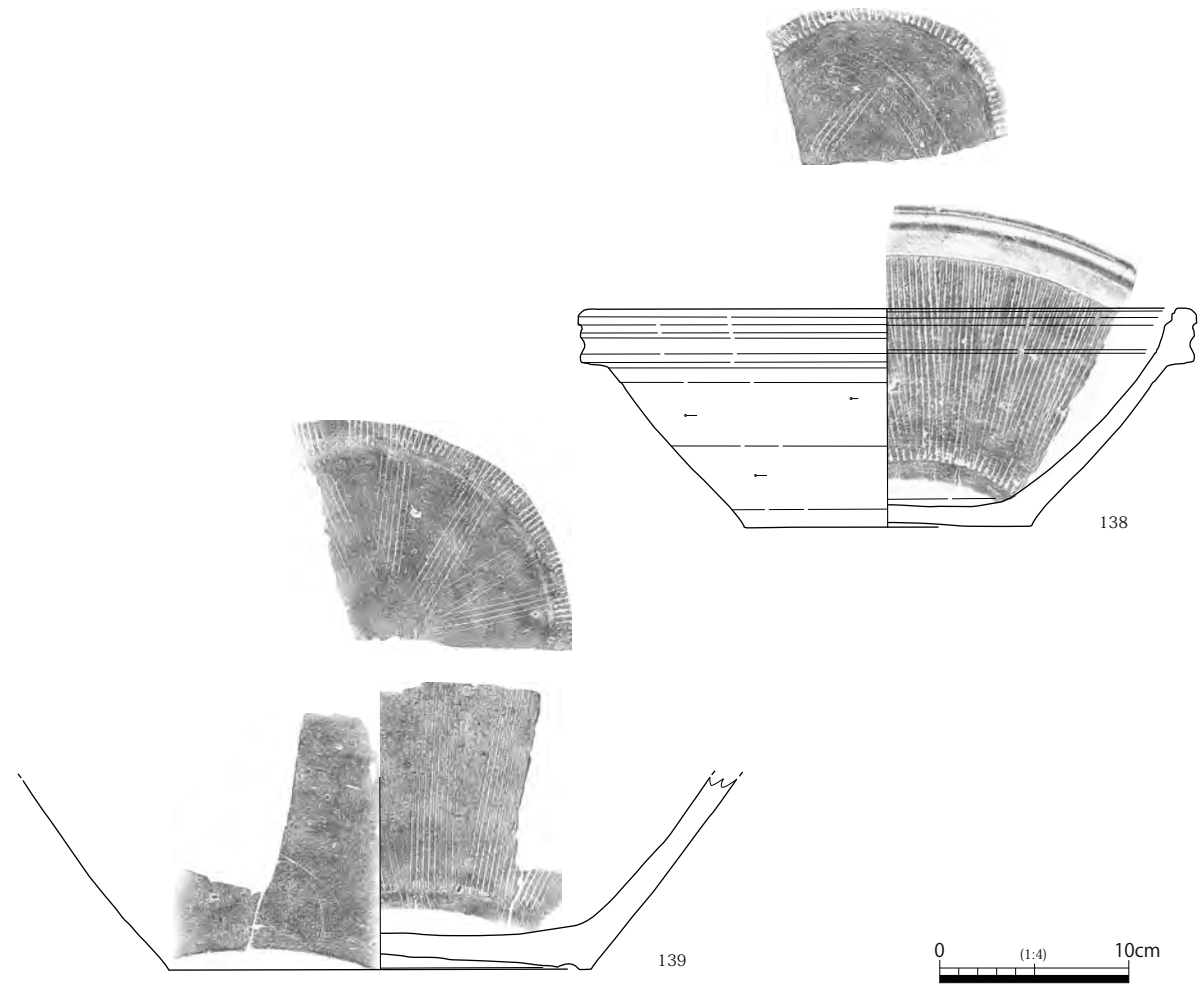
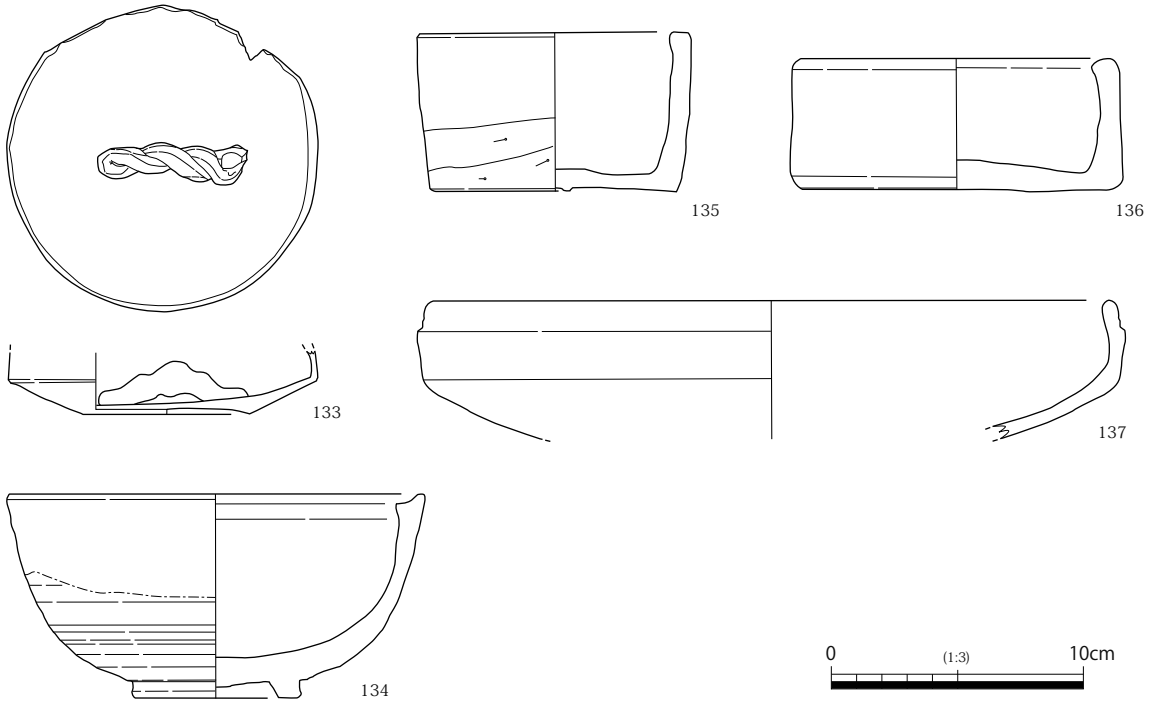


图41 第4回洪水砂層 出土遺物 (3)

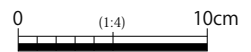
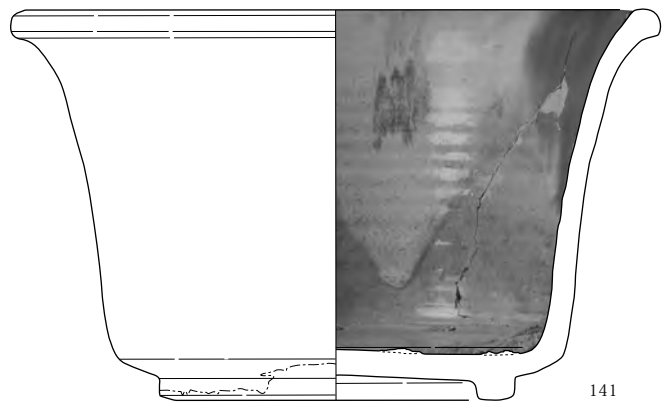
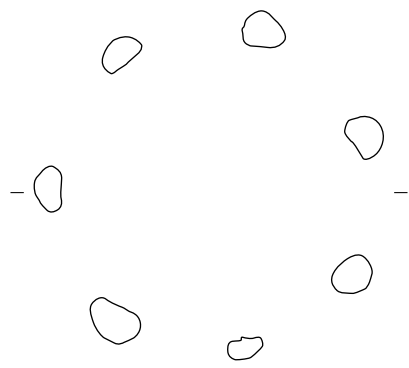
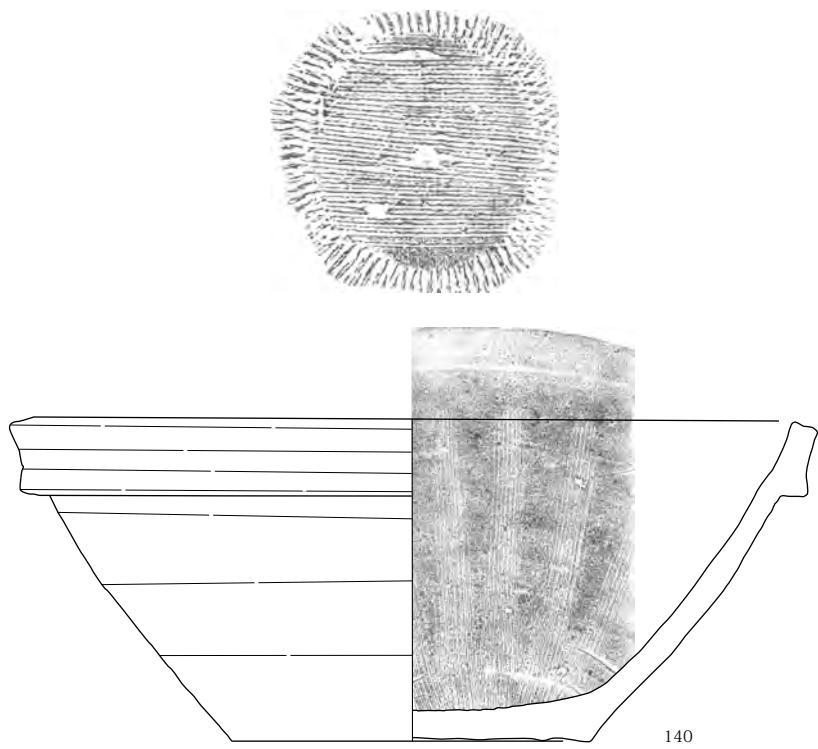


图42 第4回洪水砂層 出土遺物（4）

描かれており、19世紀前半と考えられる。129は陶器灰落とし（灰吹）である。煙草の灰を落とし入れる筒形の容器で、煙草盆にのせて使用するものである。灰を捨てる際に煙管の先で口縁部をたたくため、敲打痕が若干認められる。130は白磁皿で、見込みに寿字を木版で打ち込んだ「寿紋皿」と呼ばれたものである。美濃国土岐郡肥田村（現在の岐阜県土岐市肥田町）で、安政2（1855）年に開窯したもので、肥田焼の代表作品である。131・132は肥前磁器染付皿である。見込みに蛇の目釉剥ぎが認められ、内面には扇と唐草が配置されている。18世紀代と考えられる。

133は施釉陶器急須蓋である。134は陶器鉢である。135・136は土師質土器火入れである。137は土師質土器焙烙である。138～140は堺播鉢で、かなり大型のものである。138は、見込みにいわゆるウールマーク状の播目が認められる。139は、外面の底部付近に線刻による文様がみられるが、意匠は不明である。141は瀬戸美濃陶器大型鉢で、火鉢と考えられる。内面に胎土目が7ヶ所認められる。179は土師質土器小型蓋である。菊花形で、裏面に墨書による「寿」字がみられる。180はバイ貝製の独楽である。内部に鉛のおもりが確認できる。大坂城下や堺環濠都市遺跡で出土している。

181は、銅製小型柄鏡である。裏面中央に隅立て四つ目結文が配置され、左側に「野田肥前守藤原吉政」の銘が陽刻で付けられている。家紋が付けられ、人物名が特定されている品物のように見えるが、柄鏡特有の決まり文句のようで、これにより作者や所持していた人物を特定することはできない。

また、銭貨も出土しており、203～205は「寛永通宝」であるが、203は「背文」である。206は「皇宋通宝」で、北宋の宝元元（1038）年のものである。中世の出土銭の中で最も枚数が多い。207は「景德元宝」で、北宋の景德元（1004）年のものである。206・207は室町時代以降に流通していたもので、「寛永通宝」が発行されてからは使われなくなったものである。中世の遺物として混入したものと見える。

第4回洪水砂層からは、18世紀～19世紀前半代の遺物も多くみられるが、時期の特定できる肥田焼「寿紋皿」が出土したことから、19世紀半ば以降の堆積といえる。

e. 第4回洪水以後

第4回洪水砂層上面で遺構が複数検出されたことから、遺構面とした。第4回洪水砂層の上面は、整地や盛土がくりかえされているため、遺物包含層が良好に残存している状況ではなかった。このため、ここで遺構面と判断した面は暫定的であり、検出された遺構が同時に存在していたとは限らない。ただ、時期差は少ないものと考えられるため、第4回洪水以降の遺構・遺物としてここでまとめておく。

25土坑（図43・44・49）

盛土・整地層を除去した第4回洪水砂層上面に相当する面で検出された。B区南端部に位置しており、掘削当初は新しい時期の攪乱と考えていたものである。平面形は不整形な楕円形を呈しており、調査区南側にさらに広がる。検出面で東西方向約6.5m、南北方向約6.0m以上、深さ0.6m以上を測る。盛土層から掘り込まれており、埋土下層は黒褐色粘土が主体で、下に粗砂が堆積している。底部付近に粘土層が厚く堆積していることから、何らかの水溜り遺構とも考えられるが、はっきりしない。

遺物はかなり多く出土しているが、上層では近代以降のものが多く含まれているため、廃絶時期は近代以降といえる。下層からは、江戸時代におさまる時期の遺物がみられることから、これらを中心にまとめている。

下層から、肥前磁器染付碗・皿、陶器碗・蓋・灯明皿・甕、堺播鉢、土師質土器秉燭・火消し壺蓋・火鉢、

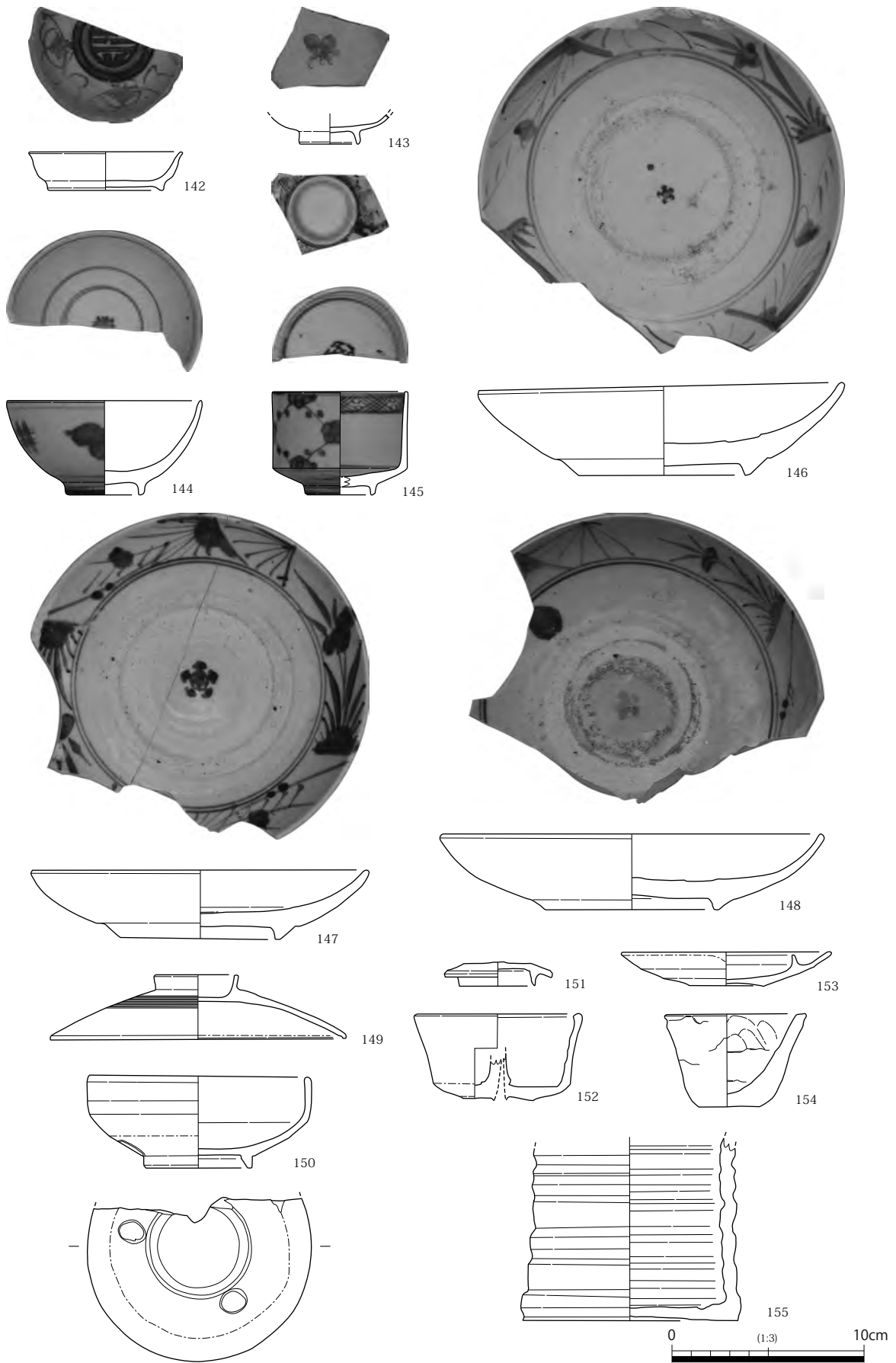


图43 25土坑 出土遗物(1)

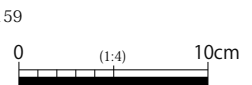
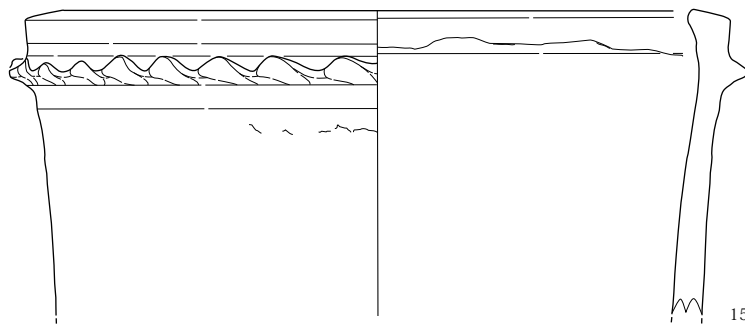
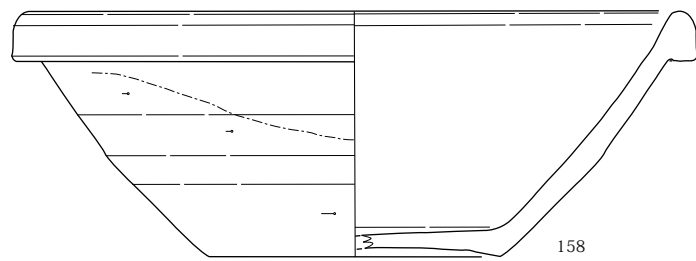
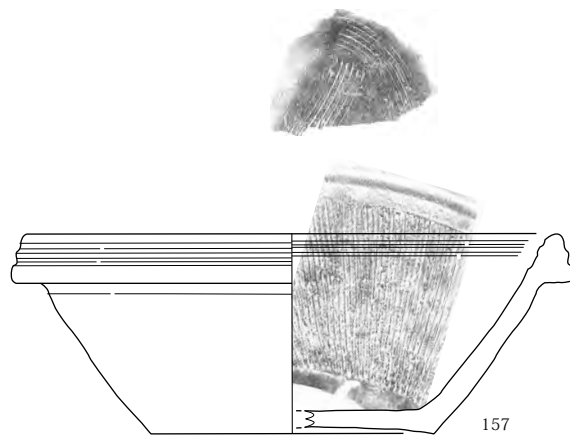
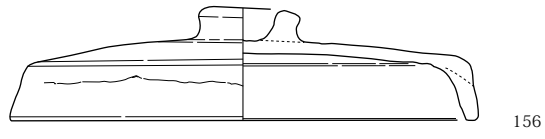


图44 25土坑 出土遗物 (2)

瓦質土器炬燵、瓦類などが出土した。

142は染付小皿で、赤絵により内面に蝶、見込みに「寿」字が描かれている。143は染付小杯で、赤絵により見込みに蝶が描かれている。144・145は染付碗で、144の見込みには、圏線の中、コンニャク印版による五弁花が付せられている。145は半筒形で、見込みには、圏線の中、コンニャク印版による五弁花が付せられている。いずれも18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。146～148は、染付皿である。いずれも見込みに蛇の目釉剥ぎが認められ、中央部にコンニャク印版による五弁花が付せられている。内面には扇と唐草が配置されている。18世紀代と考えられる。149は灰釉陶器蓋である。150は陶器碗で、高台の外側に2ヶ所の円形のケズリがみられる。151は陶器小型蓋である。152は土師質土器乗燵である。153は灰釉陶器受付き灯明皿である。154は用途が不明であるが、手づくねの小型土器である。155は陶器の火入れと考えられる。

156は、大型の土師質土器火消し壺蓋である。157は堺播鉢で、見込みにいわゆるウールマーク状の播目が認められる。158は陶器で外見は播鉢であるが、播目がないことから、こね鉢の用途が考えられるものである。159は土師質土器火鉢で、口縁部外面に突帯が巡っている。

瓦類の中に堺の瓦仲間の刻印が押された瓦がみられる。186は平瓦の側面にみられ、全体の「堺改瓦屋喜太郎」が読める。先の嶋谷氏の研究成果によると、「堺改瓦屋喜太郎」は帯屋喜太郎に該当することになり、19世紀前半の時期にあてはまる（表6）。

24井戸（図45・46、図版11）

盛土・整地層を除去した第4回洪水砂層上面に相当する面で検出された。B区のほぼ中央部に位置している。上部に井戸椀瓦を巡らすものであるが、整地などでかなり破壊されており、部分的に井戸椀瓦が残存する状態で検出された。井戸椀瓦は2段以上設けられていたものと考えられる。井戸椀瓦の下部

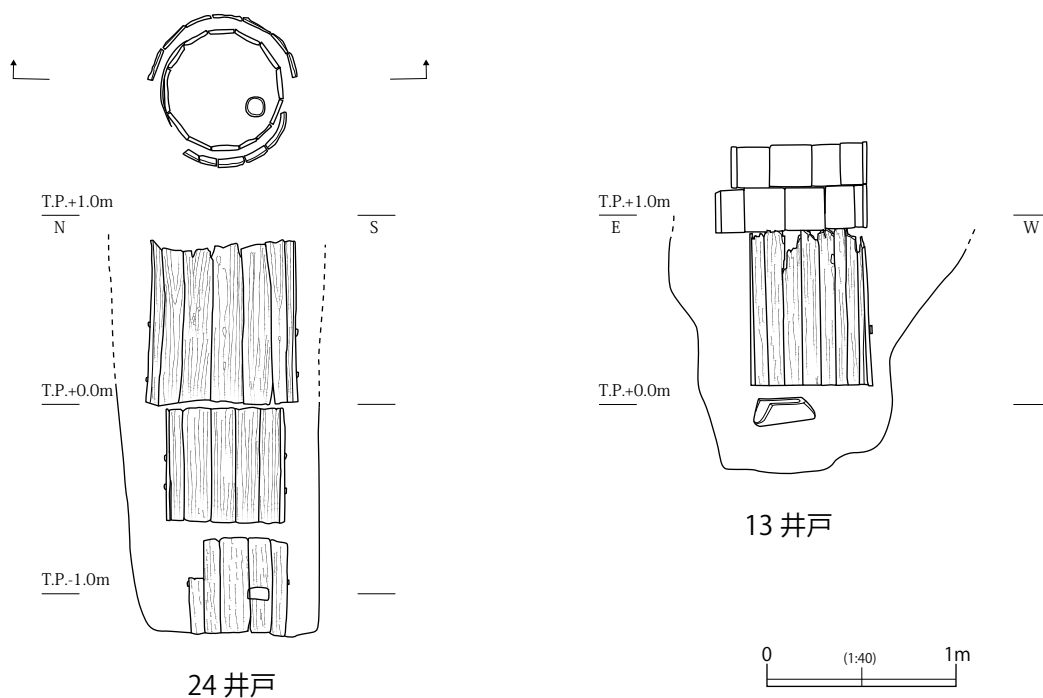


図45 13井戸・24井戸 断面模式図

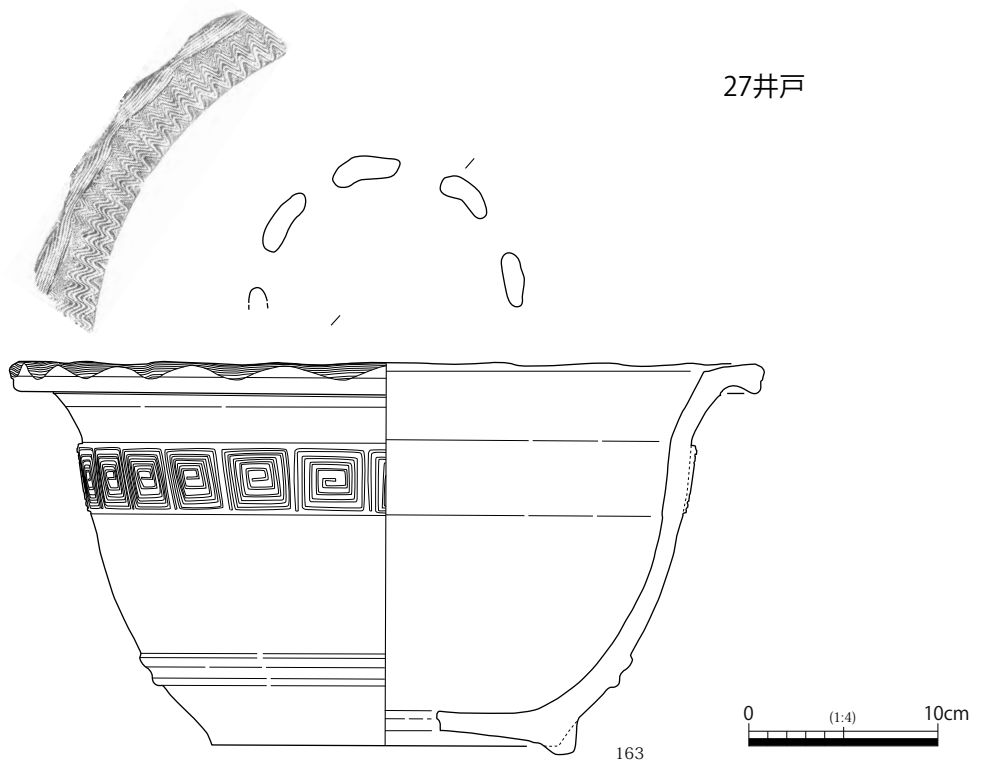
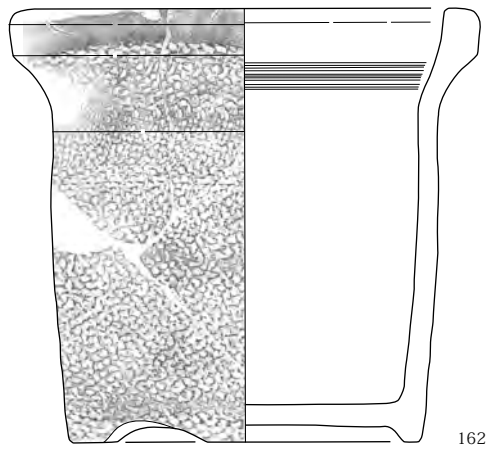
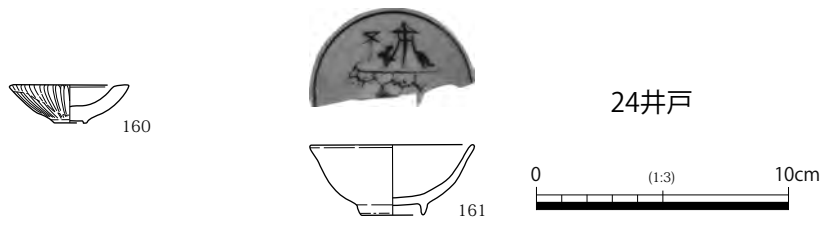


図46 24井戸・27井戸 出土遺物

では、桶を用いた井戸杵が3段にわたって検出され、上から約0.8m、約0.6m、0.5m以上の長さを測る。底部まで掘削できなかったが、検出面から約2.2mの深さまで桶が達していることは確認できた。この段階で、径約10cmの竹筒が縦に刺さった状況で検出され、井戸廃絶の際の井戸神に対する空気抜きの目的で入れられたものと推測される。

近代以降に廃絶したものであり、内部にはコンクリートやレンガなどが詰め込まれた状態であった。その中で白磁製品が検出された。160は白磁紅皿で、19世紀前半と考えられる。161は白磁小杯で、内面に簡略化された楼閣が手描きにより描かれている。滲つくしのような指物もみられる。

井戸の構造から、つくられた時期は近世までさかのぼるものといえるが、幕末に近い時期であったと考えられる。

27井戸（図版11）

盛土・整地層を除去した第4回洪水砂層上面に相当する面で検出された。B区中央部やや西寄りに位置しており、25土坑の東で、24井戸の西にあたる。上部に井戸杵瓦を巡らすものであるが、整地などで破壊されており、部分的に井戸杵瓦が残存する状態で検出された。井戸杵瓦は2段以上設けられているものと考えられる。井戸杵瓦の下部では、桶を用いた井戸杵が検出されているが、後に漆喰で内部が補強されている。24井戸と比べると深くないことから、井戸よりも野井戸や肥溜めなどとして使用されていた可能性も考えられる。

近代以降に廃絶したものであり、内部にはコンクリートやレンガなどが詰め込まれた状態であった。その中から、瓦質土器と陶器の大型品が検出された。162は瓦質土器火鉢で、外面に圧痕が施されている。163は陶器植木鉢で、外面に雷文の付文が帯状に配されている。口縁部には、櫛による波状文が巡らされている。内面には胎土目が認められる。

井戸の構造から、つくられた時期は近世までさかのぼるものといえるが、幕末に近い時期と推測するに留まる。

13井戸（図45・46・49、図版11）

盛土・整地層を除去した第4回洪水砂層上面に相当する面で検出された。A区中央部北寄りに位置しており、洪水砂層上面で井戸杵瓦が検出されたものである。上部に井戸杵瓦を巡らすものであるが、整地などで破壊されており、井戸杵瓦は2段程度が確認されたのみである。井戸杵瓦の下部では、桶を用いた井戸杵が1段検出され、約0.8mの長さを測る。この桶の下部が井戸の底であり、レベルはT.P.-0.2mを測る。底からは錆による損傷が激しく原形をとどめていなかったが、鉄製の容器が検出され、井戸の水をくみ上げるために使用されていたものと考えられる。

近代以降に廃絶したものであり、内部にはコンクリートやレンガ、瓦類などが詰め込まれた状態であった。その中から上部の井戸杵瓦が多く検出され、一部に堺の瓦仲間の刻印が押された瓦がみられる。187～190は井戸杵瓦の側面にみられ、全体の「堺下源」が読める。191は井戸杵瓦の側面にみられ、一部の「□下源」が読める。「堺下源」と考えられる。192は井戸杵瓦の側面にみられ、一部の「□下又」が読める。「堺下又」と考えられる。先の嶋谷氏の研究成果によると、「堺下源」は下田源兵衛、「堺下又」は下田又三郎に該当することになり、18世紀末～19世紀初頭の時期にあてはまる（表6）。さらに文字だけではなく、刻印として記号が井戸杵瓦の側面に押されているものもみられる。193・197は○印、

194～196はややへこんだ○印である。

内部からは、近代以降の廃棄物がほとんどであることから、時期決定は困難であるが、使用された井戸椀瓦の刻印により、つくられた時期は19世紀初頭と考えることができる。

畝溝群 (図47、図版12)

盛土・整地層を除去した第4回洪水砂層上面で検出された。A区西端部に位置しており、調査区内で9条検出された。北側がやや東に傾く南北方向の溝であり、調査区の北側へさらにのびる。畝溝の並びは、調査区の西側にさらに広がるものと考えられる。

畝溝は幅40～60cm、深さ30～50cmで、検出された部分の長さは約11mを測る。埋土は暗灰黄色細砂混じり粗砂である。畝溝群の南側に直交して溝が検出されており、この溝により畝溝群を区画しているものと考えられる。畝溝群は、調査区内においては他ではまったくみられず、この部分で検出されたのみである。

遺物も小片のみであり、時期決定できるものはなかった。

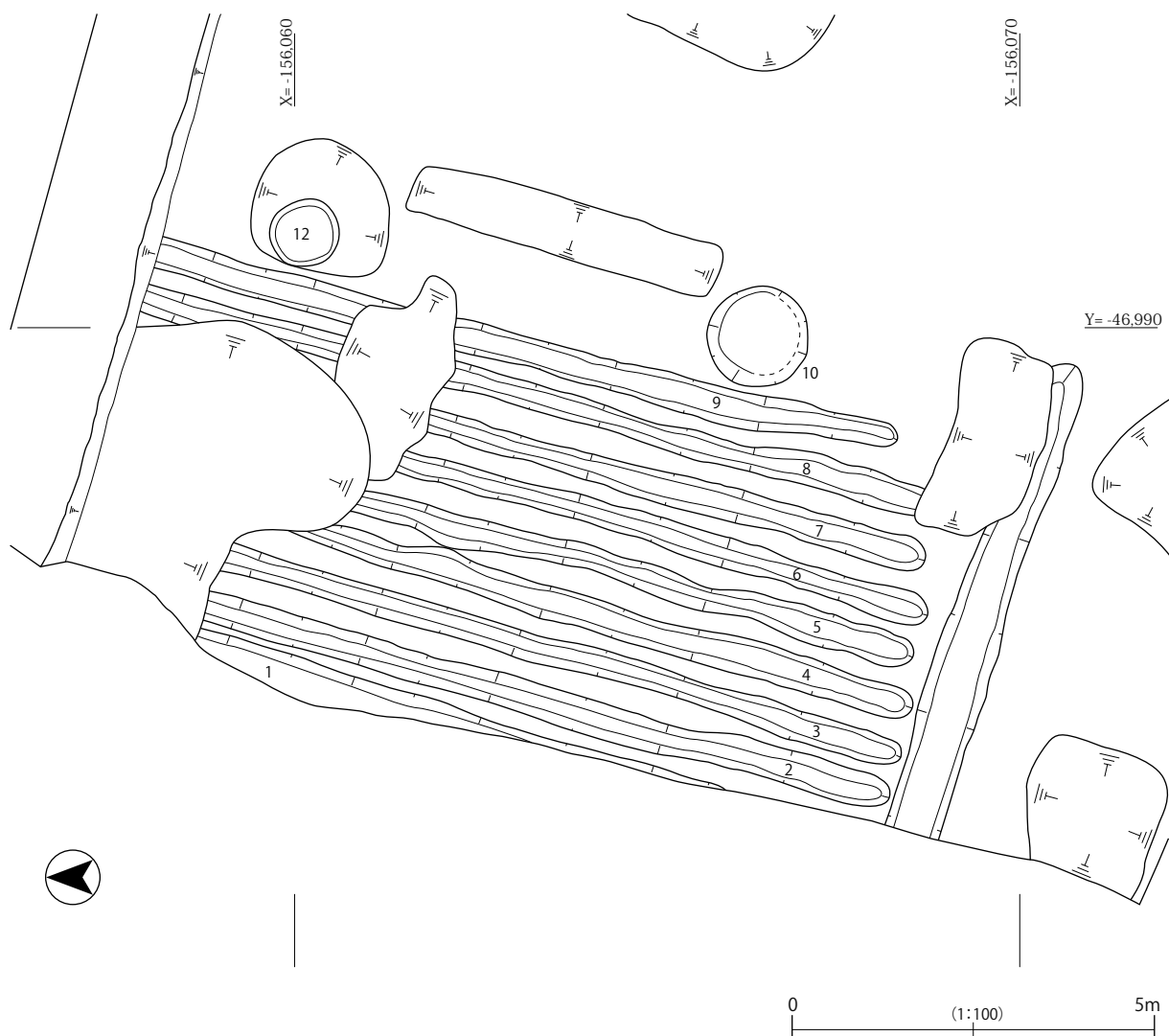


図47 畝溝群 平面図

盛土・整地層の遺物（図48、図版21）

近代の遺物と共に、肥前磁器染付碗・皿・仏飯器、陶器碗・灯明皿、土師質土器台付灯明皿、銭貨などの遺物が出土した。

164は瀬戸美濃灰釉陶器で、ほぼ全面に貫入がみられ、内外面に菊文が描かれている。165・168は染付碗のうち広東形のもので、18世紀末～19世紀前半と考えられる。166は染付皿で、蛇の目高台である。内面の見込みには蝶文が配置されている。167は染付小碗である。169は染付皿で、外面に七宝繋ぎや格子が手描きで描かれている。底部の高台内には二重角渦福が付されている。170は染付仏飯器で、蛇の目高台である。赤絵が描かれており、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。171は染付小壺で、外面に仙人などの人物が手描きで描かれている。172は染付皿で、内面に格子が手描きで描かれている。見込みに蛇の目釉剥ぎが認められる。173・175は灰釉陶器灯明皿で、175は受付きである。174は台部分が欠損しているが、土師質土器台付灯明皿である。202は銭貨で、「寛永通宝」である。

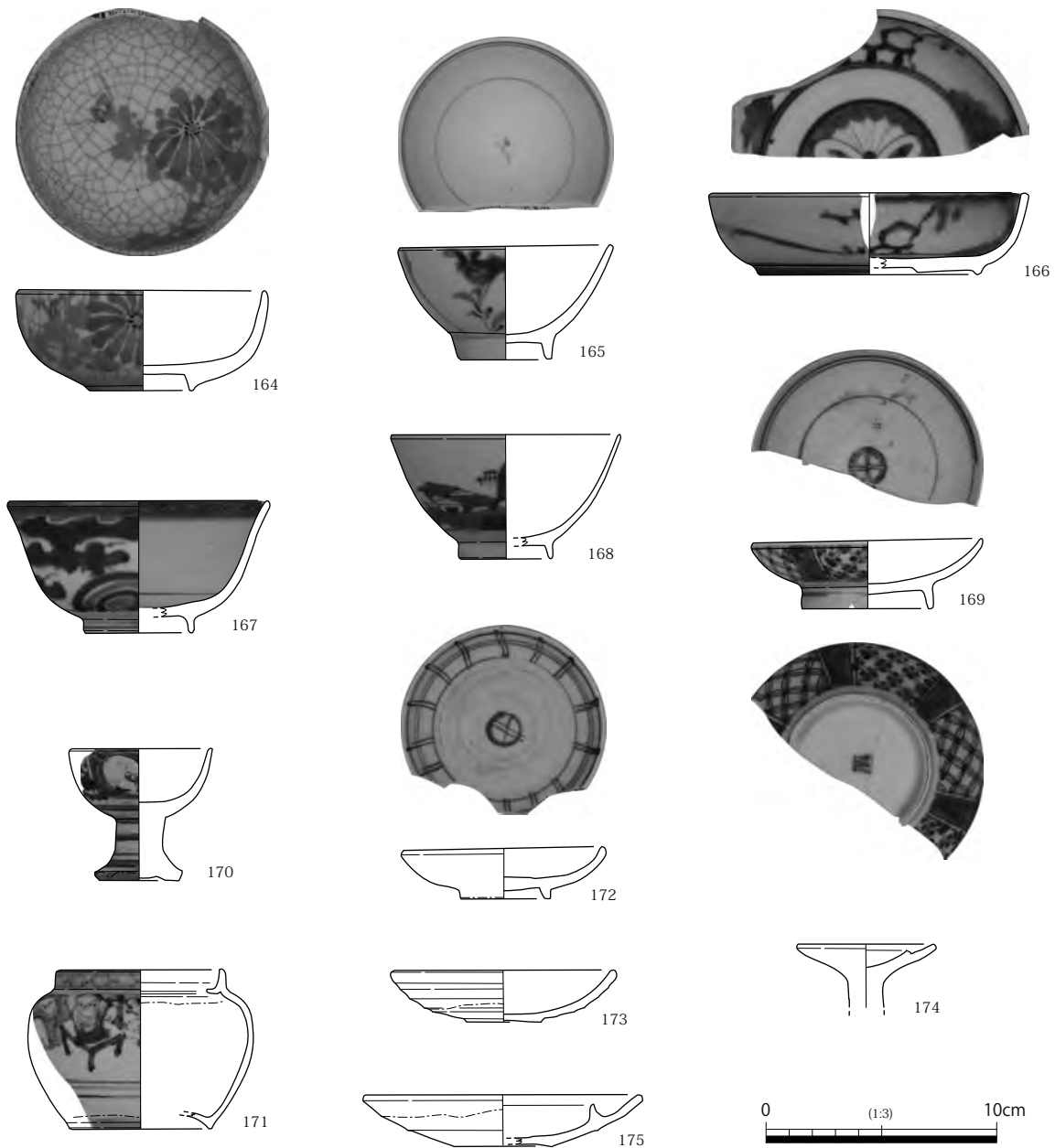


図48 盛土・整地層 出土遺物

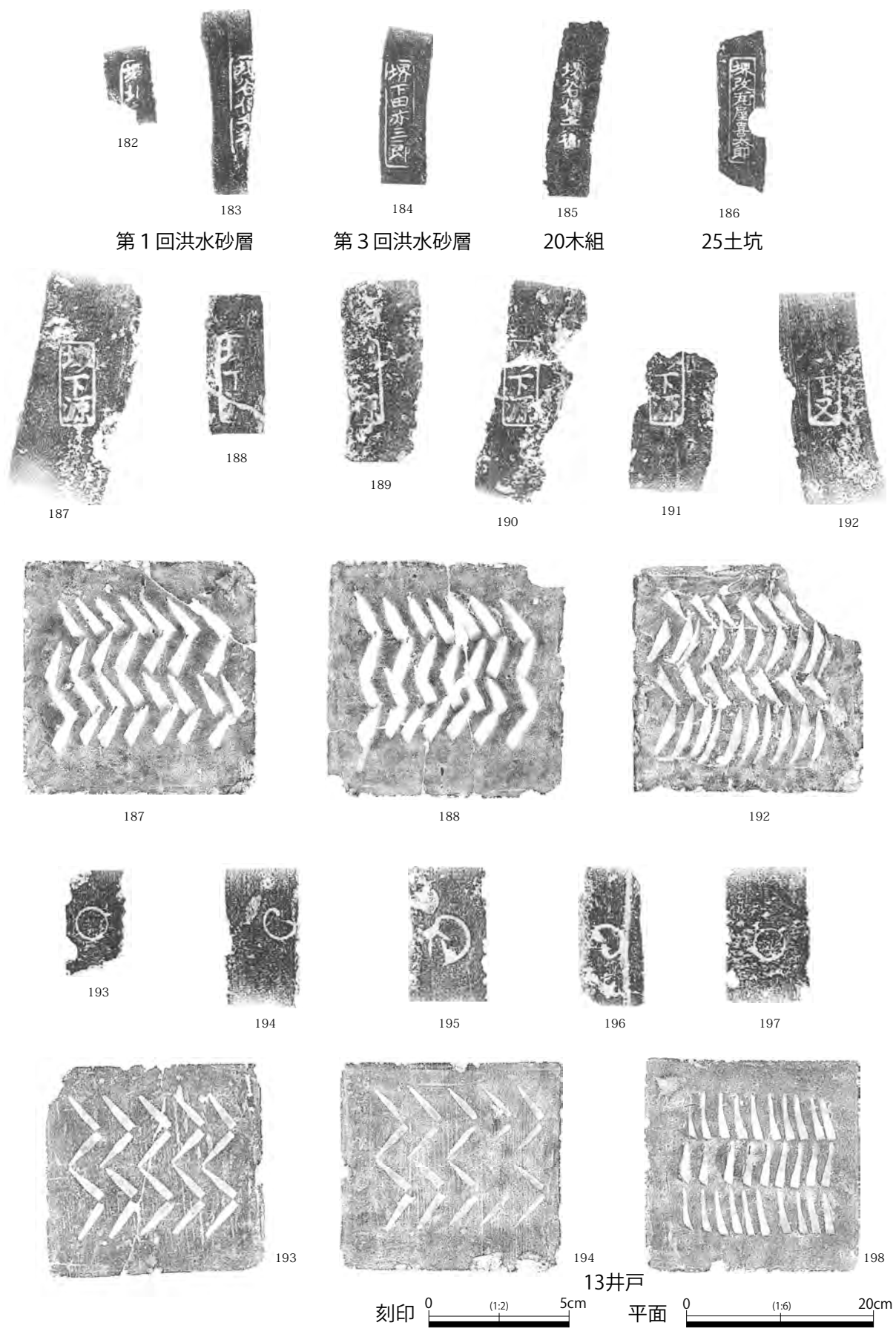


图49 纪州街道西侧出土 瓦拓本

時期は前後しているが、紀州街道西側の盛土・整地層から出土したものの一部をあげておく。

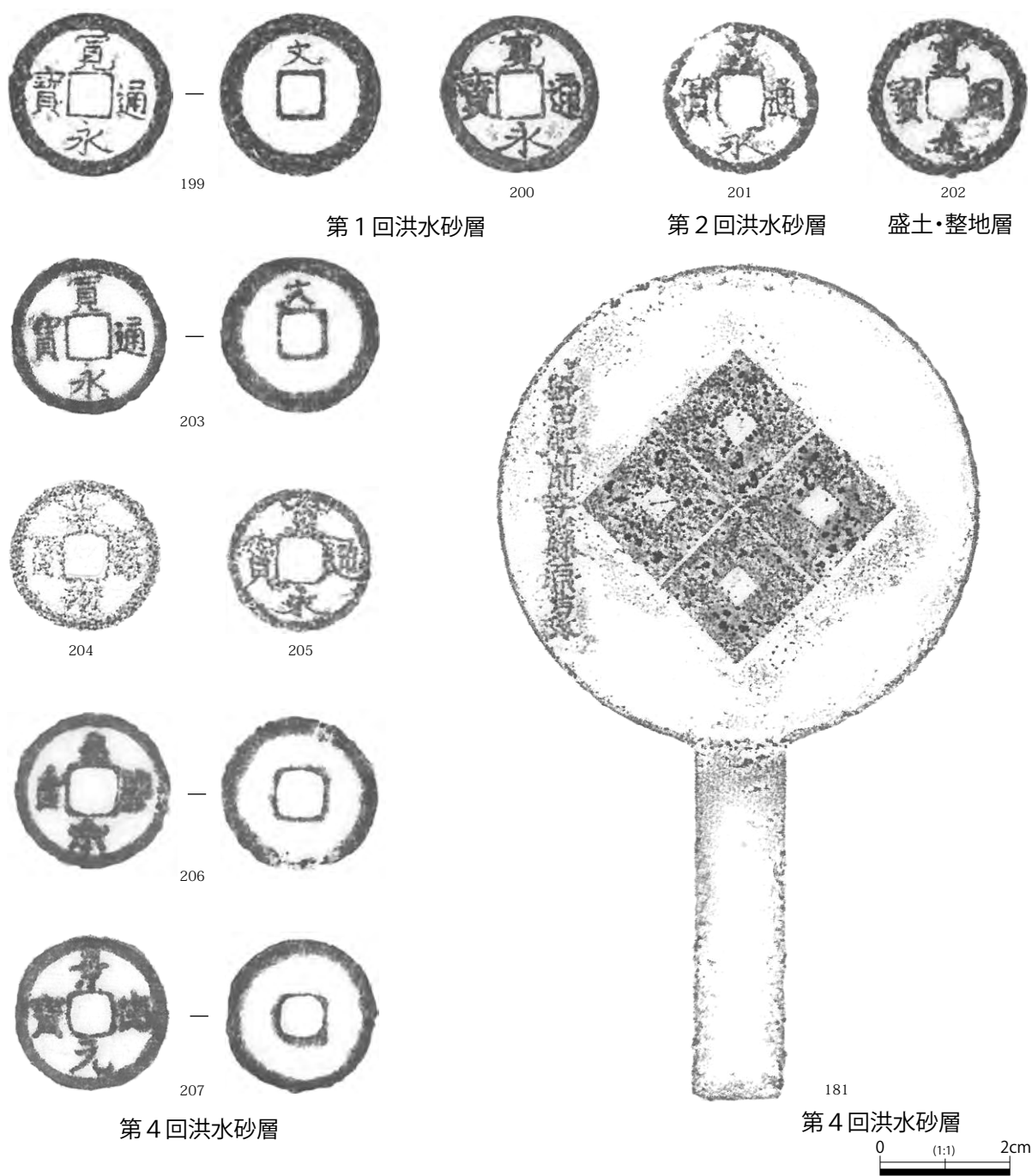


図50 紀州街道西側出土 銭貨・銅製品拓本

第3節 C区（紀州街道東側部分）の成果

紀州街道東側部分は、紀州街道部分や紀州街道西側部分とは異なり、機械による埋土除去作業でコンクリートやレンガの塊はあまり発生しないという状況であった。ただ、盛土・整地層にも多くの遺物が含まれていたことから、調査当初は後世に盛られた整地層と遺構埋土の区別が困難な部分が見られた。機械によって埋設管や建物の基礎などを除去した時点から調査を開始することとした。ただし、盛土・整地層を完全に除去しない時点から、人力掘削を開始した部分も多い。これは、盛土・整地層内に多くの遺物が含まれており、機械で一気に掘削すると、取捨選択の判断ができないことによる。紀州街道部分と同様に、おおまかな目安として、江戸時代の範囲内を取り上げの基準とした。ただし、江戸時代から明治時代まで存続する遺構・遺物も多く存在することから、あえて明治時代の範疇に入る部分の記述は避けているが、一部この範囲を越えたものも含まれている。

基本層序で述べたように、紀州街道東側部分に関しては、基本的に遺構面は1面と考えられ、その中で若干の時期差は認められるものの、ほぼ同時期に機能していたものと考えられる。記述に関しては、比較的遺物の多く出土した大型の遺構や遺構の集中している部分をひとまとまりとして、遺物取り上げ用の10m四方のブロック（図52参照）毎に記述を進めることにする。

1. 中世以前の遺構・遺物

第2章第1節でも記述しているように、調査地一帯は「堺砂堆」上に位置しており、調査中は全面にわたってほとんど砂質土の掘削のみであり、粘性の強い土壌はみることがなかった。紀州街道東側においても、遺構面下層には、基本層序で述べた黄褐色細砂層が約1m堆積しており、調査地周辺に同様の細砂層が広く堆積していることがわかる。ここでも非常に均質な砂層であり、ラミナなどは見ることができず、流水堆積とは考えられない状況であった。小礫すら混入しておらず、人為的な遺物も検出することはできなかった。人が生活した痕跡（遺構）をみつけることもできなかった。

調査の最終面は、大阪府教育委員会の指導により、この黄褐色細砂層の下層にみられる黒色粘土層上面（T.P.+0.75～0.80m）とされた。なお、黒色粘土層およびその下層においても、人為的な痕跡は検出されず、遺物はまったく出土していない。

C区の調査においても、部分的に黒色粘土層から掘り下げて、下層の堆積状況を観察した。基本的には、紀州街道および紀州街道西側のA区やB区の観察所見と異なることはなく、細砂混じり粗砂を主体とする土層であり、水生植物によるものと考えられる有機物や炭化物が検出された。遺物の出土はなく、時期を判断することはできなかった。

黒色粘土層は、厚さ10cm程度の粘土を主体としているが、C区では粘土層が薄く粗砂が多く含まれる部分もあり、均質ではない。有機物が炭化した層であり、一時期湿地状になっていたことが推測される。遺物が検出されず、時期決定が困難であることから、2ヶ所でサンプルを採取し、粘土の中に大量に含まれる炭化物により、放射性炭素年代測定をおこなった。詳細は第6章で述べるが、結果的にA.D. 232～A.D.344（確率95.4%）とA.D. 321～A.D.407（確率77.8%）という測定値となり、紀元3世紀前半～紀元4世紀中頃と紀元3世紀中頃～紀元5世紀初頭ということになった。弥生時代後期から古墳時代にあたる時期を示していることになる。この黒色粘土層の上に黄褐色細砂層が厚く堆積している。同一の土層と考えられる、黒色粘土層を試料として取り上げているが、A区の弥生時代前期～中期と

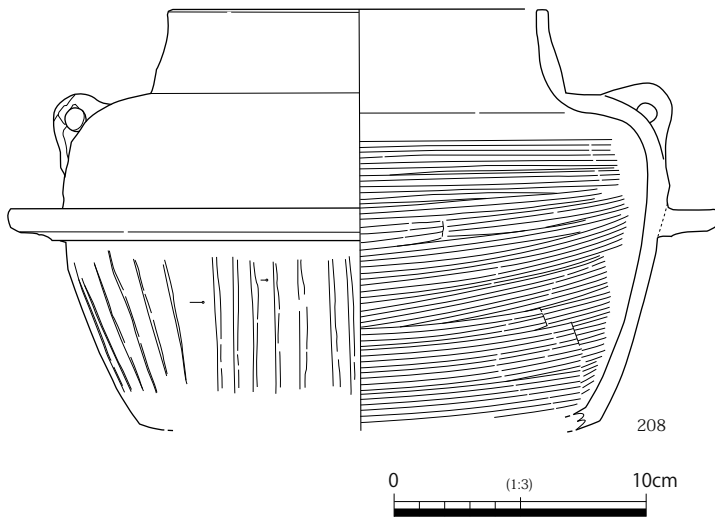


図51 C区黄褐色細砂層 出土遺物

ので、細かい調整が施された精巧なものである。細かい時期は不明であるが、中世末期から近世初頭のものと考えられる。当遺跡の出土品の中では古いものであり、紀州街道東側部分で遺構が展開する初源的な時期の遺物と考えることができる。ただ、遺構に伴ったものではなく、黄褐色細砂層上面においても遺構は検出されなかった。この遺物の出土地点は、紀州街道部分の道7面に相当すると考えられる。

紀州街道東側部分では、混入品として古墳時代と考えられる須恵器が数点検出されているが、弥生時代およびそれ以前の遺物は、石器も含めてまったく出土していない。古代から中世の遺構や遺物も、これ以外はみられず、並松町遺跡全体でも検出されていない。

2 近世の遺構・遺物

盛土・整地層を除去した面を遺構面とし、ここで検出された遺構で構成された遺構群を基本として、記述をおこなう。さらに、遺構群の上部では埋土と盛土・整地層の区別ができないこともあることから、出土遺物に関しては、一体のものとして扱うこととする。時期的に矛盾が生じる可能性もあるが、遺構と無関係ではないとの判断から、この措置をとることとした。

全体の遺構の配置をみると、紀州街道に沿って調査区西半部に集中する、土坑を主体とする遺構群が特徴的である(図52、図版13・14)。北側に小ぶりの土坑が密集しており、南側に大型の水溜めと考えられる土坑が位置している。中央部は遺構の数が極端に減るが、瓦積み井戸がみられる。さらに南東端部には、木組みにより囲われた大型の水溜めが位置している。大型の土坑を中心に、遺物が多量に検出されており、これらの土坑をもとに記述を進めていくこととする。

a. 6 i 区

紀州街道に沿って調査区西半部に集中する、土坑を主体とする遺構群のうち、南側に位置する大型の水溜め(50土坑)が中心となるものである。ほぼこの区画の大部分を占めているため、他に遺構は検出されていない。なお、盛土・整地層除去面で検出した際は、内部の堆積状況から環状に巡る溝と認識するほどであった。また、東辺の南側では、重複する溝状の遺構が検出されたが、後の埋土の堆積状況の観察から、一体の遺構ということが判明した。さらに、埋土の堆積状況の観察から、複数回掘り直さ

いう結果と約300年の年代の差が生じていることになる。ここでは、この年代差について言及するつもりはないが、古墳時代においても調査地周辺が湿地状態であったことがわかる。なお、この結果より、黒色粘土層の上に厚く堆積している黄褐色細砂層は、A区での見解よりやや時代が下って、古墳時代後期以降に堆積した可能性が考えられる。

黄褐色細砂層のほぼ上面にあたる位置で、土師質茶釜が出土した(図51-208)。鉄製茶釜を模倣したもの

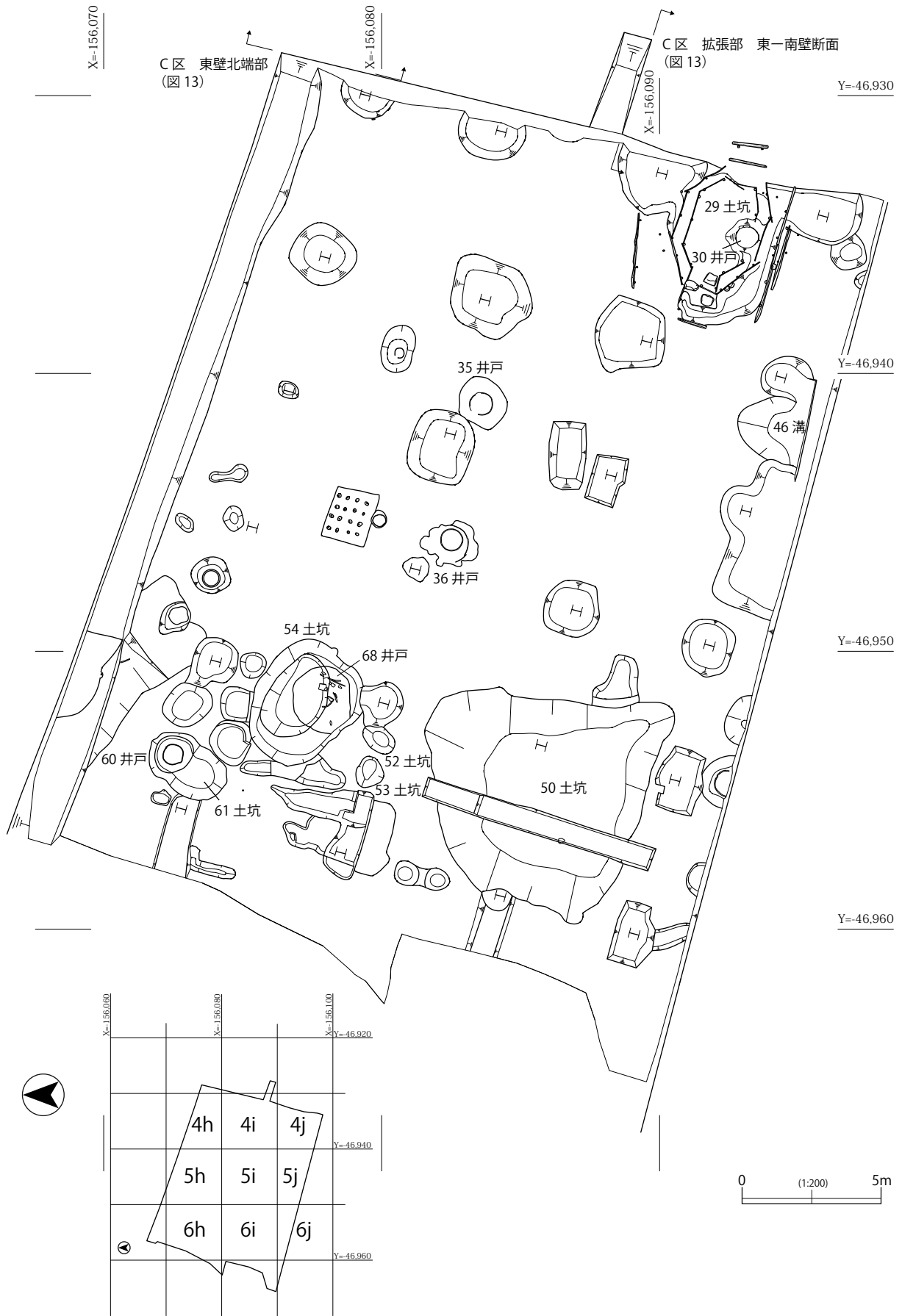


図52 C区 遺構平面図(1/200)

れたものであることがわかった。周囲は黄褐色細砂層で、付属する施設などはみつかっていない。

50土坑 (図52～55・79、図版15)

盛土・整地層除去面で検出された。検出面での平面形は不定型の台形を呈しており、当初は1基の大型土坑と考えていたが、埋土の堆積状況の観察により、2回にわたって掘り直されたことが判明した。したがって、当初検出されたものは3回目の平面形ということになる。なお、検出面では確認できなかったが、50土坑の北側部分での堆積層の精査により、下層から70土坑が検出され、50土坑により南側を切られていることが判明した。これについては、後述する。

1回目は、最も深くまで掘削されており、規模が最も大きいものである。平面形は、2回目以降の掘削によりはっきりしない部分もあるが、3回目の平面形と比較すると南側に広がっており、南北方向に長い長方形を呈している。南北方向8.5～9.2m、東西方向約7.5m、深さは最深部で検出面から約1.9mを測る。底部で木杭が検出され、横板もみつまっていることから、土留めの施設が設けられていたことがわかる。底部には、黒色粘土が主体の粘土層が堆積していることから、水溜めとして使用されていたことがわかる。黄褐色細砂層を掘り込んでいることから、周囲には粘土を含む土層が認められ、水を溜める工夫をしている。下層の粘土層の上に、様相の異なるシルトと細砂の互層が堆積していることから、洪水により埋まったものと考えられる。

2回目は、ほぼ同じ位置で掘削されているが、1回目比べて南辺が約2m北側に移動している。北辺の状況ははっきりしないが、あまり位置は変わっていないものと考えられる。また、東西両辺については、あまり位置は変わっていない。ただ、南東端部が東方向にやや突出したかたちとなっている。平面形は長方形を呈しており、南北方向約8.0m、東西方向7.2～8.8m、深さは最深

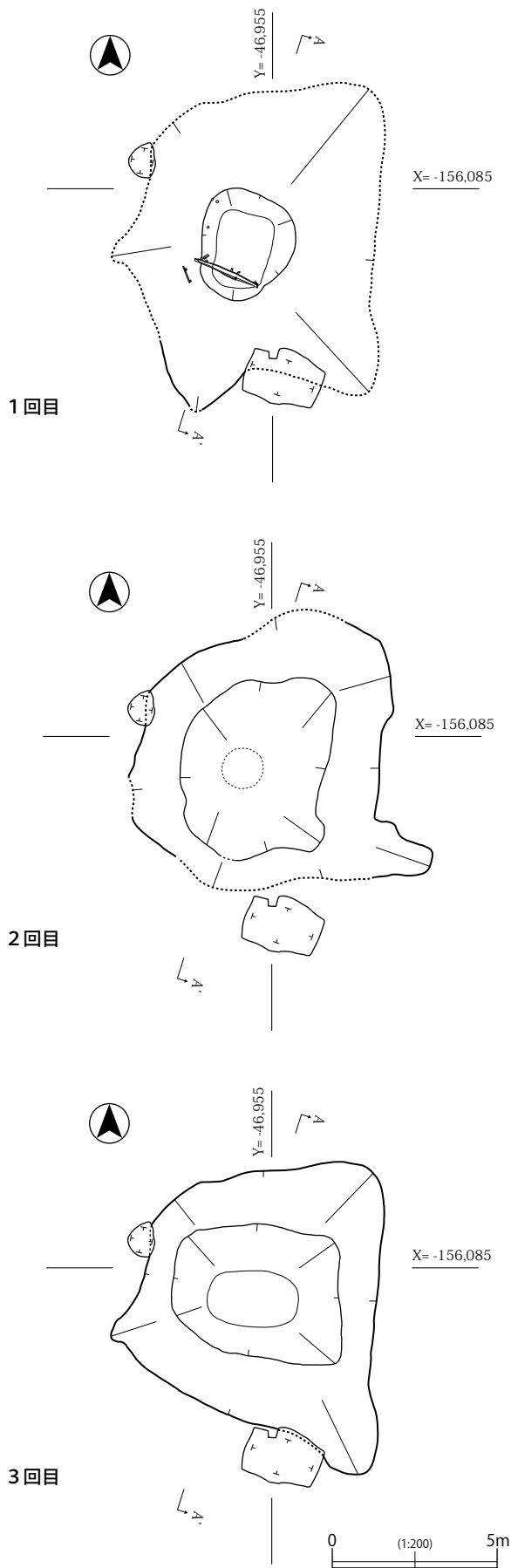


図53 50土坑 変遷模式図

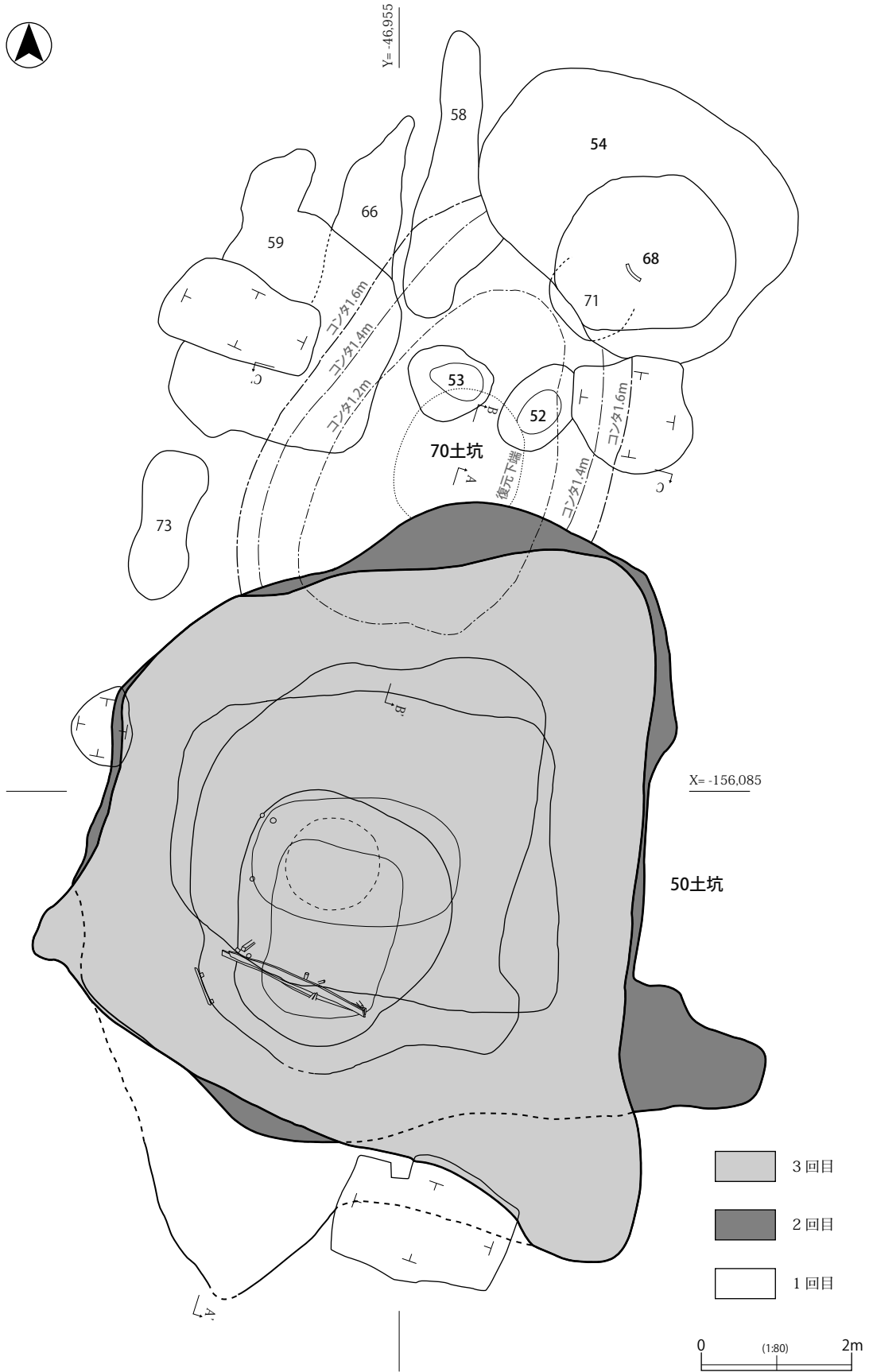


図54 50土坑・70土坑 平面図

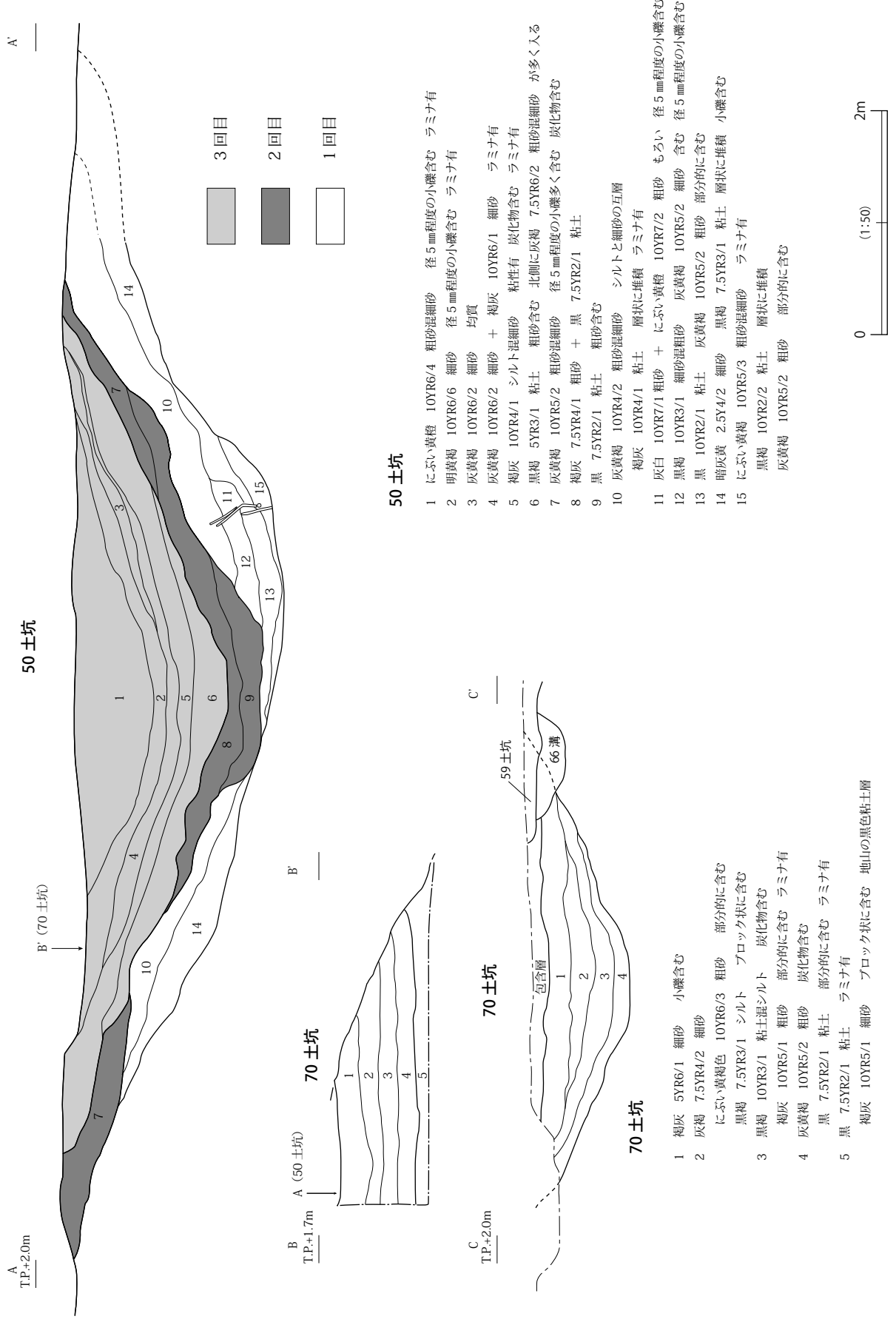


図55 50土坑・70土坑 断面図

部で検出面から約1.7mを測る。最深部は、1回目に比べて約1m北側に移動している。木杭などはみつかっておらず、土留めの施設は検出されていない。底部には、1回目と同様に黒色粘土が主体の粘土層が堆積していることから、再度水溜めとして使用されていたことがわかる。1回目の施設を利用していることから、水を溜めるための工夫を改めて施している状況はみられなかった。粘土層の上部は3回目の掘削でほぼ全体に掘り直されていることから、3回目の掘削にかかる理由ははっきりしない。洪水によって埋まったものを復旧したか、補修のため改めて掘削し直した可能性が考えられる。

3回目は、2回目とほぼ同じ位置で掘削されており、形状もほぼ同じであるが、南東端部の突出は南に向いている。平面形は不定型の台形を呈しており、南北方向6.5～9.5m、東西方向7.1～7.7m、深さは最深部で検出面から約1.4mを測る。最深部は、2回目とほぼ同じ位置である。木杭などはみつかっておらず、土留めの施設は検出されていない。2回目では、中層部分が南北方向に長い長方形を呈していたが、3回目では、東西方向に長い長方形を呈していることから、全体形状は異なっている。1回目のような、水を溜めるための工夫を改めて施している状況はみられなかった。底部には、1回目・2回目と同様に、黒褐色粘土主体の粘土層が堆積していることから、再度水溜めとして使用されていたことがわかる。粘土層の上部は、均質な細砂が堆積しており、洪水により全体が埋まったものと考えられる。この後は、再度掘削されることはなく、上部からは遺構は検出されていない。

なお、50土坑機能時の植生などを探るため、1回目と2回目の最下層である黒色粘土をサンプルとして採取し、花粉・珪藻分析をおこなった。詳細な分析結果は、第6章に記載しているが、結果的にいずれも湿原状であり、水の流れはあまりなく、アシやガマなどが生育していたことが推測されている。水溜め施設として機能していたことが証明されたものといえる。

50土坑の遺物（図56・57、図版24）

堆積層が3回に分かれることが判明したのは土層断面観察の後であることから、調査時には遺物を各回毎に分けていなかった。したがって、50土坑全体からの出土遺物ということでまとめているため、各回の時期を判定することはできない状況である。ただ、掘り直しについては、あまり時期差はないものと考えられ、遺物による各回の細かい時期決定は困難である可能性が高い。

肥前磁器染付碗・皿・鉢、陶器碗・徳利・急須・火鉢、土師質土器火鉢・灯明皿、堺播鉢、瓦類、土製品などが出土した。

209～215は染付碗である。209は半球形で、口縁部内面に四方襷文が配置されており、見込みには、二重圏線の中に五弁花が付せられている。底部の高台内には二重角渦福が付されている。18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。210はいわゆるくらわんか茶碗である。見込みには、二重圏線の中、コンニャク印版による五弁花が付せられている。外面には、コンニャク印版による鬼蔦と井桁文が付せられている。18世紀後半と考えられる。211は、口縁部内面に瓔珞文が配置されており、見込みには、圏線の中、コンニャク印版による五弁花が付せられている。212は外面に歴文、見込みには、圏線の中に変形「寿」字が付せられている。18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。213・214はいわゆるくらわんか茶碗である。213は外面にコンニャク印版による井桁文、214は鬼蔦が付されている。いずれも18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。215は半筒形で、口縁部内面に四方襷文が配置されており、見込みには、圏線の中にコンニャク印版による五弁花が付せられている。外面には半菊と格子が描かれている。18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。216・217は、陶器碗である。216は半筒形、217は

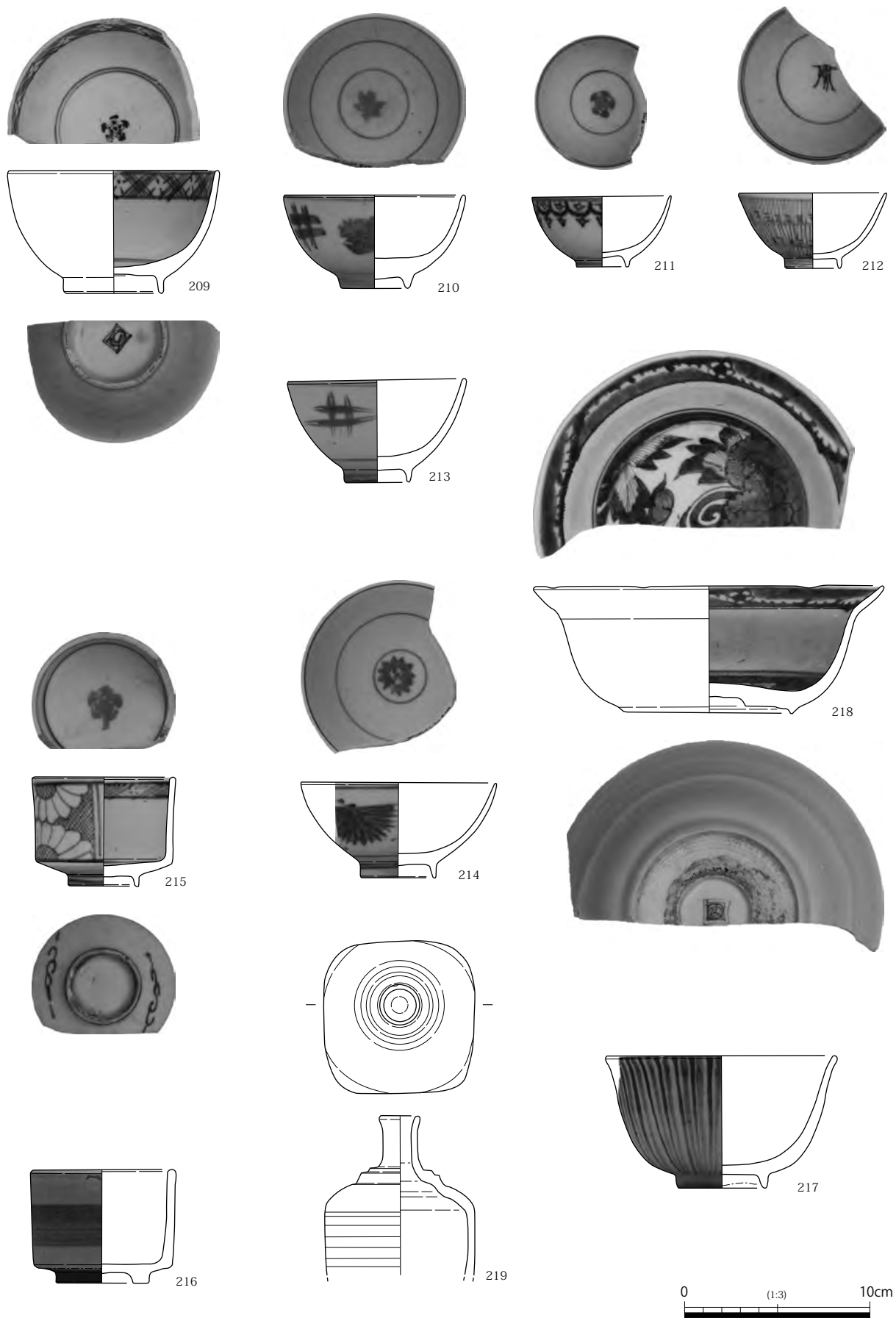


图56 50土坑 出土遗物(1)

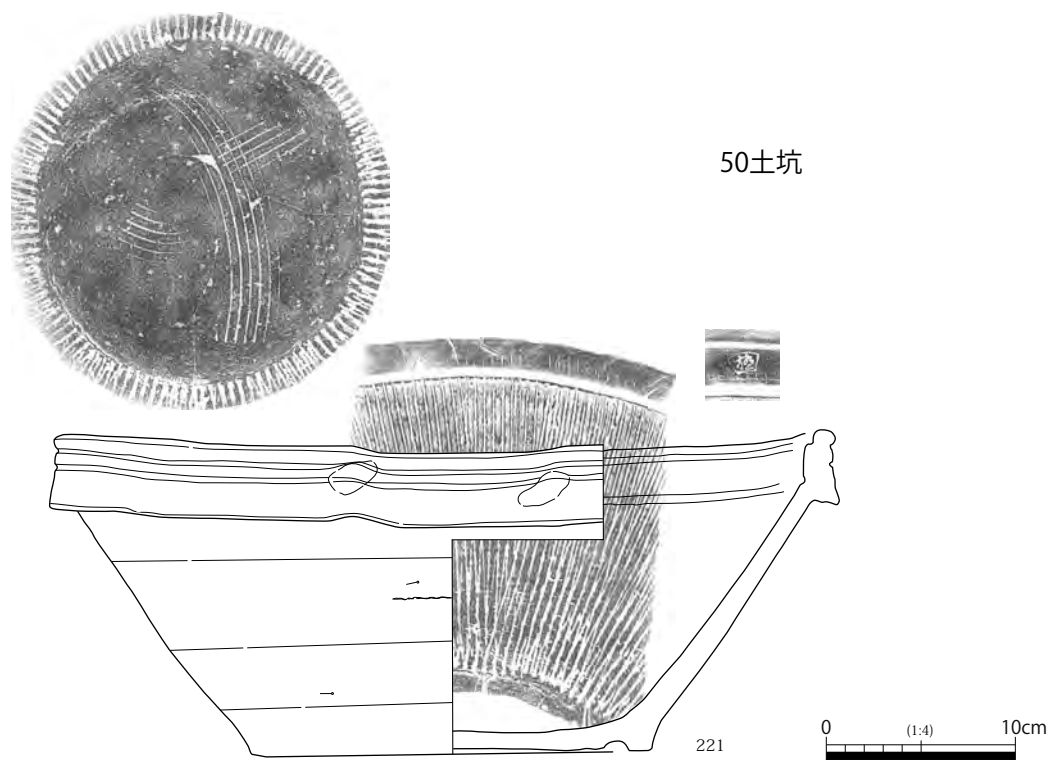
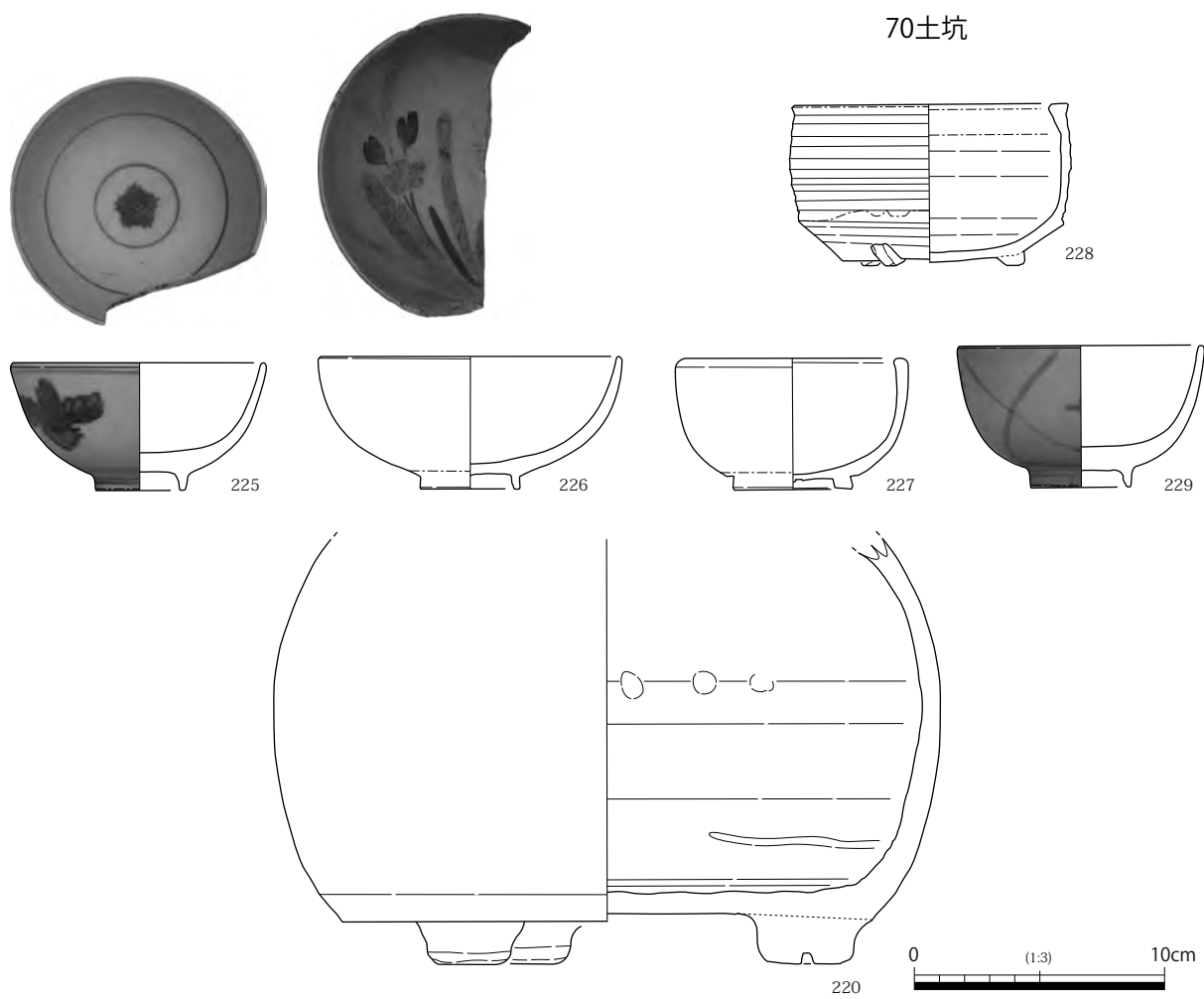


图57 50土坑 出土遺物 (2) · 70土坑 出土遺物

端反形である。218は染付中鉢である。口縁部が輪花状で、蛇の目高台である。219は丹波焼角徳利である。広島にある鞆の保命酒徳利の影響を受けたものと考えられる。220は土師質土器火鉢で、脚を3ヶ所もつものである。221は堺播鉢である。大型のもので、見込みにいわゆるウールマーク状の播目が認められる。注ぎ口の内部に、扇形の枠内に「極」の刻印がみられる。222はミニチュアの土製橋である。型押し成形によりつくられており、箱庭などで使われたものと考えられる。同様の遺物は、東京大学医学部附属病院地点の調査で出土しており、18世紀末～19世紀と考えられる。223・224は瀬戸焼大型香炉で、緑釉が施釉されている。獅子頭が付されており、同様の遺物は29土坑からも出土している。19世紀と考えられる。

これ以外に、平瓦や丸瓦を中心とした瓦類も多く出土しているが、その中に堺の瓦仲間の刻印が押された瓦がみられる。440は平瓦の側面にみられ、全体の「堺谷傳兵衛」が読める。441～443は軒丸瓦にみられ、いずれも「堺谷傳兵衛」が読める。先の嶋谷氏の研究成果によると、「堺谷傳兵衛」は谷傳兵衛・瓦屋傳兵衛に該当することになり、19世紀初頭の時期にあてはまる（表6）。444は、刻印として○印が井戸枠瓦の側面に押されているものである。

18世紀代の遺物も多くみられるが、この瓦仲間の刻印により、最終的には19世紀後半以降に洪水により全体が埋まったものと考えられる。

70土坑（図52・53・55・57、図版15）

C区ではほぼ全面にわたって、整地によって遺物包含層が削られている部分が多かったが、50土坑の北側部分で15cm程度の厚さで残存しており、これを除去した面で70土坑が検出され、50土坑により南側を切られていることが判明した。南側が50土坑に切られているほか、北側端部は54土坑・68井戸に切られており、52土坑・53土坑も重複している。70土坑の上には包含層が残存しており、その上面で52土坑・53土坑・54土坑が検出されており、包含層除去面から70土坑が掘られている状況である。包含層については、後述する。

周囲を削平されていることから、形状ははっきりしないが、南北方向に長い楕円形を呈しているものと考えられる。周囲の掘削面の深さから判断して、南北方向約8m、東西方向約5mの規模と推定される。埋土は5層に分かれており、最下層には黒色粘土が堆積している。下層に粘土が多く、炭化物も多く含まれていることから、水溜めのような施設と考えられる。50土坑のような、木杭による土留め施設などは検出されていない。50土坑に先行するもので、最初の水溜め施設であった可能性が考えられる。上層には細砂が堆積しており、洪水により埋まったものであることから、廃絶後に掘削し直して50土坑を設置したのと考えられることができる。

遺物量は少ないが、肥前磁器染付碗・皿、青磁碗、陶器碗・急須・甕・香炉、土師質土器火鉢・灯明皿、土製品などが出土した。225は染付碗である。いわゆるくらわんか茶碗で、見込みには、二重圏線の中、コンニャク印版による五弁花が付せられている。外面には、コンニャク印版による鬼蔦が付されている。18世紀後半と考えられる。226は瀬戸美濃灰釉陶器碗で、ほぼ全面に貫入がみられ、色絵により内面に草花文が描かれている。18世紀代と考えられる。227は青磁碗である。228は陶器香炉である。229は染付碗である。いわゆるくらわんか茶碗で、18世紀後半と考えられる。

18世紀代の遺物がみられ、19世紀以前には廃絶したものと考えられる。

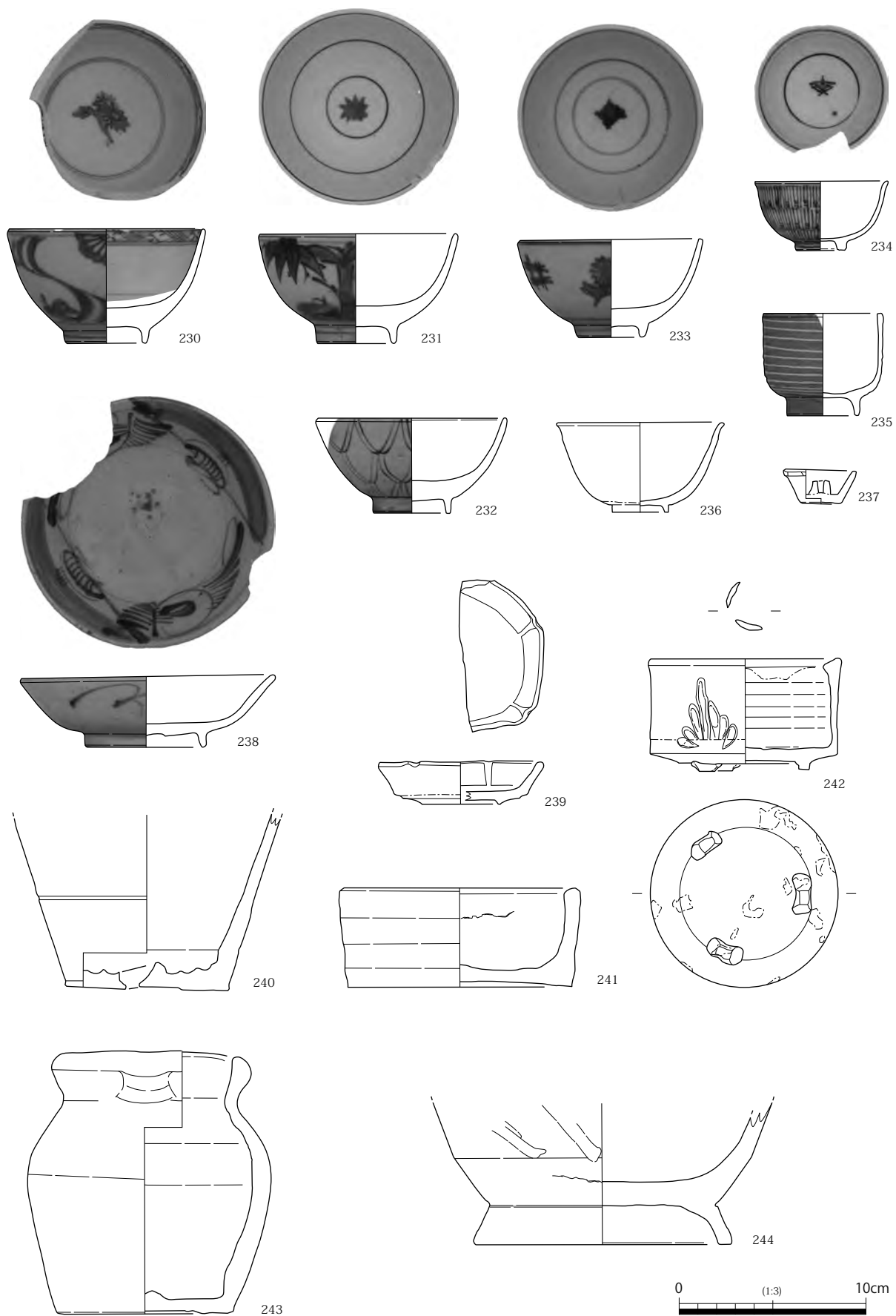


图58 6 i 区 盛土·整地层 出土遗物

6 i 区盛土・整地層の遺物（図58・80、図版25）

50土坑の位置する6 i 区で、遺構埋土と盛土・整地層の区別がはっきりしない部分もあることから、遺構検出面より上層からの出土遺物であるが、ここでまとめて扱うこととする。肥前磁器染付碗・皿・鉢・神酒德利・仏飯器、白磁皿、青磁鉢、陶器碗・香炉・壺・皿・蓋・德利・急須・鍋・植木鉢、土師質土器火入れ・火鉢・灯明皿・乗燭、瓦類、土製ミニチュア品、銭貨、銅製品などが出土した。

230～233は、染付碗である。いわゆるくらわんか茶碗で、230・231・233の見込みには、二重圏線の中、コンニャク印版による鬼蔦が付せられている。232の外面には二重網目が描かれており、233の外面にはコンニャク印版による井桁文と鬼蔦が付されている。18世紀後半と考えられる。234は染付碗で、見込みには、圏線の中、コンニャク印版による鬼蔦が付せられている。235・236は陶器小碗である。235は半筒形で、イッチンにより横線が描かれている。236は端反形である。237は、小型の土師質土器乗燭である。238は染付皿で、外面に簡略化された唐草が描かれている。239は陶器皿で、輪花形である。240は無釉の陶器植木鉢で、底部に焼成前穿孔がある。241は土師質土器火入れである。242は陶器香炉で、脚を3ヶ所もつものである。243は陶器片口壺で、いわゆるお歯黒壺である。244は輪高台をもつ土師質土器火鉢である。

小型品も出土している。245は土製ミニチュア品で、石臼をかたどったものである。かなり精巧につくられており、播目も付けられている。246はミニチュアの土製指物で、先端部には日月が表裏に付されている。471・474は泥面子で、471は片喰、474は「い」字で型押しで成形されている。銭貨も出土しており、214は「寛永通宝」である。

b. 4 j・4 i・4 h 区

調査区東端部にあたる部分であるが、南側（4 j 区）で検出された木組みにより囲われた大型の水溜め（29土坑）が中心となる。ほぼこの区画の大部分を占めており、北側の区画を含めても他に遺構は検出されていない。

29土坑（図52・59、図版16）

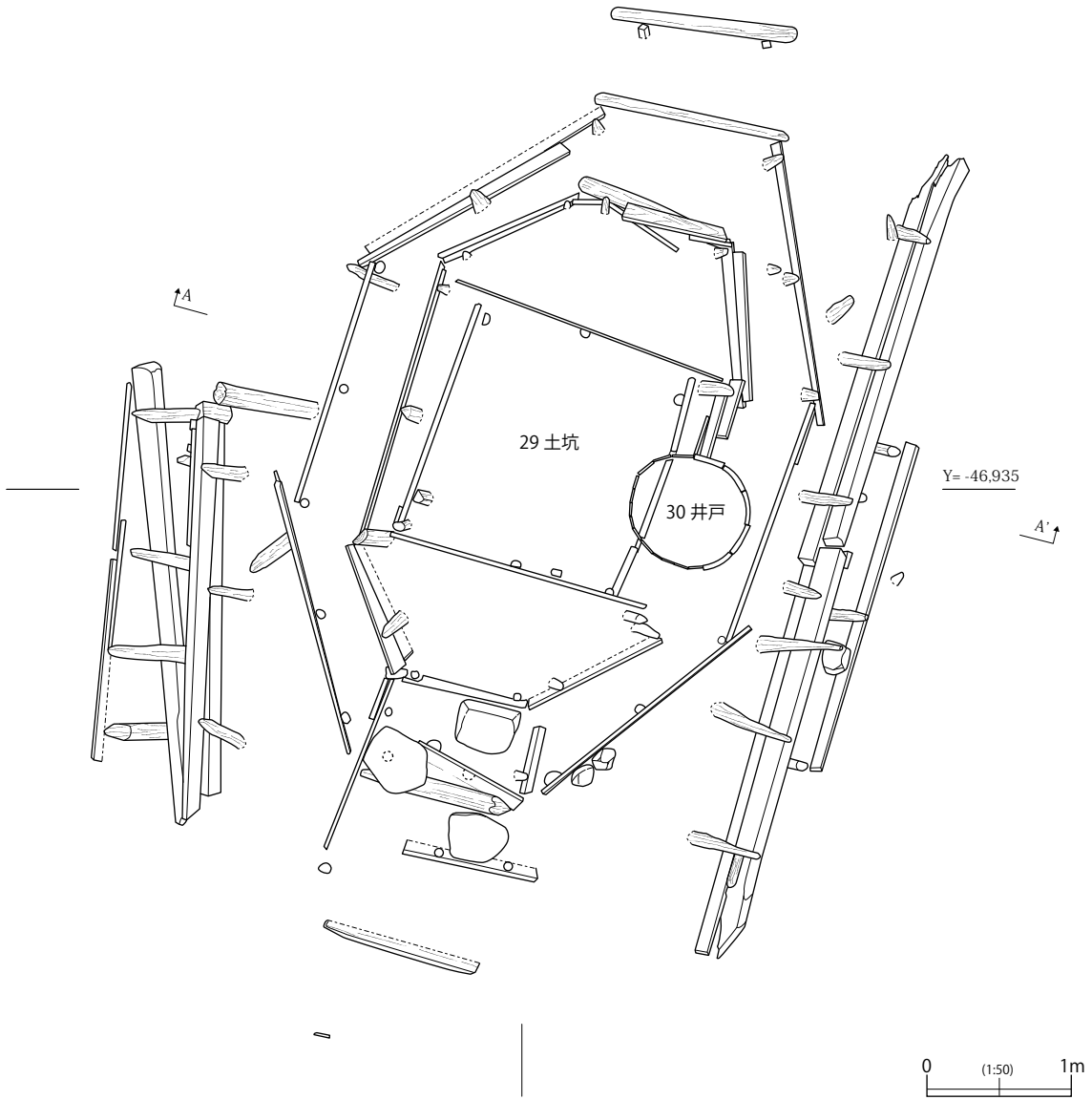
盛土・整地層除去面で検出された。ただ、遺構埋土と整地層の区別がむずかしく、遺構検出面より上部から多くの遺物が出土する状況であった。そのため、調査時に検出面を特定することができず、周囲に巡らされている板材の検出によって、遺構の形状を特定することができたほどである。50土坑と同様に、黄褐色細砂層を掘り込んでつくられたものである。なお、中央部南寄りで、上部に井戸椀瓦を巡らす30井戸が重複して検出されており、板材の一部を破壊してつくられている。

基本的な構造としては、木杭を打ち込んで横板を置くことにより土留めをして、周囲を囲んでいるものである。20木組と基本的な構造は変わらないが、比較するとかなり大掛かりなもので、板材による囲み方も丁寧なつくりとなっている。

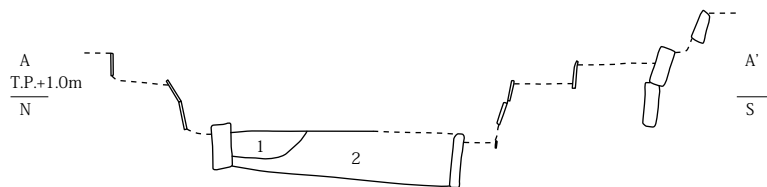
まず、外側にかなり大型の板材を二重あるいは三重に重ねて、北側と南側を区画している。北側と南側の区画は、検出面で約5 mの間隔である。検出面上面のレベルは、T.P.+1.5 mである。この区画の外側にあたる部分では、遺構は検出されていない。西側と東側では木杭や板材が検出されていないことから、四方を区画したものではない可能性が高い。板材は、かなり大規模な厚さ約10 cm、幅20～30 cm、長さ約3 mに及ぶものが複数枚使われており、ホゾ穴がみられるものもことから、住宅の柱材や梁



X = -156.092



A
T.P.+1.0m
N



1. 褐灰 10YR4/1 細砂混粗砂 黒 10YR2/1 粘土含む 径0.5cm程度の小礫含む
2. 黒 10YR2/1 粘土 リン分多く含む

図59 29土坑 平面・断面図

材を転用したものと考えられる。区画は、北側の東部は一部失われているものの、南側で約6m分が確認されていることから、両側でこの規模の区画がつけられていたものと考えられる。検出面からの深さから、現状で高さ約0.8m分が確認された区画といえるが、上部が失われていることも考えると、さらに高いものであった可能性がある。

この区画の内側は、木杭と板材で八角形に区画されている。八角形の区画は東西方向に長く、二重に組まれている。上面のレベルは、T.P.+1.2mである。外側の区画は、南北方向約3.3m、東西方向約5.5mを測る。木杭は内側に打ち込まれており、板材は外側に組まれている。外側からの土圧に耐えられる構造になっている。板材は一重で構成されており、厚さ約3cm、幅約20cm、長さ1.3~2.0mのものが区画の長さに合わせて使われている。外側の区画の2段目付近の高さで組まれており、その間にはにぶい黄橙色細砂が入れている。外側の黄褐色細砂が入れている可能性もある。これにより、八角形の区画の板材の上面と周囲の高さがそろえられている。さらに、この区画の西側と東側には、約0.5mの間隔で、並行して木杭に似た径5cm、長さ1.1~1.3mの円柱状の木材が、据えられた状況で検出された。これらも内側に木杭を打ち込んで、外側からの土圧に耐えられる構造となっている。

また、東側では、この区画部分に径約0.6~0.8mの板石が左右に交互に配置されており、階段状に区画の外側から内側に向かって降りられるようになっている。この途中にも南北方向に板材と木杭が配置されており、外側（東側）からの土圧に耐えられる構造になっていることから、この部分の補強をしていることがわかる。さらにこの部分では、南北両側にも板材が配置されており、南側の板材は一部失われているものの、北側の状況から同様に、外側（北側）からの土圧に耐えられる構造になっている。

八角形の内側の区画は、八角形の外側の区画と同じ形状で、東西方向に長くなっている。上面のレベルは、T.P.+1.1mである。南北方向約2.2m、東西方向約3.7mを測る。木杭は内側に打ち込まれており、板材は外側に組まれている。外側からの土圧に耐えられる構造になっている。板材は二重で構成されており、厚さ約3cm、幅約15cm、長さ1.0~2.0mのものが区画の長さに合わせて使われている。八角形の外側の区画の下面が、八角形の内側の区画の上面の高さに合うように組まれており、その間に褐灰色粗砂が入れている。これにより、八角形の内側区画の板材の上面とその周囲（八角形の外側区画との間）の高さがそろえられている。検出面から八角形の内側区画の底部までは、多くの遺物を含んでいるが、近代以降の廃絶時に人為的に埋められたもので、廃材なども多く含まれている。

中心部では、八角形の内側区画の長辺に合わせたかたちで、内部に方形の区画がつけられている。上面のレベルは、T.P.+0.8mである。ほぼ正方形を呈しており、一辺1.6mを測る。木杭は内側に打ち込まれており、板材は外側に組まれている。外側からの土圧に耐えられる構造になっている。板材は一重で構成されており、厚さ7~12cm、幅30~35cm、長さ1.7~2.0mのものが区画の長さに合わせて使われている。八角形の内側の区画の下面が、方形区画の上面の高さに合うように組まれており、その間には黒褐色シルト混じり粗砂が堆積している。方形区画の底部は平坦で、ほぼ区画内全体に黒色粘土が堆積している。燐分が含まれており、青色の粒子状となったものがみられる。上層には、褐灰色細砂混じり粗砂が堆積しており、径5mm程度の小礫を含んでいる。底部のレベルは、T.P.+0.5mである。検出面より、約1.2mの深さである。

なお、29土坑機能時の植生などを探るため、50土坑と同様に、最下層である黒色粘土をサンプルとして採取し、花粉・珪藻分析をおこなった。詳細な分析結果は、第6章に記載しているが、珪藻分析により、湿地状態ではなく、水の流れがあったものとの結果が出た。検出された部分からは、導水あるい

は排水をおこなっているような施設はみつかっておらず、周囲からも溝などは検出されていない。調査時には、50土坑と同様に水溜め施設と考えていたが、珪藻分析の結果から導き出された、導水施設の可能性を考えることは無理ではないといえる。29土坑の上部が後の整地などにより削平されていることが考えられ、これにより水路などの溝が失われた可能性はある。また、木組が丁寧に組まれていることや、階段状の板石を並べて、内部まで入れるような施設であることなどから、50土坑とは異なり、単なる水溜めというよりは、水の流れる池状の施設であったことも考えられる。また、花粉分析により、50土坑が埋まった後に29土坑が掘削されたことが想定されている。

29土坑の遺物（図60・61・79・80、図版26）

最下層の黒色粘土層からはあまり遺物が出土していないため、機能時の時期をあらわすものは少ない。八角形の内側区画の底部まで人為的に埋められている土層からは、多くの遺物がみられる。近代以降に埋められたものであるため、廃材が含まれており、混入品であるが、肥前磁器染付碗・皿・鉢・蓋・徳利・神酒徳利、白磁碗、陶器碗・皿・徳利・急須・土鍋・蓋・仏飯器・小瓶・灯明皿・台付灯明皿・植木鉢・小型播鉢・大甕、土師質土器焜炉・火鉢、堺播鉢、瓦類、銭貨、土製ミニチュア品、金属製品、木製品、土錘、砥石などが出土した。

247・248は瀬戸美濃染付中碗で、端反形である。外面に源氏香文が付されており、19世紀中頃と考えられる。249は染付そば猪口で、外面底部付近に蓮弁文が配置されている。蛇の目高台で、18世紀後半～19世紀と考えられる。250は陶器小杯で、半筒形である。251は染付神酒徳利で、外面に蛸唐草文が描かれている。19世紀と考えられる。252は染付鉢で、外面に「福」字が帯状に配置されているほか、見込みに圏線の中、大きく「福」字が描かれている。253・254は肥前白磁紅皿で、253は外面に押し型し陽刻で蛸唐草文が付されている。255は染付散り蓮華で、型押し成形のものである。256は陶器土鍋蓋で、外面に梅文が描かれている。257は施釉陶器蓋であるが、大型の宝珠つまみをもつ。258は陶器瓶で、肩部に文様が描かれている。259は陶器台付灯明皿である。260は小型の土師質土器灯明皿で、内面に透明釉が施される。261は陶器植木鉢である。262は施釉陶器急須蓋である。263は陶器皿で高台をもつが、灯明皿と考えられる。264は施釉陶器小壺蓋で、19世紀前半と考えられる。

265は施釉陶器土瓶で、外面に縦方向の沈線が付されている。266は土師質土器火入れ、口がすぼまっている。267は陶器播鉢で、底部に胎土目が5ヶ所確認されている。268は瀬戸焼緑釉大型香炉であるが、底部に穿孔することにより、植木鉢に転用したものである。外面に龍の浮文が配置されているほか、獅子頭も付されている。50土坑からも同形の緑釉陶器の破片が出土しているが、同一個体ではなかった。269は、用途不明の陶器である。輪積み成形でつくられており、外面に木の幹に似たくぼみが連続して配置されている。獣の脚もみられるが、種類を特定できない。東京大学医学部附属病院地点の調査で、類似したものが出土しており、火入れの類とされているが、同形ではないため、はっきりしない。

これ以外に、瓦類も多く出土しているが、その中に堺の瓦仲間の刻印が押された瓦がみられる。445は軒平瓦の側面にみられ、「堺下源」と読める。嶋谷氏の研究成果により、堺の瓦屋仲間の実態の一端が解明されており、それによると「堺下源」は下田源兵衛に該当することになり、19世紀前半の時期にあてはまる（表6）。

金属製品も出土している。270は煙管の吸口部分、271は煙管の雁首部分である。銅製品であるが、一本の煙管を構成していたものかどうかは不明である。272は鉄製の小柄と考えられるが、小刀や剃刀

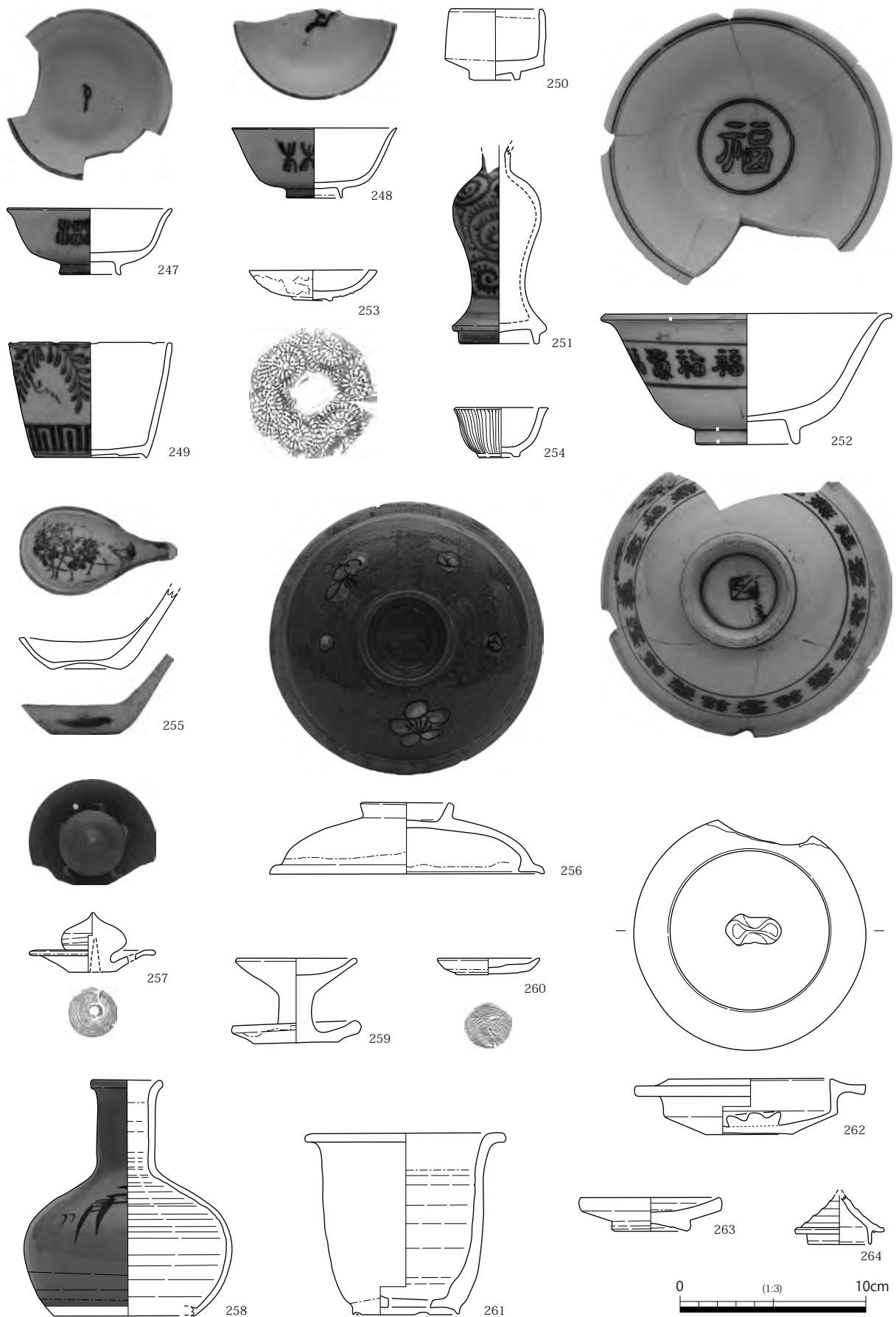


图60 29土坑 出土遗物 (1)

の可能性もある。273は鉄製の錠前鍵である。さらに、小型の玩具もまとめて出土している。274～277・279～284は泥面子である。274はきつね、275は蒸気船、276・277は三つ巴、279は祇園守、280は片喰、281は逆の「い」字、282は折れ柏、283・284は亀甲の文様が型押し成型でつくられている。これらは、一般的に家紋などをあらわしているものであるが、特定の歌舞伎役者をさしている場合もある。当時の人気者に関する一種のグッズであった可能性もある。285～288・292～295は、粘土に型押ししたものである。289は土製の牛や馬の臀部である。290・296は厨房道具のミニチュア品である。290は上部に緑釉がかかる陶器で、羽釜である。296は軟質陶器のこね鉢で、内面に透明釉がかけられている。291は白磁人形で、着物を着た男性である。中空で、底部に穴があげられている。また、銭貨も出土しており、458・459は「寛永通宝」である。

18世紀代の遺物も多くみられるが、瓦仲間の刻印により、19世紀前半頃につくられ、近代まで存続したものと考えられる。

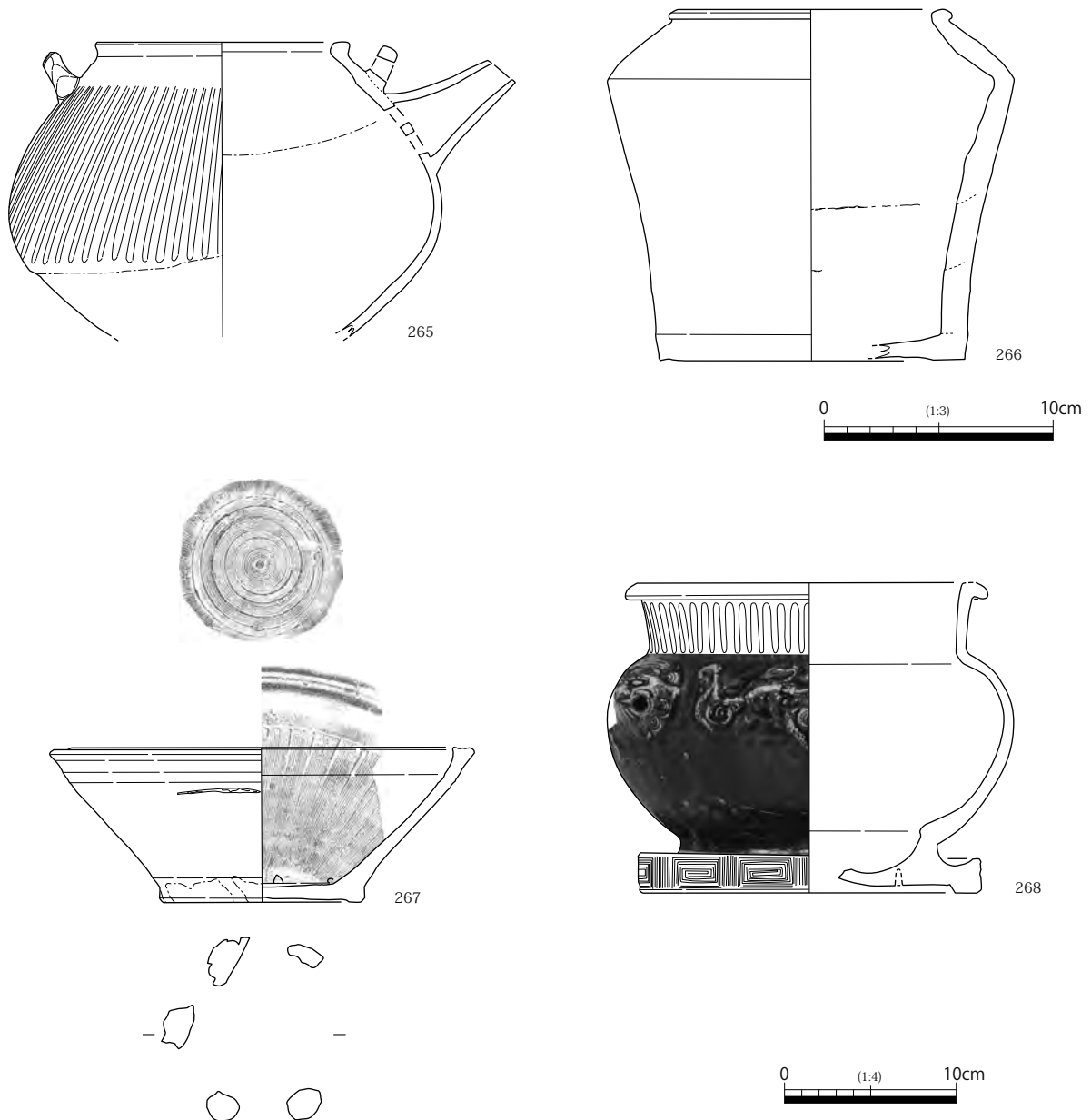


図61 29土坑 出土遺物（2）

4 j 区盛土・整地層の遺物（図62～65・79・80、図版27・28）

29土坑の位置する4 j 区で、遺構埋土と盛土・整地層の区別がはっきりしない部分もあることから、遺構検出面より上層からの出土遺物であるが、ここで扱うこととする。最も遺物の出土量が多い区画で、肥前磁器染付碗・皿・鉢・蓋・段重・徳利、青磁皿、白磁紅皿、陶器碗・香炉・壺・皿・蓋・仏飯器・仏花瓶・台付灯明皿・植木鉢、陶質焼台、瓦質土器火鉢・焜炉、土師質土器火入れ・火鉢・火消し壺蓋・焜炉・七厘、瓦類、土製ミニチュア品、陶磁器製ミニチュア品、銭貨、金属製品、木製品などが出土した。

297は染付碗で、端反形である。298は染付鉢で、内面に草花が描かれている。299は染付碗で、赤絵により外面にだるまなどが描かれている。300は染付段重で、外面に蛸唐草が配置されている。301は染付蓋である。302・303は染付皿で、内面にプリントによる文様が描かれている。303は口縁部が輪花状で、口錆がみられ、内面はまわりに花と蝶が、見込みには落款散しが配置されている。304は染付蓋で、外面に桃と漢詩が配置されており、高台内には二重角渦福が付されている。305・306は染付小碗で、外面は銅版プリントにより文様が描かれている。306は落款散しである。307は染付碗で、外面に格子文が描かれている。丸形湯のみ碗で、19世紀前半と考えられる。308は陶器小壺で、底部に糸切り痕が残る。309は染付蓋である。310・311は陶器小瓶である。312は小型の肥前白磁紅皿である。313は陶器小壺である。314は淡路焼黄釉皿である。19世紀中頃と考えられる。淡路国の陶器で、文政年間(1818～1830)に同国三原郡稲田村（現在の南あわじ市北阿万伊賀野）の賀集珉平が創業したものである。天保13(1842)年には、藩主蜂須賀氏が官窯を築き、珉平に統轄させていた。この頃、初期に製作した黄彩陶が遠近に売っていたという。その後、タイルの製造をおこなうようになり、淡陶社・淡陶株式会社（現在のダントーホールディングス株式会社）はこの後身である。

315は染付大皿である。口縁部が輪花状で、口錆がみられる。内面に、霊獣である麒麟を主体とする細かい文様が描かれている。316は萩焼びら掛け碗で、19世紀中頃と考えられる。317は陶器蓋で、白地に鉄絵により文様が描かれている。318は京焼土鍋蓋で、表面に鉄釉が円形に施され、白化粧土で草花が描かれている。319は行平鍋蓋で、白化粧土で幾何学文が描かれている。320は陶器蓋である。

321は瀬戸焼仏花瓶で、鉄釉が全面にかかっている。322は土師質土器灯明皿で、内面に透明釉が施される。323は陶器皿で高台をもつが、灯明皿と考えられる。324は灰釉陶器台付灯明皿である。325は土師質土器受付き灯明皿で、内面に透明釉が施される。326は瀬戸焼仏飯器で、鉄釉が全面にかかっており、底部に糸切り痕が残る。327は土師質土器で、ミニチュアの焙烙である。328は、陶器小壺である。329は陶器小型播鉢である。330は陶器壺であるが、建水の可能性もある。外面に手描きの文様が描かれている。331は鉄釉がかかった壺で、外面に獅子頭が付せられている。332は土師質土器火鉢である。333は瓦質土器焜炉である。334は堺播鉢で、見込みにいわゆるウールマーク状の播目が認められる。335は土師質七厘で、貼り合わせて成形されており、表面はミガキ調整が施されている。

340は鉄製の庖丁の刃である。柄部分は失われていた。341・342は、丹波焼のいわゆる貧乏徳利である。鉄釉の一種である栗皮釉や黒釉などが施されており、表面に白泥を用いて酒屋の屋号を書いたものである。342には「住吉」がみえる。これ以外に、瓦類も多く出土しているが、その中に堺の瓦仲間の刻印が押された瓦がみられる。451は軒平瓦の側面にみられ、「堺北九」と読める。嶋谷氏の研究成果により、堺の瓦屋仲間の実態の一端が解明されており、それによると「堺北九」は瓦屋九郎兵衛に該当することになり、18世紀末～19世紀前半の時期にあてはまる（表6）。

さらに、小型の玩具もまとまって出土している。466～469・472・473は泥面子である。466は亀甲、

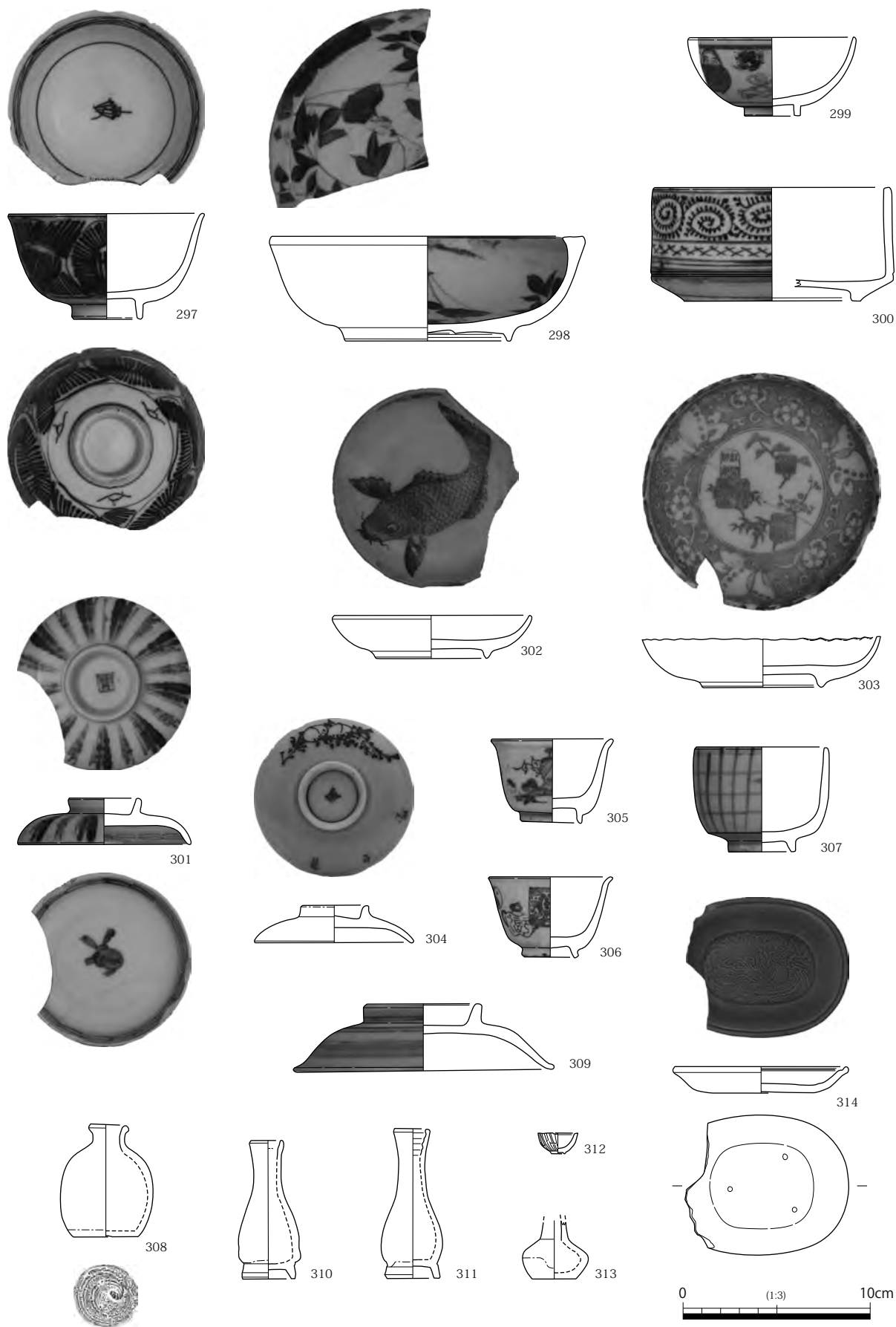


图62 4j区 盛土·整地层 出土遗物(1)

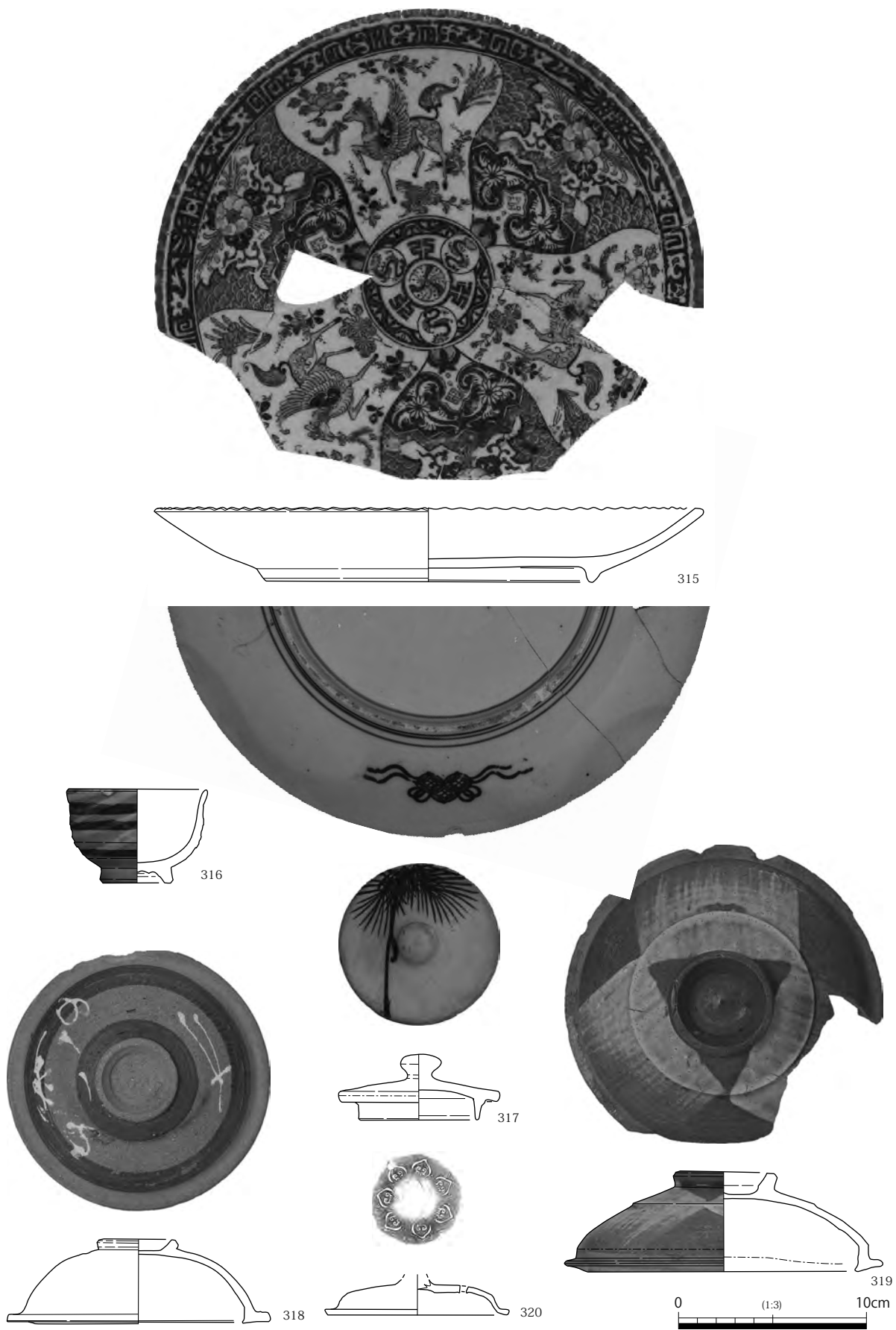


图63 4j区 盛土·整地層 出土遺物(2)

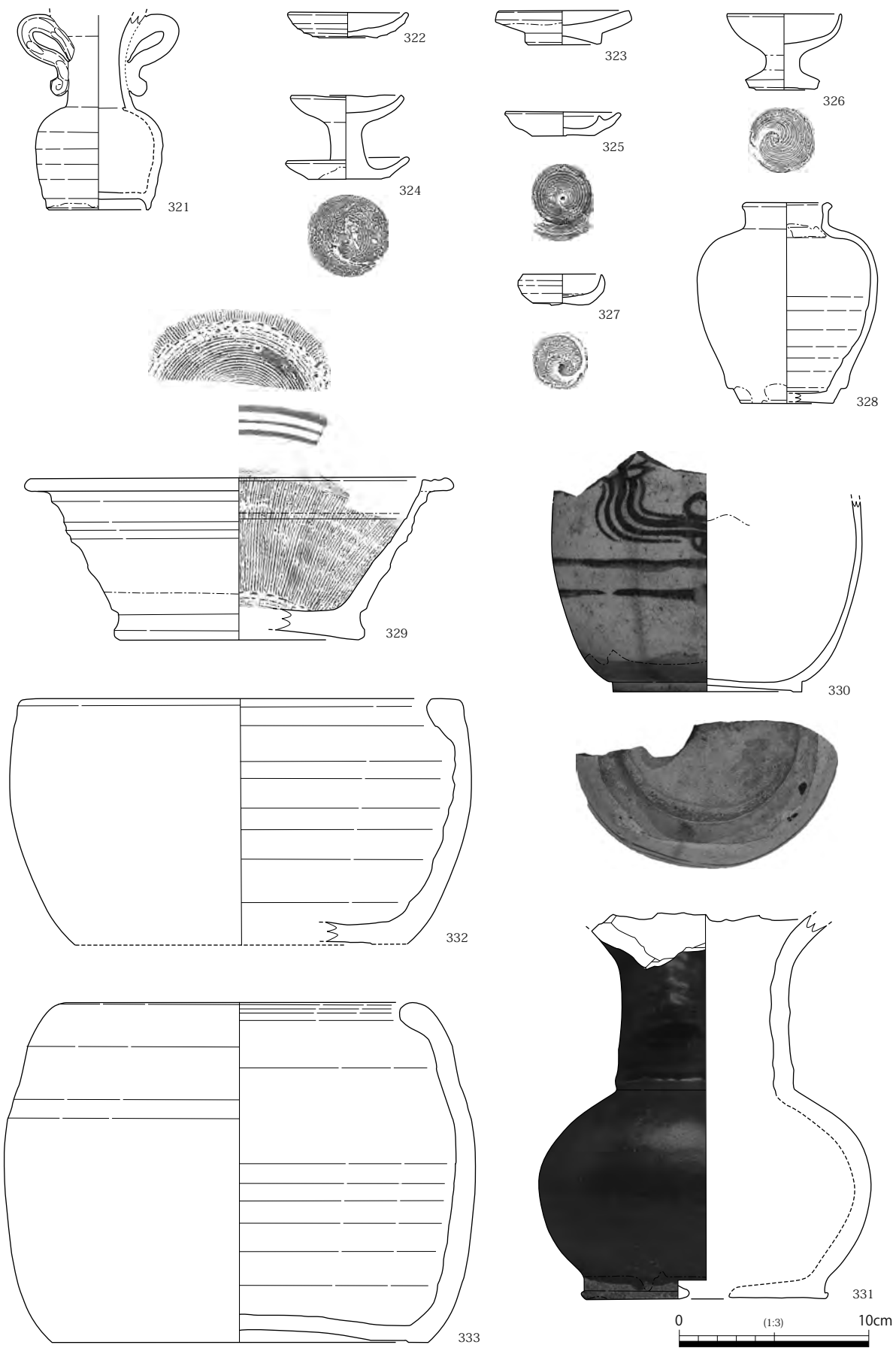
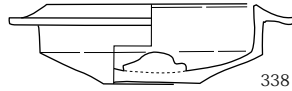
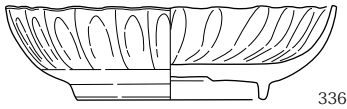
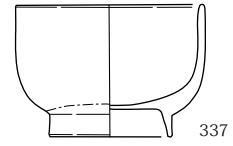
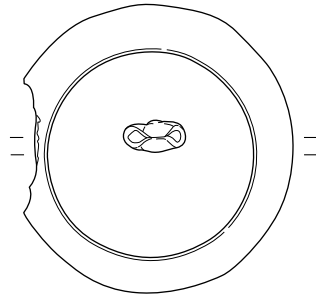
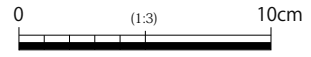


图64 4j区 盛土·整地层 出土遗物(3)



4 i 区



4 j 区

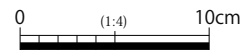
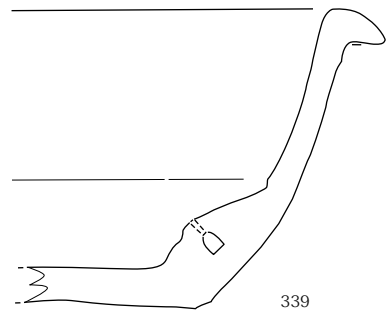
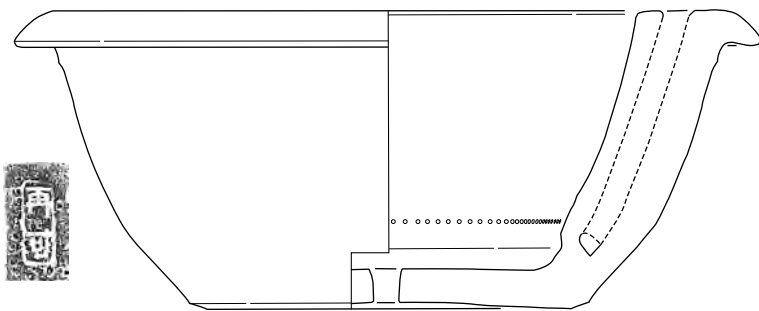
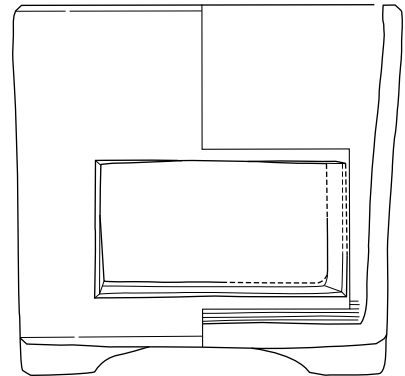
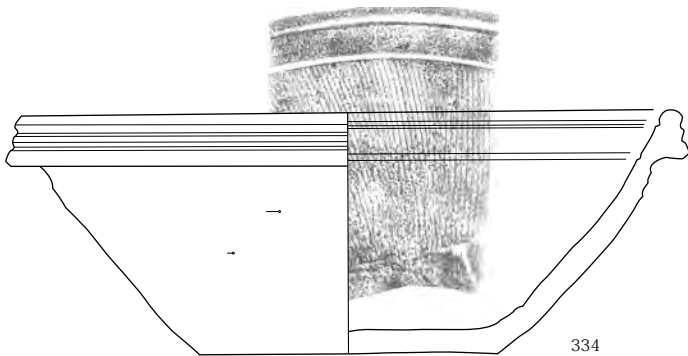
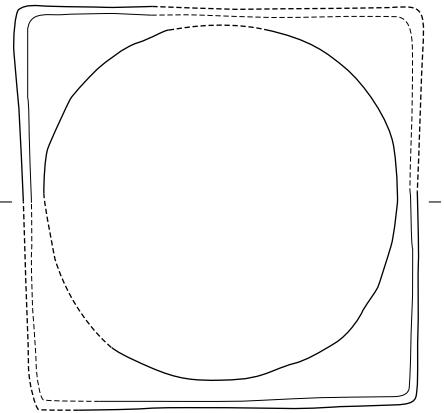


图65 4 j 区 盛土・整地層 出土遺物 (4)、4 i 区 盛土・整地層 出土遺物

467は折れ柏、468・469・472は祇園守、473は子どもの顔が型押し成型でつくられている。29土坑出土の泥面子と同様に、一般的に家紋などをあらわしているものであるが、特定の歌舞伎役者をさしている場合もある。当時の人気者に関する一種のグッズであった可能性もある。470は、貝殻を粘土に型押ししたものである。

なお、4 j 区盛土・整地層および29土坑埋土から、高温によりガラス化した溶着物が付着した、陶器甕や窯壁状の破片が多く検出された。遺構は検出されていないが、この部分のみでまとまって出土することから、この付近で高温を伴う工房などが営まれていた可能性が高い。ガラス化がみられることから、ガラス工房とも考えられるが、高温を伴う工房として、金属加工の工房あるいは鍛冶場などもありうるものといえる。ただ、これらの破片と比較すると、ふいごの羽口などはあまり出土しているとはいえず、はっきりしない。道具類はまったく検出されていない。

18世紀代にさかのぼる遺物も多くみられるが、19世紀代のものが大半を占めることから、29土坑が19世紀前半頃につくられ、近代まで存続したものを実証しているものと考えられる。

30井戸（図52・59、図版16）

盛土・整地層掘削時に上面の井戸椀瓦が露出しており、近年まで使用されていたことがわかる。29土坑の中央部南寄りに位置しており、八角形の内側の区画と内部の方形区画の南辺部分で重複してつくられており、板材の一部を破壊して井戸を設置している。八角形の内側の区画の板材は取り払われており、方形区画の板材は、ちょうど井戸椀にかかる部分のみ板材に切れ目を入れてまで、強引に設置したという印象をうける。29土坑の廃絶後、あまり時間が経っていない時期につくられたものと考えられるが、板材などを撤去しておらず、あまり計画的とはいえない状況である。

検出面で、径約0.9mを測る。29土坑の廃絶後につくられたものであるが、底部は29土坑の底部と同じレベルであり、井戸としての機能を果たしていたのか疑問が残る。内部構造としては、上部に井戸椀瓦が2段以上巡っており、その下に長さ約0.6mの桶が1段据えられたものである。底部は29土坑の底とほぼ同じで、T.P.+0.5mである。底部には、径5 cm程度の礫が多く敷かれた状況で検出された。29土坑が流水状態であったとの分析結果から、廃絶後もなんらかの流水があり、それを利用するための井戸として設置された可能性も考えられる。

井戸内は近代以降に、人為的に一気に埋められた状況であることから、江戸時代の遺物はほとんど検出されず、つくられた時期を明確に示すものは出土していない。

4 i 区盛土・整地層の遺物（図65）

29土坑の位置する4 j 区の北側に隣接する区画であることから、ここで扱うこととする。肥前磁器染付碗・皿、青磁皿、陶器碗・香炉・壺・皿・蓋・植木鉢、土師質土器火入れ・火鉢、瓦類、土製品、銭貨などが出土した。

336は青磁菊皿である。337は陶器小碗である。338は施釉陶器急須蓋である。339は陶器植木鉢で、底部から水が内部に浸透するように小さな孔が狭い間隔で多くあけられており、均等に水分が行き渡るような工夫がみられる。これと同形の植木鉢の破片は他にも出土しているが、同一個体ではないことから、複数個体存在したのものと考えられる。

4 h 区盛土・整地層の遺物（図66）

4 i 区の北側の区画で、遺構は検出されておらず、遺物量は少ないが、ここで扱うこととする。344の青磁香炉や、345の備前焼大甕が出土した。345の大甕は、最終的には便所甕として使用されていたものである。肩部に「油（甕）？」と字が刻まれていることから、本来は油を入れるためにつくられたものといえる。

c. 6 h 区

紀州街道に沿って調査区西半部に集中する、土坑を主体とする遺構群のうち、北側に位置する中型から小型の土坑が中心となるものである。その中でも、やや大型の54土坑およびその南側に位置する小型の52・53土坑が中心となっており、遺物量が多い。52・53土坑は6 h 区の南端部に位置しており、

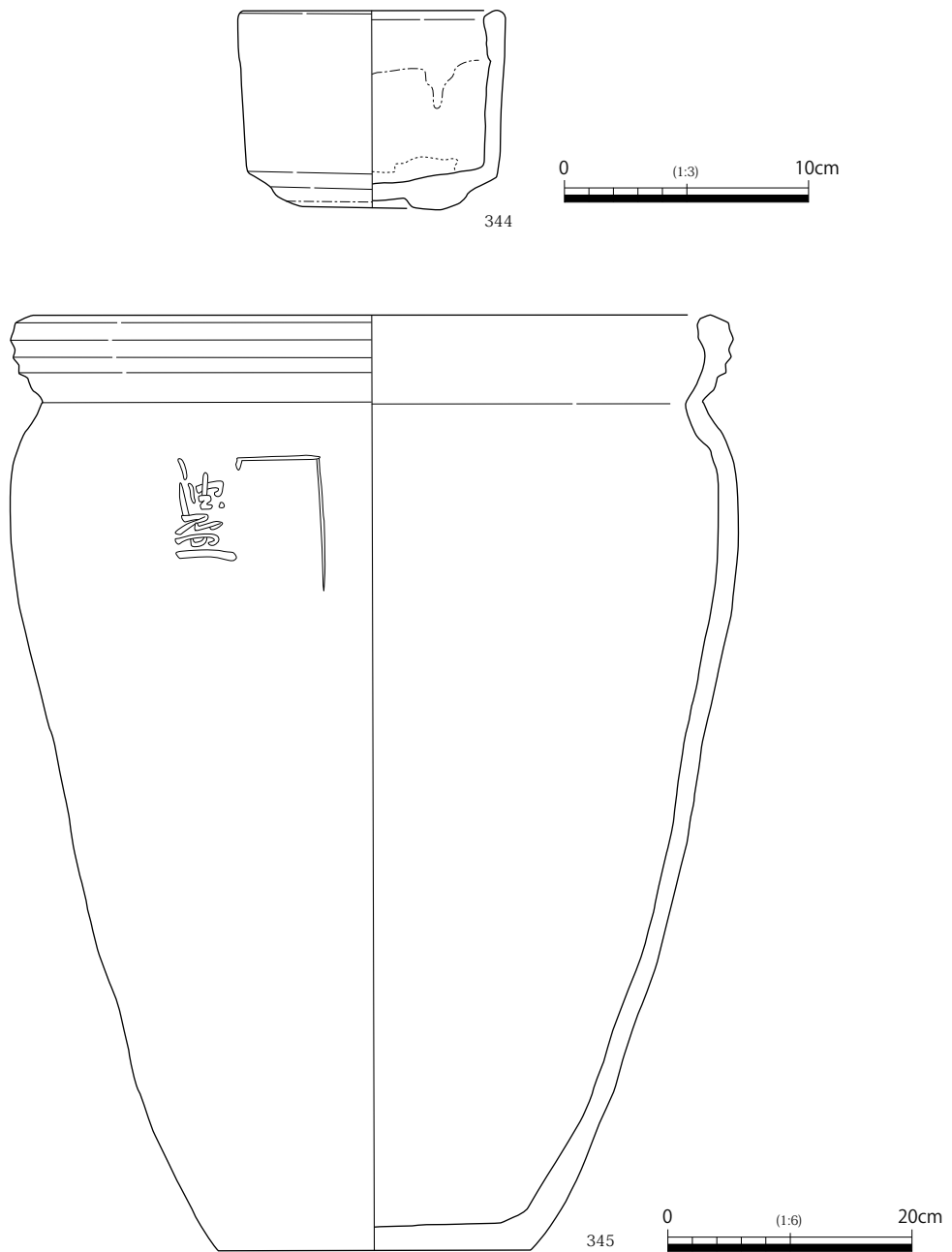


図66 4 h 区 盛土・整地層 出土遺物

隣接している。いずれも、盛土・整地層の掘削中に検出されたもので、遺物が多く含まれていた。北側には54土坑が隣接しており、この3基の土坑を中心とした部分から特に遺物が密集していることから、東側の4 j 区と対をなす状況である。

52土坑 (図52・67~69、図版17)

盛土・整地層除去面で検出された。ただ、遺構埋土と整地層の区別がむずかしく、遺構検出面より上部から多くの遺物が出土する状況であった。平面形は南北方向に長い楕円形を呈しており、長径約1.3m、短径約0.8m、深さ約0.35mを測る、小型の土坑である。埋土は暗赤灰色シルト混じり粗砂であり、炭化物を多く含む。

小型の土坑であるが、多くの遺物がみられる。焼けた遺物が多くみられることから、廃絶後に廃棄物をまとめて焼いて埋めたもので、土坑が機能していた時期をそのままあらわしているとはいえない。肥前磁器染付碗・皿・鉢・小瓶・猪口・仏飯器、陶器碗・蓋・壺・急須・灯明皿・播鉢、土師質土器火鉢・火入れ・灯明皿、瓦類、土製品が出土した。

346は染付皿と考えられるが、蓋の可能性もある。347は染付碗で、18世紀末~19世紀前半と考えられる。348は染付猪口で、外面に蛸唐草が描かれている。349は萩焼びら掛け碗で、19世紀中頃と考

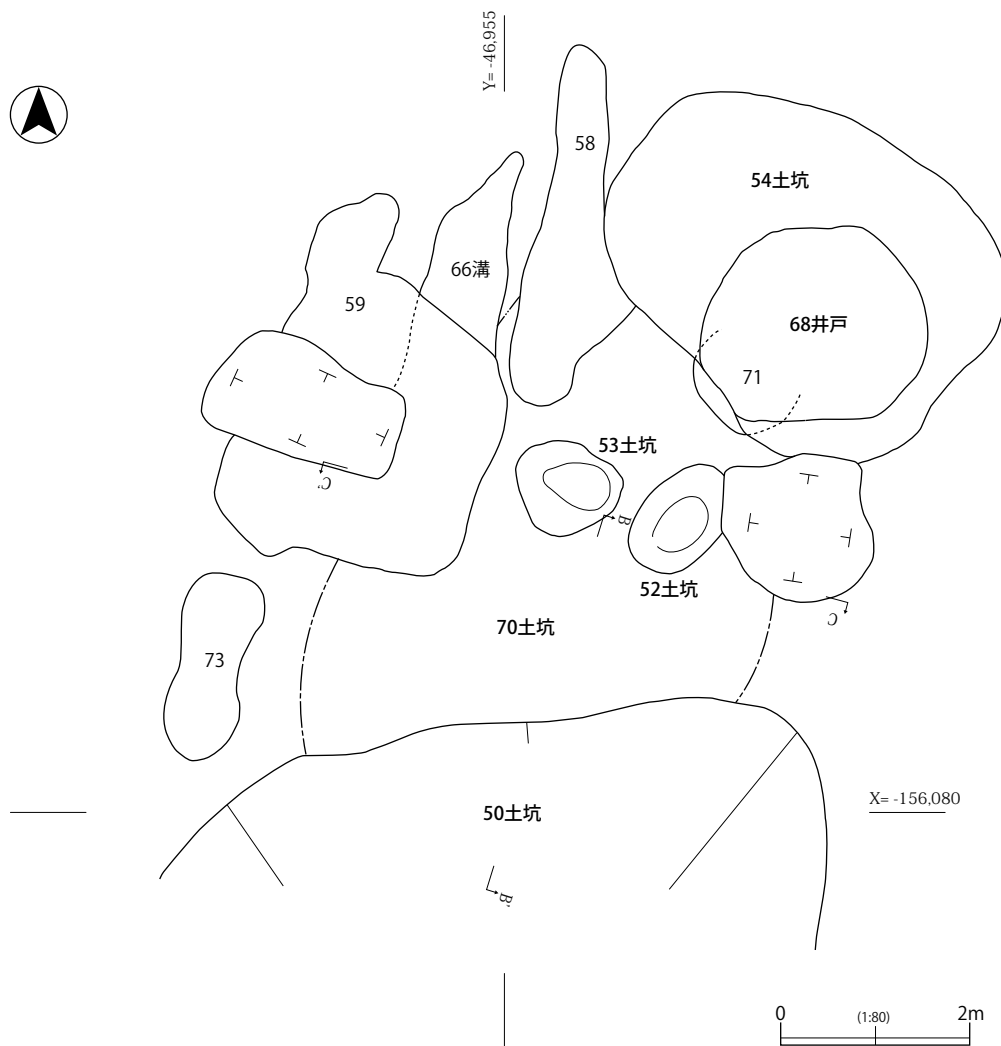


図67 6 h 区 平面図

えられる。350・351は陶器蓋で、350は白化粧土で表面に文様を描いている。

53土坑（図52・67～69、図版17）

盛土・整地層除去面で検出された。ただ、遺構埋土と整地層の区別がむづかしく、遺構検出面より上部から多くの遺物が出土する状況であった。52土坑と隣接しており、西側に位置する。平面形は東西方向に長い楕円形を呈しており、長径約1.1m、短径約0.9m、深さ約0.2mを測る、小型の土坑である。埋土は52土坑と同様で、暗赤灰色シルト混じり粗砂であり、炭化物を多く含む。

小型の土坑であるが、多くの遺物がみられる。焼けた遺物が多くみられることから、廃絶後に廃棄物をまとめて焼いて埋めたもので、土坑が機能していた時期をそのままあらわしているとはいえない。肥前磁器染付碗・皿・鉢・段重、陶器碗・蓋・壺・小瓶、土師質土器火鉢・灯明皿、瓦類、石製品が出土した。

352は陶器蓋で、白化粧土で表面に文様を描いている。353は染付段重で、外面に格子文が描かれている。354は陶器小碗である。355は染付鉢で、内外面に簡略化された唐草文が配置されている。373は輝緑凝灰岩製硯で、いわゆる赤間硯である。長門国赤間関（現在の山口県下関市）の特産品として著名であり、「赤間関」の文字を刻んだ製品が西日本一帯に広く流通していた。この硯も裏面に「赤間関英光」と刻まれている。

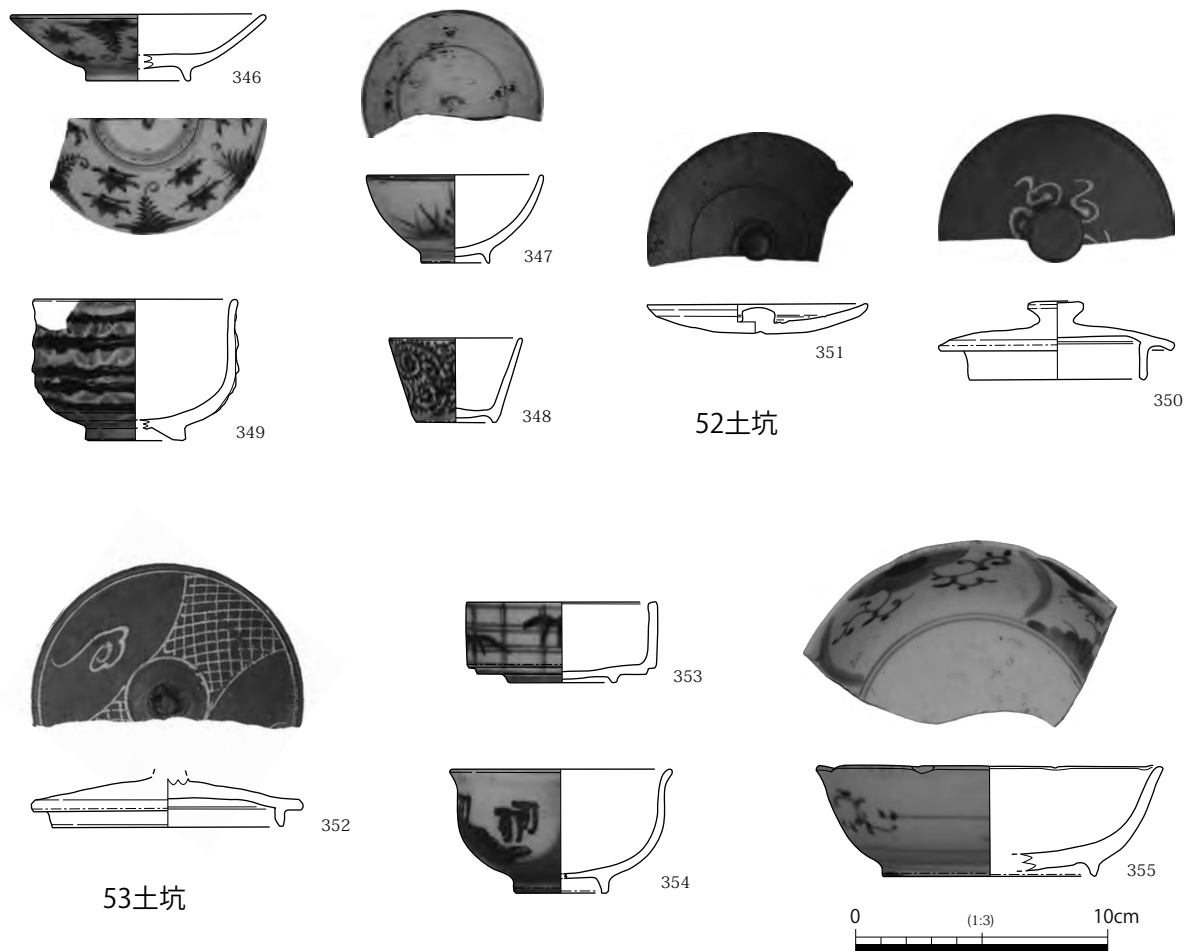


図68 52・53土坑 出土遺物

54土坑 (52・67・69、図版17)

盛土・整地層除去面で検出された。ただ、遺構埋土と整地層の区別がむずかしく、遺構検出面より上部から多くの遺物が出土する状況であった。52土坑・53土坑と隣接しており、北側に位置する。後世に掘り返されたこともあることから、埋土は一定していない。なお、試掘調査はちょうどこの土坑の中におさまった状況であった。規模も大きいことから、上部の埋土は52土坑・53土坑付近まで及んでおり、掘削時に区別がつかない状況であった。このため、明らかに52土坑・53土坑から出土した遺物以外は、52～54土坑出土遺物として取り上げている (図69)。これらの土坑が埋められた時期差はあまり認め

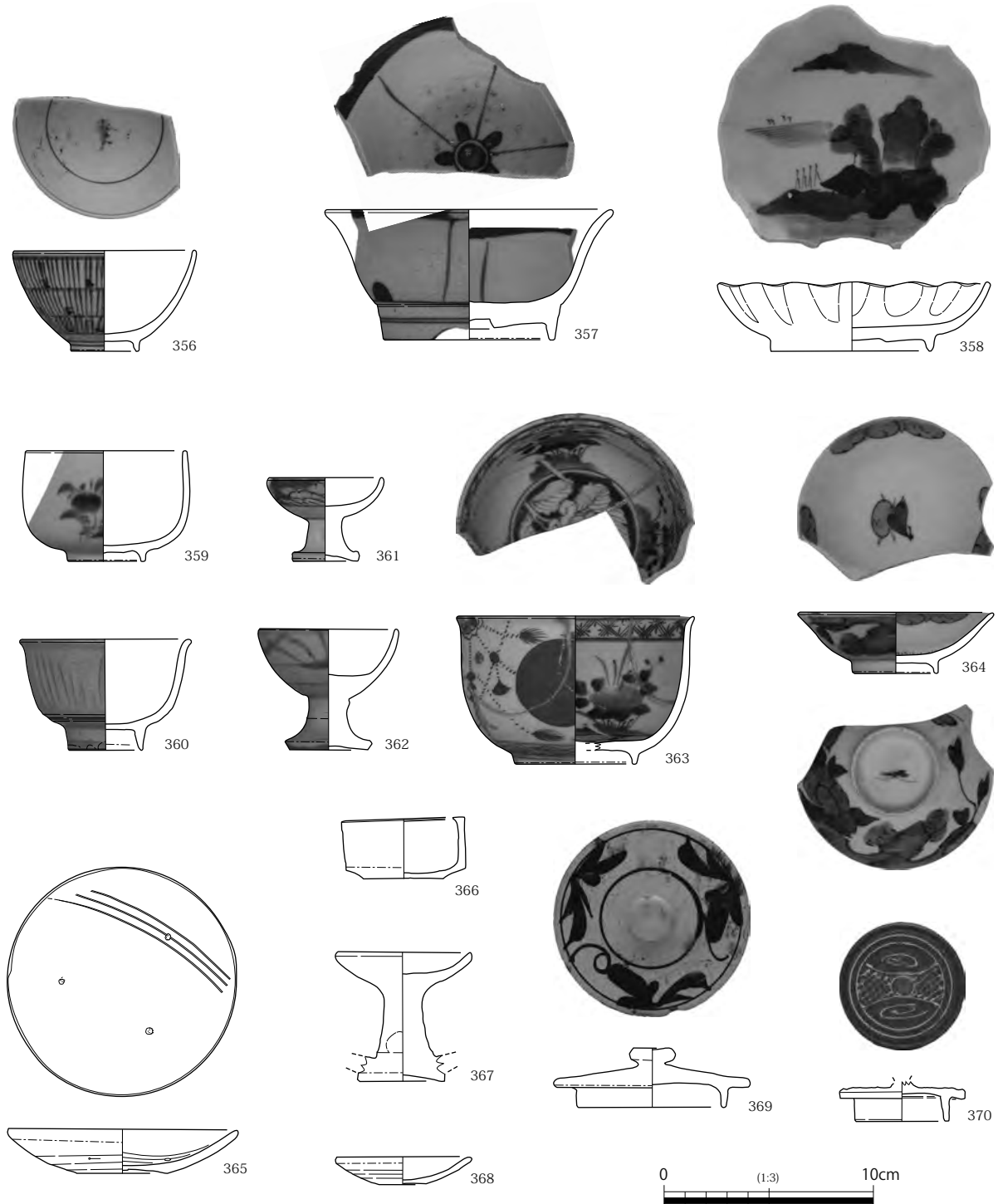


図69 52～54土坑 出土遺物

られないことから、混乱はないものとみている。底部から、上部に井戸椀瓦を巡らす68井戸が検出された。54土坑に先行するものである。

平面形は、検出面で東西方向に長い楕円形を呈しており、長径約4.2m、短径約3.0m、深さ約1.2mを測る。埋土は、52土坑・53土坑と同様の暗赤灰色シルト混じり粗砂が主体であり、炭化物を多く含む。食物残渣である、貝殻が特に多く出土した。内容は、巻貝であるツメタガイ・サザエ・バイ貝、二枚貝であるアワビ・赤貝・ハマグリ・アサリ・イタヤガイなどである。イタヤガイは、穿孔のみられるものがあり、さじなどに加工されていたものも含まれているものと考えられる。細かい数量は計測していないが、ツメタガイが非常に多い印象をうける。

廃絶後に廃棄物を焼いて埋めたもので、焼けた遺物が多くみられる。肥前磁器染付碗・皿・鉢・仏飯器、白磁皿、陶器碗・蓋・急須・灯明皿・台付灯明皿・植木鉢、堺播鉢、土師質土器火鉢・火入れ、瓦

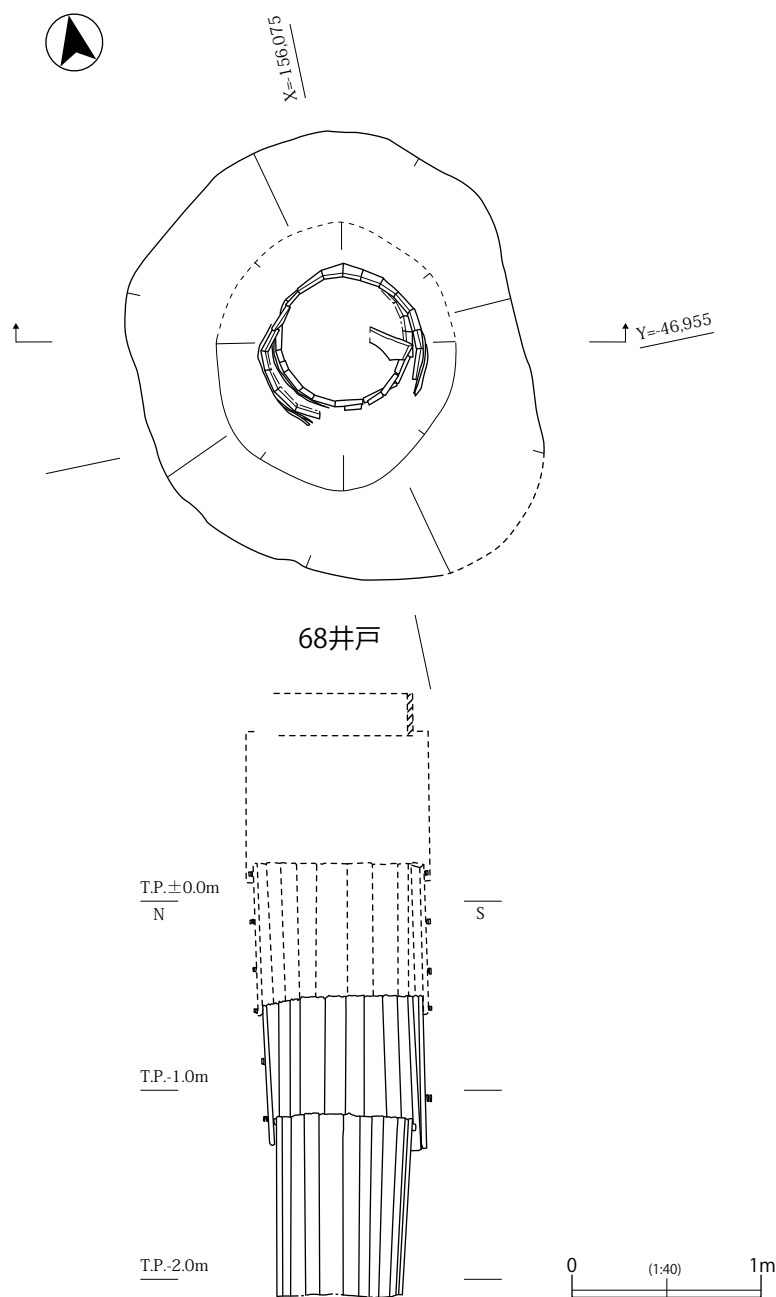


図70 68井戸 平面・断面図

類、銭貨、土製ミニチュアなどが出土した。

356は染付碗で、外面に歴文が描かれており、見込みには圏線の中に「寿」くずしが付されている。18世紀末～19世紀前半と考えられる。357は染付鉢で、広東形である。蛇の目高台で、見込みに五弁花が付されている。358は染付輪花皿で、内面に山水楼閣が描かれている。359は染付小丸碗で、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。360は瀬戸美濃小杯で、外面に放射状沈線が施されている。18世紀後半と考えられる。361・362は染付仏飯器で、いずれも蛇の目高台である。361は赤絵で文様が描かれている。362は18世紀代と考えられる。363は染付鉢で、赤絵で内外面に文様が描かれている。焼き継ぎが認められる。364は染付皿と考えられるが、蓋の可能性もある。365・368は灰釉陶器灯明皿である。366は小型の陶器合子である。367は灰釉陶器台付灯明皿である。369は陶器蓋で、白地鉄絵により草花文が描かれている。370は陶器蓋で、白化粧土で表面に文様を描いている。

小型の玩具も出土している。371は土製鳩笛である。372は陶器甕と蓋のセットで、ミニチュア品である。463～465は泥面子である。463は「柏戸」の字、464は「花」字、465は三つ巴が型押し成型でつくられている。「柏戸」は相撲力士をあらわしているものと考えられ、歌舞伎役者と共に、当時の子供たちの人気者であったことがわかる。また、銭貨も出土しており、462は「寛永通宝」である。瓦類も多く出土しているが、その中に堺の瓦仲間の刻印が押された瓦がみられる。446は井戸椀瓦の側面にみられ、「さかい濱瓦利」と読める。嶋谷氏の研究成果により、堺の瓦屋仲間の実態の一端が解明されており、それによると「さかい濱瓦利」は瓦屋利兵衛に該当することになり、18世紀末～19世紀前半の時期にあてはまる（表6）。

68井戸（図52・67・70・79、図版17）

54土坑の埋土を除去した際に、南東寄りの底部付近で検出された。検出面で径約0.8mを測る。上部に井戸椀瓦を巡らしたものであるが、54土坑の掘削などにより破壊されてあまり残っていない。井戸椀瓦が、本来何段積まれていたものかは不明である。井戸の周囲からは板材が多く検出されており、本来は井戸のまわりをこれらの板材で囲んでいたものと考えられる。

井戸椀瓦の下部では、桶を用いた井戸椀が4段にわたって検出された。ただ、1段目は掘削時に崩壊したため、詳細は不明であるが、約0.8mの長さがあったものと推定される。2段目から下は、約0.8m（2段目）、約0.8m（3段目）、0.9m以上（4段目）の長さを測る。かなり深く掘り下げられており、検出面から約3.2mの深さまで桶が達していることは確認できた。4段目の桶の下部でT.P.-2.1mである。最下部の4段目の桶の内部には、青灰色粗砂混じり粘土が堆積しているが、底部かどうかは不明である。遺物は出土していない。

近代以降に廃絶したものであり、内部にはコンクリー

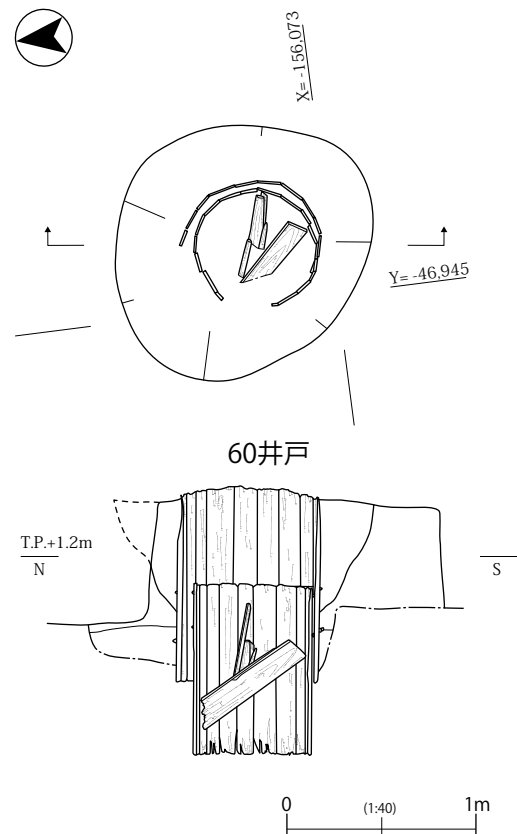


図71 60井戸 平面・断面図

トやレンガなどが詰め込まれた状態であった。そのため、遺物はほとんど検出されなかった。その中で452は井戸椀瓦で、側面に刻印として○印とややへこんだ○印が、1枚に押されているものである。時期は確定できない。

60井戸（図52・71・80、図版17）

54土坑の北西部に位置しており、61土坑の底部で検出された。61土坑は、深さ約20cmしかないことから、重複した遺構というより60井戸の掘方の可能性も考えられる。桶を用いた井戸椀のみで構成されており、井戸椀瓦は検出されていない。井戸椀は2段にわたって検出され、上から約1.0m、約0.9mの長さを測る。埋土は灰黄褐色細砂で、径5mm程度の小礫を少量含む。2段目の桶下部でT.P.+0.2mである。

近代以降に廃絶したものであるが、内部からコンクリートやレンガなどは検出されておらず、遺物はほとんど出土していない。なお、銭貨が出土しており、460は「寛永通宝」で、裏面に「元」と描かれたものである。

6h区包含層の遺物（図72）

52土坑・53土坑・54土坑の位置する6h区で、部分的に包含層が15cm程度の厚さで残存しており、これを除去した面で70土坑が検出された。包含層は灰褐色粗砂混じり細砂が主体で、礫を含んでいる。残存部分が狭い範囲であるため、遺物量は少ない。70土坑などの遺構検出面より上層からの出土遺物であるが、ここで扱うこととする。

肥前磁器染付碗・皿、陶器碗などが出土した。374は染付皿である。見込みに蛇の目釉剥ぎが認められ、中央部にコンニャク印版による五弁花が付せられている。内面には扇と唐草が配置されており、外面には簡略化された唐草文が配置されている。375は染付碗で、いわゆるくらわんか茶碗である。18世紀後半と考えられる。376は陶器皿である。

70土坑との関係から、18世紀末～19世紀初頭と考えられる。

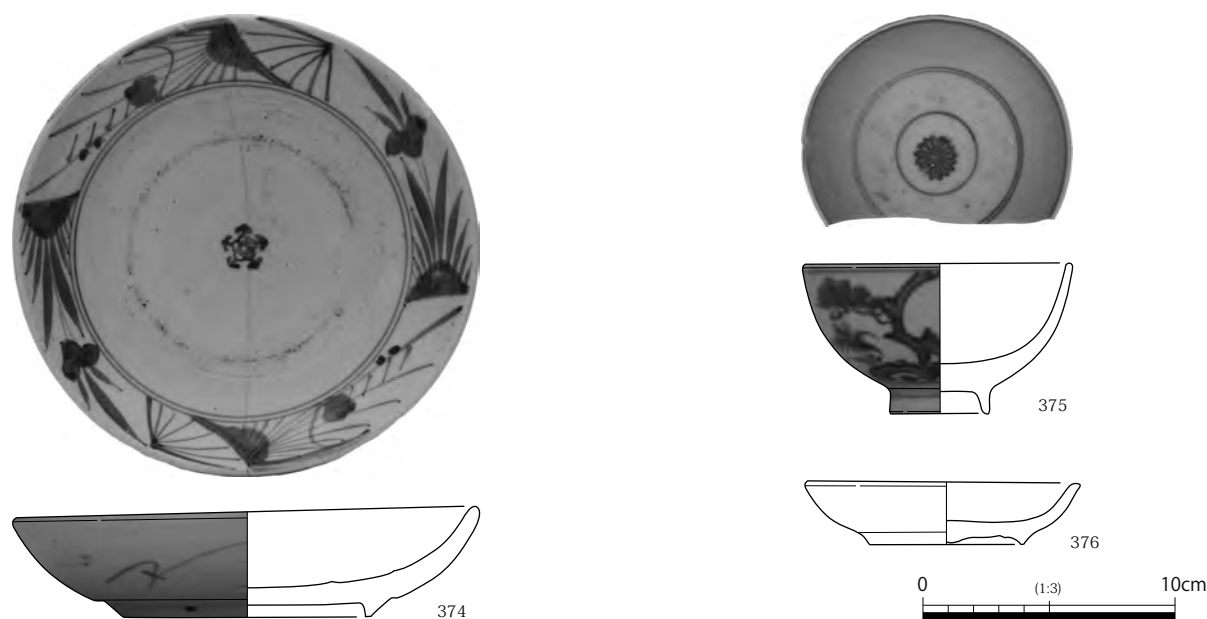


図72 6h区 包含層 出土遺物

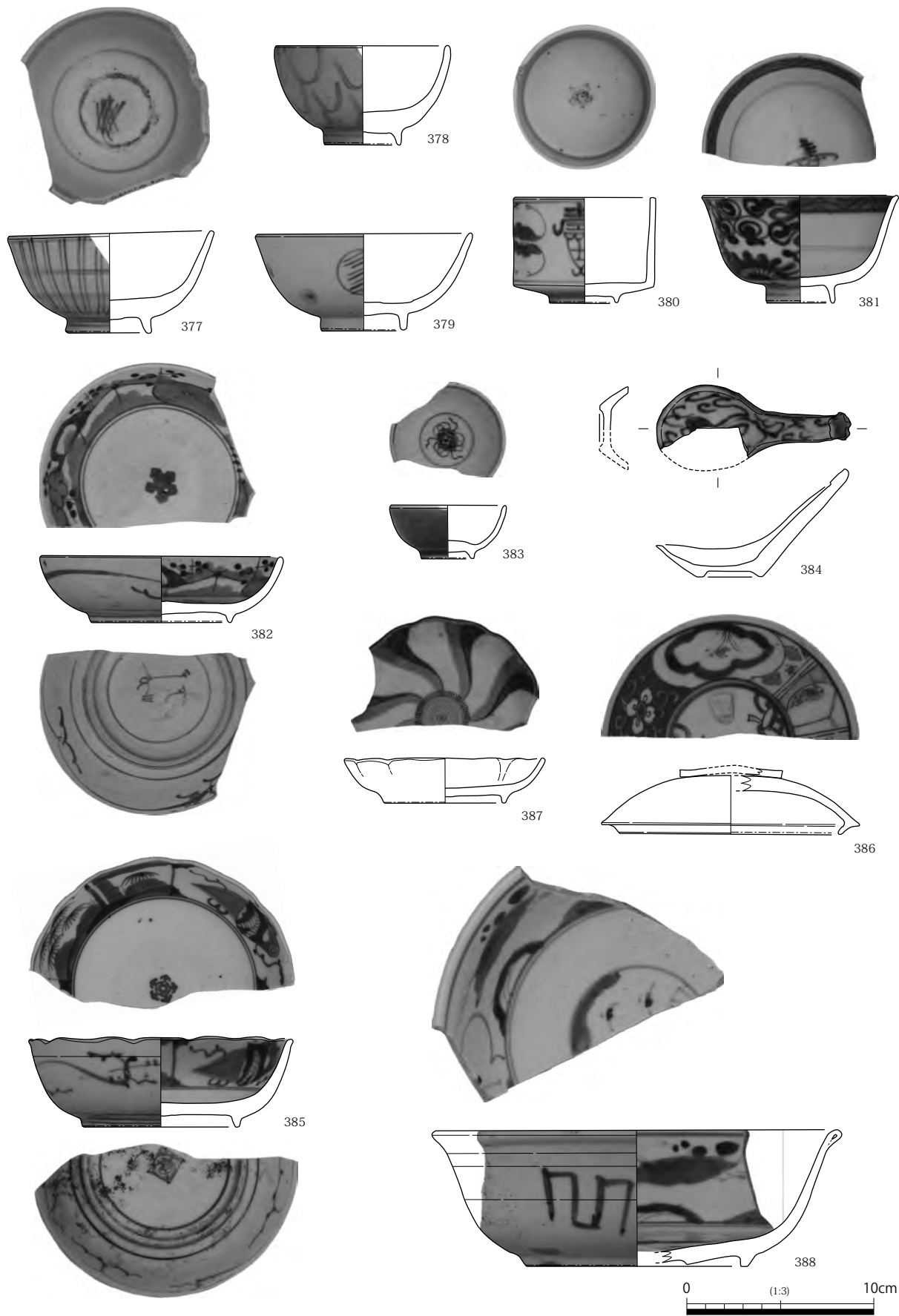


图73 6h区 盛土·整地层 出土遗物(1)

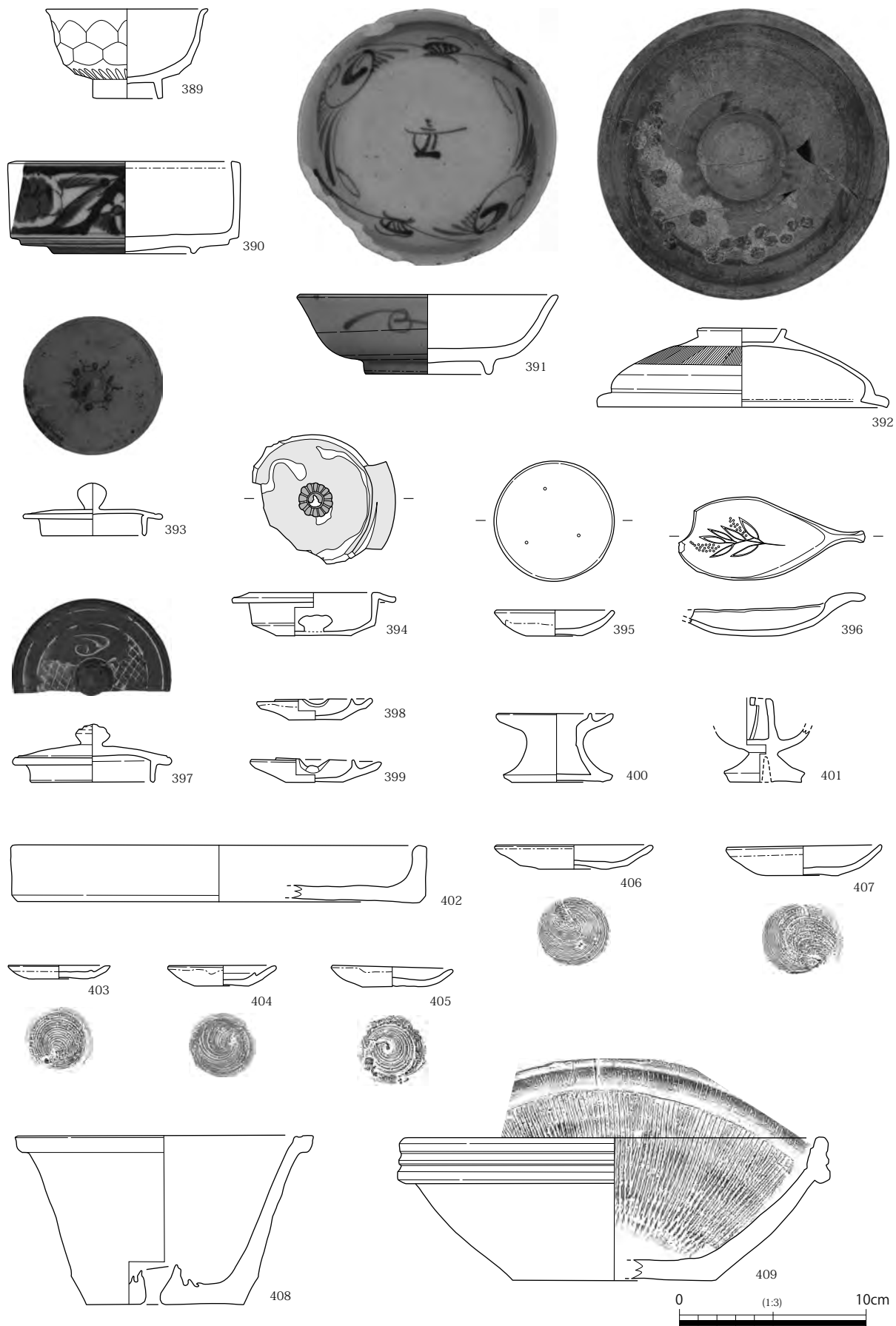


图74 6h区 盛土·整地层 出土遗物(2)

6 h 区盛土・整地層の遺物 (図73・74、図版30)

52土坑・53土坑・54土坑の位置する6 h 区で、これらの遺構埋土と盛土・整地層の区別がはっきりしない部分もあることから、遺構検出面より上層からの出土遺物であるが、ここで扱うこととする。肥前磁器染付碗・皿・鉢・仏飯器・散り蓮華、白磁碗、陶器碗・香炉・急須・壺・甕・蓋・德利・皿・灯明皿・匙・播鉢・植木鉢、堺播鉢、土師質土器焙烙・火入れ・火鉢・灯明皿、瓦類、土製ミニチュア品、銭貨、金属製品などが出土した。

377～381は、染付碗である。377は見込みに蛇の目釉剥ぎが認められ、圏線の中、中央部に斜め格子が描かれている。外面には格子文が描かれている。378はいわゆるくらわんか茶碗で、外面に二重網目文が描かれている。18世紀後半と考えられる。379は半球形で、外面に丸文散しが配置されている。18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。380は半筒形で、外面に「寿」字を図案化した文様を配置している。18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。381は端反形で、外面に手描きによる文様が描かれている。382は染付皿で、見込みにコンニャク印版による五弁花が付せられている。外面には簡略化された唐草文が配置されている。383は染付小杯である。384は染付散り蓮華で、型押し成形のものである。385は染付輪花皿で、見込みにコンニャク印版による五弁花が付せられている。外面には簡略化された唐草文が配置されており、底部高台内には二重角渦福が付されている。386は染付蓋で、外面に手描きによる文様が描かれている。387は染付輪花皿で、内面に柴垣が描かれている。388は大型の染付鉢で、外面に手描きによる文様が描かれている。

389は瀬戸美濃陶器小杯である。外面は削り出しによる亀甲文様、底部には放射状沈線で成形されている。18世紀後半と考えられる。390は染付段重で、外面に手描きによる文様が描かれている。391は陶器鉢で、内外面に簡略化された唐草文が描かれている。392は京焼土鍋蓋で、表面に鉄釉が施され、白化粧土で草花文が描かれている。393は施釉陶器蓋である。394は施釉陶器急須蓋である。395は灰釉陶器灯明皿である。396は陶器匙で、木の葉状を呈しており、内面に木の枝が刻まれている。397は陶器蓋で、表面に白化粧土で文様が描かれている。398・399は灰釉陶器受付き灯明皿である。400は陶器台付灯明皿である。401は陶器乗燭である。402は土師質土器焙烙である。403～407は土師質土器灯明皿で、いずれも内面に透明釉が施され、底に糸切り痕が認められる。408は陶器植木鉢である。409は備前焼播鉢である。410はミニチュアの土製御堂である。型押し成形によりつくられており、箱庭などで使われたものと考えられる。411は陶器壺で、肩部に蟹の形をした意匠をのせて、把手あるいは耳の役割をもたせているものである。産地は不明であるが、京焼風と考えられる。なお、図化はしていないが、陶器德利の中には、布袋を外面に貼り付けた、丹波焼のものもみられる。

d. 5 h・5 i・5 j 区

紀州街道に沿って調査区西半部に集中する遺構群のうち、北側に位置する6 h 区の東側に隣接する区画が5 h 区である。54土坑から東側では、遺構がほとんどみつかっておらず、6 h 区とは様相が異なる。ただ、54土坑の上部に堆積する遺物を多く含む盛土・整地層が東側にひろがっており、区画内からは多くの遺物が検出されている。ここで新たに項目を設けて扱うこととするが、他に遺構が検出されていないことから、54土坑の影響を強く受けているものと考えられ、一体のものといえる。

また、5 h 区の南側に隣接する5 i 区では、井戸椀瓦が上部を巡る井戸が隣接して2基検出された。これ以外では遺構は検出されておらず、盛土・整地層からも遺物はほとんど出土していない。多くの遺

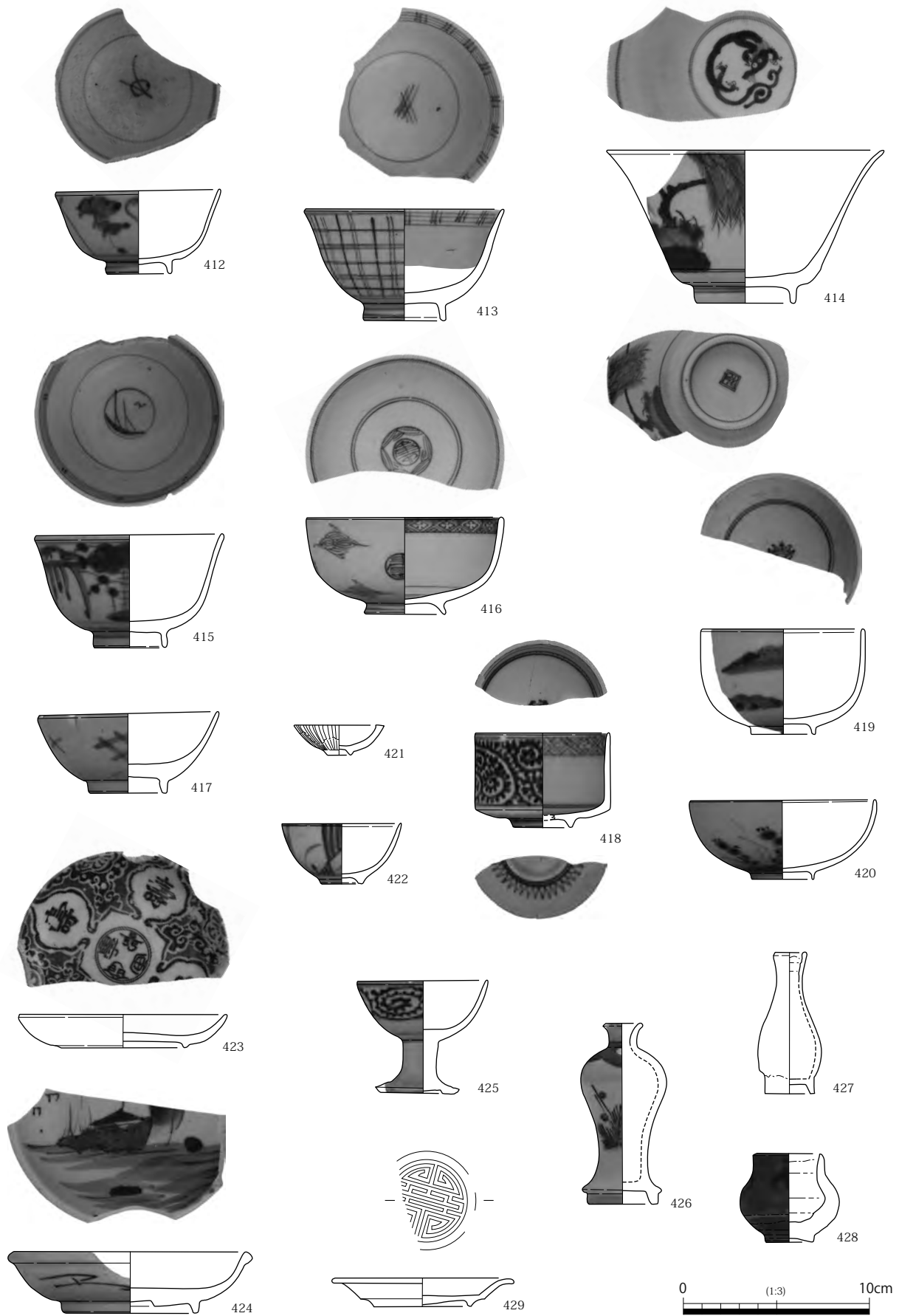


图75 5h区 盛土·整地層 出土遺物(1)

物が出土した50土坑と29土坑の間で、ほぼ空白地となっている。さらにその南側に隣接する5 j 区においても同様の状況で、わずかに南側に向かう46溝が検出されたにすぎない。

5 h区盛土・整地層出土遺物（図75・76）

6 h区に隣接しており、そこから続く盛土・整地層が5 h区まで及んでいることから、遺構検出面より上層からの出土遺物であるが、ここで扱うこととする。遺構は検出されていないが、54土坑の埋土が広がっており、この区画まで及んでいるもので、多くの遺物が検出された。肥前磁器染付碗・皿・鉢・蓋・仏花瓶・神酒徳利、白磁紅皿、陶器碗・香炉・壺・蓋・皿・急須・鍋・植木鉢、堺播鉢、土師質土器火入れ・火鉢、瓦類、土製ミニチュア品、銭貨などが多く出土した。

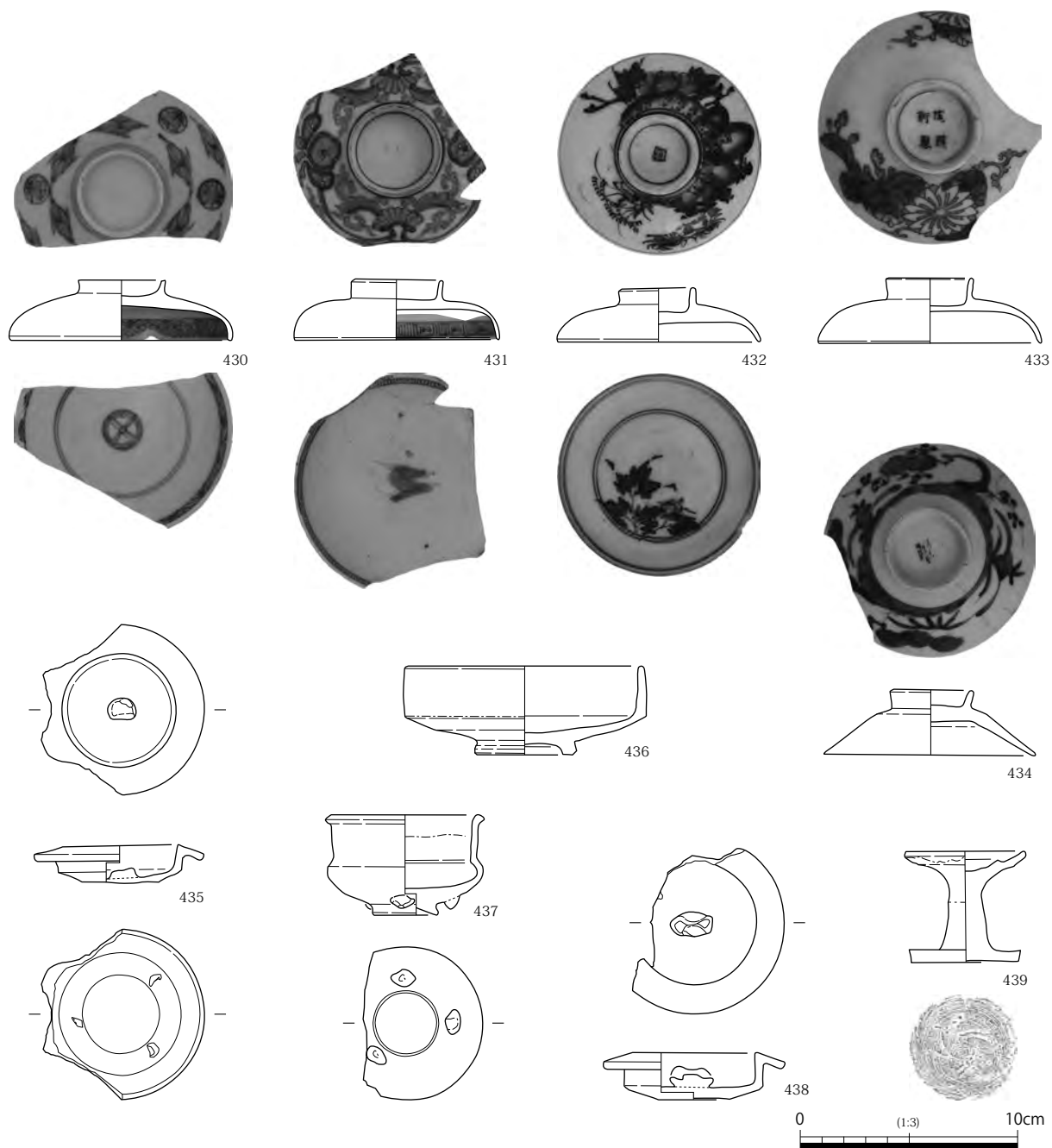


図76 5 h区 盛土・整地層 出土遺物（2）

412～420は染付碗である。412は、外面に手描きによる文様が描かれている。413は圈線の中、中央部に斜格子が、口縁部内面と外面には格子文が描かれている。414はやや大型のもので、内外面に手描きによる文様が描かれている。底部高台内には二重角渦福が付されている。415は、外面に手描きによる文様が描かれている。416は、二重圈線の中、丸の中に「寿」字が、外面には丸文散しが描かれている。417はいわゆるくらわんか茶碗で、外面に井桁文が描かれている。18世紀後半と考えられる。418は半筒形で、見込みには五弁花が付せられており、口縁部内面には四方禳文が配置されている。外面には蛸唐草が描かれている。18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。419は丸碗で、外面に手描きによる文様が描かれている。18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。420は半球形で、外面に手描きによる文様が描かれている。

421は肥前白磁紅皿で、19世紀前半と考えられる。422は染付小碗で、外面に手描きによる文様が描かれている。423は染付皿で、内面に銅版プリントにより中央に「画学長命」、まわりに「寿」字が配置されている。424は染付皿で、蛇の目高台である。外面に簡略化された唐草文、内面には手描きにより文様が描かれている。425は染付仏飯器で、蛇の目高台である。外面に蛸唐草が描かれている。426

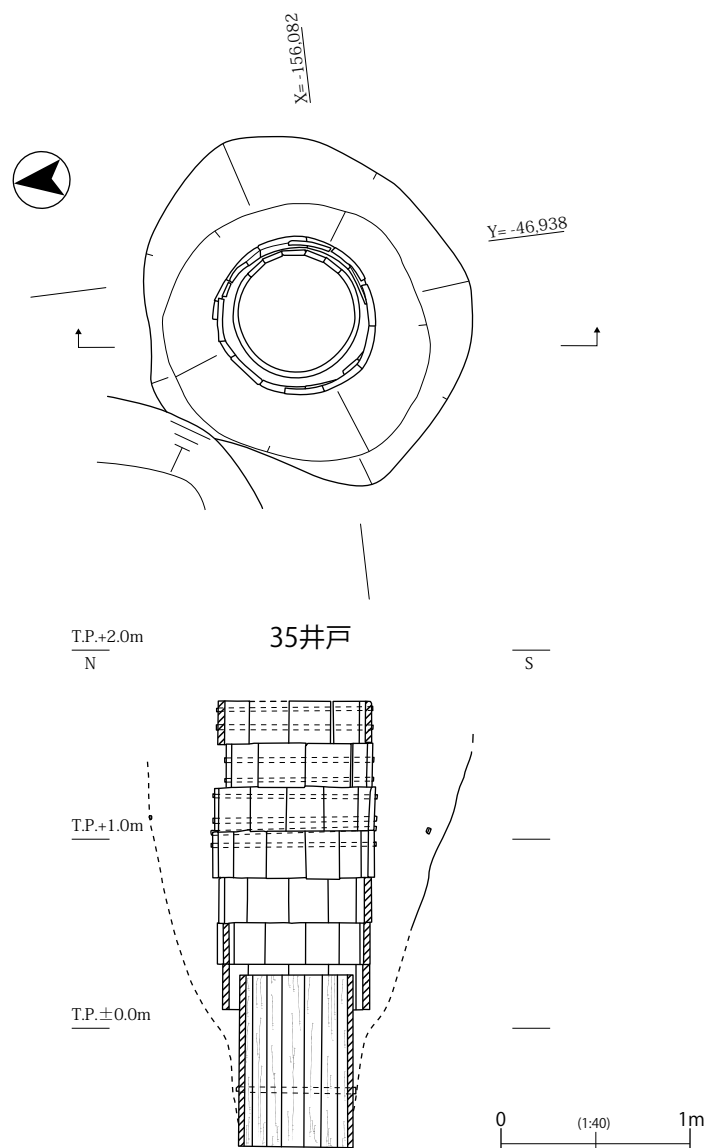


図77 35井戸 平面・断面図

は染付神酒徳利で、外面に赤絵により文様が描かれている。19世紀代と考えられる。427は陶器小瓶、428は陶器小壺である。429は白磁皿で、見込みに寿字を木版で打ち込んだ「寿紋皿」と呼ばれたものである。美濃国肥田焼の代表作品で19世紀中頃と考えられる。紀州街道西側の第4回洪水砂層からも出土している。

430～434は染付蓋である。430は外面に丸文散しが描かれており、416の染付碗とやや文様は異なるが、同種と考えられる。431は外面に線描きで花唐草が描かれている。19世紀前半と考えられる。432は内外面に手描きによる文様が描かれており、高台内に角渦福が付されている。433は外面にプリントにより文様が描かれており、高台内に「陶精軒製」と記されている。幕末の瀬戸の陶工と考えられる。434は外面に手描きによる文様が描かれている。435は施釉陶器急須蓋である。436は陶器平茶碗である。437は小型の陶器香炉である。438は施釉陶器急須蓋である。439は土師質土器台付灯明皿で、内面に透明釉が施され、底部に糸切り痕が認められる。

35井戸 (図52・77・79、図版18)

5 i 区の東端部に位置しており、周囲からは遺構は検出されていない。建物の痕跡も残っていない。検出面で、井戸の内部は径約0.8m、掘方は径約1.7mを測る。上部に井戸椀瓦を巡らしたものである。

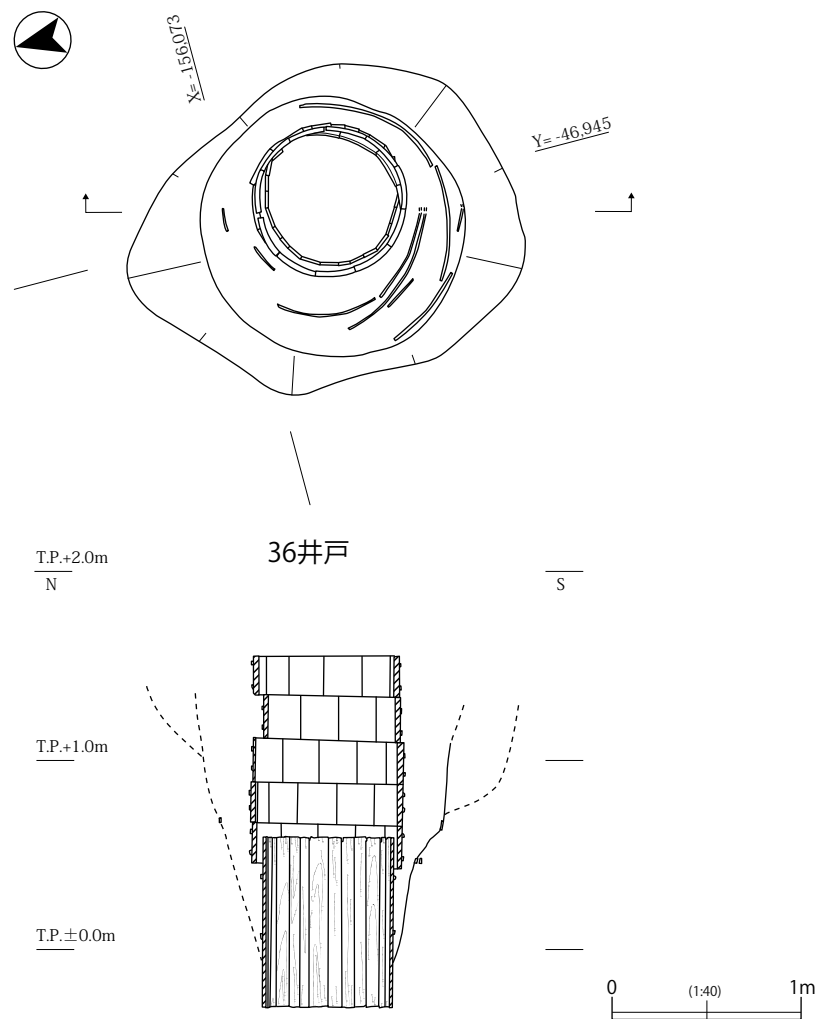
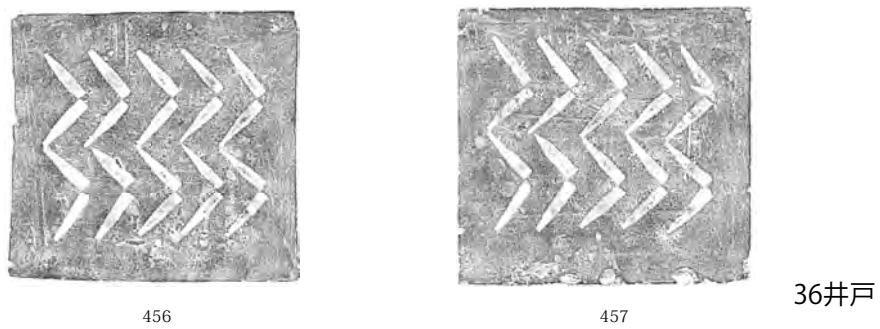
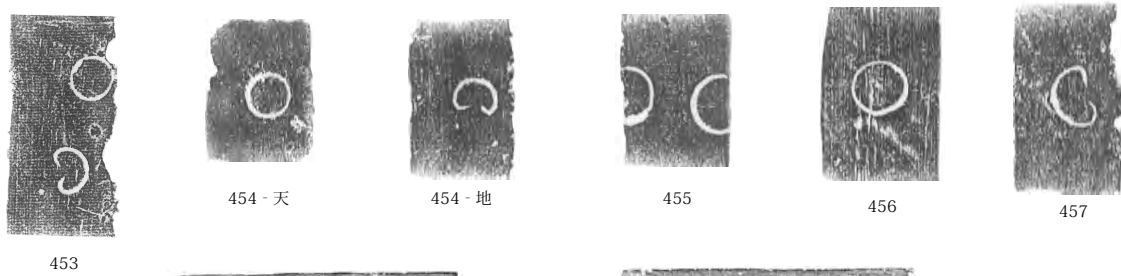
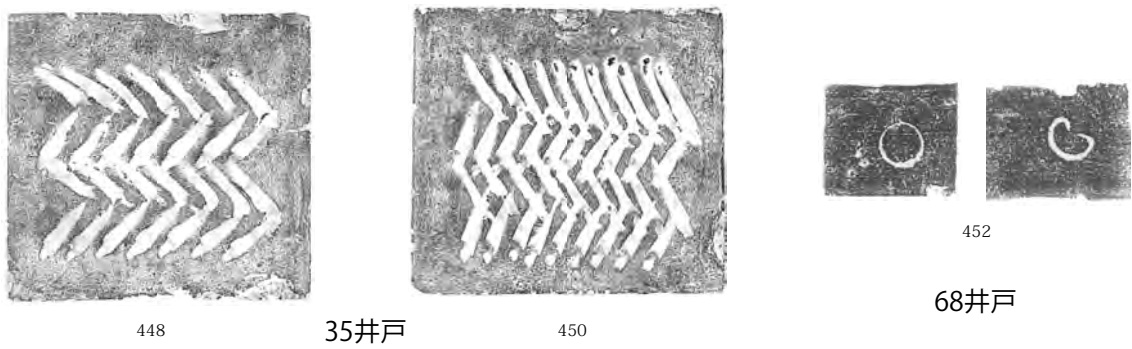
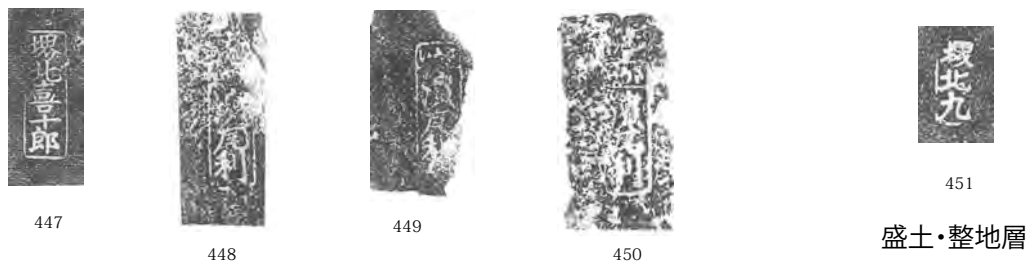
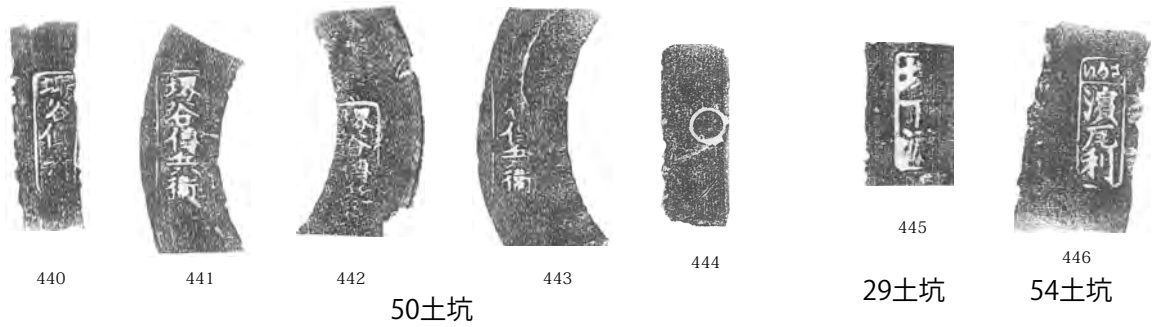
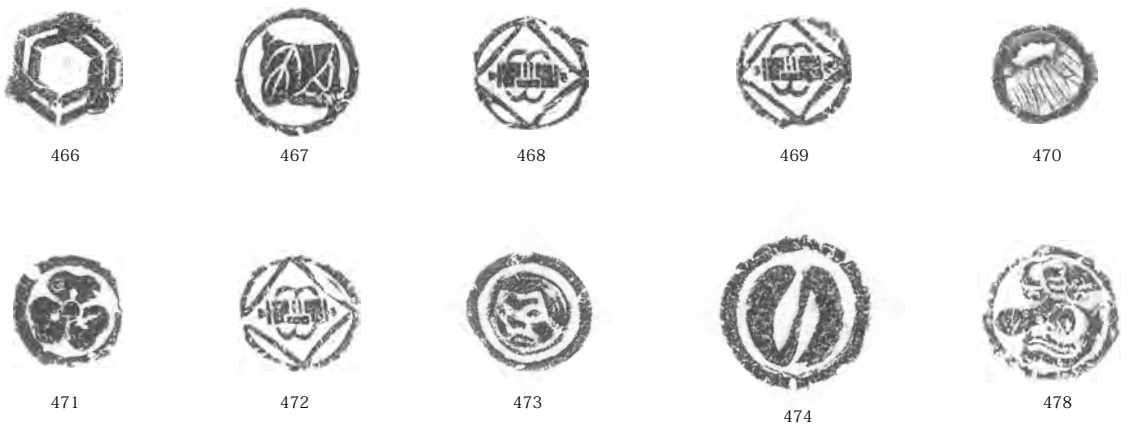
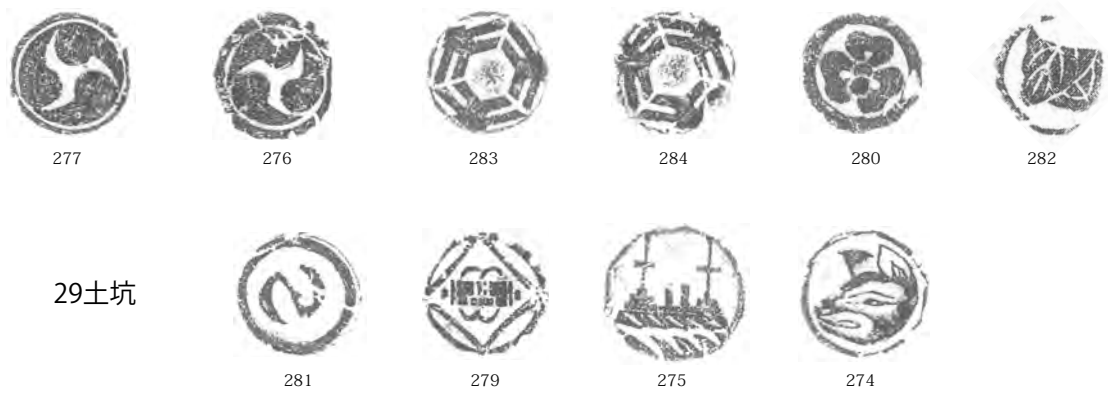
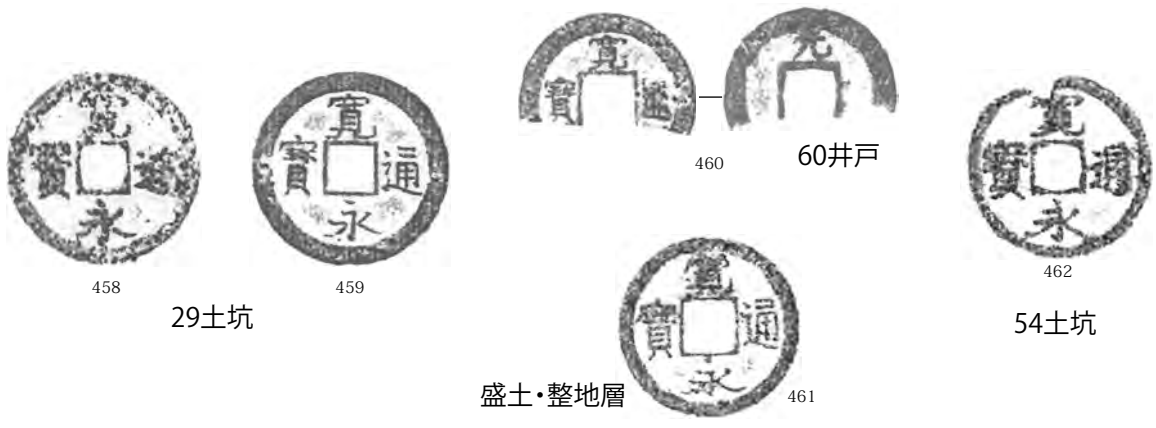


図78 36井戸 平面・断面図



刻印 0 (1:2) 5cm 平面 0 (1:6) 20cm

图79 纪州街道東側出土 瓦拓本



錢 0 (1:1) 2cm 泥面子 0 (1:2) 5cm

図80 紀州街道東側出土 銭貨・泥面子拓本

検出面からは7段の井戸椀瓦が確認されており、当初はさらに上へ積まれていた可能性もある。井戸椀瓦は11個で一周しており、痕跡が残っていることから、一段あたり2本の竹で締められていたことがわかる。井戸椀瓦の下部では桶を用いた井戸椀が1段検出されており、約0.9mの長さを測る。さらに下部に桶が入れている可能性もあるが、確認できていない。底部までは掘削できなかったが、検出面から約2.3mの深さまで桶が達していることは確認できた。この桶の下部で、T.P.-0.6mである。

近代以降に廃絶したものであり、内部にはコンクリートやレンガなどが詰め込まれた状態であった。屋根瓦も多くみられるが、その中に井戸椀瓦と共に、堺の瓦仲間の刻印が押された瓦がみられる。447は軒丸瓦の側面にみられ、「堺北喜十郎」と読める。448～450は井戸椀瓦の側面にみられ、一部ははっきりしない部分があるが、いずれも「さかい濱瓦利」と読める。嶋谷氏の研究成果により、堺の瓦屋仲間の実態の一端が解明されており、それによると「堺北喜十郎」は瓦屋喜十郎に該当することになり、18世紀末～19世紀前半の時期にあてはまる。「さかい濱瓦利」は瓦屋利兵衛に該当することになり、18世紀末～19世紀前半の時期にあてはまる（表6）。

井戸椀瓦の刻印から、19世紀前半につくられた井戸と考えられる。

36井戸（図52・78・79、図版18）

5 i 区の中央部やや北寄りに位置しており、35井戸から西へ約4 m離れている。周囲からは他に遺構は検出されておらず、建物の痕跡も残っていない。検出面で、井戸の内部は径約0.8m、掘方は南北方向に長い楕円形を呈しており、長径約2.1m、短径約1.6mを測る。上部に井戸椀瓦を巡らしたものである。検出面からは5段の井戸椀瓦が確認されており、当初はさらに上へ積まれていた可能性もある。井戸椀瓦の下部では桶を用いた井戸椀が検出されており、約0.9mの長さを測る。さらに下部に桶が入れている可能性もあるが、確認できていない。底部までは掘削できなかったが、検出面から約1.9 mの深さまで桶が達していることは確認できた。この桶の下部で、T.P.-0.3mである。

35井戸と隣接していることから、当初はどちらかの井戸が廃絶した後に掘り直された井戸と考えていた。ただ、内部にコンクリートやレンガなどが詰め込まれた状態であったことから、36井戸も近代以降まで存続していたことが判明したため、同時に使用されていたものである。井戸椀瓦には、刻印として記号が井戸椀瓦の側面に押されているものがみられる。453～455は○印とややへこんだ○印が同じ瓦に付けられたものである。456は○印、457はややへこんだ○印である。

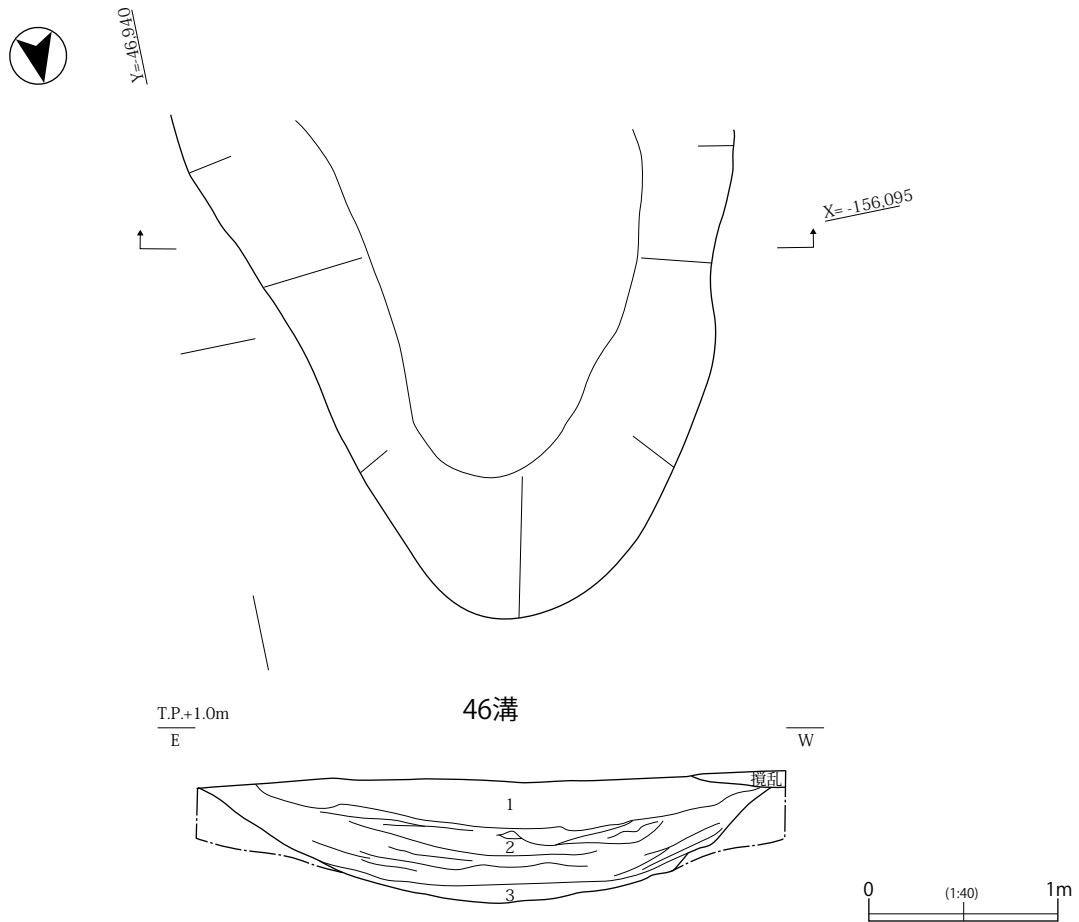
35井戸のように、刻印から時期を特定することはできないが、あまり時期差はないものと考えられるため、同時期の19世紀前半につくられた井戸と考えられる。

5 i 区盛土・整地層の遺物（図80）

2基の井戸以外に遺構が検出されていないことから、盛土・整地層からは遺物はほとんど出土していない。その中で、278の泥面子が検出されたが、天狗の顔が型押し成型でつくられたものである。

46溝（図52・81、図版18）

5 j 区の南部に位置しており、調査区南側に向かう溝である。調査区南端部の壁付近は攪乱のため、形状ははっきりしない部分もあるが、南側に向かって広がる溝である。検出面で平面形は三角形を呈しており、長さ約3.1mが確認された。さらに南壁部分で、幅約3.0m、深さ0.7mが確認されており、調



1. 灰黄褐 10YR4/2 細砂 下層に 黒褐 10YR3/1 細砂 が堆積
2. にぶい黄橙 10YR7/2 細砂 と 褐灰 10YR5/1 シルト混細砂 の互層
細かくレンズ状に堆積 径5mmの小礫含む ラミナあり 流水堆積
3. 灰 7.5Y5/1 細砂 褐灰 10YR5/1 シルト混細砂 部分的に堆積 流水堆積

図81 46溝 平面・断面図

査区外に向かってさらに深くなるものと考えられる。

埋土は3層に分かれており、下層は褐灰色細砂が主体で、粘土がみられないことから、流水による堆積といえる。さらに中層でも、にぶい黄橙色細砂と褐灰色シルト混じり細砂が互層に堆積していることから、常に流水があったものと考えられる。上層は灰黄褐色細砂が一気に堆積していることから、最終的には洪水により廃絶したものと考えられる。

当初は洪水に伴う自然流路のような溝を想定していた。ただ、隣接する29土坑が流水施設と判明したことから、上部は削平されているものの、関連のある施設と考えることができるようになった。現状では、そのまま結びつけることはできないが、29土坑の流水に関わる可能性を考えた場合、29土坑から流れる水を調査区南側へ流す役割を果たしていたものといえるかもしれない。ただ、残念ながら上部構造が不明であることから、想像の域を脱することができず、景観も復元できない。

遺物は出土していないため、時期は確定しない。

第6章 各種分析

第1節 放射性炭素年代測定（AMS法）

株式会社パレオ・ラボ

1. はじめに

堺市堺区に所在する並松町遺跡発掘調査にて検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は黒色粘土層より採取した土壌3点で、黒色粘土層は、調査地周辺に厚く堆積する黄褐色細砂層（自然堆積）の直下に10cm弱堆積しており、同様に自然堆積で調査区周辺に広がっている。採取地点は、PLD-20855がA区の紀州街道の西端部にあたる地点、PLD-20856とPLD-20857は、紀州街道の東側にあたるC区のそれぞれ中央部と南東端部である（図82）。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-20855	調査区：A区 位置：紀州街道西端部 試料No. 並松町1 層位：黒色粘土層	試料の種類：土壌 状態：wet	湿式篩分 106 μ m 酸洗浄（塩酸：1.2N） サルフィックス
PLD-20856	調査区：C区 位置：中央部 試料No. 並松町2 層位：黒色粘土層	試料の種類：土壌 状態：wet	湿式篩分 106 μ m 酸洗浄（塩酸：1.2N）
PLD-20857	調査区：C区 位置：南東端部 試料No. 並松町3 層位：黒色粘土層	試料の種類：土壌 状態：wet	湿式篩分 106 μ m 酸洗浄（塩酸：1.2N） サルフィックス

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

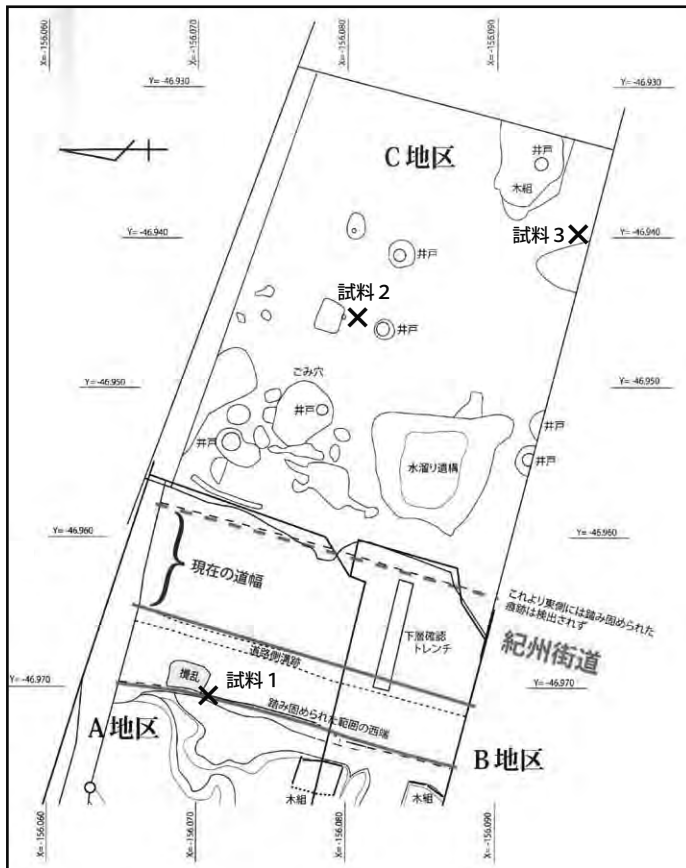


図82 試料採取地点（放射性炭素年代測定）

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図83に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期5730 \pm 40年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.1 (較正曲線データ: IntCal09) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

測定の結果、PLD-20855は、 2σ 暦年代範囲 (確率95.4%) で102 cal BC-24 cal AD (95.4%) となり、紀元前2世紀末～後1世紀前半の範囲を示した。

PLD-20856は、232-344 cal AD (95.4%) となり、3世紀前半～4世紀中頃の範囲を示した。

PLD-20857は、259-295 cal AD (17.6%) および321-407 cal AD (77.8%) となり、3世紀中頃～5世紀初頭の範囲を示した。

測定値は上述の通りだが、土壌試料の場合、堆積環境によっては値に幅が出る可能性がある。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-20855 試料 No. 並松町 1	-26.61 \pm 0.15	2034 \pm 19	2035 \pm 20	52BC (68.2%) 2AD	102BC (95.4%) 24AD
PLD-20856 試料 No. 並松町 2	-25.23 \pm 0.19	1755 \pm 19	1755 \pm 20	244AD (19.6%) 261AD 282AD (48.6%) 324AD	232AD (95.4%) 344AD
PLD-20857 試料 No. 並松町 3	-23.49 \pm 0.18	1697 \pm 18	1695 \pm 20	265AD (5.7%) 272AD 335AD (62.5%) 390AD	259AD (17.6%) 295AD 321AD (77.8%) 407AD

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編 『日本先史時代の ^{14}C 年代』
3-20 日本第四紀学会

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S.,
Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A.,
Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S.,
Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age
Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

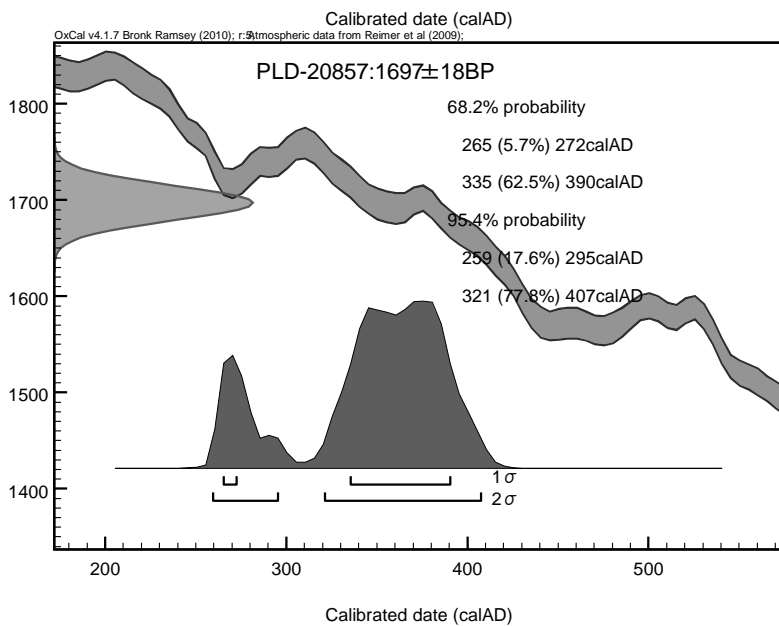
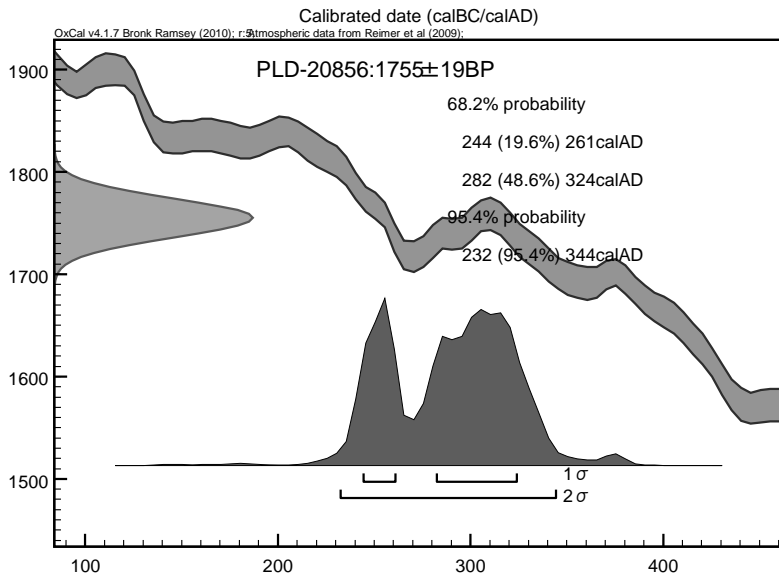
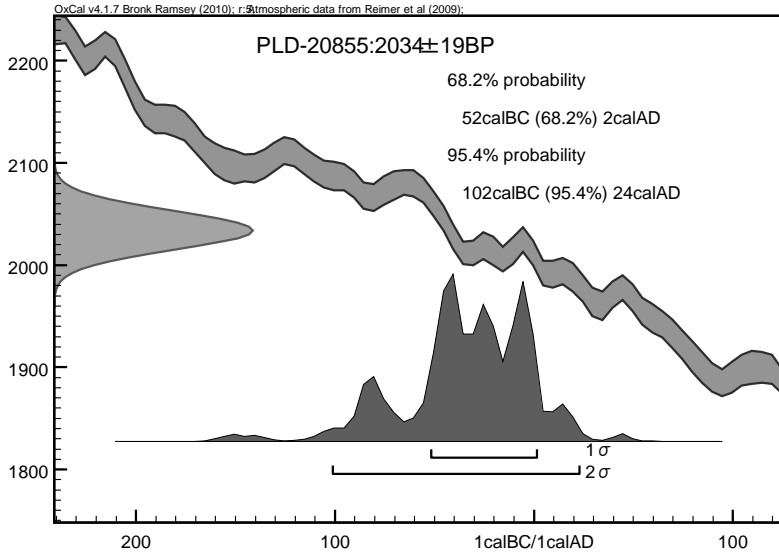


图83 曆年較正結果

第2節 花粉・珪藻分析

文化財調査コンサルタント株式会社

1. はじめに

堺市堺区に所在する並松町遺跡発掘調査にて検出された試料について、花粉・珪藻分析委託を受け実施した。本分析は、以下の目的で行われた。

- ①各土坑の堆積環境を明らかにし、土坑の性格を推定する助けとする。
- ②各土坑近辺から遺跡周辺の古植生を明らかにする。

分析項目と計画数量は、花粉分析3点、珪藻分析3点である。

2. 分析試料について

分析試料は、すべて公益財団法人 大阪府文化財センターにより採取・保管されていた試料から、提供を受けたものである。また、以下に示す平面図、断面図もすべて公益財団法人 大阪府文化財センターより提供を受けたものを基に作成した。

図84に、試料が採取された各土坑の位置を示す。また図85に、50土坑の断面図を示す。9層(2回目)、13層(1回目)から、試料が採取されていた。

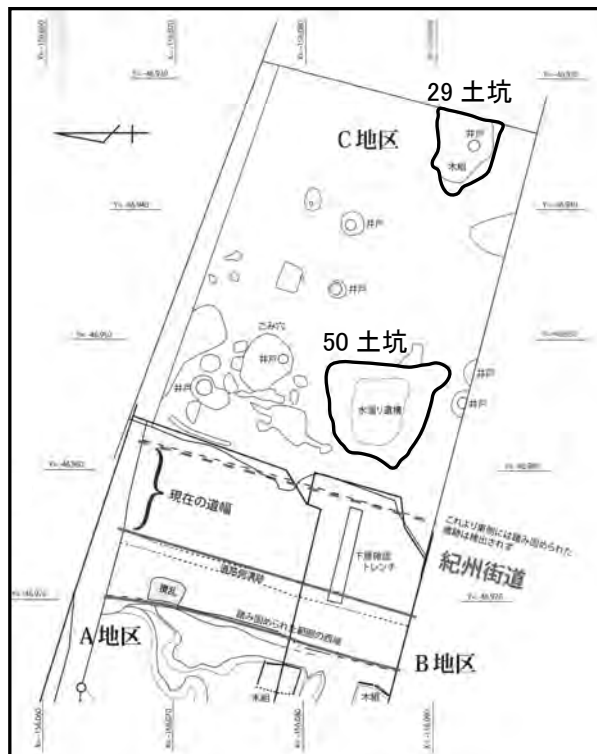


図84 試料採取地点(花粉・珪藻分析)

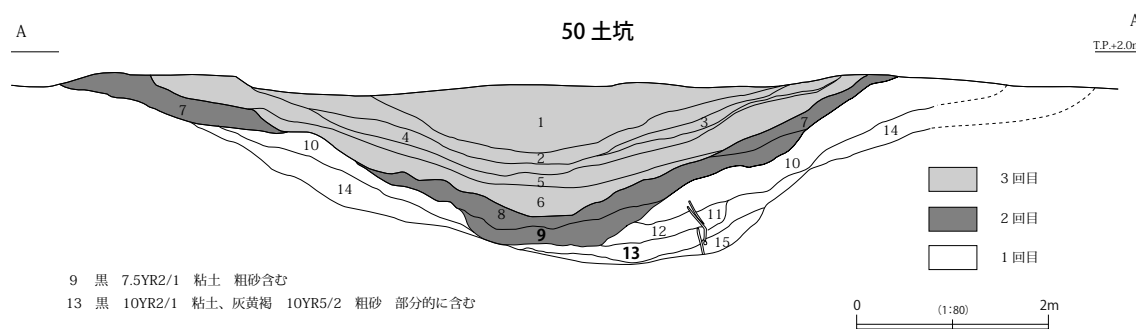


図85 50土坑 断面図

3. 分析方法

1 花粉分析

下記の特記仕様書にしたがって分析処理・検鏡（同定・計数）を行った。同定に際し、中村（1974）に基づきイネ科を、イネを含む可能性が高いイネ科（40ミクロン以上）と、可能性が低いイネ科（40ミクロン未満）に細分している。また、花粉化石の含有量を算出するために必用な計量を、随時行った。

花粉分析特記仕様書

分析方法

- 1) 採取した試料の汚染部分を除去し、試料の粒度によって適量を取りだす。
- 2) 水酸化カリウム溶液を分散剤として加え、低速のホモジナイザーを用いて試料の泥化・分散処理を行う。
- 3) 細粒物質の除去を行う。5ミクロンマイクロフィルターを使用して粒径処理を確実にすることが望ましい。
- 4) 大型時計皿とアスピレータで攪拌しつつ微化石を濃縮する。
- 5) フッ化水素酸を用いて珪酸塩鉱物質を溶解・除去する。
- 6) 比重1.6～1.9の重液中で遠心分離し、植物質を濃縮する。
- 7) アセトリシス処理により脱水を行うと共にセルロース分を溶解・除去する。
- 8) 遠心分離機により水洗し、水溶性物質を溶解・除去する。
- 9) グリセリンゼリーと混合してプレパラートを作成し、顕微鏡下で同定・計数を行う。プレパラートは1試料につき、2～3枚作成するものとする。
- 10) 同定は200個以上行うことを原則とし、複数のプレパラートで検討するものとする。

解析

- 1) 各花粉種類の出現率（パーセント表示）計算と花粉ダイアグラムの作成を行う。
- 2) 各地点における花粉消長パターンの読み取りと花粉帯の分帯を行う。
- 3) 各地点の地層対比と、地域的な古植生・古気候の復元、堆積環境の推定を行う。

2 珪藻分析

下記の特記仕様書にしたがって分析処理・検鏡（同定・計数）を行った。また、珪藻化石の含有量を算出するために必用な計量を、随時行った。

珪藻分析特記仕様書

分析方法

- 1) 採取試料の汚染部分を除去し、適量を取り出して乾燥、粉碎する。
- 2) 15%の過酸化水素水に浸して試料を分散、泥化させる。
- 3) ピロリン酸ナトリウム処理を行った後、30%塩酸と硝酸の混酸で炭酸塩等の鉱物、破片を処理する。
- 4) 5ミクロン振動マイクロフィルターでコロイド分を分離、除去する。
- 5) 水溶性物質の除去および時計皿を用いて珪藻化石の濃縮を行う。

- 6) プレパラートは1試料につき2～3枚を作成する。
- 7) 同定は200個以上検出することを原則とし、複数のプレパラートで検討し、その平均値を求めるものとするが、特徴的な種については少数でも計数を行うものとする。

解析

- 1) 珪藻のダイアグラムを作成し、海水性、汽水性、淡水性等の種類別とともにその生息域、生活型等を基にして地層の堆積環境の変遷を推定する。

4. 分析結果

1 微化石概査結果

花粉分析用プレパラート及び珪藻分析用プレパラートを用いた微化石の概査結果は、表3のとおりである（植物片、炭は花粉分析用プレパラートを観察した。火山ガラス、植物珪酸体は珪藻分析用プレパラートを観察した）。

表3 微化石概査結果

地点	試料No.	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	植物珪酸体
29 土坑		○	○	○	◎	△×	△×
50 土坑	9 層（2 回目）	◎	△	◎	◎	△×	△×
	13 層（1 回目）	◎	△	◎	◎	△	△×

凡例 ◎：十分な数量が検出できる ○：少ないが検出できる △：非常に少ない
△×：極めてまれに検出できる ×：検出できない

2 花粉分析結果

(1) 花粉分析結果

3試料の花粉分析を行った結果、表4に示す43種類の花粉・孢子化石が検出できた。

花粉分析の結果を、下記の花粉ダイアグラム（図86・87）と花粉化石組成表（表4）に示す。

花粉ダイアグラムでは、計数した花粉、孢子の総数を基数にし、各々の花粉と孢子について百分率を算出してスペクトルで表し、左に総合ダイアグラム（針葉樹、広葉樹、草本・藤本花粉、孢子の割合を示すグラフ）、右に含有量グラムを配した。

(2) 花粉化石群集の特徴

地点ごとに花粉化石群集の特徴を、花粉化石群集の変遷が明確になるように、下位から上位に向かい示した。

① 29土坑

木本花粉の割合が34%と低く、草本花粉の割合が64%と高い。木本花粉ではマツ属（複維管束亜属）が63%と高く、スギ属、コナラ亜属がこれに次ぐ。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が66%と高く、イネ科（40ミクロン未満）、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科がこれに次ぐ。

② 50土坑

13層（1回目）では、木本花粉の割合が67%と高く、草本花粉の割合が33%と低い。木本花粉では

マツ属（複維管束亜属）が59%と高く、アカガシ亜属がこれに次ぐ。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が20%、イネ科（40ミクロン未満）が13%を示す。また、栽培種のソバ属、ワタ属が検出できた。

9層（2回目）では、木本花粉の割合が58%、草本花粉の割合が41%を示す。木本花粉ではマツ属（複維管束亜属）が72%と高く、アカガシ亜属、コナラ亜属、スギ属、エノキ属—ムクノキ属がこれに次ぐ。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が21%、アブラナ科が16%、イネ科（40ミクロン未満）が13%を示す。また、栽培種のワタ属が検出できた。

並松町遺跡 C区 29土坑

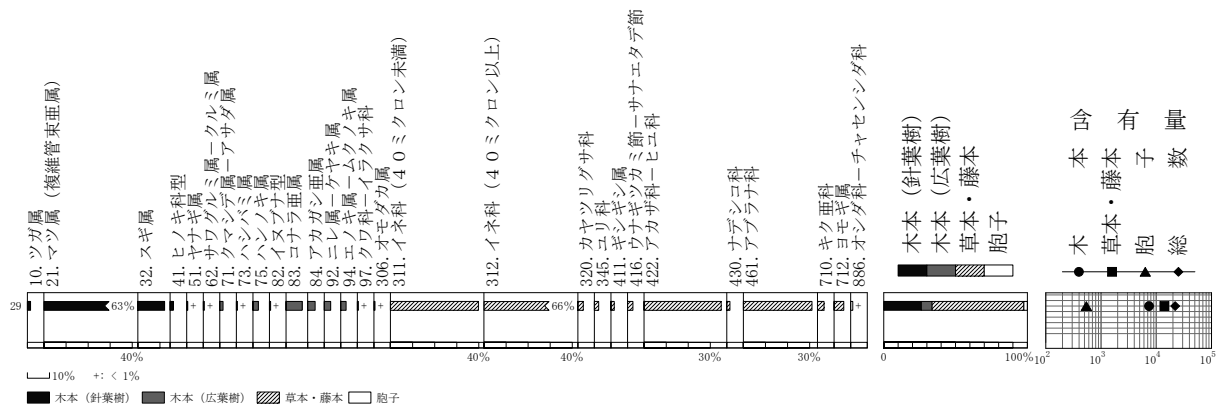


図86 29土坑の花粉ダイアグラム

並松町遺跡 C区 50土坑

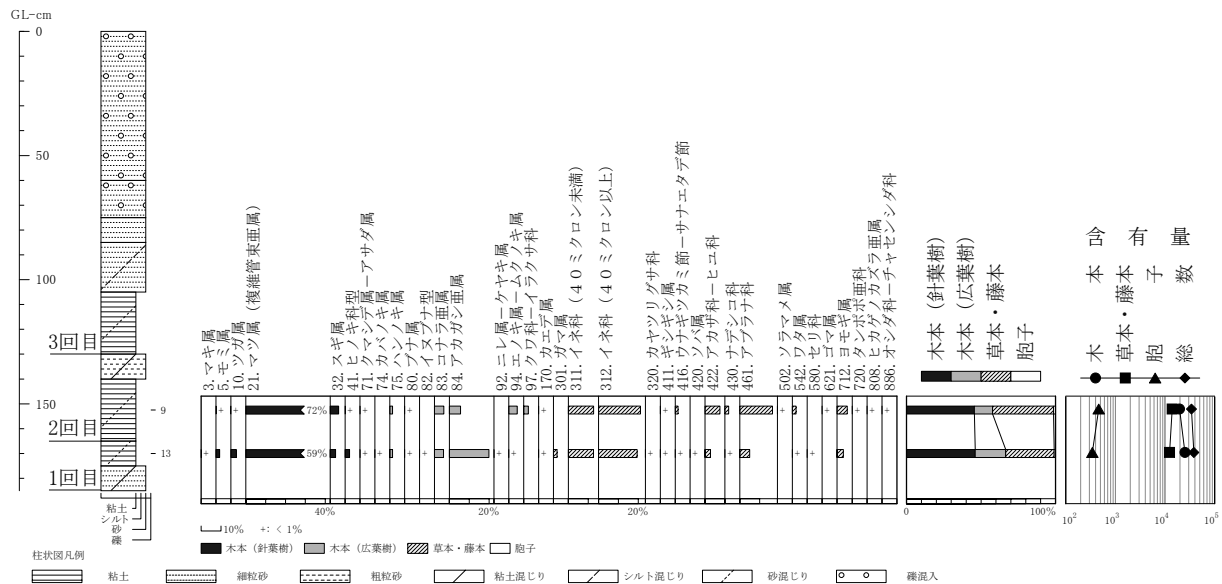


図87 50土坑の花粉ダイアグラム

表4 花粉化石組成表

		29 土坑		50 土坑			
				9層(2回目)		13層(1回目)	
3	<i>Podocarpus</i>	マキ属				1	0.5%
5	<i>Abies</i>	モミ属		2	0.9%	4	1.8%
10	<i>Tsuga</i>	ツガ属	3 1.5%	2	0.9%	6	2.7%
21	<i>Pinus (Diploxylon)</i>	マツ属(複維管束亜属)	129 62.6%	154 72.3%	131	59.3%	
32	<i>Cryptomeria</i>	スギ属	25 12.1%	9 4.2%	6	2.7%	
41	Cupressaceae type	ヒノキ科型	3 1.5%	1 0.5%	5	2.3%	
51	<i>Salix</i>	ヤナギ属	1 0.5%				
62	<i>Pterocarya-Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	1 0.5%				
71	<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	3 1.5%	2 0.9%	2	0.9%	
73	<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1 0.5%				
74	<i>Betula</i>	カバノキ属				2	0.9%
75	<i>Alnus</i>	ハンノキ属	5 2.4%	3 1.4%	3	1.4%	
80	<i>Fagus</i>	ブナ属		2 0.9%	1	0.5%	
82	<i>Fagus japonica type</i>	イヌブナ型	1 0.5%			1	0.5%
83	<i>Quercus</i>	コナラ亜属	15 7.3%	10 4.7%	10	4.5%	
84	<i>Cyclobalanopsis</i>	アカガシ亜属	7 3.4%	12 5.6%	44	19.9%	
92	<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	6 2.9%			2	0.9%
94	<i>Celtis-Aphananthe</i>	エノキ属-ムクノキ属	5 2.4%	9 4.2%	2	0.9%	
97	Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1 0.5%	5 2.3%			
170	<i>Acer</i>	カエデ属		2 0.9%		1	0.5%
301	<i>Typha</i>	ガマ属				4	1.8%
306	<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	1 0.5%				
311	Gramineae(<40)	イネ科(40ミクロン未満)	82 39.8%	27 12.7%	28	12.7%	
312	Gramineae(>40)	イネ科(40ミクロン以上)	136 66.0%	45 21.1%	43	19.5%	
320	Cyperaceae	カヤツリグサ科	5 2.4%			2	0.9%
345	Liliaceae	ユリ科	4 1.9%				
411	<i>Rumex</i>	ギンギン属	3 1.5%	2 0.9%	1	0.5%	
416	<i>Echinocaulon-Persicaria</i>	ウナギツカミ節-サナエタデ節	5 2.4%	3 1.4%	1	0.5%	
420	<i>Fagopyrum</i>	ソバ属				1	0.5%
422	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	72 35.0%	16 7.5%	6	2.7%	
430	Caryophyllaceae	ナデシコ科	3 1.5%	4 1.9%	1	0.5%	
461	Cruciferae	アブラナ科	64 31.1%	35 16.4%	11	5.0%	
502	<i>Vicia</i>	ソラマメ属		1 0.5%			
542	<i>Gossypium</i>	ワタ属		4 1.9%	1	0.5%	
580	Umbelliferae	セリ科				2	0.9%
621	<i>Sesamum</i>	ゴマ属		1 0.5%			
710	Carduoideae	キク亜科	6 2.9%				
712	<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	9 4.4%	11 5.2%	7	3.2%	
720	Cichorioideae	タンポポ亜科		2 0.9%			
808	Subgenus Lycopodium	ヒカゲノカズラ亜属		1 0.5%			
886	Aspid.-Asple.	オシダ科-チャセンシダ科	2 1.0%	1 0.5%			
898	MONOLATE-TYPE-SPORE	単条溝孢子	6 2.9%	1 0.5%			
899	TRILATE-TYPE-SPORE	三条溝孢子	7 3.4%	2 0.9%	3	1.4%	
木本花粉総数			206 34%	213 58%	221	67%	
草本花粉総数			390 64%	151 41%	108	33%	
孢子総数			15 2%	5 1%	3	1%	
総数			611	369	332		
含有量(粒数/g)			21,988	34,004	37,912		

3 珪藻分析結果

(1) 分析結果

3試料の珪藻分析を行った結果、表5に示す32種類が検出された。

珪藻分析の結果を、下記の珪藻ダイアグラム（図88・90）、珪藻総合ダイアグラム（図89・91）と珪藻化石組成表（表5）に示す。

珪藻ダイアグラムでは、分類群ごとに検出総数を基数とした百分率を算出し、スペクトルで表した。また、環境指標種群（小杉；1988、安藤；1990）を基にスペクトルのハッチを変えている。さらに、環境指標種群ごとの累積グラフ、含有量グラフ、完形率グラフを右側に付けた

珪藻総合ダイアグラムのうち、左端の「生息域別グラフ」は同定したすべての種類を対象にそれぞれの要因（生息域）ごとに累積百分率として示した。そのほかの4つのグラフは、淡水種について要因ごとに累積百分率として示した。

(2) 珪藻化石群集の特徴

地点ごとに珪藻化石群集の特徴を、珪藻化石群集の変遷が明確になるように、下位から上位に向かい示した。

① 29土坑

珪藻化石の含有量が160万粒/gと多く、完形率も80%と高かった。珪藻化石の含有量が多かったことは、安定した環境が続いたことを示唆する。また、完形率が高いことは、小型の珪藻が多かったことと起因すると思われる。

全てが淡水であり、アルカリ性種、浮遊種が卓越傾向にある。珪藻化石群集では淡水・アルカリ性・浮遊種の *Melosira varians* が特に高率を示すほか、淡水・酸性・底生種の *Achnanthes hungarica*、淡水・アルカリ性・流水・底生種の *Synedra ulna* が他の種類に比べ高率を示す。

② 50土坑

29土坑同様に珪藻化石の含有量が180万～140万粒/gと多く、完形率も70%程度と高かった。29土坑同様に安定した環境が続いたものと考えられる。

13層（1回目）：全てが淡水であり、酸性種、底生種が卓越傾向にある。珪藻化石群集では淡水・酸性・底生種の *Achnanthes hungarica* が特に高率を示すほか、特徴的に検出される種類はない。

9層（2回目）：全てが淡水であり、酸性種、底生種が卓越傾向にある。珪藻化石群集では淡水・酸性・底生種の *Achnanthes hungarica* が特に高率を示すほか、淡水・アルカリ性・浮遊種の *Melosira varians* が他の種類に比べ高率を示す。

並松町遺跡 C区 29土坑

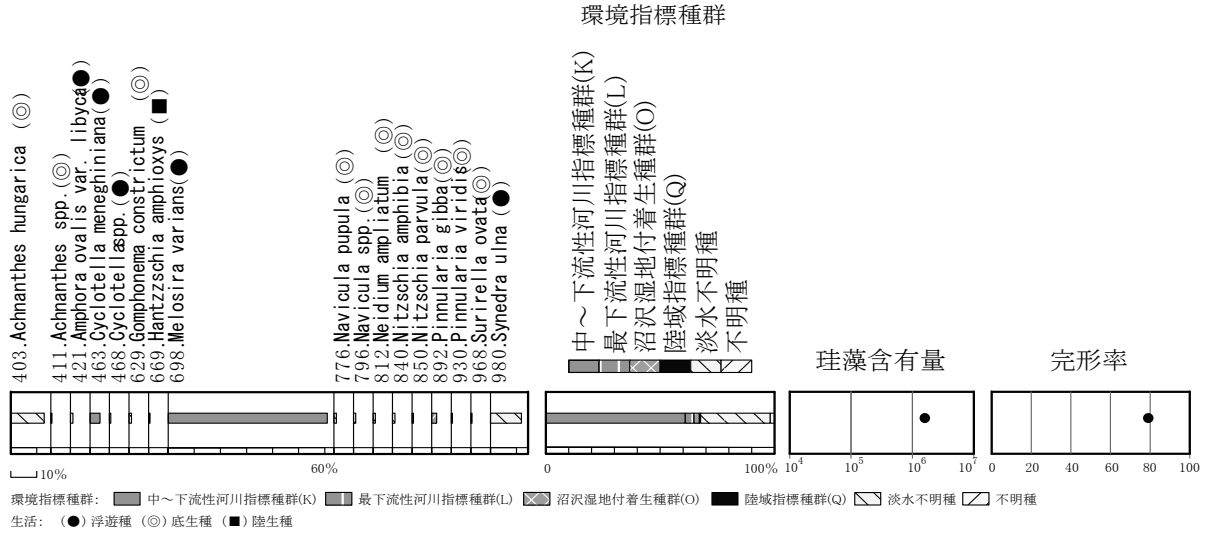


図88 29土坑の珪藻ダイアグラム

並松町遺跡 C区 29土坑

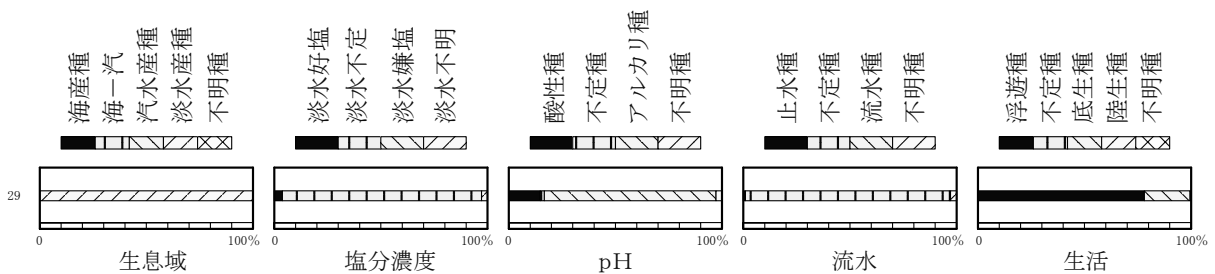


図89 29土坑の珪藻総合ダイアグラム

並松町遺跡 C区 50土坑

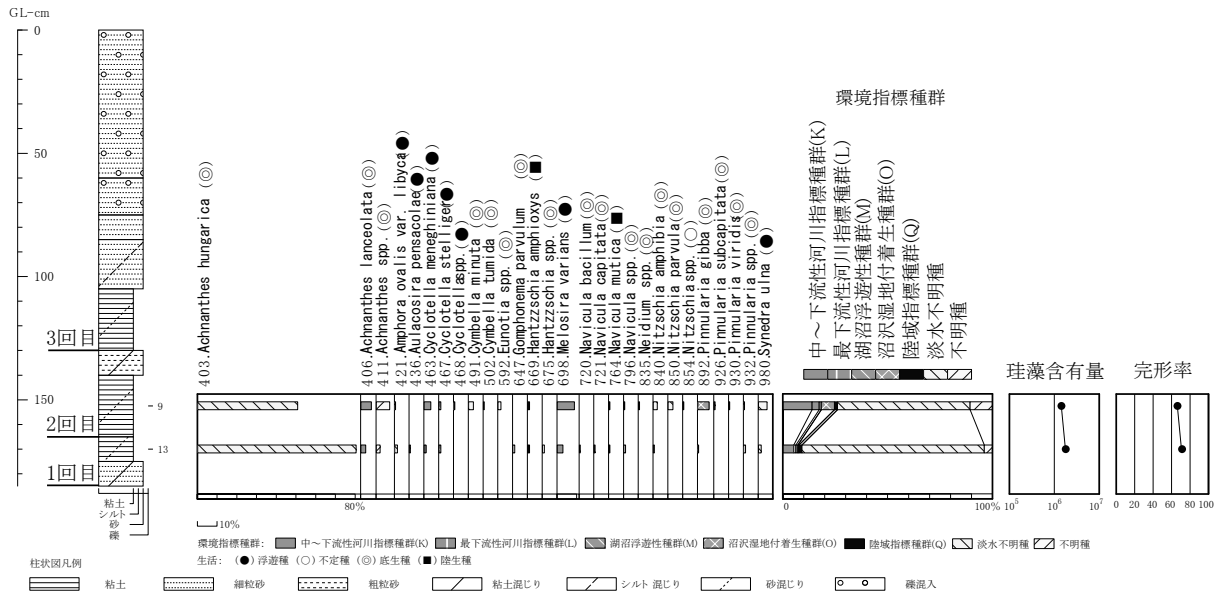


図90 50土坑の珪藻ダイアグラム

並松町遺跡 C区 50土坑

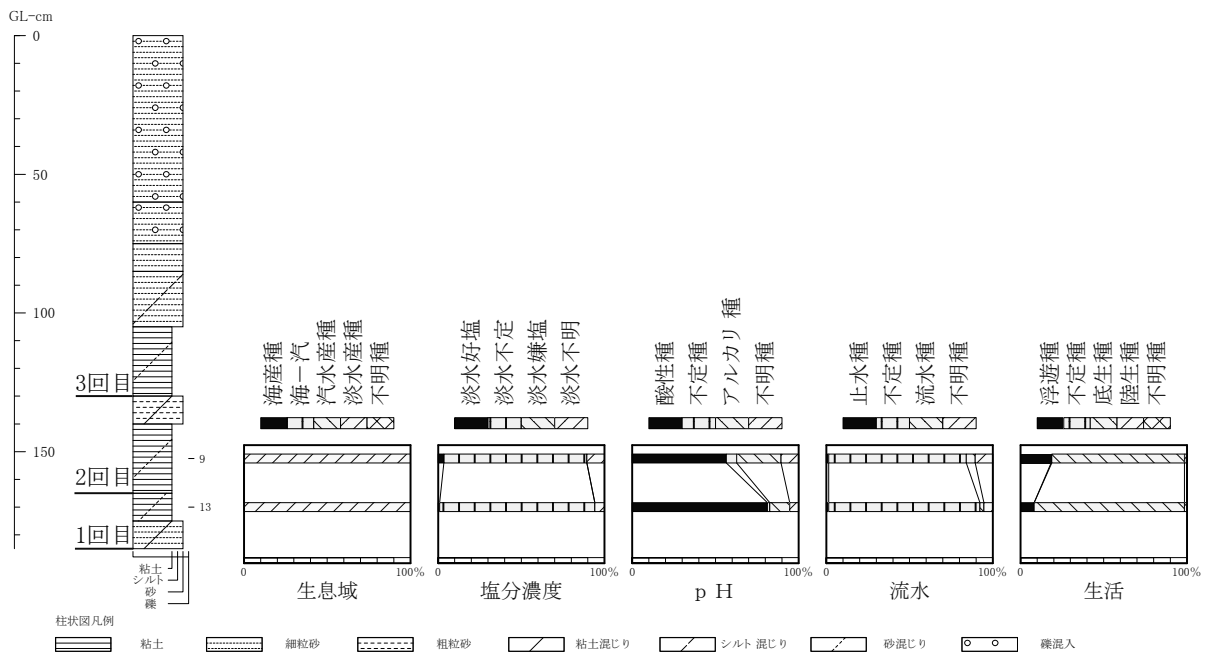


図91 50土坑の珪藻総合ダイアグラム

表5 珪藻化石組成表

コード	学名	生息域					29 土坑		50 土坑			
		水域	塩分濃度	Ph	流水	生活			9層(2回目)		13層(1回目)	
403	<i>Achnanthes hungarica</i>	淡水	不定	酸性	不定	底生	27	12.9%	105	50.7%	167	80.3%
406	<i>Achnanthes lanceolata</i>	淡水	不定	アルカリ	流水	底生			11	5.3%	5	2.4%
411	<i>Achnanthes</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	1	0.5%	14	6.8%	4	1.9%
421	<i>Amphora ovalis</i> var. <i>libyca</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	浮遊	2	1.0%	1	0.5%	3	1.4%
436	<i>Aulacosira pensacolae</i>	淡水	不明	酸性	止水	浮遊					1	0.5%
463	<i>Cyclotella meneghiniana</i>	淡水	好塩	アルカリ	不定	浮遊	8	3.8%	7	3.4%	2	1.0%
467	<i>Cyclotella stelligera</i>	淡水	不定	アルカリ	止水	浮遊			2	1.0%	2	1.0%
468	<i>Cyclotella</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	浮遊	1	0.5%	1	0.5%		
491	<i>Cymbella minuta</i>	淡水	不定	不定	不定	底生			5	2.4%		
502	<i>Cymbella tumida</i>	淡水	不定	アルカリ	止水	底生			1	0.5%		
592	<i>Eunotia</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生			3	1.4%		
629	<i>Gomphonema constrictum</i>	淡水	不定	アルカリ	止水	底生	2	1.0%				
647	<i>Gomphonema parvulum</i>	淡水	不定	不定	不定	底生					2	1.0%
669	<i>Hantzschia amphioxys</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	陸生	1	0.5%	2	1.0%	2	1.0%
675	<i>Hantzschia</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生					2	1.0%
698	<i>Melosira varians</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	浮遊	128	61.0%	18	8.7%	6	2.9%
720	<i>Navicula bacillum</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	底生					1	0.5%
721	<i>Navicula capitata</i>	淡水	不明	不明	不明	底生					1	0.5%
764	<i>Navicula mutica</i>	淡水	不定	不定	不定	陸生			1	0.5%	1	0.5%
776	<i>Navicula pupula</i>	淡水	不定	不定	不定	底生	2	1.0%				
796	<i>Navicula</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	2	1.0%	1	0.5%	2	1.0%
812	<i>Neidium ampliatum</i>	淡水	不明	不明	不明	底生	2	1.0%				
835	<i>Neidium</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生			1	0.5%		
840	<i>Nitzschia amphibia</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	底生	2	1.0%	4	1.9%	1	0.5%
850	<i>Nitzschia parvula</i>	淡水	不定	不定	不定	底生	1	0.5%	5	2.4%		
854	<i>Nitzschia</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	不定			1	0.5%		
892	<i>Pinnularia gibba</i>	淡水	不定	酸性	不定	底生	4	1.9%	12	5.8%	1	0.5%
926	<i>Pinnularia subcapitata</i>	淡水	不定	不定	不定	底生			1	0.5%		
930	<i>Pinnularia viridis</i>	淡水	不定	不定	不定	底生	1	0.5%	1	0.5%		
932	<i>Pinnularia</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生			1	0.5%	2	1.0%
968	<i>Surirella ovata</i>	淡水	不定	アルカリ	流水	底生	1	0.5%				
980	<i>Synedra ulna</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	浮遊	25	11.9%	9	4.3%	3	1.4%
		海水生種合計					0	0%	0	0%	0	0%
		海～汽水生種合計					0	0%	0	0%	0	0%
		汽水生種合計					0	0%	0	0%	0	0%
		淡水生種合計					210	100%	207	100%	208	100%
		合計					210		207		208	
		含有量(粒数/g)合計					1,595,454		1,429,595		1,763,397	
		完形率					完形数	167	137	146		
							%	80%	66%	70%		

5. 考察

1 各土坑の埋積環境について

(1) 29土坑

淡水産種の珪藻化石のみ検出され、海水の影響は認められなかった。

高率で検出されるアルカリ性・浮遊種の *Melosira varians* は、環境指標種群で中～下流性河川指標種群に分類されている。このことから、29土坑には、河川からの流入が常時あったものと推定できる。

(2) 50土坑

淡水産種の珪藻化石のみ検出され、29土坑同様に海水の影響は認められなかった。

13層（1回目）では、酸性種、底生種が卓越することから、湿地（湿原）環境であったと考えられる。

9層（2回目）でも13層（1回目）同様に酸性種、底生種が卓越することから、湿原環境であったと考えられる。ただし、*Melosira varians* などのアルカリ性・浮遊種の割合が13層（1回目）に比べ高くなっており、河川の影響を受けたと考えられる。

2 花粉化石群集から推定される古植生

(1) 29土坑

木本花粉の割合が低く、草本・藤本花粉の割合が高いことから、29土坑周辺には草地が広がっていたと考えられる。水辺にはアシが生育していたほか、オモダカなどの抽水植物も生育していたと考えられる。やや湿った場所にはカヤツリグサ科やタデ科（ウナギツカミ節ーサナエタデ節）の草本が生育し、乾燥した場所にはタデ科（ギシギシ属）アカザ科ーヒユ科、キク科（キク亜科、ヨモギ属）の草本が生育していたと考えられる。一方、イネを含む可能性が高いイネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率も高い。遺跡の近辺に耕作地があり、そこから風によってもたらされたか、あるいは29土坑に流れ込む水と一緒に、上流の耕作地からもたらされたものと考えられる。

木本花粉の割合が低いことから、木本花粉の多くは泉北丘陵や金剛・生駒山地など、遠方から飛来したものと考えられる。アカマツを主体としてナラ類を混淆する薪炭林：里山やスギの植林が分布したものと考えられる。

(2) 50土坑

① 13層（1回目）

木本花粉花粉の割合が高いが、森林が土坑近辺に迫っていたとするには、値が低く、土坑周辺には草地が広がっていたと考えられる。珪藻分析から土坑内が湿原環境であったと考えられ、土坑内には花粉化石の検出できたアシやガマが繁茂していたと考えられる。また、ソバ属やワタ属花粉が検出されることから、50土坑の近辺で耕作が行われ、ソバやワタが栽培されていたと考えられる。また、アブラナ科にも栽培の可能性が指摘できる。ただし、イネ科（40ミクロン以上）の出現率は低く、稲作はやや離れた場所で行われていたと考えられる。

木本花粉の多くは泉北丘陵や金剛・生駒山地など、遠方から飛来したものと考えられる。アカマツを主体としてナラ類を混淆する薪炭林：里山が卓越するものの、本来これらの山々を覆っていたと考えられるカシ類を要素とする照葉樹林が、少なからず残存していたと考えられる。あるいはカシ類がごく僅か、調査地近辺に生育していた可能性もある。また、スギの植林の分布を積極的に指摘するほど、スギ属花粉の検出量が多くはなかった。

② 9層（2回目）

13層（1回目）に比べ木本花粉の割合が低く、草本・藤本花粉の割合が高い。湿性、水生草本の割合は13層（1回目）に比べ変化が乏しいが、ガマ属が検出されなかった。したがって、土坑内にはアシが生育していたと考えられる。一方栽培種ではワタ属が引き続き検出され、ソバ属が検出されなかったもののゴマ属やソラマメ属（栽培と断定はできない）が検出された。また、アブラナ科にも栽培の可能性が指摘できる。このことから、近辺で耕作が行われ、これらの作物が栽培されていたと考えられる。また、イネ科（40ミクロン以上）の出現率にも13層（1回目）に比べ変化が乏しく、稲作はやや離れた場所で行われていたと考えられる。

木本花粉の割合がやや減少し、13層（1回目）や29土坑同様に木本花粉の多くは泉北丘陵や金剛・生駒山地など、遠方から飛来したものと考えられる。アカマツを主体としてナラ類を混濁する薪炭林：里山が卓越していたと考えられる。また、スギの植林の分布を積極的に指摘するほど、スギ属花粉の検出量が多くはなかった。

一方、木本花粉群集は13層（1回目）と29土坑の中間的な組成を示し、50土坑と29土坑の埋まる時期を示唆する可能性が指摘できる。50土坑の2回目が埋まった後に29土坑が掘られ、埋まっていったと考えられる。

6. まとめ

珪藻分析の結果、29土坑には河川からの流入があったものと推定できる。50土坑の13層（1回目）は湿地（湿原）環境で、9層（2回目）は河川の影響を受けるようになったと考えられる。

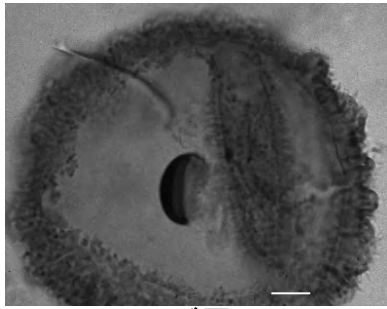
花粉分析の結果、50土坑で2回目埋積が終わった後で29土坑が埋まったものと推定できた。両土坑内にはアシが生育していたほか、土坑、時期の違いによってガマやオモダカなどの抽水植物が生育していた。土坑の周辺には草地が広がっていたと考えられる。更に50土坑の時期に近辺では、ソバ、ワタ、ゴマ、ソラマメ類、アブラナ類などの栽培が行われていた可能性もある。更にやや離れた場所では稲作も行われていたと考えられる。

泉北丘陵や金剛・生駒山地にはアカマツ林（薪炭林：里山）が広がり、50土坑が機能した初期（13層（1回目）の時期）には照葉樹林も残存した。照葉樹林は次第に縮小し、29土坑が機能した時期にはほとんど認められなくなる。一方、29土坑の時期にはスギ植林が行われている。

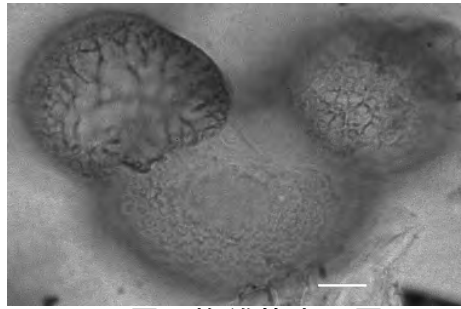
参考文献

- 安藤一男 1990 「淡水珪藻による環境指標種群の設定と古環境への応用」『東北地理』42 73-88.
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27 10-20.
- 中村 純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネを中心として」『第四紀研究』13 187-197.

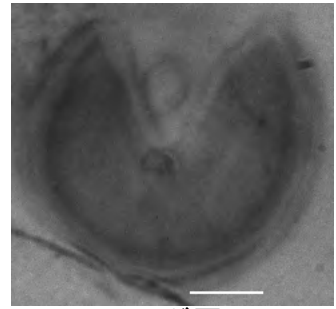
写真1 花粉の顕微鏡写真



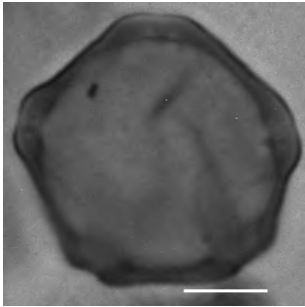
ツガ属



マツ属 (複維管束亜属)



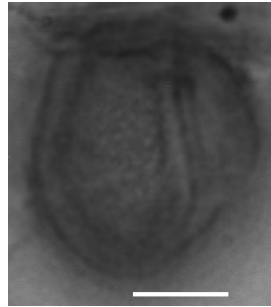
スギ属



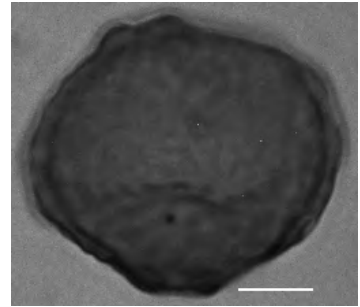
ハンノキ属



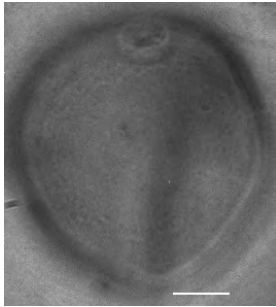
コナラ亜属



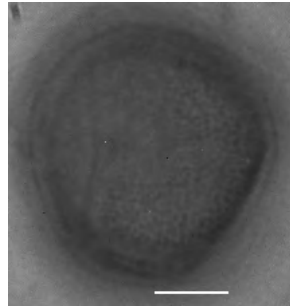
アカガシ亜属



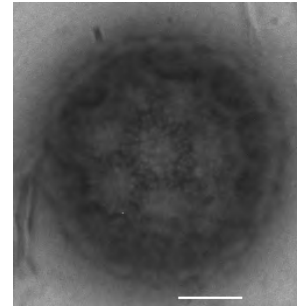
ニレ属 - ケヤキ属



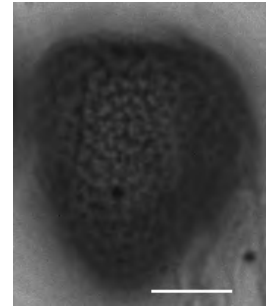
イネ科 (40ミクロン以上)



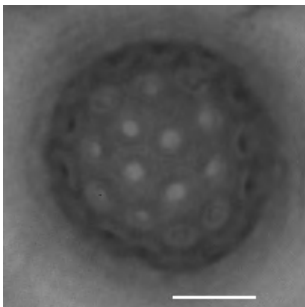
ギシギシ属



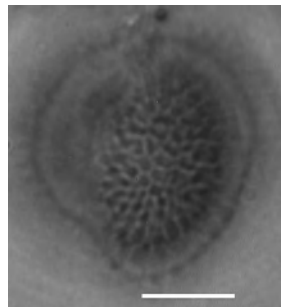
ウナギツカミ節
- サナエタデ節



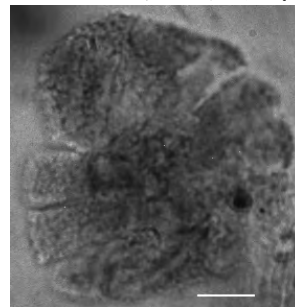
ソバ属



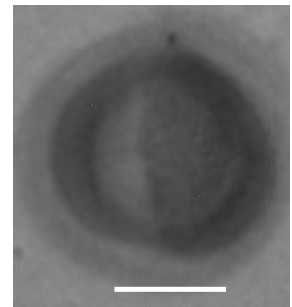
アカザ科 - ヒユ科



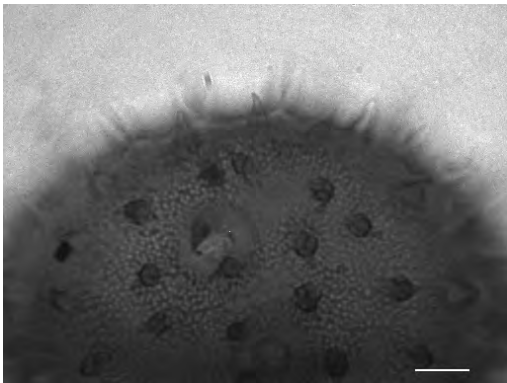
アブラナ科



ゴマ属



ヨモギ属



ワタ属



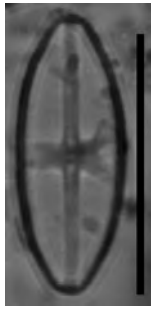
ソラマメ属

スケールはすべて 0.01 mm

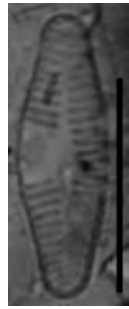
写真2 珪藻の顕微鏡写真



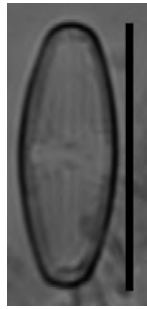
Achnanthes hungarica



Achnanthes hungarica



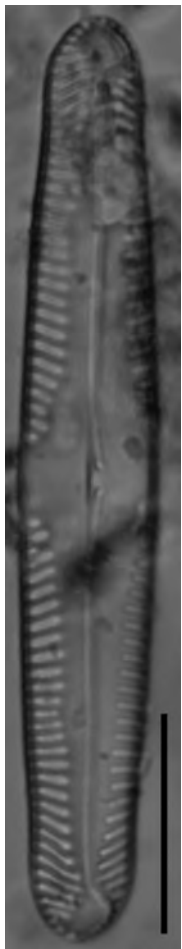
Achnanthes lanceolata



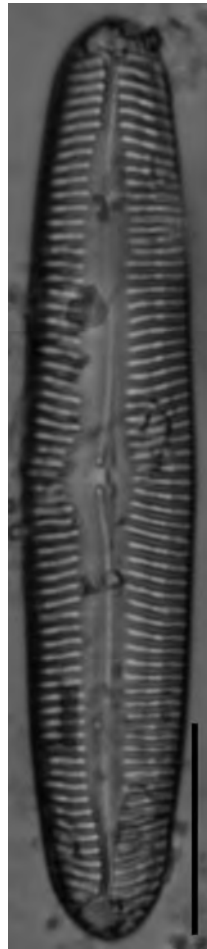
Navicula mutica



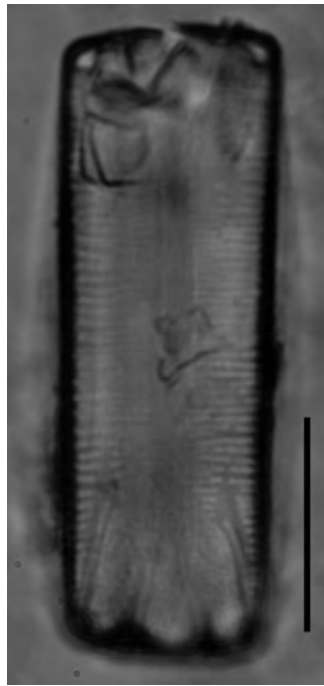
Amphora ovalis
var. *libyca*



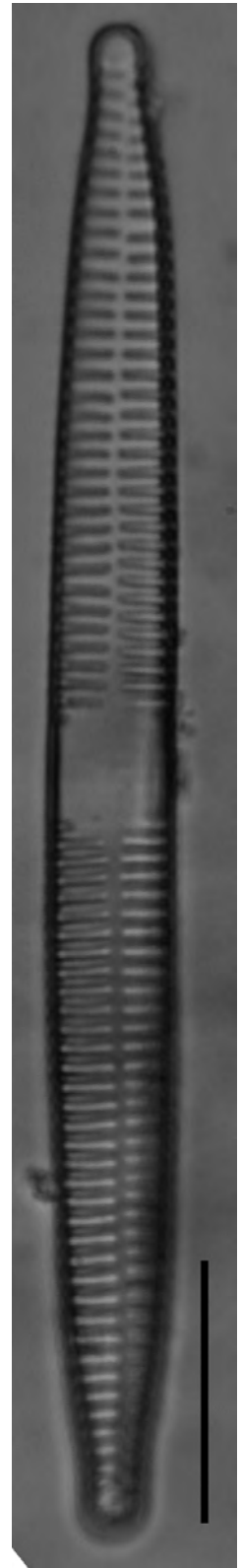
Pinnularia gibba



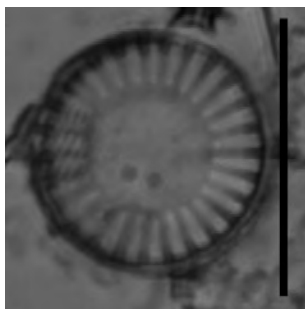
Pinnularia viridis



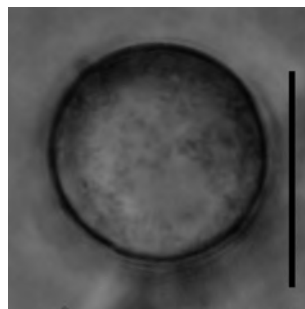
Eunotia spp.



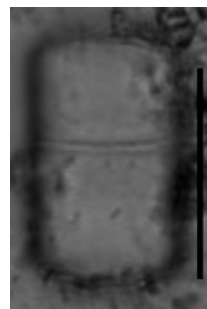
Synedra ulna



Cyclotella meneghiniana



Merosira varians



Merosira varians

スケールはすべて 0.02 mm

第7章 まとめ

今回は紀州街道を中心として、街道本体とその両側に展開した集落などを調査することが目的であった。紀州街道は、現在も幹線道路として使われており、道路部分および近接する区域に埋設管などが設けられていたことや大型建物の基礎が残存しており、盛土・整地層が厚いことから、人力掘削開始面までかなり上面の攪乱が進んでいた状況であった。調査の目安としては、江戸時代の範囲内を基準としたが、明治時代以降まで存続する遺構も存在することから、あえて明治時代の範疇に入る部分の記述は避けているが、一部この範囲を越えたものも含まれている。調査では、明治時代以降の遺物も多くみつまっているが、調査の対象からははずしている。

全般に中世以前に関しては、遺構・遺物はほとんど検出されなかった。「堺砂堆」上に位置していることから、調査中は全面にわたってほとんど砂質土の掘削のみであり、その中からも遺物を検出することはできなかった。調査の最終面は、大阪府教育委員会の指導により、黄褐色細砂層の下層にみられる黒色粘土層上面（T.P.+0.7m程度）とされたが、人為的な痕跡は検出されず、遺物はまったく出土していない。

時期の判断材料とするため、A区とC区においてサンプルを採取し、この黒色粘土層の中の炭化物により、放射性炭素年代測定をおこなった。結果として、A区では紀元前2世紀末～紀元1世紀前半の弥生時代前期～中期、C区では紀元3世紀前半～紀元4世紀中頃と紀元3世紀中頃～紀元5世紀初頭の弥生時代後期から古墳時代という結果が出ている。これにより、黄褐色細砂層は古墳時代以降の堆積ということが判明したが、約1mの厚さで堆積している黄褐色細砂層の上面で18世紀以降の遺構・遺物が検出されたことから、古代から近世初頭にかけては、人跡未踏に近い状況であったことがわかる。近接して堺環濠都市集落や住吉大社を中心とする集落が存在するにもかかわらず、古代や中世にこのような状況であったことは、にわかには信じがたいが、考古学的な成果からは、このような結果が導かれることとなった。

紀州街道については、近世の紀州徳川家の参勤交代で使われるほどの主要な街道として知られているが、今回の調査では、近世初頭以前の道は検出されなかった。古くは古代にさかのぼるが、大坂の住吉や四天王寺から熊野参詣へ向かう道として南にのびる街道として、熊野街道や住吉街道と呼ばれる幹線道路が存在していたが、これらの道は調査区内では検出されなかったことになる。このため、紀州街道はこれらの街道をそのまま利用したものではないことが判明した。現在では、堺の街の中心部と住吉大社を経て大阪市街を直接結んでいるが、近世初頭以前にはこの地を通過していなかったということである。中世には堺と住吉は密接な関係があり、往来も多かったといえるが、この地ではなく、他の場所に道が設置されていたということになる。

並松町という地名は、堺環濠都市を出てから、街道沿いに松並木が植えられていたことに由来するといふ。大和川が開削される以前からこの景観はみられたとのことから、この時点で紀州街道がこの地を通過していたことは確実である。さらに、この地の北側に大和川が開削された際には、大和川により道が分断されるが、紀州街道の道筋を残すため、当初唯一の橋（大和橋）を架けることにより、この地を通るようにしたものと考えられる。このため、近世以降に紀州街道の価値が非常に上がり、人々の動きも急激に活発になったものといえる。このため、18世紀以降の遺構や遺物が多く検出されるよ

うになったものと考えられる。堺環濠都市が大坂夏の陣で焼失した後の復興により、街並が変わり、道の方向が変化した可能性が高いものといえる。近世に入ってから開発が、この地に大規模な変革をもたらしたものと考えられる。

紀州街道部分

紀州街道に考古学的調査によるメスが入られることは、おそらく今回がはじめてのことと考えられるため、特に江戸時代を中心として幹線道路であった紀州街道の初源およびその展開を解明することが調査の目的であった。また、堺環濠都市と住吉をつなぐ部分の集落の展開を探ることも目的であった。

紀州街道部分に関しては、調査にあたって、断面観察による道路の踏み固め状況の違いなどから、便宜的に現在の道0面から最下層となる道7面まで区分した。明確に時期区分をあらわしているわけではないが、堆積状況に違いがみられるため、ある程度の時期区分の目安として使うこととした。

調査で検出された道のうち、最も古い（初期）ものは道6面である。道という性格上、出土遺物により時期を決定することは困難であるため、この道が機能し始めた時期は不明である。歴史的背景から、中世末期から近世初頭と考えられるが、はっきりしない。路面は、踏み固めによる硬く締まった薄い層から成り立っており、最も古いものは、現在の道幅よりも広い幅をもつことがわかった。現在の道の西端部より約4m西に広がっており、道幅は約11mである。ただ、その西側は、洪水砂層に削られていることから、さらに西へ広がっていた可能性も考えられる。

現在の道幅と同じになったのは、道5面であるが、時期は特定できない。この時点で西側に側溝が掘削されており、その西側には硬く締まった薄い層がみられないことから、道の西端が確定したことを表している。道の東端に関しては、側溝が検出される部分もあるが、土層の堆積状況の観察から、盛土が認められ、一部土塁状のものが見つられていたことが考えられる。これは、絵図にも記載されていることから、これを証明するものと考えられる。これ以降、現在まで道幅はほぼ固定されており、道1面のように道の両側を保護するため、石垣が設けられた時期もある。路面に関しても、詳細は不明であるが、現在のアスファルト舗装に至るまでの、様々な補強技術が使われており、踏み固めだけではない硬さをもっている。

調査成果から、この地を通る紀州街道の初源は判明したが、最初に街道を建設するにあたって、特に大規模な工事をおこなった形跡がみられないのは、かなり意外性のあることと思われる。江戸時代に、参勤交代で使われるほどの街道を新たに建設することは、かなりの重要な工事であるといえるが、特に整備されないまま通行が始まったという印象をうける。あるいは、当初はこの地を通るように計画されていなかったか、ある時期に急遽ルートを決めなければならない事態が起き、見切り発車のような状況から始まったものかもしれない。紀州街道の初源を探る目的で調査にあたったが、かえって問題点が増えてしまったといえる。街道の調査は、文献や絵図からのアプローチもおこなわれているため、総合的な判断が求められると思うが、今回の考古学的な調査成果による見解は、今のところこのようなものとなった。

紀州街道西側

街道の西側では4回にわたる大規模な洪水の痕跡が検出された。当初は、大和川に隣接している位置関係から、洪水による氾濫によるものと考えたが、礫が主体であり、かなり大きな礫もみられることか

ら、大和川の洪水とは考えにくいものである。堆積状況の観察により、西からの強い流れが認められることから、海からの津波や高潮によるものと判断した。現在の海岸線に比べて、当時の海岸線は近接しており、紀州街道から西へ500m程度の位置にあったものと推定される。大地震や大雨、嵐による被害の記録が多く残っていることから、これらの洪水も特定できる可能性がある。ただ、出土遺物による細かい時期決定はできないことから、むずかしい部分もある。

遺物の中に、堺の瓦仲間の刻印が押された瓦類がみられ、18世紀末～19世紀前半の細かい時期決定

表6 『大坂瓦屋仲間記録』に見える堺の瓦屋仲間（嶋谷 1999論文より転載）

年代		史料名	人名	住所	人名	住所	人名	住所
安永	7 1778	播鉢職一件文書[播州明石] 大坂賣瓦師仲間入願写	下田又三郎				瓦屋七兵衛	農人町
寛政	2 1790 4月							
寛政	10 1798 11月	瓦方名前切替帳	下田又三郎	北瓦町	瓦屋九郎兵衛	北瓦町	瓦屋七兵衛	北材木農人町
文化	5 1808	播鉢職一件文書[播州明石]						
文化	7 1810 3月	堺瓦屋仲間格式定帳	下田源兵衛		瓦屋九郎兵衛		瓦屋七兵衛	
文化	10 1813	北材木農人町水帳絵図					瓦屋七兵衛	
文化	12 1815	播鉢職一件文書[播州明石]	下田源兵衛	北瓦町				
文化	14 1817	播鉢職一件文書[播州明石]						
文政	2 1819 9月	堺瓦屋仲間格式定帳(貼紙)					帯屋喜太郎	車農人町
文政	4 1821 6月	堺瓦屋瓦株名前帳	下田源兵衛	北瓦町	瓦屋九郎兵衛	綾山口町	帯屋喜太郎	
文政	4 1821 11月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)			瓦屋九郎兵衛			
文政	6 1823 9月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)	下田源兵衛	北瓦町			帯屋喜太郎	
文政	6 1823 11月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
文政	7 1824 4月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
文政	7 1824 11月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)					海部屋清兵衛	和泉屋吉兵衛
文政	8 1825 10月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
文政	10 1827 1月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
文政	10 1827 2月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
文政	12 1829 7月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
文政	13 1830 11月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
文政	13 1830 12月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
天保	2 1831 9月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)			瓦屋九兵衛	柳農人町		
天保	2 1831 11月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
天保	7 1836 1月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)			瓦屋九郎兵衛	経王寺前町		万代屋七郎兵衛
天保	7 1836 6月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
天保	7 1836 9月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)			瓦屋九兵衛			
天保	9 1838 5月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)			瓦屋九兵衛	北瓦町		
天保	11 1840 10月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)					瓦屋九八郎	北瓦町

年代		史料名	人名	住所	人名	住所	人名	住所
安永	7 1778	播鉢職一件文書[播州明石] 大坂賣瓦師仲間入願写	谷 傳兵衛	宿屋農人町	帯屋喜十郎	北材木農人町	瓦屋利兵衛	
寛政	2 1790 4月							
寛政	10 1798 11月	瓦方名前切替帳	瓦屋傳兵衛		瓦屋喜十郎		瓦屋利兵衛	
文化	5 1808	播鉢職一件文書[播州明石]						
文化	7 1810 3月	堺瓦屋仲間格式定帳	瓦屋傳兵衛		瓦屋喜十郎	北材木農人町	瓦屋利兵衛	
文化	10 1813	北材木農人町水帳絵図						
文化	12 1815	播鉢職一件文書[播州明石]						
文化	14 1817	播鉢職一件文書[播州明石]	瓦屋傳兵衛		瓦屋喜十郎		瓦屋利兵衛	
文政	2 1819 9月	堺瓦屋仲間格式定帳(貼紙)						
文政	4 1821 6月	堺瓦屋瓦株名前帳	瓦屋傳三郎	宿屋農人町	瓦屋喜十郎	北材木農人町	瓦屋利兵衛	神明町濱
文政	4 1821 11月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
文政	6 1823 9月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)			瓦屋喜十郎	北材木農人町		
文政	6 1823 11月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)	瓦屋傳三郎					
文政	7 1824 4月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
文政	7 1824 11月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
文政	8 1825 10月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)					瓦屋菊松	神明町濱
文政	10 1827 1月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
文政	10 1827 2月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)			伊勢屋清兵衛			
文政	12 1829 7月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)			細屋喜一郎			
文政	13 1830 11月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)	和田屋志波					
文政	13 1830 12月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)	和泉屋里う					
天保	2 1831 9月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
天保	2 1831 11月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
天保	7 1836 1月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
天保	7 1836 6月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)	和泉屋勘兵衛					
天保	7 1836 9月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
天保	9 1838 5月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						
天保	11 1840 10月	堺瓦屋瓦株名前帳(貼紙)						

に大きな役割を果たしている。嶋谷氏の研究により、堺の瓦屋仲間の実態の一端が解明されており、瓦屋仲間の個人の特定がある程度わかるようになっている（表6）。洪水砂の中からも、この堺の瓦仲間刻印が押された瓦類が数点みついている。第1回洪水砂から「堺谷傳兵衛」の刻印が押された瓦が出土しており、19世紀初頭のものである。第2回洪水砂からはみつっていないが、第3回洪水砂からは「堺下田亦三郎」の刻印が押された瓦が出土しており、18世紀末～19世紀初頭のものである。洪水砂からの遺物であるため、時期を特定することはむずかしいが、これらの刻印が押された瓦類により、下限をある程度推測することができる。このため、第1回洪水は、19世紀初頭以前には起こりえないということになるのである。

堺市内を襲った洪水被害については、表7に簡単にまとめているが、18～19世紀で最も大規模な被害は、嘉永7(1854)年の安政大地震（南海地震）による津波被害である。細かい時期決定はできないが、今回確認された洪水で最も規模の大きなものは、4回のうち第2回洪水である。このため、第2回洪水を安政大地震（南海地震）による津波被害とすると、1854年という年代が与えられることになり、出土遺物の点からも無理はないものと考えられる。これ以外の洪水に関しては、特定はむずかしいが、18～19世紀におさまるものといえよう。

紀州街道東側

一方、街道の東側では、西側でみられた4回にわたる大規模な洪水の痕跡はほとんど検出されていない。西からの高潮や津波の被害は紀州街道までで、東側までは及んでいないことがわかる。このため、遺構面は比較的良好に残存しており、紀州街道沿いに広がるゴミ穴や井戸、水溜め遺構などがまとめて検出された。これらの遺構は、廃絶後に多くの廃棄物で埋められていることから、遺物の出土量は非常に多くなった。

ゴミ穴は、陶磁器をはじめとする生活雑器がほとんどで、当時の食器などが多い。現在では考えられないほど大切に使われたようで、染付碗や皿の中には、高級品とはいえないようなものまで、焼き継ぎにより修復されているものが多くみられる。また、挿鉢や焙烙、七厘、焔炉などの調理具のほかに、火鉢や灯明皿なども多く検出されており、生活に密着した遺物である。さらに、仏飯器や仏花瓶、神酒徳利なども出土しており、信仰に関わる遺物として特徴的である。一方、泥面子や土人形なども多くみら

表7 堺市内洪水被害記録一覧

年	月 日	被害の内容
709 和銅2		河内・摂津など5国で雨が続き、稲苗を損なう
1471 文明8	8月6日	高潮による民家数千戸の流失と数百人の犠牲者
1707 宝永4		宝永津波 高さ2.7m
1790 寛政2		海嘯による港湾及び中浜筋の被害
1791 寛政3		海嘯による港湾及び中浜筋の被害
1854 嘉永7	11月5日	安政の大地震（南海地震）による海嘯の襲来〔安政南海道津波〕
1868 慶應4	5月	豪雨による大和橋上流右岸決壊並びに安立町民家流失
1871 明治4	5月	暴風雨による若松新田の流失並びに町中半ば浸水
1884 明治17	7月	石津川決壊による湊村の浸水
1885 明治18	6月	豪雨による市街地の浸水
1896 明治29	9月	豪雨による大和川と石川の堤防決壊
1903 明治36	7月	大和川決壊による堺市北部地帯の浸水
1913 大正2		大和川洪水による市街地の浸水
1917 大正6		石川の堤防決壊と大和川氾濫
1934 昭和9	9月21日	室戸台風による大惨害
1945 昭和20	10月14日	阿久根台風による大惨害
1950 昭和25	9月3日	ジェーン台風による被害
1952 昭和27	7月10日	豪雨による市街地の浸水
1953 昭和28	5月31日	豪雨による市街地の浸水
1953 昭和28	6月7日	台風による市街地の浸水
1953 昭和28	9月25日	台風13号による市街地の浸水
1954 昭和29	6月29日	豪雨による市街地の浸水
1954 昭和29	7月4日	豪雨による市街地の浸水
1956 昭和31	9月25日	台風15号による市街地の浸水
1957 昭和32	6月27日	台風5号による市街地の浸水
1959 昭和34	8月13日	台風7号による市街地の浸水
1960 昭和35	6月22日	豪雨による市街地の浸水
1961 昭和36	6月27日	台風6号による市街地の浸水
1961 昭和36	10月28日	豪雨による市街地の浸水
1979 昭和54	6月28日	豪雨による市街地の浸水
1982 昭和57	8月2日	台風10号による市街地の浸水
1995 平成7	7月5日	豪雨による市街地の浸水

れ、玩具も出土していることになる。ゴミ穴からは、これ以外に貝殻や骨も多くみつかっており、食物残渣として捨てられているものである。細かい分析はしていないが、当時の食生活を知る上で重要な手がかりを与えてくれるものである。ただ、土質の関係で、残存していない可能性もあるが、木製品は比較的少なく、下駄などが数点みられるのみであった。箸などは出土していない。

出土遺物のうち、陶磁器類は時期決定に重要なものであるが、今回の調査では後世の整地によって、時期差の認められるものが同時に検出されることが多く、細かい時期決定はできなかった。ただ、遺物の中に18世紀以前のものはほとんどみられないことから、基本的には18世紀以降に展開する遺構群であり、それをさかのぼるものはないと考えられる。遺物の時期差は認められるが、調査成果として同一の地区で同一の包含層から出土したものを、あえてそのまま報告している。

水溜め遺構は、今回の調査の中で特徴的な遺構である。大型のもので、地山が砂地である場所で、わざわざ工夫をして水溜め施設を構築している。用途は不明であるが、形状もつくりも異なっており、狭い範囲の中で、このような施設が必要であった意義が興味深いものである。

紀州街道沿いの50土坑は、素掘りのものであるが、埋土の堆積状況の観察により、2回掘り直されたことがわかった。最終的には洪水砂により埋まっていることから、洪水に屈してしまったようであるが、何度も洪水により埋まった土砂を掘り直して、土坑を復活させた努力が感じられる。50土坑機能時の植生などを探るため、1回目と2回目の最下層である黒色粘土をサンプルとして採取し、花粉・珪藻分析をおこなった。結果的にいずれも湿原状であり、水の流れはあまりなく、アシやガマなどが生育していたことが推測されている。水溜め施設として機能していたことが証明されたものといえる。

これに対し、調査区東端部で検出された29土坑は、木組みの囲いを大型の板材を用いてまわりに組んでおり、洪水対策ともいべき構造をもっている。また、内部は八角形に区画されており、さらに導線として、板石を用いた階段を設けている。庭園の苑池の様相を呈しているが、かなり手の込んだ構造をもつものである。この遺構は、洪水によって埋まったことはないものと考えられる。こちらも50土坑と同様に、機能時の植生などを探るため、最下層である黒色粘土をサンプルとして採取し、花粉・珪藻分析をおこなった。珪藻分析により、50土坑とは異なり、湿地状態ではなく、水の流れがあったものの結果が出た。ただ、導水あるいは排水をおこなっているような施設はみつかっておらず、周囲からも溝などは検出されていない。29土坑の上部が後の整地などにより削平され、水路などの溝が失われた可能性は考えられる。近接して46溝が検出されていることから、この溝につながることも可能性としてあげている。また、木組が丁寧に組まれていることや、階段状の板石を並べて、内部まで入れるような施設であることなどから、50土坑とは異なり、単なる水溜めというよりは、水の流れる池状の施設であったことも考えられる。さらには、花粉分析により、50土坑が埋まった後に29土坑が掘削されたことが想定されている。このため、同時には存在していなかったことになるが、大幅な時期差は認められないため、50土坑の存在は知っていたものと考えられる。両者の関係は不明で詳細は決めかねるが、様々な問題点を提供する遺構である。

今回の調査では、紀州街道や出土遺構・遺物に関する問題点が多く、うまくまとまっていない部分もあることから、研究者にとって不満足な点が多いことは承知している。すべての責任は、編集者の力不足にあるということで勘弁していただきたい。ただ、今回の整理作業は、調査成果の公表という点を重視し、まとめていることから、各専門の研究者の方々により、これらの調査成果がさらに各方面での研究の発展の一助となれば、幸いである。

参考文献一覽

一般書関係

- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編 1983 『角川日本地名大辞典 27 大阪府』 角川書店
『日本歴史地名大系 28 大阪府の地名』 平凡社 1986
井上正雄 1921 『大阪府全志 卷4』 (復刻版 1985 清文堂出版)

陶磁器全般

- 加藤唐九郎編 1984 『原色陶器大辞典』 淡交社
植崎彰一編 1987 『日本やきもの集成 新装版 3 瀬戸・美濃・飛騨』 平凡社
満岡忠成編 1987 『日本やきもの集成 新装版 6 近畿Ⅰ』 平凡社
満岡忠成編 1987 『日本やきもの集成 新装版 7 近畿Ⅱ』 平凡社
西田宏子 1988 「近世陶磁器研究の現状」『月刊考古学ジャーナル』297 ニュー・サイエンス社
森本伊知郎 2009 『近世陶磁器の考古学—出土遺物からみた生産と消費』 雄山閣

肥前陶磁器関係

- 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布～発掘資料を中心として～」『国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館
大橋康二 1985 「肥前陶磁の流れ」『季刊考古学』13 雄山閣出版
大橋康二 1986 「肥前古窯の変遷」『九州陶磁文化館研究紀要 第1号』 佐賀県立九州陶磁文化館
大橋康二 1988 「伊万里磁器研究の現状」『月刊考古学ジャーナル』297 ニュー・サイエンス社
大分県教育委員会 1993 『府内城三ノ丸遺跡』

瀬戸美濃関係

- 藤沢良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』V 瀬戸市歴史民俗資料館
藤沢良祐 1987 「本業焼の研究(1)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VI 瀬戸市歴史民俗資料館
藤沢良祐 1988 「本業焼の研究(2)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VII 瀬戸市歴史民俗資料館
藤沢良祐 1989 「本業焼の研究(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VIII 瀬戸市歴史民俗資料館
井上喜久男 1988 「美濃陶磁器研究の現状」『月刊考古学ジャーナル』297 ニュー・サイエンス社

江戸遺跡関係

- 古泉弘 1985 「江戸の街の出土遺物—その展望—」『季刊考古学』13 雄山閣出版
佐々木達夫 1985 「物資の流れ—江戸の陶磁器」『季刊考古学』13 雄山閣出版
佐々木達夫 1987 「江戸へ流通した陶磁器とその背景」『国立歴史民俗博物館研究報告』14 国立歴史民俗博物館
成瀬晃司・堀内秀樹 1990 「消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部付属病院地点—医学部付属病院中央診察棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点— 東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3』 東京大学遺跡調査室
堀内秀樹 1992 「『備前系焼締め播鉢』の系譜—17世紀以降の備前播鉢及び堺播鉢について—」『東京考古』10
長佐古真也 1993 「『受付灯明皿』にみる生産と流通—受皿の型式分類と量的把握を通して—」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』XII 東京都埋蔵文化財センター
長佐古真也 1994 「江戸遺跡における18世紀後半の陶磁器組成—尾張藩麴町邸跡出土一括資料を中心に—」

『東京都千代田区尾張藩麴町邸跡』 紀尾井町6-18遺跡調査会

長佐古真也 1994 「和泉伯太藩上屋敷跡出土の陶磁器の様相」『和泉伯太藩上屋敷跡』 地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会

長佐古真也 1995 「8号遺構出土一括資料からみる19世紀初めの陶磁器の様相」『江戸城跡 和田倉遺跡』 千代田区教育委員会

堀内秀樹・坂野貞子 1996 「江戸遺跡出土の18・19世紀の輸入陶磁器」『東京考古』14

庭野薫 1996 「001号・558号遺構出土陶磁器の年代の様相について」『東京都千代田区隼町遺跡』 千代田区隼町遺跡調査会

堀内秀樹 1999 「出土播鉢からみた様相差—江戸・江戸周辺・上方の分析から—」『関西近世考古学研究』 VII 関西近世考古学研究会

東京大学埋蔵文化財調査室 1999 「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)」『東京大学構内遺跡調査研究年報2』

大成可乃 2011 「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(2)—器種(小器種)の出土状況—」『東京大学構内遺跡調査研究年報7』 東京大学埋蔵文化財調査室

東京都清瀬市下宿内山遺跡発掘調査団 1986 『下宿内山遺跡』

千代田区紀尾井町遺跡調査会 1988 『東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告書』

東京大学遺跡調査室 1989 『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点 東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1』

新宿区四谷三丁目遺跡調査団 1991 『四谷三丁目遺跡』

新宿区四谷三丁目遺跡調査団 1991 『江戸遺跡検出のやきもの分類(兼凡例)』(『四谷三丁目遺跡』別冊)

(財)東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター 1994 『丸の内三丁目遺跡』

新宿区南町遺跡調査団 1994 『東京都新宿区南町遺跡』

豊島区遺跡調査会・豊島区教育委員会 2007 『巣鴨町IX—東京都豊島区・巣鴨遺跡における近世町場の発掘調査— 豊島区埋蔵文化財調査報告23』

豊島区遺跡調査会・豊島区教育委員会 2008・2009 『巣鴨町XII—東京都豊島区・巣鴨遺跡における近世町場の発掘調査— 第1分冊・第2分冊 豊島区埋蔵文化財調査報告26』

淡路町二丁目西部地区市街地再開発組合・(株)四門 2011 『神田淡路町二丁目遺跡』

堺関係

稲垣正宏 1985 「18・19世紀の日常雑器」『堺市文化財調査報告書第21集』 堺市教育委員会

白神典之 1987 「堺環濠都市遺跡発掘調査報告書—SKT204地点—」『昭和61年国庫補助事業発掘調査報告』 堺市教育委員会

白神典之 1988 「堺摺鉢について」『堺環濠都市遺跡(SKT79)発掘調査報告 堺市文化財調査報告書第37集』 堺市教育委員会

森村健一 1988 「堺環濠都市遺跡出土の近世陶磁器」『月刊考古学ジャーナル』297 ニュー・サイエンス社

嶋谷和彦 1989 「溝SD002出土の18世紀第2四半期の一括遺物について」『中百舌鳥遺跡発掘調査報告—堺市中百舌鳥町4丁 NAN15地点・筒井家屋敷内— 堺市文化財調査報告書第47集』 堺市教育委員会

土山健史 1989 「堺環濠都市遺跡における15、16世紀の在り土器」『中近世土器の基礎研究』V 日本中世土器研究会

續伸一郎 1989 「堺環濠都市遺跡調査報告書 SKT202地点—堺市車之町西1丁6番」『堺市文化財調査報告書 第49集』 堺市教育委員会

白神典之・増田達彦 1990 「堺環濠都市遺跡立会調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告 第7冊』 堺市教育委員会

續伸一郎 1990 『堺環濠都市遺跡発掘調査報告書 SKT153地点—堺市九間町東3丁1—17：錦小学校内—堺市文化財調査報告書 第51集』 堺市教育委員会

嶋谷和彦 1990 「近世瓦に見られる堺瓦師の刻印銘（一）」『摂河泉文化資料』No.41 摂河泉文庫

白神典之・増田達彦 1991 「堺における近世の陶磁器と土器—遺跡出土の一括資料の紹介をかねて—」『関西近世考古学研究』I 関西近世考古学研究会

白神典之 1992 「堺播鉢考」『東洋陶磁』19 東洋陶磁学会

嶋谷和彦 1993 「堺・大坂出土の刻印瓦—堺瓦を中心に—」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第27回）資料』（財）大阪文化財センター

堺市博物館 1995 『堺と三都』図録

嶋谷和彦 1996 「堺播鉢の生産と流布」『月刊考古学ジャーナル』409 ニュー・サイエンス社

十河良和 1996 「堺環濠都市遺跡出土の土師質土器・炮烙について」『関西近世考古学研究』IV 関西近世考古学研究会

堺市博物館 1997 『堺—もの・ひと・こと—』図録

白神典之・増田達彦 1999 「堺環濠都市出土の調理具・貯蔵具—江戸期の播鉢・鍋・徳利・植木鉢—」『関西近世考古学研究』VII 関西近世考古学研究会

嶋谷和彦 1999 「近世・堺の瓦屋仲間と刻印瓦—住友銅吹所跡出土の堺銘刻印瓦に寄せて—」『大阪市文化財協会研究紀要』第2号（財）大阪市文化財協会

大坂・畿内関係

長谷川眞 1988 「丹波系播鉢について」『中近世土器の基礎研究』IV 日本中世土器研究会

大平茂 1992 「近世丹波焼播鉢の型式分類と編年」『三田市下相野窯址 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XVII』 兵庫県教育委員会

積山洋 1995 「近世大坂出土の土師質土器編年、素描」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3（財）大阪府埋蔵文化財協会

渡邊忠司 1999 「近世大坂のくらしと食生活」『関西近世考古学研究』VII 関西近世考古学研究会

森 毅 1999 「大坂における17世紀の供膳具の様相」『関西近世考古学研究』VII 関西近世考古学研究会

積山洋 1999 「大坂の土師質土器—主要器種を中心に—」『関西近世考古学研究』VII 関西近世考古学研究会

乗岡実 1999 「近世備前焼の播鉢—素描メモ—」『関西近世考古学研究』VII 関西近世考古学研究会

長谷川眞 2000 「近世丹波系播鉢の変遷とその系譜関係」『関西近世考古学研究』VIII 関西近世考古学研究会

池田研 2005 「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』 大阪大学考古学研究室編

遺物觀察表

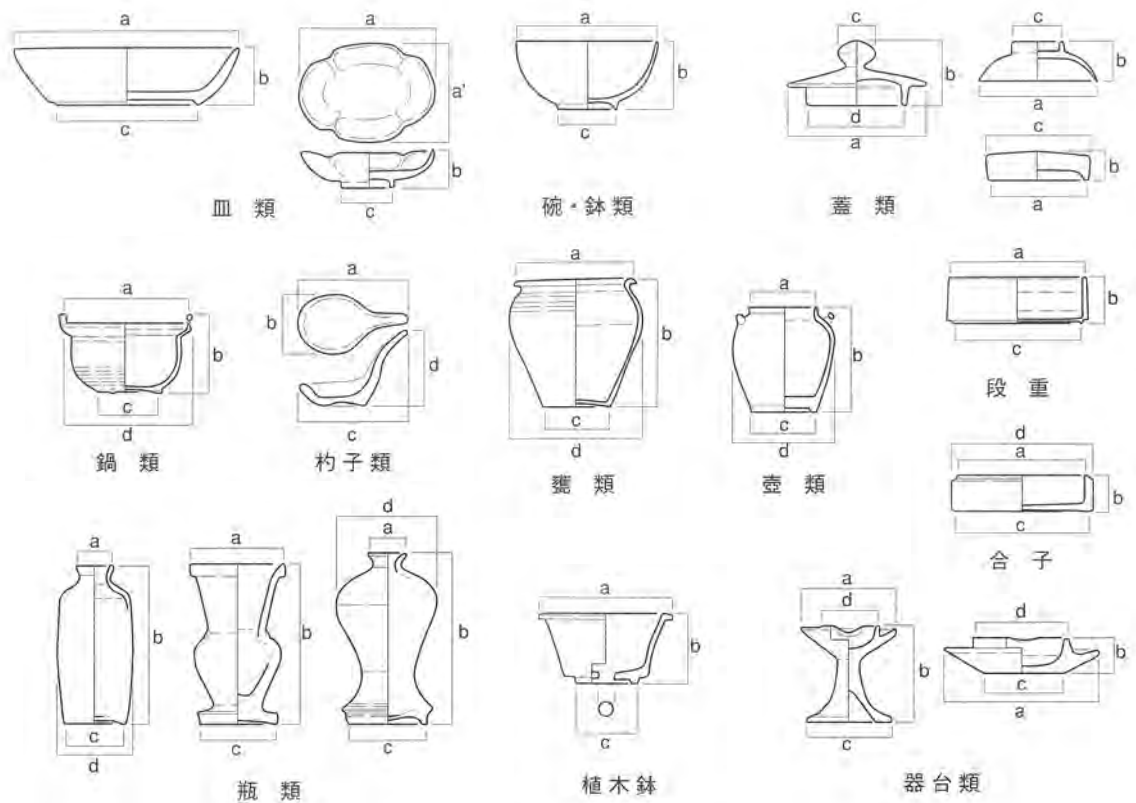
観察表凡例

- 磁器、陶器、土器類の計測にあたっては、以下の計測方法を参考とした。

『江戸遺跡検出のやきもの分類（兼凡例）』（『四谷三丁目遺跡』別冊） 1991

新宿区四谷三丁目遺跡調査団 第15図 遺物計測部位 p32

- 表中の法量の a～d は、下図の部位を計測したものである。
- 法量のうち、*がつく数値は、復元値である。



遺物観察表(1)

報告 番号	挿図 番号	写真 図版	区	地区別	遺構面・層名	種別	器形	法量 (cm)			残存 率(%)	備考	
								(a)	(d)	(b)			
1	15		B	8 i	黄褐色細砂層	弥生土器	甕			*9.5	10		
2	21		B	7 i	道5面下	染付	碗			4	3.3	20	半筒形
3	21		A	7g	道5面下拡張盛土層	染付	碗	7.7		3.8	5.1	95	半筒形 若松文
4	21		A	7g	道5面下拡張盛土層	陶器	碗	8.5		*4.6	6.4	80	半筒形 貫入あり
5	21		B	7 i	道5面下	染付	皿	*18.4		9.4	4.4	50	見込み蛇の目釉剥ぎ 印版五弁花 蛇の目高台
6	21		A	7g	道5面下拡張盛土層	白磁	油壺				7	40	
7	21		A	7g	道5面下拡張盛土層	土師質	焜炉	*16.1			14.7	20	
8	21		A	7g	道5面下拡張盛土層	土師質	火鉢	25		18	7.9	90	
9	21		A	7g	道5面下拡張盛土層	土師質	火鉢	15		12.8	5.6	60	外面口縁付近に墨書あり
10	21		A	7h	中央土層確認トレンチ	陶器	摺鉢	*29.5		*15.3	9.8	20	丹波
11	21		A	7g	道5面下拡張盛土層	陶器	摺鉢	*34.6			12.2	30	堺
12	22		B	7 i	道4面下層相当	染付	輪花皿	*18.3		*11.6	3.9	20	見込み松竹梅円形 底部「富貴(長)春」
13	22		A	8h	3回目洪水層下盛土	陶器	土瓶蓋	14.4	7.2	5.8	3.5	100	
14	22		A	7g	3回目洪水層下盛土	陶器	碗	*7.4		*5.2	6.3	30	半筒形
15	22		B	7 i	道4面下層相当	青磁	碗			3.8	4.5	40	
16	22		A	8h	3回目洪水層下盛土	青磁	碗	10.9		3.9	6.1	100	
17	22		A	7g	3回目洪水層下盛土	陶器	碗	*10.9		4	4.8	50	唐津 刷毛目
18	24		B	7 i	道3面下砂層(東側石垣外)	軟質陶器	小型品	*5.0		*4.0	1.7	50	
19	24		B	7 i	東側石垣下	軟質陶器	小型品	6.2		3	1.3	60	
20	24		B	7 i	道3面下砂層(東側石垣外)	陶器	蓋	9	6.9	2.5	2.5	100	
21	24		B	7 i	東側石垣下	染付	蓋	*8.5		3.4	2.4	70	見込み松竹梅円形
22	24		A	6g・ 6h	道3面下砂層(東側石垣外)	陶器	摺鉢					10	施釉
23	24		B	7 i	東側石垣下	陶器	小壺			5	9.5	80	
24	24		B	7 i	東側石垣下	陶器	台付灯明皿	*5.7		3.4	4.6	50	灰釉
25	24		B	7 i	東側石垣下	土師質	火鉢			*18.2	6.6	20	輪高台
26	24		A	7h	道3面下砂層(西側石垣中央)	陶器	摺鉢	*32.0		*14.4	11.5	50	備前
27	25		A	7h	道2面下層	染付	碗	*10.6		3.9	6.2	40	端反形 山水文?
28	25		A	7h	道2面下層	染付	碗	*10.6		*4.0	5.9	40	端反形 内面亀甲 外面雷文 楼閣山水
29	25		A	7g	北壁側溝	染付	碗			8.4	5	30	広東形 見込み五弁花 蛇の目高台
30	25		A	7h	道2面下層	染付	小碗	7.1		2.4	3.4	100	笹文
31	25		A	7h	道2面下層	染付	小碗	*6.0		*2.4	3	50	
32	25		A	6g	道2面下層	染付	猪口	*6.1		2.5	2.8	70	山水
33	25		A	6g	道2面下層	染付	蓋	8.3	7	*2.7	2.3	90	色絵 蝶文
34	25		A	6g	道2面下層	陶器	碗	*8.2		*3.5	5.5	25	瀬戸美濃 亀甲文、放射状沈線
35	25		A	7h	道2面下層	陶器	台付灯明皿	6.2		4.2	5.1	70	灰釉
36	25		A	6g	道2面下層	白磁	紅皿	5		1.6	1.6	100	
37	25		A	7h	道2面下層	土師質	秉燭	5.7		3	3.2	100	
38	25		A	6g	道2面下層	陶器	灯明皿	7.4		3	1.3	100	内面施釉
39	25		A	7h	道2面下層	陶器	蓋	5.6		2.2	2.5	80	角形
40	25		A	7h	道2面下層	青磁	鉢	*12.0		*5.4	5	40	
41	25		A	7h	道2面下層	染付	皿	12.4		5	3.2	70	蛇の目釉剥ぎ 印版五弁花
42	25		A	7h	道2面下層	染付	輪花皿	10.2		5.6	2.2	80	楼閣山水
43	26		A	6g	道2面下層	瓦質	羽釜	*21.0	28.7		9	10	
44	26		A	6g	道2面下層	陶器	摺鉢	*30.7		*15.0	11.6	25	堺
45	26		A	6g	道2面下層	陶質	焼台	*14.7		*15.0	4.2	40	
46	26		A	6g	道2面下層	陶器	火入れ	*13.0		*13.9	5.6	40	
47	26		A	6g	道2面下層	陶質	焼台	*18.3		*18.4	8	25	
48	26		A	7h	道2面下層	土師質	火入れ			9.5	7.8	40	
49	26		A	7h	道2面下層	土師質	台付火鉢			15.6	*11.9	50	輪高台
50	27		A	7h	道1面下層	染付	碗	*10.5		3.9	6.3	40	格子文
51	27		A	6h	紀州街道東側埋土最上層	陶器	蓋	5.8	4.1		1.2	100	
52	27		A	7h	道1面下層	染付	鉢	*13.7		*6.8	5.5	40	端反形 内面格子文
53	27		A	7h	道1面下層	染付	小杯	*7.3		*2.8	2.4	30	蓋?
54	27		A	7g	道1面下層	染付	碗	*8.5		3.4	4.5	50	端反形
55	27		A	7h	道1面下層	染付	碗	8.8		3.4	5	60	焼き継ぎ印あり
56	27		A	7g	道1面下層	染付	蓋	*8.7		*3.5	2.7	40	手描き
57	27		A	7g	道1面下層	陶器	蓋	*7.0	*5.0	1	2.9	50	刷毛目
58	27		A	7g	道1面下層	陶器	蓋	9.5	7.1		2.1	80	鉄絵
59	27		A	7g	道1面下層	陶器	蓋	9.7	7.2	2.4	3.6	95	鉄釉 トビカンナ
60	27		A	7h	道1面下層	染付	神酒徳利			4.1	9	40	
61	27		A	7g	道1面下層	染付	碗	*10.8		4.4	5.1	30	端反形 見込み斜格子 外面格子文
62	27		A	7g	道1面下層	陶器	受付き灯明皿	5.5		2.5	1.3	70	
63	27		A	7h	道1面下層	土師質	植木鉢			10.7	6.5	30	外面に櫛描き文あり
64		20	A	6h・ 7h	22土坑	土製品	ふいごの羽口	8.5					残長15.5
65		20	A	6g	道3面下	銅製品	蓋	9.4			2.0	100	

遺物観察表（2）

報告 番号	挿図 番号	写真 図版	区	地区割	遺構面・層名	種別	器形	法量 (cm)				残存 率(%)	備 考		
								(a)	(d)	(c)	(b)				
66		21	A	6h	道3面下	銅製品	緋銭	2.3						「寛永通宝」	
67		20	A	6g	道1面下	土製品	火鉢			16.6	6.0	20		底部に墨書あり	
68		21	A	7h	道1面下	陶器	行平鍋持ち手					10		「寿」字 残長7.3、幅3.35	
69		21	A	7h	道1面下	陶器	行平鍋持ち手					10		樹木仙人印文 残長7.1、幅3.0	
70		21	A	7h	道1面下	土製品	土人形(牛)	6.25			3.0	100		型作り成形左右貼合せ	
71		21	A	7h	道1面下	貝製品	バイ独楽	*3.0				*1.8			
72	31		B	9h	第1回洪水砂層	染付	皿?			5.6	*1.9	50		高台内に草花文	
73	31		A	10h	第1回洪水砂層	陶器	碗	*11.8		*5.7	5	35		唐津 刷毛目	
74	31		B	9h	第1回洪水砂層	染付	蓋	11.6	10.2	3.6	3.2	40			
75	31		A	8h	第1回洪水砂層	染付	鉢			*10.2	7.8	30			
76	31		B	9h	第1回洪水砂層	陶器	灯明皿	*11.0		*3.6	2.7	40		内面施釉	
77	31		B	9h	第1回洪水砂層	染付	碗	*7.6				*3.4	45		
78	31		A	10h	第1回洪水砂層	陶器	皿	*28.8				*4.3	30	馬の目文	
79	31		B	9h	第1回洪水砂層	陶器	受付き灯明皿	*11.4		*4.1	2.5	45		透明釉	
80	31		A	8h	第1回洪水砂層	陶器	皿	*10.9		4.3	3.1	60		灰釉 菊紋貼付け	
81	31		A	9h	第1回洪水砂層	陶器	皿	*14.6				*2.9	25	灰釉 菊紋貼付け	
82	31		A	6h	石垣外側埋土	陶器	摺鉢	*18.0			9	7	40	小型	
83	32		A	8h	第1回洪水砂層	土師質	焜炉	*23.3				*10.9	30	穿孔1ヶ所残存	
84	32		A	8h	第1回洪水砂層	陶器	摺鉢	*27.8		*12.2		*10.2	30	堺	
85	32		A	8h	第1回洪水砂層	陶器	摺鉢	*47.0				*14.0	20	堺	
86	32		A	10h	第1回洪水砂層	陶器	大型甕				*42.6	14.9	20		
87	34		B	8h	20木組	染付	輪花皿	*17.9		11	3.7	50		底部「富貴長春」 松竹梅 唐草文	
88	34		B	8h	20木組	染付	碗	*7.2		3.7	5.7	50		半筒形 焼き継ぎあり	
89	34		B	8h	20木組	染付	小碗	7.3		3.4	3.2	90		手描き くらわんか	
90	34		B	8h	20木組	陶器	蓋	5		0.6	1.3	100			
91	34		B	8h	20木組	染付	碗	*11.1				*5.1	20	七宝つなぎ文	
92	34		B	8h	20木組	陶器	碗	9.5		3.6	5.7	100			
93	34		B	8h	20木組	陶器	甕				21.8	*15.8	30	内面格子タタキ	
94	35		A	8g	第2回洪水砂層	染付	碗	*7.2		*4.3	6.3	70		半筒形 内面口縁部四方禱	
95	35		A	8g	第2回洪水砂層	染付	碗	*9.6		*3.9	5.8	60		厚手碗 鬼蔦	
96	35		A	8h	第2回洪水砂層、20木組付近	染付	碗	*10.8		*4.5	4.9	50		内面蛇の目釉はぎ?厚手碗	
97	35		A	8h	第2回洪水砂層、20木組付近	染付	碗	*12.2		*5.4	6.9	45		内面口縁部四方禱	
98	35		B	8i	第2回洪水砂層	染付	碗	11.8		4	6.2	50		厚手碗	
99	35		A	8g	第2回洪水砂層	染付	輪花皿	*20.7		*12.4	3	25			
100	35		A	8h	第2回洪水砂層、20木組付近	染付	皿	*19.0		*9.8	4.1	50		見込み蛇の目釉剥ぎ 印版 扇・唐草文	
101	35		A	8h	第2回洪水砂層、20木組付近	白磁	碗	*7.8		*2.8	4.5	50			
102	35		B	8i	洪水砂層(第1回・2回)	白磁	碗	11		4.1	6.6	98			
103	35		A	8h	第2回洪水砂層	土師質	灯明皿	*6.2		*3.4	1.1	50		内面施釉	
104	35		A	8h	第2回洪水砂層、20木組付近	土師質	燭台	2.7		4.4	5.3	70			
105	35		A	8h	第2回洪水砂層、20木組付近	青磁	香炉	*10.6				*8.0	40		
106	35		A	8h	第2回洪水砂層、20木組付近	土師質	受付き灯明皿	*9.7				1.4	60		内面施釉
107	36		A	8h	第2回洪水砂層	土師質	火鉢	*35.6				9.2	30		
108	36		A	8h	第2回洪水砂層下盛土	土師質	甕					*33.2	*30.4	30	
109	37		A	8h	第3回洪水砂層下盛土	土師質	火鉢	22		16.3	14.9	70		輪高台	
110	37		A	8h	第3回洪水砂層下盛土	土師質	火入れ	10.4		10.6	5.7	70		○印刻印あり(外面)	
111	39		A	8h	第4回洪水砂層相当	染付	碗	10		3.8	5.2	98		厚手碗 二重圏線内印版五弁花	
112	39		A	8h	第4回洪水砂層相当	染付	碗	9.8		3.5	5.2	100		厚手碗 二重圏線内印版五弁花	
113	39		B	8i	攪乱	染付	碗	9.8		3.6	5.1	90		厚手碗 二重圏線内印版五弁花	
114	39		B	8h	攪乱	染付	碗	*9.7		3.5	5.1	70		厚手碗 二重圏線内印版五弁花	
115	39		A	8h	南壁側溝	染付	碗	9.8		3.9	5.1	100		厚手碗 二重圏線内印版五弁花	
116	39		B	8h	攪乱	染付	碗	*10.3		3.7	4.6	60		厚手碗 二重圏線内印版五弁花	
117	39		A	8h	南壁側溝	染付	碗	7.7		3.6	6.4	100		半筒形 印版五弁花	
118	39		A	8g	盛土端部第4回洪水砂層	染付	碗	*7.2		3.4	6	50		半筒形 印版五弁花	
119	39		A	8h	南壁側溝	染付	碗	11.3		6.4	6.2	40		広東形	
120	39		B	8i	攪乱	染付	小杯	6.1		3.2	4.5	50			
121	39		B	8h	攪乱	染付	鉢	*22.4				*8.7	40	赤絵 外面花鳥 内面瓔珞文 焼き継ぎあり	
122	39		A	10h	黄褐色粗砂層	染付	蓋	*10.4	*9.4	4.3	2.9	40			
123	40		A	8h	南壁側溝	染付	蓋	10		4.2	2.3	98		内面松竹梅円形	
124	40		A	8h	南壁側溝	染付	蓋	9.4		4.3	3.2	97			
125	40		A	8h	黄褐色粗砂層上面	染付	皿	*19.2		*10.2	3.9	50		蛇の目釉剥ぎ 印版五弁花 扇・唐草文	
126	40		A	8h	第4回洪水砂層相当	陶器	碗	*7.1		3.6	4.9	70		萩焼 びら掛け	
127	40		B	8i	攪乱	染付	皿	9.8		6.3	1.5	100		見込み亀文 手描き歴文 蛇の目高台 角渦福	
128	40		A	8h	第4回洪水砂層相当	染付	小瓶	1.7		2.6	8.3	100		梅鉢文	
129	40		A	9g	黄褐色粗砂層	陶器	灰吹	*3.9		4.8	7.3	100			
130	40		B	8i	攪乱	白磁	皿	9.3		5.4	2.4	90		内面見込みに「寿」字刻(寿文皿)	
131	40		A	8h	盛土端部第4回洪水砂層	染付	皿	*19.0		*10.5	4.4	50		蛇の目釉剥ぎ 印版五弁花 扇・唐草文 外面唐草文	

遺物観察表 (3)

報告 番号	挿図 番号	写真 図版	区	地区別	遺構面・層名	種別	器形	法量 (cm)			残存 率(%)	備 考	
								(a)	(d)	(c)			(b)
132	40		A	8h	南壁側溝	染付	皿	*18.6		*9.8	3.9	50	蛇の目釉剥ぎ 内面扇・唐草文 外面唐草文
133	41		A	7g	洪水砂層 (第2回~4回)	陶器	蓋		6.6	6	*2.5	60	
134	41		A	8g	第4回洪水砂層相当	陶器	鉢	*16.4		6.5	8.1	40	
135	41		B	8i	攪乱	土師質	火入れ	10.7		9.5	6.3	100	
136	41		A	9g	黄褐色粗砂層上面	土師質	火入れ	12.2		12.3	5.2	100	
137	41		A	8h	洪水砂層 (第1回)	土師質	焙烙	*26.8			*5.5	30	
138	41		A	8h	第4回洪水砂層相当	陶器	摺鉢	*30.7		*15.2	11.6	25	堺
139	41		B	8h	洪水砂層 (第3回・4回)	陶器	摺鉢			22.4	*10.2	40	堺 線刻 (外面)
140	42		A	8h	第4回洪水砂層相当	陶器	摺鉢	40.2		18.8	17.2	70	堺
141	42		A	8h	第4回洪水砂層相当	陶器	大型鉢	*32.8		17	20.7	60	
142	43		B	10h	25土坑	染付	小皿	*8.0		*6.0	2	50	赤絵 見込みに「寿」字 手描き
143	43		B	10h	25土坑	染付	小杯			3	*1.6	10	赤絵 見込みに蝶
144	43		B	10h	25土坑	染付	碗	10.2		3.7	4.9	50	
145	43		B	10h	25土坑	染付	碗	*7.1		*3.4	5.4	50	半筒形
146	43		B	10i	攪乱	染付	皿	18.9		8.9	4.8	80	蛇の目釉剥ぎ 印版五弁花 扇・唐草文
147	43		B	10h	25土坑	染付	皿	*17.5		8.2	3.6	60	
148	43		B	10h	25土坑	染付	皿	*19.6		9	4	40	
149	43		B	10h	25土坑	陶器	蓋	15.4		4.4	3.4	80	
150	43		B	10h	25土坑	陶器	碗	11.4		5.5	4.9	60	円形のケズリ2ヶ所あり
151	43		B	10h	25土坑	陶器	蓋	5.5	3.9		1.3	95	灰釉
152	43		B	10i	攪乱	土師質	秉燭	*8.4		3.7	4.5	50	
153	43		B	10h	25土坑	陶器	灯明皿	10.8		3.8	1.8	80	灰釉
154	43		B	10h	攪乱	土師質	ミニチュア	*7.3		3.2	4.8	60	
155	43		B	10h	攪乱	陶器	火入れ			11.2	9.6	60	
156	44		B	10h	25土坑	土師質	火消し壺蓋	*24.6		5.4	6.1	60	
157	44		B	10i	攪乱	陶器	摺鉢	*28.1		*15.0	10.6	45	堺
158	44		B	10h	25土坑	陶器	鉢	*34.4		*15.4	13	30	
159	44		B	10h	25土坑	土師質	火鉢	*37.4			*16.2	20	
160	46		B	9i	24井戸	白磁	紅皿	4.7		1.2	1.5	100	
161	46		B	9i	24井戸	白磁	小杯	*6.4		*2.3	2.8	45	手描き 楼閣 (溝つくし)
162	46		B	9i	27井戸	瓦質	火鉢	*22.0		*18.2	23	30	
163	46		B	9h	27井戸	陶器	植木鉢	*38.9		18.4	20.7	50	雷文あり
164	48		B	9h	攪乱	陶器	碗	10.7		4.1	4.4	80	瀬戸美濃京焼風 灰釉 半球形 貫入あり 内外面菊文
165	48		B	9h・ 10h	攪乱	染付	碗	9.2		3.9	4.9	60	広東形
166	48		B	9h・ 10h	攪乱	染付	鉢	*13.5		*9.4	3.5	40	亀甲文 見込み蝶文 蛇の目高台
167	48		B	9h・ 10h	攪乱	染付	碗	*11.2		*4.6	5.7	40	端反形
168	48		B	9h・ 10h	攪乱	染付	碗	*9.9		*3.9	5.4	50	広東形
169	48		B	9h・ 10h	攪乱	染付	皿	9.9		5.6	3.1	55	手描き七宝つなぎ 二重角椀渦福
170	48		B	9h・ 10h	攪乱	染付	仏飯器	*6.0		3.4	5.7	60	赤絵 蛇の目高台
171	48		B	9h・ 10h	攪乱	染付	小壺	*7.0		*5.9	6.9	25	人物文
172	48		B	9h・ 10h	攪乱	染付	皿	8.8		3.9	2.2	80	手描き格子文 釉剥ぎ
173	48		B	9h	攪乱	陶器	灯明皿	*9.4		*3.2	2.2	45	灰釉
174	48		B	9h	攪乱	土師質	台付灯明皿	5.9			2.8	50	
175	48		B	9h	攪乱	陶器	受付き灯明皿	*11.8		*4.2	2.3	40	灰釉
176	22	A	8g	第1回洪水砂層	青磁	大皿	*17.0				5.6	20	割れ口に墨書あり
177	22	A	8h	第1回洪水砂層	瓦類	丸瓦 (転用瓦)							研磨された丸瓦 残長9.0、残幅7.5
178	22	A	7g	第2回洪水砂層	石製品	硯							残長16.0、幅7.5
179	23	A	8h	第4回洪水砂層相当	土製品	蓋	4.0				1.0	100	「寿」字の墨書あり
180	23	A	8g	攪乱	貝製品	バイ独楽	3.5					3.2	
181	50		A	8h	第4回洪水砂層	銅製品	小型柄鏡					100	刻字あり 長さ12.9、鏡面径7.5、柄の長さ5.4
182	49		A	8h	第1回洪水砂層	瓦類	平瓦						刻印瓦「堺北口」
183	49		A	8h	第1回洪水砂層	瓦類	平瓦	22.5	23.5		27.0		刻印瓦「堺谷傳兵衛」 厚さ1.7
184	49		A	7g	第3回洪水砂層	瓦類	平瓦						刻印瓦「堺下田亦三郎」
185	49		B	8h	20木組	瓦類	平瓦	21.5	23.5		25.5		刻印瓦「堺谷傳兵衛」 厚さ1.7
186	49		B	10h	25土坑	瓦類	平瓦						刻印瓦「堺改瓦屋喜太郎」
187	49		A	8g	13井戸	瓦類	井戸椀瓦	22.5			22.5		刻印瓦「堺下源」 厚さ3.7
188	49		A	8g	13井戸	瓦類	井戸椀瓦	23.0			22.0		刻印瓦「堺下源」 厚さ3.0
189	49		A	8g	13井戸	瓦類	井戸椀瓦	23.0			24.0		刻印瓦「堺下源」 厚さ3.0
190	49		A	8g	13井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦「堺下源」 厚さ3.0
191	49		A	8g	13井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦「□下源」 厚さ3.0
192	49		A	8g	13井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦「□下又」 横22.5、縦24.0、厚さ3.0

遺物観察表（4）

報告 番号	挿図 番号	写真 図版	区	地区割	遺構面・層名	種別	器形	法量 (cm)				残存 率(%)	備考
								(a)	(d)	(c)	(b)		
193	49		A	8g	13井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦 ○印 横21.5、縦22.0、厚さ3.0
194	49		A	8g	13井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦 ○印 横21.5、縦22.0、厚さ3.0
195	49		A	8g	13井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦 ○印 横21.5、縦21.5、厚さ3.0
196	49		A	8g	13井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦 ○印 横22.0、縦22.0、厚さ3.0
197	49		A	8g	13井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦 ○印 横21.5、縦21.5、厚さ3.0
198	49		A	8g	13井戸	瓦類	井戸椀瓦						横21.0、縦23.0、厚さ3.0
199	50		B	9h	第1回洪水砂層	銅製品	銭貨	2.5					「寛永通宝」
200	50		B	9h	第1回洪水砂層	銅製品	銭貨	2.4					「寛永通宝」
201	50		B	8i	第2回洪水砂層	銅製品	銭貨	2.35					「寛永通宝」
202	50		B	8h	盛土・整地層	銅製品	銭貨	2.4					「寛永通宝」
203	50		A	9g	第4回洪水砂層	銅製品	銭貨	2.45					「寛永通宝」
204	50		A	8h	第4回洪水砂層	銅製品	銭貨	2.35					「寛永通宝」
205	50		A	8h	第4回洪水砂層	銅製品	銭貨	2.2					「寛永通宝」
206	50		A	9g	第4回洪水砂層	銅製品	銭貨	2.35					「皇宋通宝」
207	50		A	9g	第4回洪水砂層	銅製品	銭貨	2.4					「景德元宝」
208	51		C	4h	黄褐色細砂層	土師質	茶釜	14.8	28.3		16.7	70	
209	56		C	6i	50土坑	染付	碗	*11.3		5.2	6.6	50	半球形 四方襷 二重角椀渦福
210	56		C	6i	50土坑	染付	碗	9.7		3.7	5.1	85	井桁鬼菖文
211	56		C	6i	50土坑	染付	小碗	7.5		2.8	3.8	80	瓔珞文
212	56		C	6i	50土坑	染付	碗	8		*2.9	4.1	55	見込みに寿字
213	56		C	6i	50土坑	染付	碗	10		3.4	5.6	80	広東形 井桁文
214	56		C	6i	50土坑	染付	碗	*10.5		4	5.2	60	広東形 印版鬼菖文
215	56		C	6i	50土坑	染付	碗	*7.4		3.7	5.9	60	筒形 内面四方襷 外面格子文
216	56		C	6i	50土坑	陶器	碗	7.5		4.9	6.1	100	半筒形
217	56		C	6i	50土坑	陶器	碗	*12.2		*4.7	7.2	40	端反形
218	56		C	6i	50土坑	染付	鉢	*18.7		8.8	6.9	50	
219	56		C	6i	50土坑	陶器	徳利	2			*8.6	60	丹波 型作りの角徳利 広島の鞆の保命酒徳利の影響
220	57		C	6i	50土坑	土師質	火鉢			*21.2	*17.0	40	
221	57		C	6i	50土坑	陶器	摺鉢	40		21.2	15.9	100	堺 刻印あり(内面口縁部) 見込みウールマーク
222		24	C	6i	50土坑	土製品	橋(ミチヲ)				3.0	50	型押し成形 長さ7.0、幅3.8
223		24	C	6i	50土坑	陶器	火鉢				8.1		緑釉 火鉢 獅子頭 幅10.5
224		24	C	6i	50土坑	陶器	火鉢				10.5		緑釉 火鉢 獅子頭 残高10.5
225	57		C	6h	70土坑	染付	碗	10		3.6	5.1	80	鬼菖文
226	57		C	6h	70土坑	陶器	碗	*11.6		*3.8	5.2	50	色絵 半球形 灰釉
227	57		C	6h	70土坑	青磁	碗	*8.5		*4.7	5.3	30	
228	57		C	6h	70土坑	陶器	香炉	*10.9		7	6.5	40	
229	57		C	6i	70土坑	染付	碗	*9.7		*3.9	5.7	30	
230	58		C	6i	盛土・整地層	染付	碗	*10.4		4.2	6.1	60	くらわんか 厚手碗
231	58		C	6i	盛土・整地層	染付	碗	10.5		2.1	5.9	100	くらわんか 厚手碗
232	58		C	6i	盛土・整地層	染付	碗	*10.0		4	5.1	45	厚手碗 二重網目文
233	58		C	6i	盛土・整地層	染付	碗	9.6		3.6	5.2	100	厚手碗 井桁鬼菖
234	58		C	6i	盛土・整地層	染付	小碗	7.1		2.7	3.7	95	端反形
235	58		C	6i	盛土・整地層	陶器	小碗	*6.3		3.8	5.5	55	
236	58		C	6i	盛土・整地層	陶器	小碗	*8.7		*3.1	4.8	40	端反形
237	58		C	6i	盛土・整地層	土師質	秉燭	3.8		2	1.9	100	
238	58		C	6i	盛土・整地層	染付	皿	13.5		6.2	3.9	85	
239	58		C	6i	盛土・整地層	陶器	皿	*8.7		*4.2	2.3	50	
240	58		C	6h	盛土・整地層	陶器	植木鉢			8.8	9.5	40	
241	58		C	6i	盛土・整地層	土師質	火入れ	*12.5		*12.0	5.4	50	
242	58		C	6i	盛土・整地層	陶器	香炉	10.2		7	6	100	
243	58		C	6i	盛土層	陶器	片口壺	9		9.4	14.1	100	お歯黒壺
244	58		C	6i	盛土・整地層	土師質	火鉢			13.7	7.6	20	輪高台
245		25	C	6i	盛土・整地層	土製品	臼(ミチヲ)	4.2			2.35	100	
246		25	C	6i	盛土・整地層	土製品	指物(ミチヲ)				7.0		表：日、裏：月 最大幅3.45、柄径1.35
247	60		C	4j	29土坑	染付	碗	8.7		3.2	3.6	90	端反形 源氏香文
248	60		C	4j	29土坑	染付	碗	*8.8		*2.9	3.8	50	端反形 源氏香文
249	60		C	4j	29土坑	染付	そば猪口	*8.8		6	6.2	50	外面底部に連弁文 蛇の目高台
250	60		C	4j	29土坑	陶器	猪口	4.9		2.7	3.9	90	中筒形
251	60		C	4j	29土坑	染付	神酒徳利			4.1	*10.7	95	
252	60		C	4j	29土坑	染付	鉢	15.4		5.4	7.1	90	
253	60		C	4j	29土坑	白磁	紅皿	6.9		2.1	1.7	100	型押陽刻「蛸唐草文」
254	60		C	4j	29土坑	白磁	紅皿	5.1		1.9	3.8	100	
255	60		C	4j	29土坑	染付	蓮華	*8.6		4.8	*4.3	70	型押し成形(底部無軸)
256	60		C	4j	29土坑	陶器	蓋	14.8		5.1	3.9	100	
257	60		C	4j	29土坑	陶器	蓋	*6.8	2.5	3.5	3.2	70	底部糸切り痕あり 宝珠つまみ
258	60		C	4j	29土坑	陶器	瓶	3.6		*7.5	12.7	70	

遺物観察表 (5)

報告 番号	挿図 番号	写真 図版	区	地区別	遺構面・層名	種別	器形	法量 (cm)				残存 率(%)	備 考
								(a)	(d)	(c)	(b)		
259	60		C	4 j	29土坑	陶器	台付灯明皿	6.3		4.4	4.6	80	
260	60		C	4 j	29土坑	土師質	灯明皿	5.5		3.3	8.5	100	底部糸切り痕あり
261	60		C	4 j	29土坑	陶器	植木鉢	9.5		5.7	9.8	95	
262	60		C	4 j	29土坑	陶器	蓋	12.2	5.8		3	95	施釉
263	60		C	4 j	29土坑	陶器	灯明皿	7.5		4	1.8	100	
264	60		C	4 j	29土坑	陶器	蓋	4.8	3.3		2.7	95	施釉
265	61		C	4 j	29土坑	陶器	土瓶	10.9			12.9	60	
266	61		C	4 j	29土坑	土師質	火入れ	*11.7		*13.3	15.9	40	
267	61		C	4 j	29土坑	陶器	摺鉢	24.4		11.4	9	60	
268	61		C	4 j	29土坑	陶器	緑釉竜文香炉	19.7		19.4	18.1	60	瀬戸焼洞窯、植木鉢転用
269		26	C	4 j	29土坑	陶器	用途不明						輪積み成形 最大長12.5、最大幅8.35
270		26	C	4 j	29土坑	銅製品	煙管 (吸口)	7.2	8.5	0.6			
271		26	C	4 j	29土坑	銅製品	煙管 (雁首)	5.5	5.2	0.95	0.7		(e)1.7
272		26	C	4 j	29土坑	鉄製品	小柄						長さ(15.2)、幅1.5
273		26	C	4 j	29土坑	鉄製品	錠前の鍵						長さ12.8、最大幅1.3
274	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	3.6			0.45		
275	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	3.6			0.45		
276	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	3.5			0.4		
277	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	3.3			0.45		
278	80	26	C	5 i	盛土・整地層	土製品	泥面子	3.65			0.7		
279	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	3.35			0.5		
280	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	3.3			0.55		
281	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	3.3			0.55		
282	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	3.35			0.45		
283	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	3.2			0.5		
284	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	3.45			0.6		
285	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	3.1			1.4		
286	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	3.1			1.55		
287	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	2.8			1.15		
288	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	2.8			1.55		
289	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	ミニチュア	2.6			1.9		
290	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	ミニチュア	2.8			1.7		
291	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	人形				6.5		磁器製品に彩色 最大幅3.45
292	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	3.1			1.5		
293	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	3.0			1.3		
294	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	3.1			1.3		
295	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	泥面子	1.4			1.4		
296	80	26	C	4 j	29土坑	土製品	ミニチュア	3.15		1.8	1.2		
297	62		C	4 j	盛土層	染付	碗	10.4		3.6	5.6	80	端反形
298	62		C	4 j	盛土層	染付	鉢	*16.6		*8.8	5.6	25	焼き継ぎあり
299	62		C	4 j	盛土層	染付	碗	*8.8		*2.9	4.2	50	
300	62		C	4 j	盛土層	染付	段重	*12.7		9.4	6.1	40	焼き継ぎあり
301	62		C	4 j	盛土層	染付	蓋	9.2		3.9	2.5	90	
302	62		C	4 j	盛土層	染付	皿	10.5		6.1	2.3	80	
303	62		C	4 j	盛土層	染付	皿	12.7		6.3	2.7	95	見込み落款散し 花蝶文
304	62		C	4 j	機械掘削時	染付	蓋	8.9		3.4	2	95	二重角枠渦福 漢詩
305	62		C	4 j	盛土層	染付	小碗	6.4		3.2	4.5	80	銅版プリント
306	62		C	4 j	盛土層	染付	小碗	6.6		2.8	4.3	100	銅版プリント 落款散し
307	62		C	4 j	盛土層	染付	小碗	*7.0		*3.6	5.6	50	丸型湯飲み碗 外面格子文
308	62		C	4 j	盛土層	陶器	小壺	1.9		3.4	6.1	100	
309	62		C	4 j	盛土層	染付	蓋	14		6.3	3.7	95	
310	62		C	4 j	盛土層	陶器	小瓶	1.7		2.8	7.4	100	
311	62		C	4 j	盛土層	陶器	小瓶	1.8		2.8	8	100	
312	62		C	4 j	盛土層	白磁	紅皿	2.1		0.7	1.1	100	小型
313	62		C	4 j	盛土層	陶器	小壺			2.3	*3.2	80	
314	62		C	4 j	盛土層	陶器	皿	7.3		5.5	1.4	80	淡路焼 黄釉
315	63		C	4 j	盛土層	染付	大皿	28.4		17.5	4	70	霊獣麒麟文 口錆
316	63		C	4 j	機械掘削時	陶器	碗	*7.3		3.6	5	40	萩焼 びら掛け
317	63		C	4 j	盛土層	陶器	蓋	8.6	6.2	2.2	3.5	95	白地鉄絵
318	63		C	4 j	機械掘削時	陶器	蓋	14		4.3	4.5	95	鉄釉 白化粧で草花文イッチン描き
319	63		C	4 j	盛土層	陶器	蓋	17	14.2	5.5	5.3	80	行平鍋蓋 幾何学文
320	63		C	4 j	盛土層	陶器	蓋	9.6			1.9	80	
321	64		C	4 j	盛土層	陶器	仏花瓶			5.3	10.3	80	
322	64		C	4 j	盛土層	土師質	灯明皿	6.2		3.1	1.4	80	内面施釉
323	64		C	4 j	盛土層	陶器	灯明皿	6.8		3.7	1.3	100	
324	64		C	4 j	盛土層	陶器	台付灯明皿	5.8		4.3	4.4	100	灰釉 底部糸切り痕あり

遺物観察表(6)

報告 番号	挿図 番号	写真 図版	区	地区割	遺構面・層名	種別	器形	法量 (cm)				残存 率(%)	備考
								(a)	(d)	(c)	(b)		
325	64		C	4j	盛土層	土師質	受付き灯明皿	6		3.3	1.3	95	底部糸切り痕あり
326	64		C	4j	機械掘削時	陶器	仏飯器	6		3.6	5	85	瀬戸 鉄釉 底部糸切り痕あり
327	64		C	4j	盛土層	土師質	炮烙(ニヒア)	4.2		2.9	1.6	95	
328	64		C	4j	盛土層	陶器	小壺	4.2		*4.8	10.6	55	
329	64		C	4j	盛土層	陶器	摺鉢 (小型)	*21.9		*12.6	8.6	40	
330	64		C	4j	盛土層	陶器	壺 (建水?)			*10.0	*10.1	40	底面に朱書あり
331	64		C	4j	盛土層	陶器	壺			12.6	20.3	80	植木鉢に転用か?
332	64		C	4j	盛土層	土師質	火鉢	23.1			13	60	
333	64		C	4j	盛土層	瓦質	焜炉	*18.3		*19.8	18	30	
334	65		C	4j	盛土層	陶器	摺鉢	34.6		15.8	12.9	80	堺
335	65		C	4j	盛土層	土師質	七厘	*19.7		18.6	19.6	70	板作り 貼り合せ後ミガキ調整
336	65		C	4i	盛土層	染付	菊皿	*13.2		7.4	3.7	70	
337	65		C	4i	盛土層	陶器	小碗	7.4		*4.8	5.3	95	半筒形
338	65		C	4i	盛土層	陶器	蓋	*11.2	4	2.6	3.2	95	施釉陶器
339	65		C	4i	盛土層	陶器	植木鉢	36		19.2	15.8	50	刻印あり (外面)
340		27	C	4j	盛土・整地層	鉄製品	包丁の刃						最大長18.6
341		27	C	4j	盛土・整地層	陶器	貧乏徳利	4.5				20	残存長12.5
342		27	C	4j	盛土・整地層	陶器	貧乏徳利					50	白泥で「住吉」 残存長23.7
344	66		C	4h	盛土層	青磁	香炉	10.4		7.2	8.2	100	
345	66		C	4h	盛土・整地層	陶器	大型甕	*55.2		25.4	76.4	60	備前 線刻 (外面)
346	68		C	6h	52土坑	染付	皿	*10.0		*4.1	2.7	50	
347	68		C	6h	52土坑	染付	小碗	*6.9		*2.7	3.6	50	
348	68		C	6h	52土坑	染付	猪口	*5.3		*3.0	3.4	50	
349	68		C	6h	52土坑	陶器	小碗	*8.0		*3.8	5.6	30	萩焼 びら掛け
350	68		C	6h	52土坑	陶器	蓋	*9.4	*6.9	*2.3	3.1	50	白化粧土
351	68		C	6h	52土坑	陶器	蓋	*8.7		*1.3	1.2	40	
352	68		C	6h	53土坑	陶器	蓋	10.3	9.1		1.9	50	白化粧土
353	68		C	6h	53土坑	染付	段重	*7.5		*4.2	3.2	50	格子文
354	68		C	6h	53土坑	陶器	小碗	*8.6		*3.6	5	50	
355	68		C	6h	53土坑	染付	鉢	*13.6		*8.5	4.4	40	
356	69		C	6h	52~54土坑の一部	染付	碗	*8.6		*3.2	4.9	40	見込みに「寿」くずし
357	69		C	6h	52~54土坑の一部	染付	鉢	*13.6		*8.1	6.3	30	広東形 見込みに五弁花 蛇の目高台
358	69		C	6h	52~54土坑の一部	染付	輪花皿	12.7		7.7	3.3	70	山水楼閣
359	69		C	6h	52~54土坑の一部	染付	小丸碗	*7.6		3.7	5.3	40	半筒形
360	69		C	6h	52~54土坑の一部	陶器	碗	*7.8		3.5	5.3	50	
361	69		C	6h	52~54土坑の一部	色絵	仏飯器	*5.4		3.1	4	60	蛇の目高台
362	69		C	6h	52~54土坑の一部	染付	仏飯器	6.6		3.8	5.8	50	蛇の目高台
363	69		C	6h	52~54土坑の一部	色絵	鉢	*11.2		5.7	7.1	50	手描き 焼き継ぎあり
364	69		C	6h	52~54土坑の一部	染付	碗	9.3		4	3	50	
365	69		C	6h	52~54土坑の一部	陶器	灯明皿	10.9		4.8	2.1	100	灰釉
366	69		C	6h	52~54土坑の一部	陶器	合子	5.9		3.8	2.9	80	
367	69		C	6h	52~54土坑の一部	陶器	台付灯明皿	6.3		4.1	6.2	60	灰釉
368	69		C	6h	52~54土坑の一部	陶器	灯明皿	6.4		2.3	1.3	100	灰釉
369	69		C	6h	52~54土坑の一部	陶器	蓋	9.5	7	2.2	2.8	100	白地鉄絵 「草花」文
370	69		C	6h	52~54土坑の一部	陶器	蓋	6	4.4		1.9	90	白化粧土 イッチン描き
371		29	C	6h	52~54土坑	土製品	鳩笛	5.25			4.1	80	
372		29	C	6h	52~54土坑	陶器	甕と蓋(ニヒア)	3.7		1.8	3.3	100	
373		29	C	6h	53土坑	石製品	硯				1.55	80	赤間石製 刻書あり 長さ13.35、幅5.0
374	72		C	6h	黄褐色細砂層上面	染付	皿	18.3		9.8	4.4	100	見込み蛇の目釉剥ぎ 印版五弁花 扇・唐草
375	72		C	6h	黄褐色細砂層上面	染付	碗	10.5		3.9	6	60	厚手碗
376	72		C	6h	黄褐色細砂層上面	陶器	皿	10.8		6.1	2.5	50	
377	73		C	6h	盛土層	染付	碗	10.9		4.4	5.3	60	格子文
378	73		C	6h	盛土・整地層	染付	碗	*9.2		4.1	5.3	60	厚手碗
379	73		C	6h	盛土・整地層	染付	碗	11.5		4.4	5.2	100	半球形 丸文散し
380	73		C	6h	盛土・整地層	染付	碗	7.4		3.6	5.2	100	筒形 寿文
381	73		C	6h	盛土・整地層	染付	碗	*10.3		*3.6	5.3	40	端反形 手描き
382	73		C	6h	盛土・整地層	染付	鉢	*12.8		7.3	3.6	50	外面唐草文
383	73		C	6h	盛土・整地層	染付	小杯	6.2		2.8	2.9	60	
384	73		C	6h	盛土層	染付	蓮華	10.3		*4.4	5.8	70	型押し成形
385	73		C	6h	盛土層	染付	輪花鉢	*14.0		*8.0	4.8	50	二重角椀渦福
386	73		C	6h	盛土層	染付	蓋	*13.9	11.8	*5.6	3.1	50	赤絵
387	73		C	6h	盛土層	染付	輪花皿	*10.6		*6.4	2.5	40	柴垣
388	73		C	6h	盛土層	染付	大型鉢	*21.3		*11.7	7.3	30	
389	74		C	6h	盛土・整地層	陶器	碗	8.4		3.8	4.8	45	亀甲形に成形 放射状に沈線
390	74		C	6h	盛土層	染付	段重	*12.5		*7.6	5	40	
391	74		C	6h	盛土・整地層	陶器	鉢	13.7		6.7	4.3	70	

遺物観察表（7）

報告 番号	挿図 番号	写真 図版	区	地区別	遺構面・層名	種別	器形	法量 (cm)				残存 率(%)	備 考
								(a)	(d)	(c)	(b)		
392	74		C	6h	盛土・整地層	陶器	蓋	15		4.7	4.2	100	京焼 土鍋蓋 鉄釉 白化粧土で草花文
393	74		C	6h	盛土・整地層	陶器	蓋	7.6	5.5	1.6	2.8	100	施釉
394	74		C	6h	盛土・整地層	陶器	蓋	*6.4	4	1.8	2.3	60	施釉
395	74		C	6h	盛土・整地層	陶器	灯明皿	6.3		2.9	1.4	100	灰釉
396	74		C	6h	盛土・整地層	陶器	茶さじ	10		4.4	2.4	90	
397	74		C	6h	盛土・整地層	陶器	蓋	8.6	6.5	1.9	3.1	50	白化粧土
398	74		C	6h	盛土・整地層	陶器	灯明皿	4.1		2.7	1.2	100	灰釉
399	74		C	6h	盛土・整地層	陶器	灯明皿	4.1		3	1.3	95	灰釉
400	74		C	6h	盛土・整地層	陶器	台付灯明皿	6.1		4.9	3.7	70	
401	74		C	6h	盛土・整地層	陶器	秉燭			3.8	4.5	70	瀬戸
402	74		C	6h	盛土・整地層	土師質	焙烙	*22.1		*21.6	3.1	30	
403	74		C	6h	盛土層	土師質	灯明皿	*5.4		2.8	0.8	50	内面施釉 底部糸切り痕あり
404	74		C	6h	盛土・整地層	土師質	灯明皿	5.7		2.8	1.1	99	内面施釉 底部糸切り痕あり
405	74		C	6h	盛土・整地層	土師質	灯明皿	6.4		3.4	1.2	100	内面施釉 底部糸切り痕あり
406	74		C	6h	盛土層	土師質	灯明皿	*8.3		3.6	0.8	40	内面施釉 底部糸切り痕あり
407	74		C	6h	盛土層	土師質	灯明皿	8.2		3.8	1.6	100	内面施釉 底部糸切り痕あり
408	74		C	6h	盛土・整地層	陶器	植木鉢	*15.8		*8.4	9.1	45	
409	74		C	6h	盛土・整地層	陶器	播鉢	22		11	7.7	40	備前
410		30	C	6h	盛土・整地層	土製品	御堂(ニヒア)			2.6		95	残存長4.25、最大幅2.85
411		30	C	6h	盛土・整地層	陶器	蟹形耳付壺	11.5		9.5	20.0	95	
412	75		C	5h	盛土・整地層	染付	碗	8.9		3.4	4.6	60	
413	75		C	5h	盛土・整地層	染付	碗	*10.6		4.2	6	60	見込み斜格子 格子文
414	75		C	5h	盛土・整地層	染付	碗	*14.9		5.2	8.2	20	
415	75		C	5i	盛土・整地層	染付	碗	10		3.8	6.1	90	
416	75		C	5h	盛土・整地層	染付	碗	10.6		4.4	5.2	55	見込み「寿」字 円文散し
417	75		C	5h	盛土・整地層	染付	碗	9.7		4.1	4.4	95	井桁文
418	75		C	5h	盛土・整地層	染付	碗	*7.6		*3.0	5.1	30	中筒形 見込み五弁花 四方襷 蛸唐草文
419	75		C	5h	盛土・整地層	染付	碗	*8.8		*3.4	5.7	50	丸碗
420	75		C	5h	盛土・整地層	染付	碗	9.9		3.3	4.3	50	半球形
421	75		C	5h	盛土・整地層	白磁	紅皿	4.8		1.2	1.6	100	
422	75		C	5h	盛土・整地層	染付	小杯	*6.4		*2.2	3.3	50	
423	75		C	5i	盛土・整地層	染付	皿	*11.2		*6.6	1.8	55	「寿」字 見込みに「国学長命」プリント
424	75		C	5h	盛土・整地層	染付	皿	*12.5		*6.8	3.3	45	蛇の目高台 唐草文
425	75		C	5h	盛土・整地層	染付	仏飯器	*7.0		4.1	6	60	蛸唐草文、蛇の目高台
426	75		C	5h	盛土層	白磁	神酒徳利	*1.9		3.1	9.7	95	赤絵 手描き
427	75		C	5i	盛土・整地層	陶器	小瓶	1.6		2.7	7.6	100	
428	75		C	5i	盛土・整地層	陶器	小壺	3.2		2.4	4.6	100	
429	75		C	5i	盛土・整地層	白磁	皿	*9.8		*5.2	1.5	30	見込みに「寿」字陰刻 (寿文皿)
430	76		C	5h	盛土・整地層	染付	蓋	*10.2		4.1	2.8	50	丸文散し
431	76		C	5i	盛土・整地層	染付	蓋	*9.4		4.2	2.8	70	線描き 花唐草文
432	76		C	5i	盛土・整地層	染付	蓋	9.3		3.6	2.5	100	角渦福
433	76		C	5i	盛土・整地層	染付	蓋	10.2		4	3	80	
434	76		C	5h	盛土・整地層	染付	蓋	9.8		3.9	3.1	95	
435	76		C	5h	盛土・整地層	陶器	蓋	*7.8	5.7	1.1	2.8	75	施釉
436	76		C	5i	盛土・整地層	陶器	碗	*10.8		4.4	4.1	50	平形
437	76		C	5h	盛土・整地層	陶器	香炉	*6.8		2.9	4.6	60	
438	76		C	5h	盛土・整地層	陶器	蓋	*8.4	6.4	2	2.1	60	施釉
439	76		C	5h	盛土・整地層	土師質	台付灯明皿	*5.5		5	5.1	80	底部糸切り痕あり
440	79		C	6i	50土坑	瓦類	平瓦						刻印瓦「堺谷傳兵衛」 横22.0~23.5、縦26.0、厚さ1.5
441	79		C	6i	50土坑	瓦類	軒丸瓦						刻印瓦「堺谷傳兵衛」 小巴径14.0、長23.0、厚さ1.5
442	79		C	6i	50土坑	瓦類	軒丸瓦						刻印瓦「堺谷傳兵衛」 小巴径14.0、長23.0、厚さ1.5
443	79		C	6i	50土坑	瓦類	軒丸瓦						刻印瓦「堺谷傳兵衛」 小巴径14.0、長23.0、厚さ1.5
444	79		C	6i	50土坑	瓦類	平瓦						刻印瓦 ○印 横22.0~23.5、縦26.0、厚さ1.5
445	79		C	4j	29土坑	瓦類	軒平瓦						刻印瓦「堺下源」 厚さ2.3
446	79		C	6h	54土坑	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦「さかい濱瓦利」 横22.0、厚さ3.0
447	79		C	5i	35井戸	瓦類	軒丸瓦						刻印瓦「堺北喜十郎」
448	79		C	5i	35井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦「さかい濱瓦利」 横22.0、縦22.0、厚さ3.0
449	79		C	5i	35井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦「さかい濱瓦利」 横22.0、縦22.0、厚さ3.0
450	79		C	5i	35井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦「さかい濱瓦利」 横22.5、縦22.5、厚さ3.0
451	79		C	4j	盛土・整地層	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦「堺北九」 残存長26.0
452	79		C	6h	68井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦 ○印 横21.5、縦22.0、厚さ3.0
453	79		C	5i	36井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦 ○印 横22.0、縦22.0、厚さ3.0
454	79		C	5i	36井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦 ○印 横21.5、縦21.5、厚さ3.0
455	79		C	5i	36井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦 ○印 横21.0、縦21.5、厚さ3.0
456	79		C	5i	36井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦 ○印 横20.5、縦21.0、厚さ3.0
457	79		C	5i	36井戸	瓦類	井戸椀瓦						刻印瓦 ○印 横21.0、縦21.0、厚さ3.0

遺物観察表(8)

報告 番号	挿図 番号	写真 図版	区	地区割	遺構面・層名	種別	器形	法量 (cm)				残存 率(%)	備考
								(a)	(d)	(c)	(b)		
458	80		C	4 j	29土坑	銅製品	銭貨	2.4					「寛永通宝」
459	80		C	4 j	29土坑	銅製品	銭貨	2.4					「寛永通宝」
460	80		C	6 h	60井戸	銅製品	銭貨	2.35					「寛永通宝」
461	80		C	6 i	54土坑	銅製品	銭貨	2.2					「寛永通宝」
462	80		C	4 j	盛土・整地層	銅製品	銭貨	2.3					「寛永通宝」
463	80		C	6 h	52~54土坑	土製品	泥面子	3.4			0.75		
464	80		C	6 h	52~54土坑	土製品	泥面子	3.0			0.6		
465	80		C	6 h	52~54土坑	土製品	泥面子	3.3			0.35		
466	80		C	4 j	盛土・整地層	土製品	泥面子	3.3			0.45		
467	80		C	4 j	盛土・整地層	土製品	泥面子	3.3			0.5		
468	80		C	4 j	盛土・整地層	土製品	泥面子	3.1			0.4		
469	80		C	4 j	盛土・整地層	土製品	泥面子	3.1			0.65		
470	80		C	4 j	盛土・整地層	土製品	泥面子	3.15			1.2		
471	80		C	6 i	盛土・整地層	土製品	泥面子	3.2			0.7		
472	80		C	4 j	盛土・整地層	土製品	泥面子	3.3			0.45		
473	80		C	4 j	盛土・整地層	土製品	泥面子	3.4			0.5		
474	80		C	6 i	盛土・整地層	土製品	泥面子	4.1			0.6		

写真図版

図版1 紀州街道 遺構 (1)



1 A区紀州街道堆積状況 (北側溝)



2 A区紀州街道堆積状況 [細部] (北側溝)



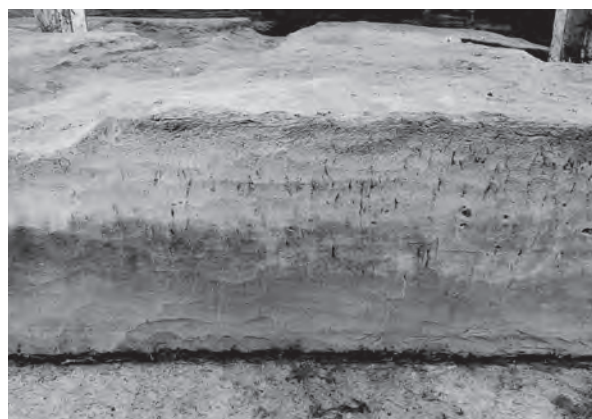
3 A区紀州街道堆積状況 (中央)



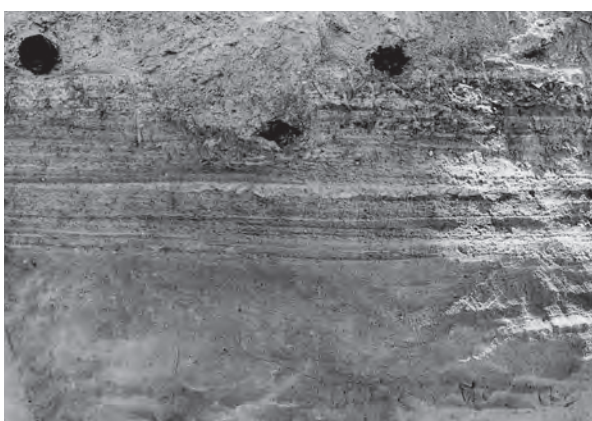
4 A区紀州街道堆積状況 (中央西側)



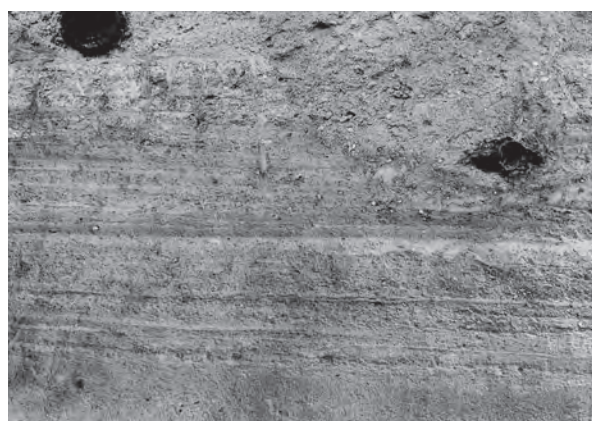
5 A区紀州街道堆積状況 [下部] (中央)



6 A区紀州街道堆積状況 [下部] (中央西側)

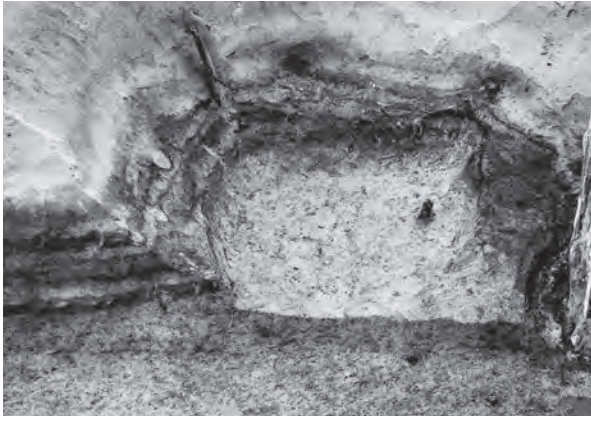


7 A区紀州街道堆積状況 (南壁)

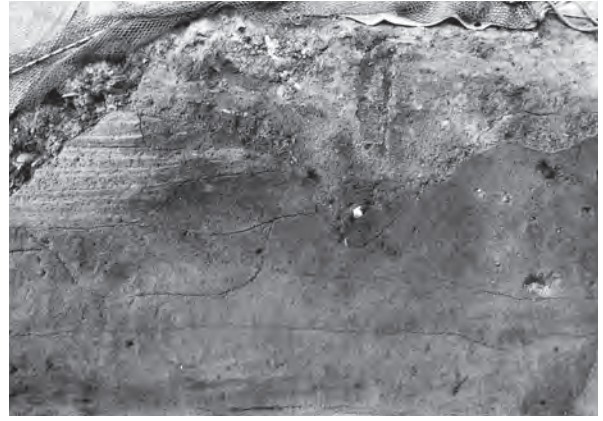


8 A区紀州街道堆積状況 [細部] (南壁)

図版2 紀州街道 遺構 (2)



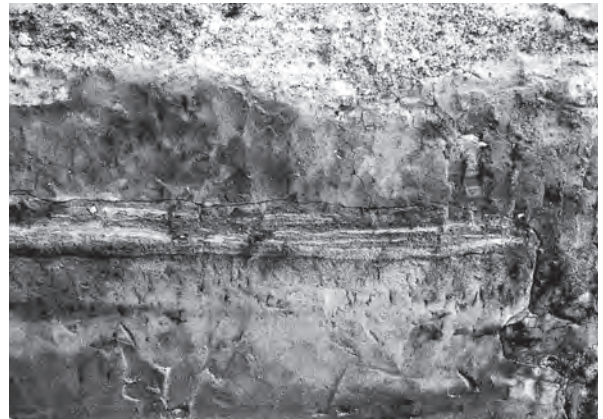
1 A区22土坑 (南から)



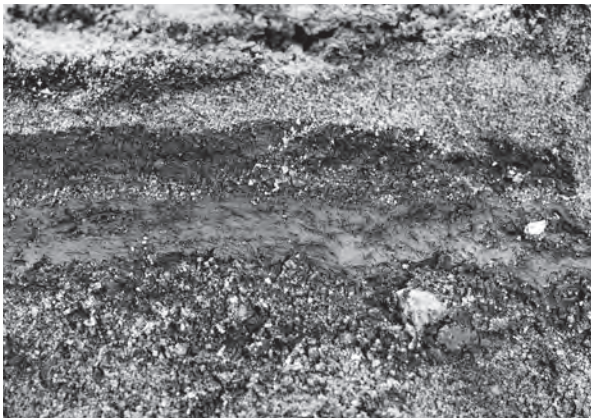
2 B区紀州街道堆積状況 (東端部北壁)



3 B区紀州街道堆積状況 [道路側溝部分] (南壁)



4 B区紀州街道堆積状況 [西端部] (南壁)



5 A区黒色粘土層堆積状況 (西から)



6 A区黒色粘土層下堆積状況 (西から)



7 B区深掘りトレンチ (西から)



8 B区黒色粘土層下堆積状況 (北から)

図版5 紀州街道 遺構 (5)



1 B区整地層除去面 [道3面より上面] 全景 (北から)



2 A区道3面全景 (南から)



3 A区道3面全景 (北から)



4 A区道3面下砂層除去面全景 (北から)

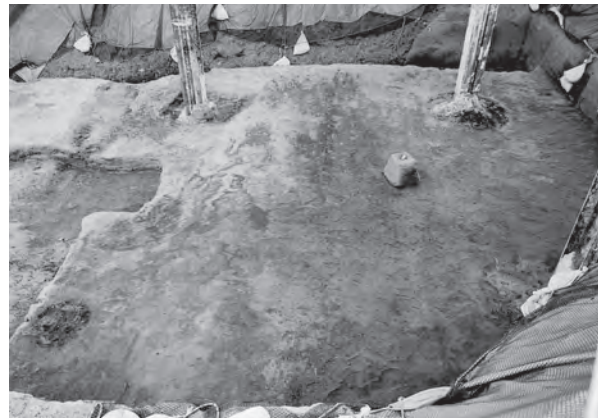
図版3 紀州街道 遺構 (3)



1 A区道5面全景 (東から)



2 A区道6面全景 (北から)



3 B区道6面全景 (南から)



4 A区道7面全景 (北から)



5 B区道7面全景 (北から)

図版4 紀州街道 遺構 (4)



1 A区道4面全景 (北から)



2 B区道6面全景 (南から)



3 B区道5面全景 [手前は紀州街道迂回路] (東から)



4 B区道5面全景 (北から)



5 A区道5面全景 (東から)



6 A区道5面全景 (北から)

図版6 紀州街道 遺構 (6)



1 A区道2面西側石垣 [北部] (西から)



2 A区道2面西側石垣 [北部細部] (西から)



3 A区道2面西側石垣 [中央部] (西から)



4 A区道2面西側石垣 [石積状況] (北から)



5 A区道2面東側石垣 [北部細部] (東から)



6 A区道2面東側石垣 [北部] (東から)



7 A区道2面東側石垣 (東から)



8 A区道2面西側石垣裏込め内焼台混入状況 (西から)

図版7 紀州街道西側 遺構 (1)



1 A区洪水砂層除去面全景〔紀州街道含む〕(東から)



2 A区洪水砂層除去面全景〔紀州街道含む〕(西から)

図版8 紀州街道西側 遺構（2）



1 A区洪水砂層除去面全景〔紀州街道含む〕（西から）



2 B区洪水砂層除去面全景〔紀州街道含む〕（西から）

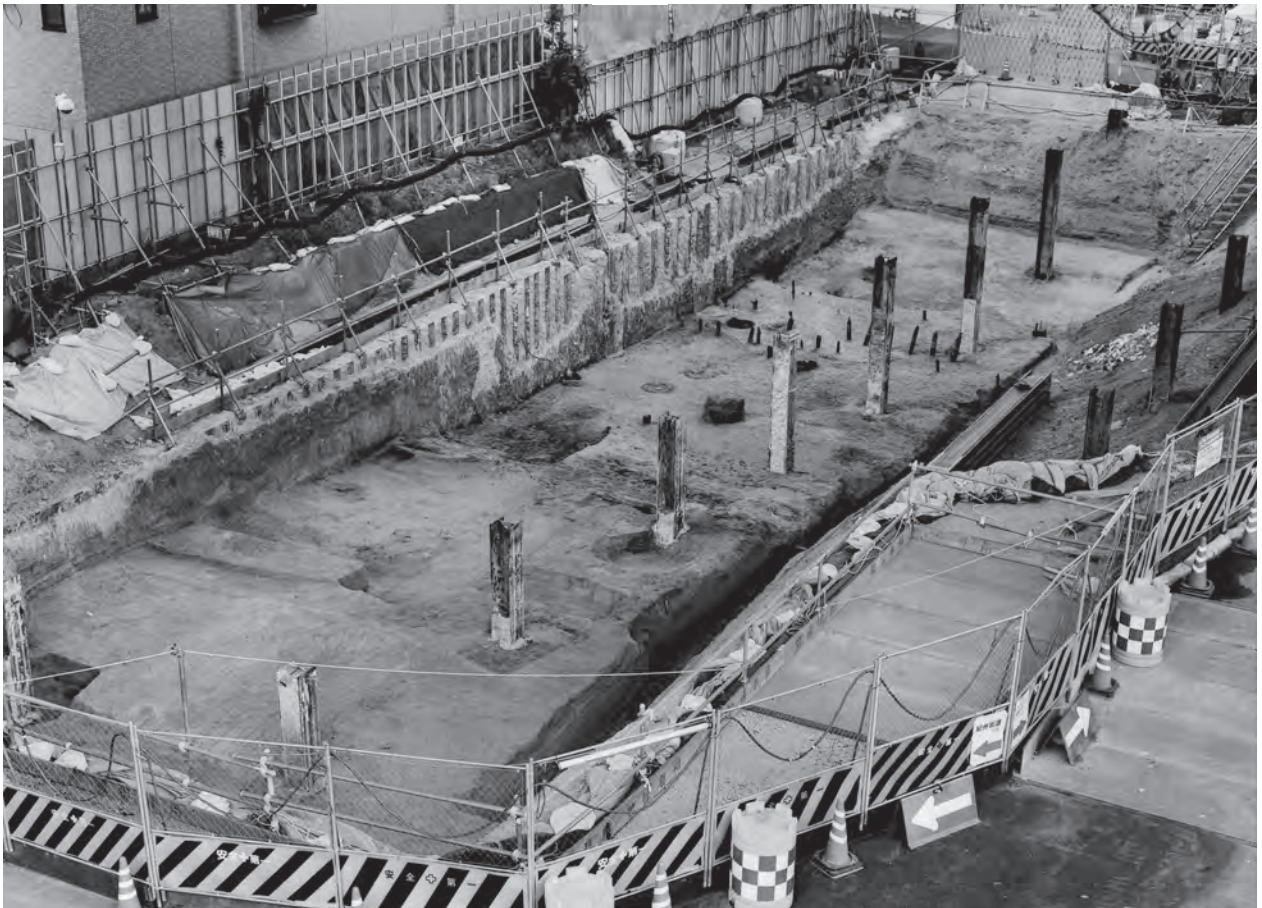
図版9 紀州街道西側 遺構 (3)



1 B区洪水砂層除去面全景〔紀州街道含む〕(西から)



2 B区洪水砂層除去面〔西部〕全景(西から)



3 B区洪水砂層除去面全景〔紀州街道含む〕(東から)

図版10 紀州街道西側 遺構 (4)



1 B区洪水砂層除去面全景 (東から)



2 A区北壁断面 [西端部] (南から)



3 A区北壁断面 [西部] (南から)



4 A区北壁断面 [中央部] (南から)



5 A区西壁断面 [北部] (東から)

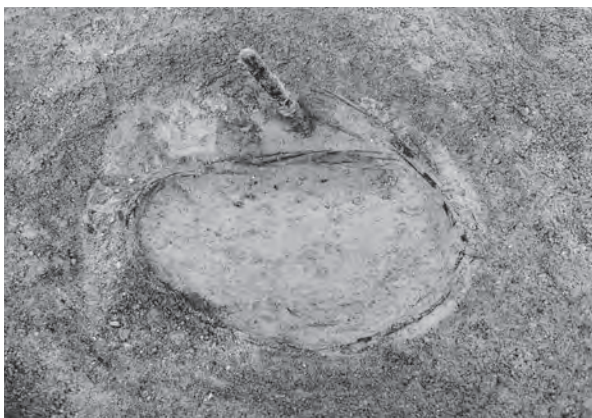
図版11 紀州街道西側 遺構 (5)



1 A区深掘りトレンチ (東から)



2 B区西半部最終面全景 (北から)



3 A区19井戸検出状況 (東から)



4 A区19井戸 (東から)



5 A区洪水砂層端部石検出状況 (北から)



6 A区13井戸 (東から)



7 B区27井戸 (西から)



8 B区24井戸 (西から)

図版12 紀州街道西側 遺構 (6)



1 A区20木組 [北半部] (南から)



2 B区20木組埋土堆積状況 (北から)



3 B区20木組 [東半部] (北から)



4 B区20木組 (西から)



5 A区畝溝検出状況 (南から)



6 A区畝溝全景 (西から)



7 A区畝溝 [南西部] 全景 (西から)

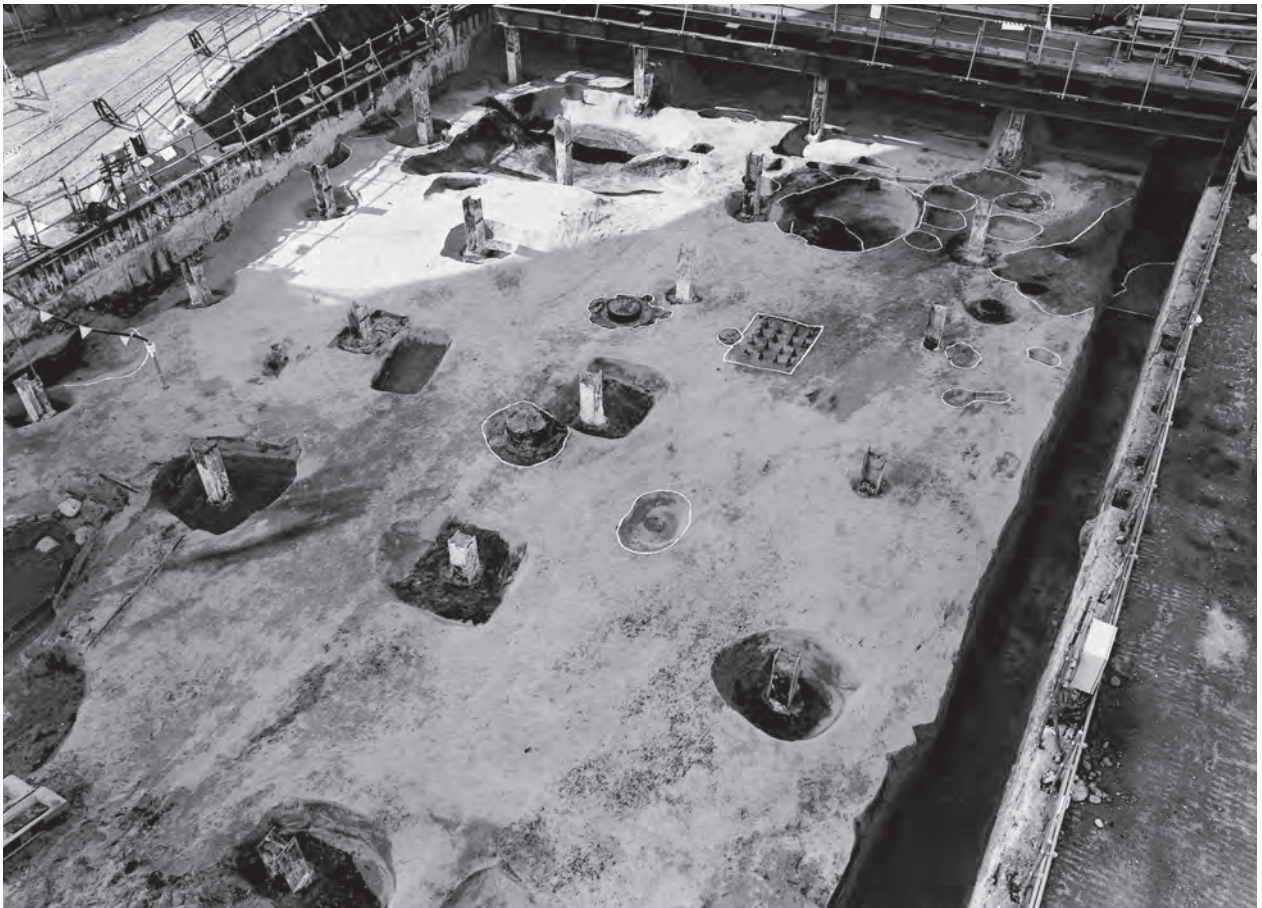


8 A区西半部洪水砂層除去面全景 (西から)

図版13 紀州街道東側 遺構 (1)



1 C区遺構面全景および紀州街道（東から）



2 C区遺構面全景（東から）

図版14 紀州街道東側 遺構 (2)



1 C区遺構面全景 (北から)



2 紀州街道沿いの遺構群 (北から)

図版15 紀州街道東側 遺構 (3)



1 C区70土坑 (西から)



2 C区50土坑 [1回目] 埋土堆積状況 (西から)



3 C区50土坑 [1回目] 木組検出状況 (北から)



4 C区50土坑 [1回目] 木組全景 (南から)



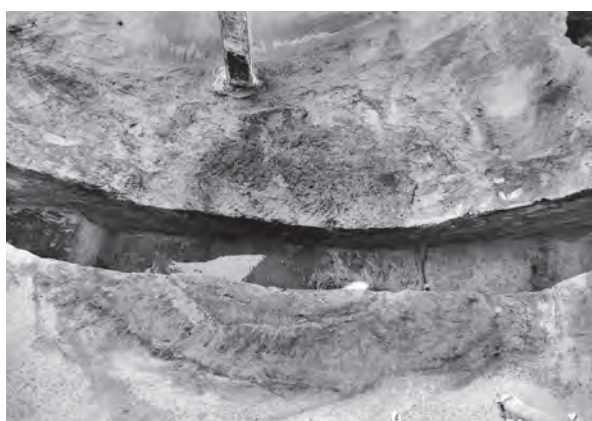
5 C区50土坑 [2回目] (西から)



6 C区50土坑 [2・3回目] 埋土堆積状況 (西から)



7 C区50土坑 [2回目] 底面 (西から)



8 C区50土坑 [3回目] (西から)

図版16 紀州街道東側 遺構 (4)



1 C区29土坑 [埋土除去面] (東から)



2 C区29土坑南側木組 (東から)



3 C区29土坑北側木組 (東から)



4 C区29土坑内30井戸 (北から)



5 C区29土坑西側木組 (東から)



6 C区29土坑階段状石組 (東から)



7 C区29土坑東側木組 (東から)



8 C区29土坑完掘状況 (西から)

図版17 紀州街道東側 遺構 (5)



1 C区52土坑埋土堆積状況(北から)



2 C区53土坑埋土堆積状況(西から)



3 C区54土坑完掘状況 [68井戸検出状況] (西から)



4 C区68井戸(西から)



5 C区60井戸(西から)

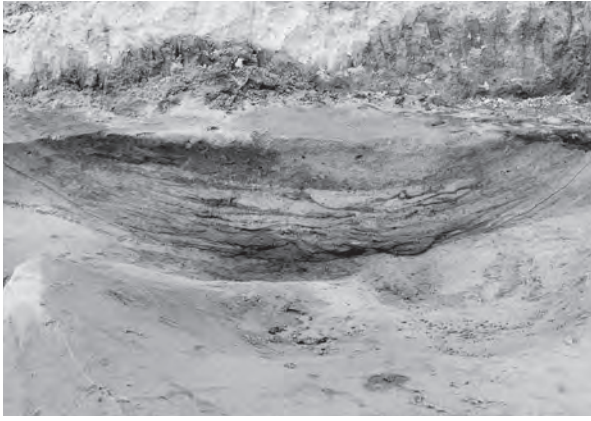


6 C区土層断面 [東端部] (北から)



7 C区60井戸木枠検出状況(西から)

図版18 紀州街道東側 遺構 (6)



1 C区46溝埋土堆積状況 (北から)



2 C区35井戸 [上部] (西から)



3 C区35井戸 [内部] (西から)



4 C区36井戸粋瓦 [細部] (西から)



5 C区36井戸 [上部] (西から)



6 C区36井戸 [下部] (西から)



7 C区36井戸 [内部] (西から)

図版19 紀州街道 遺物 (1)



道5面下(道6面上)出土遺物



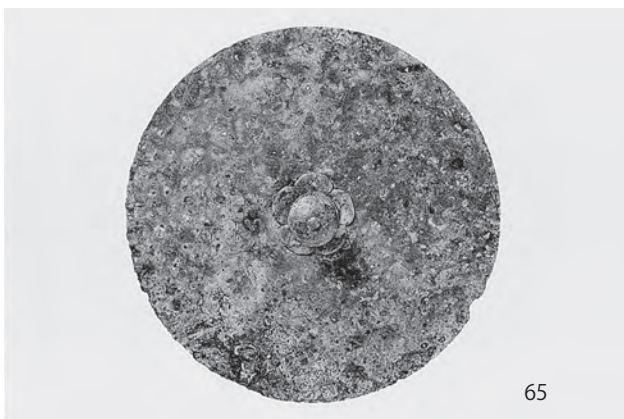
道4面下(道5面上)・道3面下(道4面上)出土遺物

図版20 紀州街道 遺物 (2)



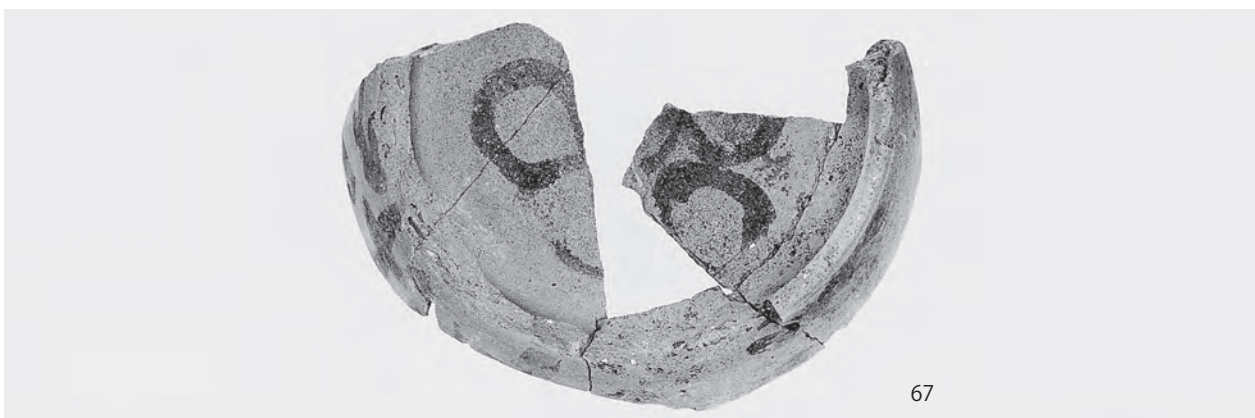
64

ふいごの羽口 [22土坑]



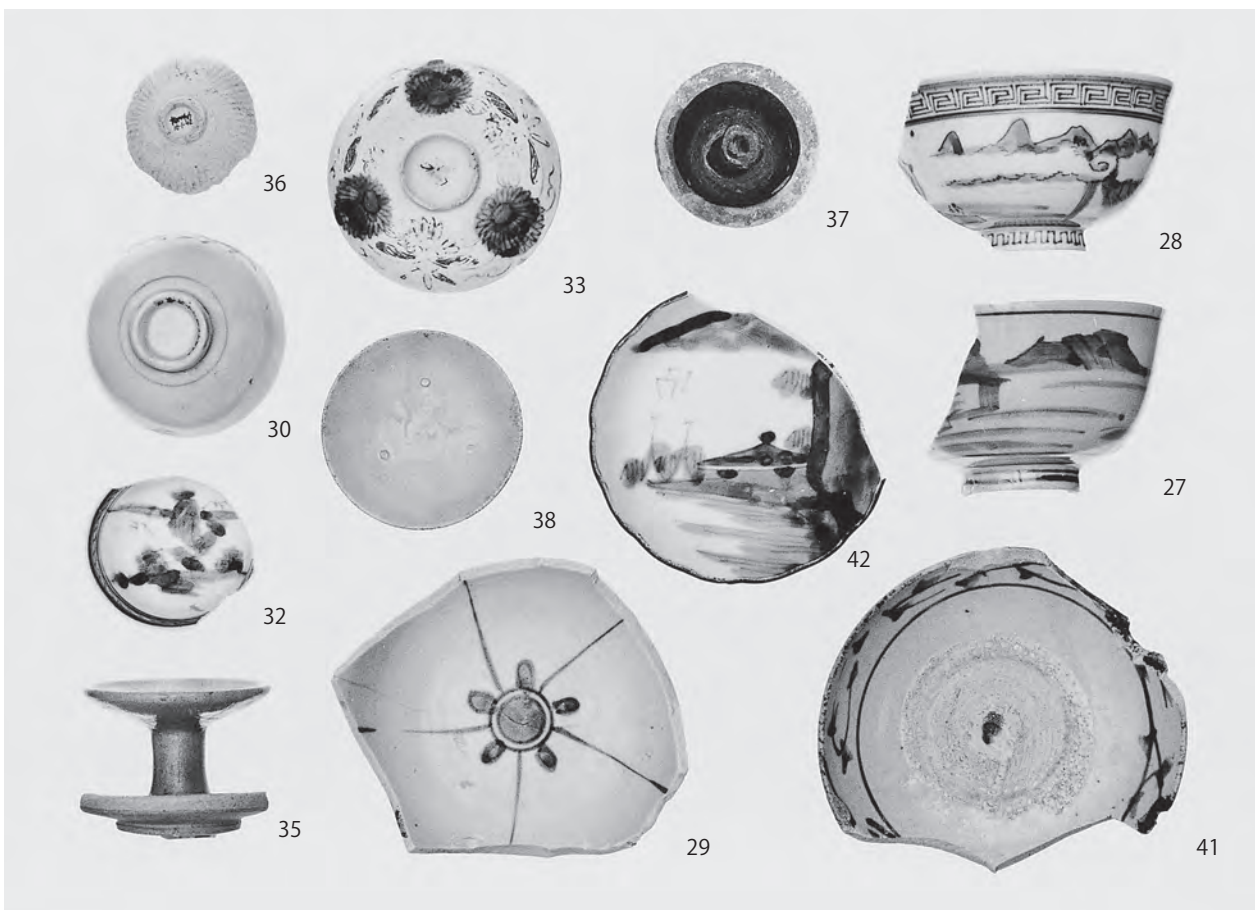
65

銅製蓋 [道3面下 (道4面上)]



67

墨書入り土師質土器火鉢 [道1面下 (道2面上)]



道2面下 (道3面上) 出土遺物

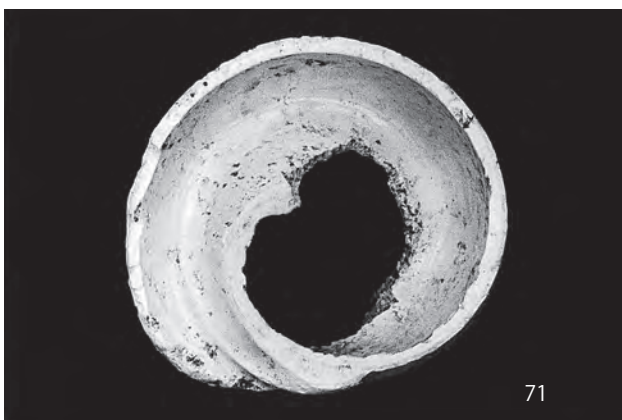
図版21 紀州街道 遺物 (3)



陶器行平鍋持ち手 (左:「寿」字、右:樹下仙人) [道1面下 (道2面上)]



土人形の牛 [道1面下 (道2面上)]



バイ独楽 [道1面下 (道2面上)]



「寛永通宝」緡銭 [道3面上 (道4面下) 相当]

図版22 紀州街道西側 遺物（1）



第1回洪水砂層 出土遺物



割れ口に墨書のある青磁大皿 [第1回洪水砂層]



研磨された丸瓦 [第1回洪水砂層]



石製碗 [第2回洪水砂層]

図版23 紀州街道西側 遺物 (2)



179

「寿」字の墨書のある土師質蓋 [第4回洪水砂層]



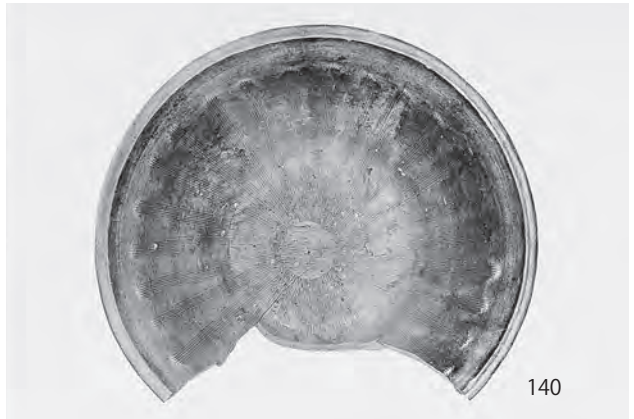
180

パイ独楽 [第4回洪水砂層]



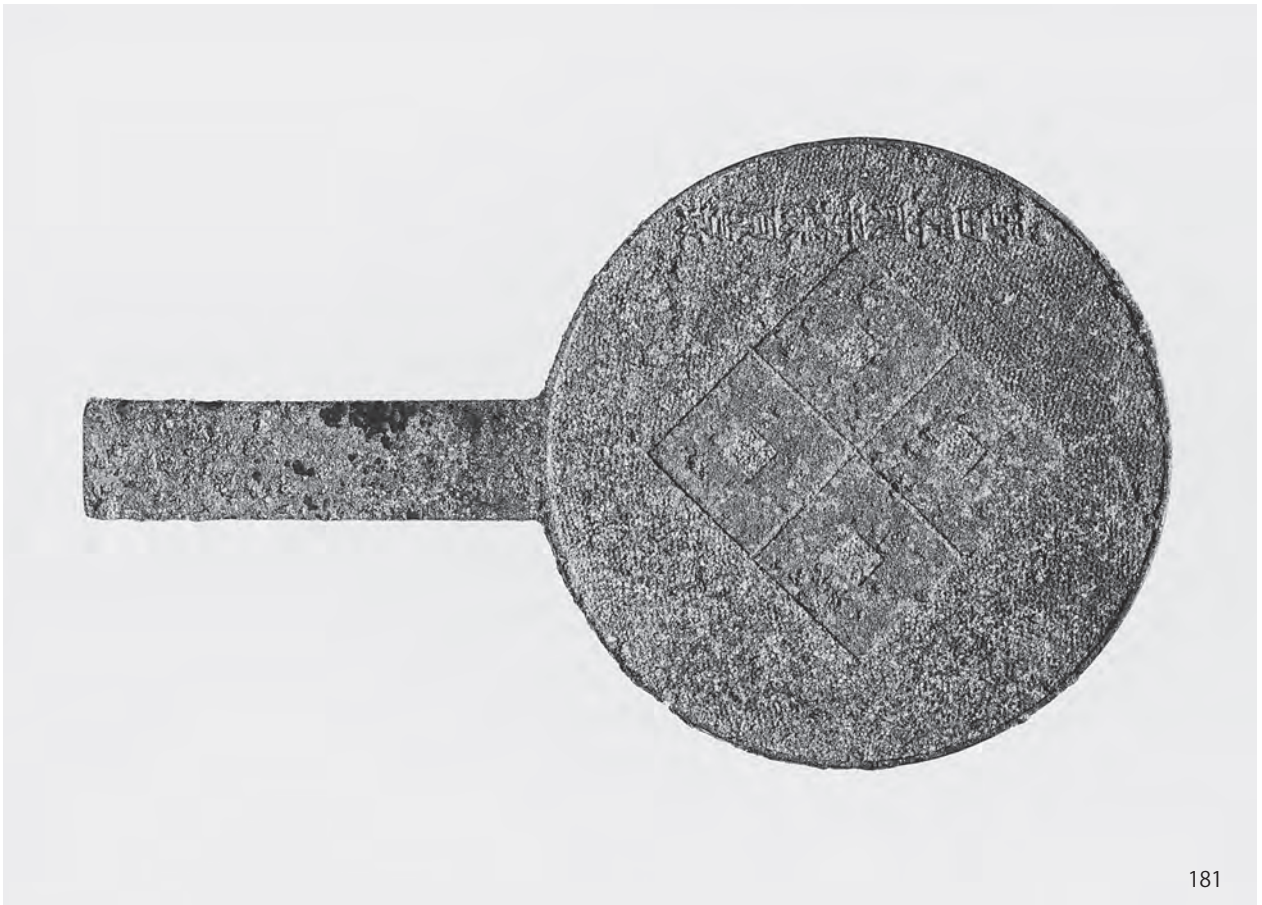
135

土師質土器火入れ [第4回洪水砂層]



140

堺播鉢 [第4回洪水砂層]



181

銅製小型柄鏡 [第4回洪水砂層]

図版24 紀州街道東側 遺物（1）



208

土師質土器茶釜 [黄褐色細砂層]



222

土製橋（ミニチュア） [50土坑]



223

緑釉陶器火鉢 [50土坑] 出土遺物



224



219

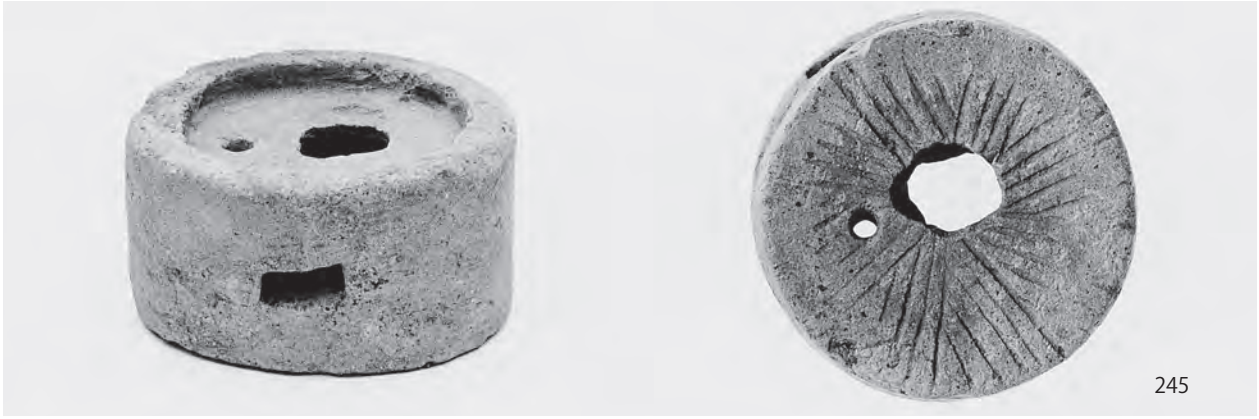
丹波焼角德利 [50土坑]



221

堺播鉢 [50土坑]

図版25 紀州街道東側 遺物 (2)



245

土製臼 (ミニチュア) [6 i 区盛土・整地層]



246

土製指物 (ミニチュア) (表:日、裏:月) [6 i 区盛土・整地層]



243

陶器 お歯黒壺 [6 i 区盛土・整地層]



345

備前焼大甕 線刻 [4h 区盛土・整地層]

図版26 紀州街道東側 遺物 (3)



270



271

煙管 (左: 吸口、右: 雁首) [29土坑]



272



273

小柄 [29土坑]

錠前の鍵 [29土坑]



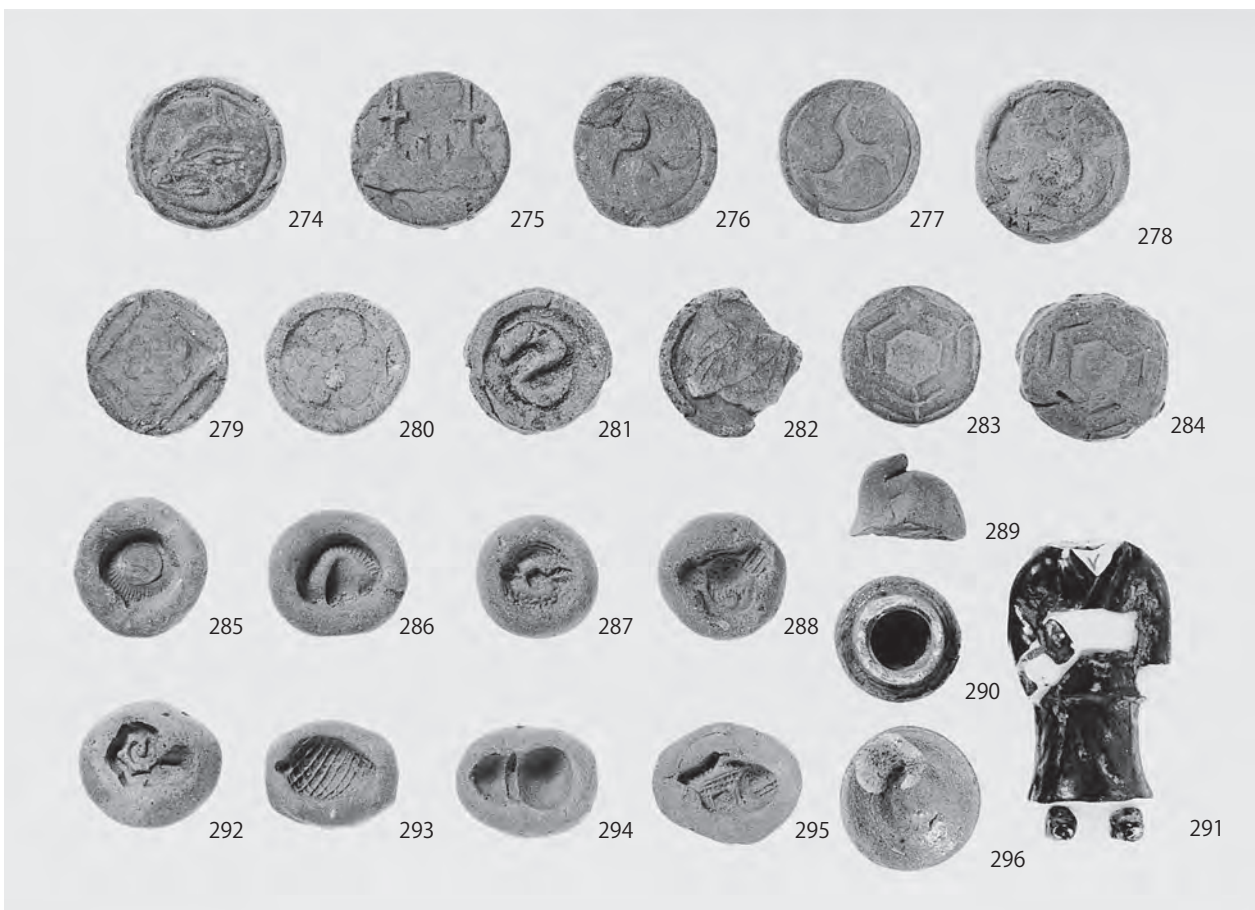
269

用途不明陶器 [29土坑]



312

小型白磁紅皿 [29土坑]



274

275

276

277

278

279

280

281

282

283

284

285

286

287

288

289

290

292

293

294

295

296

291

泥面子・土人形・ミニチュア [29土坑、4 j 区盛土・整地層]



340

庖丁の刃 [4 j 区盛土・整地層]



341



267

陶器小型播鉢 [4 j 区盛土・整地層]



335

瓦質土器七厘 [4 j 区盛土・整地層]



342

丹波焼貧乏徳利 [4 j 区盛土・整地層]

図版28 紀州街道東側 遺物 (5)



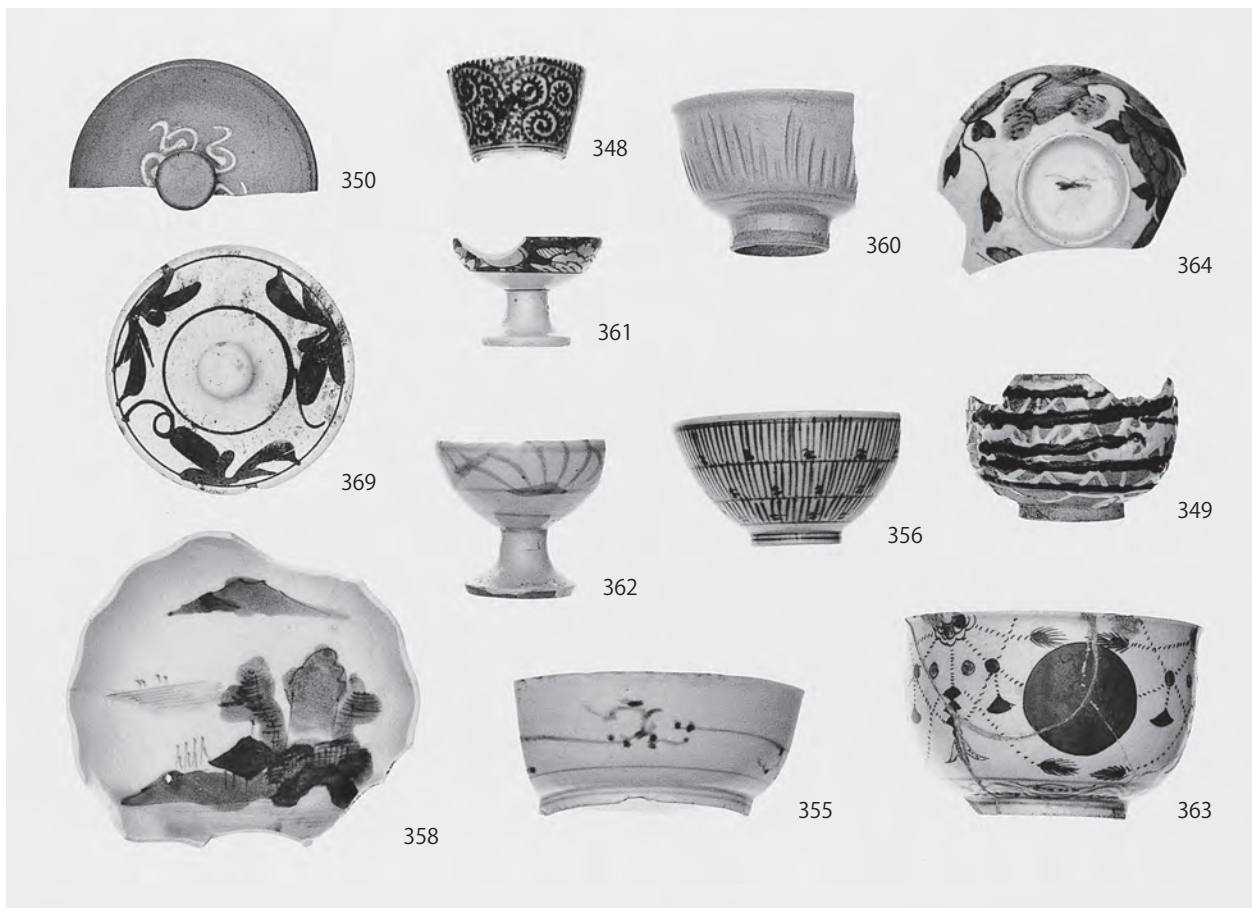
陶器灯明皿・仏花瓶・小型壺類 [4 j 区盛土・整地層]



陶器植木鉢 [4 j 区盛土・整地層]

339

図版29 紀州街道東側 遺物 (6)



52～54土坑出土遺物



土製鳩笛 [54土坑]



陶器甕と蓋 (ミニチュア) [54土坑]



赤間石製硯および刻書 [53土坑]

図版30 紀州街道東側 遺物（7）



410

土製御堂（ミニチュア） [6 h区盛土・整地層]

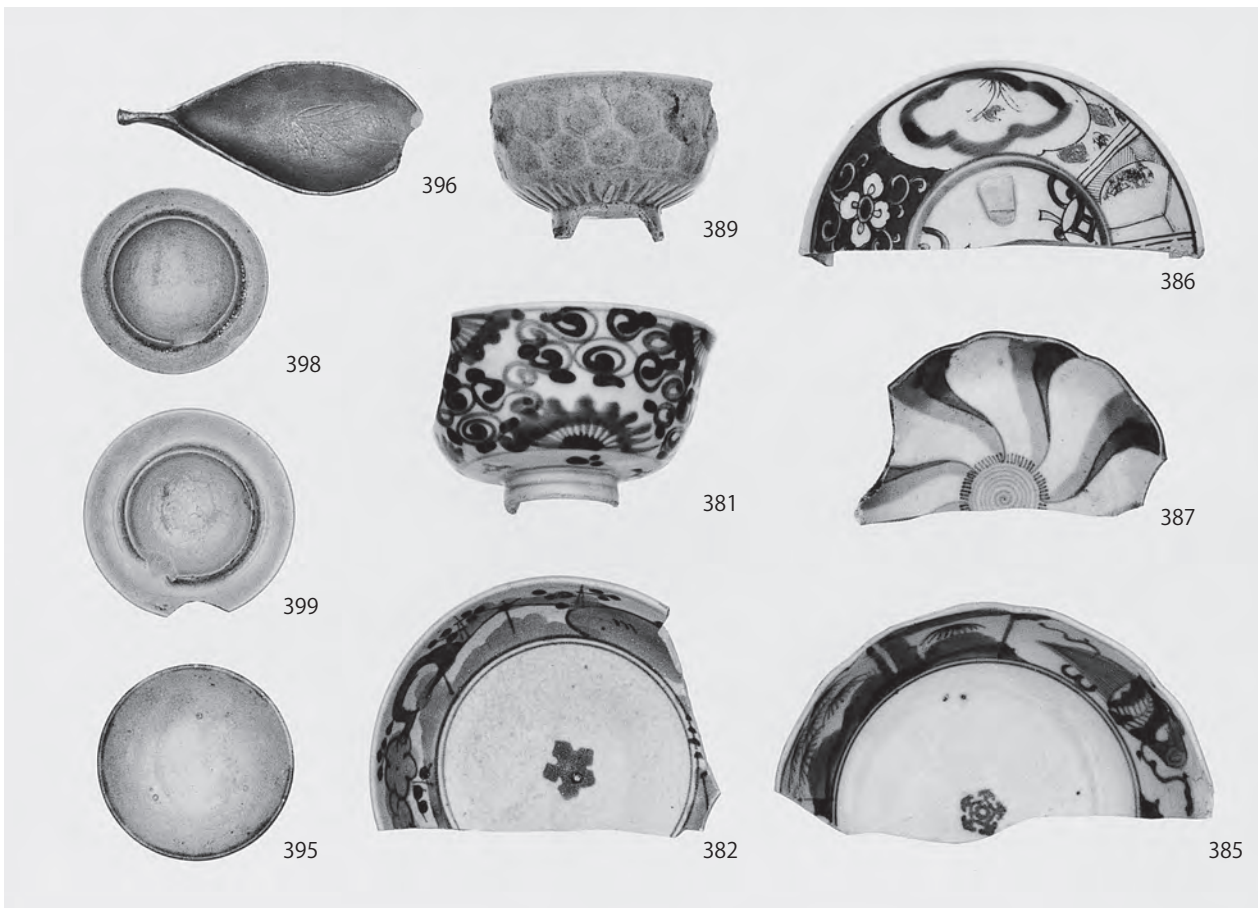


蟹形耳付陶器壺 [6 h区盛土・整地層]



411

蟹形耳細部 [6 h区盛土・整地層]



396

389

386

398

381

387

399

382

385

395

6 h区盛土・整地層出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	なみまつちょういせき							
書 名	並松町遺跡							
副 書 名	大阪府道高速大和川線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第231集							
編著者名	中村淳磯							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL 072-299-8791 FAX 072-299-8905							
発行年月日	西暦 2012年9月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		東 経	北 緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なみまつちょういせき 並松町遺跡	おおさか 府 大阪府 さかいし ざかいく 堺市堺区 なみまつちょう ほか 並松町 外	27141	365	135° 29' 07"	34° 35' 43"	2011.2.1 ～ 2012.1.31 [現地調査・ 整理作業] 2012.2.1 ～ 2012.9.28 [整理作業]	1,694m ²	大阪府道高速大和川線建設
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
並松町遺跡	集落・街道	弥生時代後期 ～古墳時代前期				弥生土器	包含層より、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が1点出土。	
		古代～ 中世(近世初頭)				土師質土器茶釜	包含層より、中世末期～近世初頭の遺物が1点出土。	
		近世後半 (18～19世紀)		道路遺構・土坑 ・井戸・溝・木組み ・水溜め遺構など		土師質土器・陶器 ・磁器・瓦質土器 ・瓦類・土製品 ・貝製品・銭貨 ・金属製品など	紀州街道の調査。街道の西側で、洪水の痕跡を検出。街道の東側で、近世後半の遺構群と大量の遺物を検出。	
要 約	<p>紀州街道の本体に初めて考古学的調査のメスが入った調査である。古代や中世にも熊野参詣により、利用されていた熊野街道に関連するものとの期待があったが、調査の結果、この地に街道が通るのは、近世後半(18世紀)以降であることが判明した。これ以前は、住吉大社と堺環濠都市を結ぶ道は、調査区以外の場所を通っていたことになる。</p> <p>遺構面の下には、約1mの厚さをもつ均質な細砂層が堆積しており、砂堆上に立地していることがわかる。遺物はほとんど出土しなかったが、細砂層の下から検出された黒色粘土層が、放射性炭素年代測定により、弥生～古墳時代という結果が出た。現在では考えにくい、調査地一帯が、近世初頭にいたるまで、人跡未踏の地であったことが推測される。</p> <p>街道の西側(海側)では、大規模な洪水の痕跡がみられ、遺構はほとんど残存していない。安政大地震などによる津波の影響が考えられ、紀州街道の西側には大きな被害が出ていたことが推測される。</p> <p>街道の東側では、津波の影響はほとんどなかったものと考えられ、遺構・遺物が多く検出された。後世の整地などで、遺構の細かい時期はわからなかったが、18世紀後半以降に存続していたものといえる。近世から現代まで存続していたものも多く、井戸などは多くの廃棄物によって埋められていた。</p>							

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第231集

並 松 町 遺 跡

大阪府道高速大和川線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2012年 9月28日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 明新社
奈良県奈良市南京終町3丁目464番地

